

聖書に導かれて 南無妙法蓮華經

- | | |
|----------------------------|---------|
| 1. 義人所感集 | H28年3月 |
| 2. 我は如何にして神仏を
信ずる者になりし乎 | H28年6月 |
| 3. 確信ある無題 | H28年9月 |
| 4. 晩鐘と祈り（俗書） | H28年12月 |
| 5. 息を吸う心 | R3年8月 |

愛は危険物と同じ、皆陽を当てない。

義人

令和3年

目次

義人の想い、～真実の愛～	3
ヨハネの第一の手紙 第3章	5
義人所感集	7
我は如何にして 神仏を信ずる者になりし乎	71
確信ある無題	127
晩鐘と 祈り	190
息を吸う心	268

義人の想い、～真実の愛～

私が神、再臨したイエスであることを信じてほしい。私は自覚と聖書の導きによって生きています。私は世に問いたい。ルサンチマン（恨み）からではなく、人々を弱いとか強いとかに分ける価値観を、もう一度再確認してほしい。後ろからぼつ立て、競争に仕向け、苦しむ人々の姿を見て、悦に入っているのはサタンです。勝つためにはどんな汚いことでもする。負けたものには容赦ない侮辱。そんな世界はもう終わりにしないとはいけません。どうか皆様のおおらかな賛意をください。私は私の書きものが世に流布されることが唯一サタンへの対抗手段であると訴えます。真実の愛があるからです。ここに共鳴した善人に神の国、不老不死、永遠の命が約束されるでしょう。すべての経緯が判明します。神の国は近い。永遠の命を確かなものにするため、愛を確かなものにする。すべてはひとりひとりの信仰にある。私を信じて下さい。私は多くの方々が福音にふれ、幸せになり、神の義、愛に、涙も消え去ってゆくことを望んでいます。欲望から放れ、美しい想いを抱くこと、大事です。不完全な人達も誠意と思いやり、信仰によって神の義を抱き、完全円満な姿、成仏と呼ばれる境涯へと誘われてゆきます。日蓮は久遠元初の仏であり創造主（神）です。つまりイエスと日蓮は同一の存在。復活と成仏、同様に愛に包まれた暖かい境界にあります。私、梶原

義人はその名の通り、煩惱が燃え盛る、火事原野にひとり立つ正義の男です。皆様に真実の信仰を掴んでいただきたい。一人でも多くの方が神の王国の住人になれるよう衷心より願う次第であります。私は三位一体の支持者です。聖霊は固定観念から放れ自由に生きていくことの大切さを体感によって知らせてきます。そして聖書とのダイアローグ（対話）は私にとっての神への自覚を促す基本です。すべての完結が私、義人によってなされるということです。人々の不安を煽るような終末論は展開致しません。ただ何か生まれ起こるはずで、それだけは確かです。皆様と共に幸福へと歩んでゆきたいです。本物の信仰を抱いて。「子たちよ、誰も惑わされてはならない。彼が義人であると同様に義を行なうものは義人である」（ヨハネの第一の手紙 3章7節）ご覧下さりありがとうございます。「義人の想い」と銘打って、これにて私のあいさつに代えさせて頂きたいと思えます。尚、私の他の作品もPDF（電子書籍）で無料、開放しています。是非、そちらへと宜しくお願い申し上げます。この小道が広く大きな愛の街道となり皆さまの幸福に必ずや貢献されると信じて疑いありません。では、いざ、よろしく。

義人

新約聖書

ヨハネの第一の手紙

第3章

わたしたちが神の子とよばれるには、どんなに大きな愛を父から賜ったことか、よく考えてみなさい。わたしたち、すでに神の子なのである。世がわたしたちを知らないのは、父を知らなかったからである。

- 2 愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものになることを知っている。その御姿（みすがた）を見るからである。
- 3 彼についてこの望みをいただいている者は皆、彼がきよくあらわれるように自らをきよくする。
- 4 すべて罪を犯す者は、不法を行う者である。罪は不法である。
- 5 あなたが知っているとおりに、彼は罪をとり除くために現れたのであって、彼にはなんら罪がない。

- 6 すべて彼におる者は、罪を犯さない。すべて罪を犯すものは彼を見たこともなく、知ったこともない者である。
- 7 子たちよ。だれにも惑わされてはいけない。彼が義人であると同様に、義を行うのは義人である。

義人所感集

はじめに開目と報恩という文字を
冒頭の題字の上に乗せようと思ったが
このことはキリスト者、仏教徒によらず
宗教を志すものにとっては基本中の基本である。
あえて記すことを控えた。

私はひとのなかの悪魔を見た。

この世が利と欲で動いているのを最近になって痛烈
に確認した。

当たり前とされる、自由主義という幻想に裏打ちさ
れた、

キャピタリズム（資本主義。）

つまり金儲け、利得が、何よりも優先されるというこ
とである。

それを守るためという口実に残酷な殺し合いは起こ
り

人々は泣き、地面に倒れるのである。

比較、競争。搾取。神は絶対、許容しないだろう。

H 2 8 年 3 月

義人

はじめに

人が弱い自分、悪い自分、情けない自分を見せるとき。濁流にうまく舟を漕ぎ出せないと無残な結果に。精神疾患、退学、失職、離別、自死に至ることも。良い子でいたい。人に負けたくない。なぜか本音をはけない。でも周りにはもう気付いている。あなたが今、どういう状況にあるのかを。プライドが傷ついた。でも自らの尊厳は傷つかない。そこに気付いてほしい。つまり愛の存在。「復讐など考えてはいけないよ」。エホバの証人の山口さんという20代後半の男性に尋ねた「イエスちゃ、どういう人だったと思う」。彼は「私の目ざすひと、なりたいひとです」「具体的には」さらに尋ねた。答えが返ってこない。しびれを切らした私は「侠客、清水次郎長みたいなひとだったと思うよ。ヤクザとは少し違うけど」「…………」「弱き者を、助け、強きを、くじく。神に対し、あくまで真摯で忠実。アガペーという慈愛に命を懸ける」。お宮では露天商たちを「祈りの家を盗賊の家にした」といって散々蹴散らす。そして「私が王になるのを反対するものを打ち殺せ」とエルサレムに乗り込んでいく。そんな人がただ優しいヤワな男であるはずがない。山口さんは驚いて「知りませんでした。確かに聖書にあります」シャモは死んでも音はあげぬ、イエスは殴られ、鞭打たれ、辱めを受け、十字架につけられても弱音を漏らさなかった。そして神を敵に回す群衆のため「彼らは自分たちがなにをやっているのかわからないのです。」

とお目こぼしを願った。普通の人ではない。山口さんは若干ひきつった表情で目を白黒させた。そして私がイエスだと宣言すると、それに対して全面否定のサインが、表情から見受けられた。正直、私にはイエスみたいな度胸もなければ忍耐力もない。ただ聖書に記され、自覚がある。仕方がないのである。もうひとつたみかけた。使徒、ペテロは、漁師出身だよ。気は荒いよ。そんな男がイエスに「魚より人をとるのはどうか」と持ちかけられて二つ返事について行くのだから、そりゃ男ぶりも、良かったのだろう。山口さんも、それは納得したか「お互いイエスが大好きなのですよね」と。こんな話が楽しいと喜んでくれた。私も嬉しかった。イエスのことを理解してくれ、共感出来て。エホバの証人への警戒感が少しずつだけど和らいできた。しかし一つだけ注文する、「イエスになりたい人ではなく感謝する対象です」と。今回の「義人所感集」の内容。これが最後のご登場になると思います。今まで皆さんには「なんでこんなもん、よまんなんがよ」とひんしゆくをかってきたかもしれませんが。真由子先生、さようならのコーナーがあります。これにてお許しを。あと替わった主治医への注文の書も。あからさまにするかどうか迷ったが、私とサタンとの格闘の跡へ旅に来たとご理解願いたい。そして相変わらずの母親攻撃。もういい加減にしろよ。そんな作品です。

もくじ

教え

正月

母

真実

激するさとりについて

真由子先生様へ

追伸

苦しいうずき

若松英輔様へ

D r Oへの鬱憤の書

D r Oへの意見書

拝啓 郁子様へ

所感集

[教え]

啓蒙したいとか、帰順させようと思うことは間違っていて、それが心の苦しみにつながっている。宗教団体、お導き、祈伏いろいろ呼び名はあるが勧誘が主な活動になってくる。そこにあるのは党勢の拡大と金儲けである。多額のお布施という功績をあげた当人の、一時の救われのエピソードが、上層部にとって看板、団体の広宣に適うと判断されると、聴衆の前、功德の発表という栄誉が与えられる。その連鎖はすべて修行であり、成仏、幸せのためのものだとして規定され

る。マインドコントロールである。私はなるほど説法はする。だがそれと同時に「私を疑い、鵜呑みにするな」と言おう。それでも、なお、神としての私の存在や、私の語る神の国の奥義を理解した信じ、求めずにはおれない。そんな人が救われ、また報いを受ける。これが因縁、正しい道筋である。つまり予定調和。神からきたものは信じることができる、そうでないものは、心が頑なで目も開かず、耳も聞こえぬため、悟ることができないのだ。「私に出来ることは祈ることだけである」。

だが、いま改めたい。その思いは、すべて自分が楽になりたいものであることは否めない。聖書は許さなかった。アダムとイヴの神への裏切りにより、たくさんの人達が罪を引きずり恐怖を伴い、死に至らしめられた。そしてひとりの最も神に従順な預言者が降臨し、信じる人たちの罪を贖った。イエスキリストである。そしてまた聖書は語る。「あのきつねのもとへ行け。悪霊を追い出し、病をなおせ、預言者はエルサレム以外で死ぬことはありえないから」つまり「楽を考えず、骨身をおしまずやることだけはやれ」ということみたいだ。少し乱暴な意識から自分の努力義務を放棄しにかかっていた。元議員だった権力志向が強い人に、私が宗教を語るのは知識のひけらかしにしかとれないと言われた。私は客観的に考えて「残念だがそうなのか」と思わざるをえなかった。お寺さんも「お釈迦さまと日蓮上人という天才が思索されたことで、僧侶でもない檀家のお前が偉そうに語るの

は恐れおおくおこがましい。父ちゃん、祖父ちゃんのこと思って南無妙法蓮華經、言うとりゃ、いいがだ。」つまり一般的権威からの見解である。何度もいうが、イエスは律法学者でも神殿の祭祀長でもなく大工であった。日蓮も漁民出身で田舎の無名の僧侶であった。既成の地位より、どれだけ民衆の心に添い幸福を願っていたかに価値がある。良心とは、ある意味、行動を制止する、臆病な心だと、オスカーワイルドは言っているが、私は日蓮、イエスのように臆病、卑怯から離れた、内村鑑三の言うところの、高尚なる勇ましい生涯を、美しい良心に基づき送りたいものだと心底思うのである。

〔正月〕

正月はいつも苦しい。人々の妄念が一番激するときだからである。母が丸椅子に立ち、神棚を整えている。高齡である。危なっかしい。きっと哀れだと思って手助けしてくれるものだと期待し、また本当は私に命令、強制したいところであろう。昔からであるが、私はこういう儀式めいたものは大嫌いで苦痛であった。また紅白歌合戦は愉しいと思ったことは一度もない。正月など来なければいいのに。神棚は私の中のイエスキリストとなぜかショウが合わないのである。「体調を崩す」。そのことを母に伝えても理解してくれない。神棚にこだわる、母に言った「鬼」。自分中心の典型である。彼女と関わる、周りの人たちも仕方ないと思っているのであろう。適当に受け流しているみ

たいだ。私はヘルパーさんの手助けがいる。モチベーション維持に障害がある。母は自らの老いも念頭にいれなければならないだろう。丸椅子に立つことは危険である。聖書は言う「母親と無理に仲良くする必要はない」だが、シンドイ。うまくいかない母とは、そのまま仲が悪くあればいいのだろうが、やはり気持ちが悪い。 どういう形であろうが早く終わりを迎えたい。私が死んで無になるか、天国にいて気のいい奴らと美しい天女を同伴し永遠に酒を酌み交わすか。とりあえずこんな暴力と束縛、自己執着と醜い欲望からくる喧騒の世界とは、速やかにオサラバしたい。そして仕事とは如何に。上層部、ガバナンス（統治）の名のもとに、発せられる命令か、わがままからくる欲求か、そこに生まれる自己顕示。空気を読む。そんなこんな、もう嫌だぜ。静かに暮らしたいぜ。労働などもうご免だぜ。素直な気持ちだ。世の親たちは己の支配欲を満たすために子供を奴隷か召使いのように扱う。朝は8時に起きて夕方は5時に一緒に晩飯を喰う。ある精神障害者の家庭、父子関係である。俺なら父親を叩き殺すぜ。アダルトチルドレン。父親がテレに出た。「出勤しております」実際は共同作業所に通っている。そんな見栄、体裁の方が自らをおとしめていることに気づかないみたいだ。デイケアに通う私は一段下のヤクザだそう。価値観というのは括りがあるかぎり、いつも人を差別して苦しめるものなのだ。名誉欲、金銭欲、性欲、所有欲などを肯定するからこそ人類は成り立っている。それが

世間である。「真実の教え」に気づくとき世間では黙
っている。この世の価値観を否定すれば狂人と呼
ばれます。でもあえて言う。欲望を制御し、自分から
離れるとき、本当の自律、幸福がある。英国の元宰相
チャーチルは言った「民主主義よりいいものがない
限りは民主主義がいいものなのだろうなあ、仕方な
いなあ」つまりパイのブンドリ合いである民主主義
よりみんなで公平に分かち合うシステムはできない
ものか。社会主義が健全な形で機能することはない
のか。みんなが不得手な労働から解放され、同時に各
地で得意なことを率先垂範で示めす。愛による独裁
者が現れ人々の自由を確認し、それをまた追認する。
その気高い自由というものは、狭い視野にもとづく
金銭、所有、獲得などの物質的な欲望ではなく。高次
の魂の自由でなければならない。高度の自律。食い物
が無く、猫を餓死させる。自らも死なねばなるまい。
同悲同苦。そのことが自然に出来る。それが本当の自
由人である。

[母]

母は全然、私の言わんとしているところを理解して
いないみたいだ。

父との結婚。年齢も年齢だし母親（私の祖母）が心配
だったけど姉たちもうるさく、父も優しそうなので
嫁ぐのを決めたという。

一方、父にとって結婚というハードルは高かったか。
脳動脈瘤からくるてんかん、異常なまでの愛、優しさ

への偏執。

かつて病弱であった女工との結婚に踏み切り、その最後を看取り、島根から来た親族の前でお骨の入った箱を抱きしめポロポロ涙をこぼし、引き渡しを拒んだ祖父。説得され、悲しみの下、最期の別れを終えたという。彼は失意の中、緑の観音様の座像を贖う。そんな祖父はきっと存在することを信じていたに違いない。不憫な息子の、心にある温かい義侠心に応えてくれる。慈悲深い、女がいることを。

実は私は皮肉にも多くの人が亡くなった昭和戦争がなかったら誕生していなかった。空襲で家が焼け、戦後、母は狭い市営住宅に居を構えていた。近くに住むひとの縁からの成り行き、見合いだった。

母はよく解らない。なんでもひとのせいにする。人一倍わがままなくせに自分の意志は誰かに決定されたという。母親が心配で嫁に行けなかった。家計が心配でうえの学校に進めなかった。先生が家族に掛け合うと言ってくれたのだけど。

私は母がなんの目的あって学校へ行きたかったのか解らなかったが、彼女は確実に進学したほうが良かったと思う。視野が広がったのは確実にだと思うからだ。そのセクシャリティーの否定、強権的な考え、そして献身的なところ。まあ、学校の教師がいいだろう。そこで出世すれば嬉しかったのかなあ。教養とは自分本位の粉砕にある。そこに気付いてほしいのだが。結婚の話にもどる。そんな母に父方の祖母は偽善を感じたのかもしれない。私の伯父は母の帰宅時間ま

で指定し男女関係を制約し、その純潔を守るのに心血を注いだという。それはそれで良かったのであろう。母が納得していればのことである。

その後、父に先立たれた後、母は持ち前の天真爛漫さと献身的姿勢、そして自分中心の思い入れを持ち、家族のため、強く生き抜いて行く。その自らの正当性にこだわる性質は終始一貫かわらない。私が失恋をしてグッとこらえているのをみて、なにか勘違いしたのか、「私も映画、観に行こうかと誘われたこともあるよ」これ程、ずれたあさはかな了見をみせるのである。ひとの心の痛み、苦しさを慮ることが出来ないみたいだ。そしてなんでもかんでも隠蔽しようとする体質。そのことの方が恥ずかしいとなぜ気づかないのか。私が母に聞きたいのは本当にひとを好きになり、愛したことがあるのかということだ。生活のため重いビールの箱を運んだということよりも、周りの人たちに対しどれだけ愛情にみちた優しい言葉をかけてあげられたかということである。母が最近、昔、近所にいた女性に遭ったという。その人が母に向かって「変わったねえ」と言ったそうだ。商売と子育て。実は感謝と信心で生きて来た母。老いと欠乏でなにか変化したということなのだろうか。私は信じたいのである、母の底にある深い思いやり、それがただ姿形を、少し変えただけの意味であったと。母の嘘偽りない慈悲深さが、私の生きてこられたベースにあったことを強く信じたいのだが。

[真実]

たぶん私は母に褒められたいのだろう。「義人えらいものになったなあ」と。だが母の言葉、「あんた、変なこと書いて、真子や千華に迷惑かけられんなや」私はいつも離さず手元において、薬の副作用からくる、口の乾きに対処するため、水分補給時に使っている、千華にディズニーランドの土産に貰ったマグカップを、半分水の入った状態で、床に叩きつけた。「俺の書いたものを見たこともなくせに、俺がなんで彼女たちの名誉を傷つけるものを書かなきゃいけないんだ」大人気ない。そうなのだろう。しかしあまりにも情けなかった。幸いにもマグカップに破損はなかった。母はそれでも私を傷つけたとは微塵にも思っていない。釘をさしたつもりでいるが頭ごなしの物言いには、俺の今まではなんだったのかと思う。母に何か物足りなさや見識の浅さを感じる。イエスを産み、敵に回すマリアの存在。神の愛を母は知ろうとしない。自分中心のマリアの愛。鬼になる。それだから生活してこられた。本当だろうか。人は鬼にならなければ生きていけないか。私は神イエスとして断じて違うと言いたい。「鬼は心に暗く、深い闇を抱き生きていくことになる。そして原罪という瑕疵もあえて見ようとはしない。いつも潔癖に己の正しさだけを訴え、強いことを誇りとする。関わり、弱く傷ついた周りへの配慮はなく、憐れみは意図的に封じ込み、あくまで己の正当化と保持の為、自省はなく逆に責めに転じる」。彼女は神を愛し、隣人を愛さねばなら

ない。「己だけが高く評価されればいい」。地獄を生む。「マリアは天寿を全うする」と聖書にある。私との永遠の決別は迫っているのか。このままでは彼女は神の国には入れないからだ。自己中心との戦いに打ち勝つことができない限りは。私の言説に従わない彼女にソチがとびかかる。ソチは神の御使いである。「早く気付け、神の慈愛に」捨て猫だったソチの恩返しに心が痛い。あるお坊さんが食事の終わった後、オワンを川で洗っていた。子供がいう。「あっちの川の水の方がきれいだよ」坊さんが言う。「空といってな、そんなことにこだわってはいけない」子供はニッコリ笑い「じゃ、器も洗わなくていいじゃないか」この話を聞いた比叡山の一番偉い人が、「その子を私に預けてくれまいか、きっと偉い、立派な僧侶にしてみせるから」とお母さんに言った。お母さんは「わかりました」と答えると子供に向かって「きっと立派なお坊さんになるのですよ。それまでは母はあなたと会いません」源信、5才の頃というが、時は流れた。厳しい修行を終え、源信は天皇より紫の衣を拝領し得意満面で母に会いに行った。喜ぶと思った母は「馬鹿者、そんなものを貰って喜々としている、それが立派な僧か、人々のために生き、役にたつてこそ本物の僧侶だろう」。本当に偉いお母さんだな。この母親は特別だったのかもしれない。母親に叱咤され、なにかがふっきれたのだろう。比延山中、横川の恵心院に隠遁し[往生要集]を仕上げる。日本浄土教の始まりである。結局、母親に報いず、源信は悪が

はびこるこの世を諦観し、あの世へと逃げ込む道を選択した。その罪は重い。後に法然、親鸞という大悪人を生み出すに至る。そこには厭世感が漂い、私は人々を思うとき、その虚無に憐れみでいっぱいになる。私は日蓮大聖人である。ポジティブに南無妙法蓮華經。神を敵に回さず、この世で幸せになる方法を皆に伝授する。ある男、父親は下戸であった。そしてその男は浴びるようにして毎晩酒を呑んだ。父親はそれが嬉しくて自慢した。酒が飲めることが男らしさの代名詞としてまかりとおっていた、なごりのある時代だった。男は飲み続けた。自らの高慢な思考に基づき、過重な肉体労働に、強く価値を定め、矜持を抱き、世間に向かった。生活不安を煽る悪魔と闘うも、不正行為に手を染め、神、信仰という善意には背を向けて、買春の悪徳も頻発させた。そして遂にはアルコール依存症になり去っていったのだ。彼はただ父親に褒めてもらいたくて、また喜ぶ顔が見たくて始めは呑んでいたのだろう。いつかヤケ酒、現実からの逃避そんなものに繋がり、悲しい結末を迎えた。彼は酒を暴飲する中でサタンを見た。男は己を誇示するより隣人と優しい関係を作ることが大事だと、どこかで気付いた。サタンにとって彼はわが父と同じ危険分子となった。彼は最後どんな思想を抱いただろう。周りの評価を気にし、顔色を窺い隣人を察する性分も彼には備わっていた。しかし突出した排他的独善は他人からの侮辱を生むことになった。自分である為には、いずれにも負けるわけにはいかない。

彼を悩ました、営利と奉仕の分け目。(誰かが得し、誰かが損する)、冷たい世間の仕組み。優しさとユーモアでは乗り切れなかった。そのひずみからの苦悩。尾崎を聞かせてやりたかった。悔やむ。それぞれの人生。思いやりで見るとき、罪人でも死ねば、題目により癒されねばならない。私はただ人を愛すだけである。南無妙法蓮華経。私がここで言いたい事実とは、誰もが皆、結局は親に認めてほしい。子を否定した物言いは、なにも生まれないどころか、怒り、恨みを呼び起こし、地獄が現出される。どんな小さなことでもいい、お子さんの頭をなでて褒めてあげてください。男はなにをやっても褒めてもらえなかった、その果ての反逆の所業だったからです。そして私は今日も母にかかって噛みつき、罵声を浴びた、ソチの頭を「かたいもんだ」と言っては撫でるのです。

[激するさとりについて]

私が言いたかったもの、コンセプト、本質は愛である。つまり戒をやぶるも守るもその基底にあらねばならないのは愛である。仏教のいう執着と呼ばれる愛からキリストのアガペーと呼ばれる深い慈愛まで、長く延びる一線上果てしない。ある女がいる。主人以上のひとを好きになったという。「主人とは正反対の価値観をもつひとでした。が、経済力のなさから離婚は思い止まりました。でもまだ好きで主人と再度話合いましたが子供の親権を主張され、子供とは別れられないと思い、相手との関係は終わりました。でも

相手のことがまだ好きです」。恋愛とは世間の規範を超えてしまうほど激しい情熱のことをいいます。不倫には身の破滅も辞さない覚悟が必要です。このひとは相手に価値観を変えられたといいつつも、少しも価値観は変わっていないわけで、つまり彼女の恋愛は、単なる浮気一時のアバンチュールだったということです。おそらく時間が解決するでしょう。でも妻に浮気された夫の悔しさ、怒り、は簡単に消えないかと思えます。今後の結婚生活を平穩に送るには相当の覚悟がいるのではないのでしょうか。「嫌いになったわけじゃないけど、好きかと聞かれたら困る」などと言っている場合ではないと思えます。まずは、夫の傷ついた気持ちを理解し、心して頑張ってください。これは読売新聞、人生案内のなかで（大阪のF子さん）作家の久田恵さんが答えた要約である。若干返答の部分に比重がたかくなっているが、そこには私も同感だと思うからである。ひとは堂々と生きなければならない。恋をするなら破滅、覚悟だ。しかし破滅とはなんだろう。いまのご時世クルマが普通車から軽四に変わった。マンションから市営住宅に移りすんだ。年に一度の海外旅行に出掛けられなくなった。そんなことに違いない。そしてリゴリズム（厳格主義）で行き着くところが金と安定、無感動と冷酷さと計算高さにあるのならかなり寂しい気もする。愛は何処へ。場末のスナックで「一度ならいいのよねえ、これが続くとだめだけど」浮気の間答をしていたかなり年配のお姉さんたち、単調な生活に一服の清涼剤

が欲しいのか。(純愛)、私は意識もしないで歌った尾崎のアイラブユー「きしむベッドのうえで優しさもちよりきつくカラダ抱きしめ合えば、それからまた二人は目をとじるよ、かなしいうたに愛がしらけてしまわぬように」彼女たちはいつの間にかそそくさといなくなってしまう。私はただ清らかな愛をもとめたい。そしてこの時点で聖書は言った。「結婚はあきらめなさい」これは最後通告か。

(私は納得しなければいけないか。愛は不滅である。真由子さん、私のプロポーズ受けて下さい。聖書よ、俺の一途な心を知っているではないか。決して後退はしないぞ。神の試しに神は乗らない。私の覚悟は変わらない)。令和3年6月現在。

真由子先生様へ

あれから八カ月がすぎました。これでよかったのでしょうか。新婚の温かい家庭を築いていらっしゃるなら、こんなことをするのはちょっと非常識なのではと誰かに叱られそうです。元気でいらっしゃいますか。友達できましたか。さだ まさしさんの案山子みたいですね。振り返ってみると医師をめざして一生懸命、頑張ってこられた先生と、行き当たりばったりでその時、その時に変な正義感を燃やして病気を引き起こした私とでは釣り合いがとれないのは当たり前ですよ。豚に真珠。猫に小判。私には高嶺の花だったのですか。

ある人から言われました。「今度は真由子先生をもっと超える人をさがして」

違うのですよ。真由子先生だからだったのですよ。恋をしたのですよ。だからどんなに性格が悪くてもいい。器量が劣っていてもいい。仕事なんかどうでもいい。超えるとか超えないとか、比較で判断するものとは違うのです。先生に魅力がないということじゃなく。

ある本を読みました孤独に悩んでいる精神科医が少くない。他人から悩みごとを相談される立場にいながら、自分自身の悩みは誰にも打ち明けられない孤独な状況にいる人を「ヘルプレス・ヘルパー」と呼ぶのだが、精神科医はどうしてもそうなりやすい。と、そして身近なところにいる家族や友人などに自分の悩みを日ごろからできるだけ相談しておくほうがいい。でないと弱みをみせまいとし、ますます孤独になり追い詰められてしまう危険性が高くなります。すいません心配のあまり筆がすべってしまいました。いみじくも先生がかつて私に助言されたことと同様のことを私は言っています。

先生は優秀な精神科医です。自信をお持ちください。私が元気なのが一番の証拠です。いま先生がどういう状況にあり、なにを目指し、なにを想い、なにに悩み、なにを求め、なにを夢みているのか、そんなことを聞いてあげられる。きっと幸福だろうなあ。

外は冷たいみぞれ雨です。でも私はいつもなぜか楽しいのです。炭酸リチウムが効いているのでしょうか

か。私の家の近くにセブンイレブンができました。そのカウンターコーナーから先生の勤務されている病院が、まるで私を見守りまたは見下ろすかのように存在しているのが見えます。私はもの悲しくて2、3度足を運んだあと、もうアイスコーヒーを飲むのは止めました。

「もう先生は忘れてるよ」鼻でワラツタ。この友人とはしばらく連絡を断ちました。想像力、と思いやりに少し欠けていると思ったからです。

そして私は生きていく上で一番、大切な勇気をふりしぼりたいと思いました。かつて松田優作は「好きな女をひとにゆずるという気持ちが俺にはわからない」と語りました。私は当時、身を引く方が男らしいと思っていました。でもいまそれは確実に違っていると思います。ただ明るく、素直に、温かく、正直に犠牲にならずに、ひとをたとえ傷つけることになったとしても自分の愛を貫く信念に生きる。それが大事なのだなあと感じて参りました。悪人でしょうか。この世は悪人の自覚もない罪人で溢れています。一番の善とは愛すべきひとをただ愛すべきことだと思います。

こんなことをするのは破廉恥で節操のないことだとは重々承知しております。御心を乱すか怒らせるか私にも分かりかねますが、何分お気を悪くされた際は統合失調症の恋愛妄想の昔すこし診ただけの甲斐性のない男からだとはきすてて下さい。寂しいですけど。また片便りになりそうな気もしますが、よろし

ければ「馬鹿」の二文字でもよろしいですから返信を待っています。

周りが敵に見えるときそれは自分に執着しているときです。ある人からいわれたことがあります。「正論を通したければ人の心を掴むことだ」私は恥ずべきことはしてないつもりです。己の心に素直に準ずるだけです。利や義でうごいているのではないみたいです。

つまり愛にて。

同封するオレンジの冊子「激するさとり」できたてホヤホヤです。聖書の導きにより送付させていただきます。いつものとおりに一生懸命書いたものです。お忙しいとは思われますが少しの癒しになるとしたなら天にも上る心持ちです。

ただ枕元に無造作に置いて、寝物語のタネにするのは避けていただきたくお願い申し上げます。

長くなりました。心の叫び声は尽きることはありません。

それでは寒くなります。お身体充分にお労り下さり、これからもご活躍されることを祈って筆を擱きたいと思えます。

義人

追伸

聖書ははじめ文面を提出することを許しませんでした。しかし私は我慢ならず決行しようと思いました。でももし医局かなんかでチェックされ先生のお立場が芳しくなくなるのではと推量し聖書に従い本文を破り捨てました。なぜか新しい名前になった先生の宛名をかいたクラフト封筒はそのままにしておきました。そして就労支援B型施設の責任者さんや利用計画を立ててくださる精神保健福祉士の方に冊子をお渡しするうちに、自然と男女関係というものを意識しない、これから未来に向けての医療、福祉に関しての人間関係のあり方についておこがましくも思いを馳せました。女性進出がこれからも進展していくでしょう。その中で良好な関係をつくる基盤となるのは、やはり友情だと思うのです。そう得心しました。昨夜0：13分に聖書を開くと「恵みの水はつきない」と赤線で囲んだ文句が二度続けて表れました。「これで先生に贈れる」親しいお世話になった方、隣人つまり友人。

頑なな偏愛に凝り固まっていた心に自由が戻ってきた気がしました。先生からの愛は処方されたお薬から十分伝わってきます。どんなかたちであろうと先生の幸せだけを案じ、そして祈っております。これらを送る際にいくらかの葛藤があったことを、記すとともに、もっと気楽でフレンドリーな関係になればなあと勝手に希望いたしております。今はたぶん無理でしょうけど。吉本先生も気持ち良く本をもら

って下さった、とひとのことをもちだすのは変ですけど。自分勝手ばかり申し上げてすいません。先生への気持ちの整理は徐々にすすめてまいります。ですからまずは、私からの心をこめた呈示物を受け取って頂きたく、宜しくお願い申し上げる次第であります。

[苦しいうずき]

黙殺。その意味は「あんたなんか気にも止めてない」ということだろうか。ある精神保健福祉士の女性が私に言った。「何も思っていない人から手紙を貰っても私は無視する」と勿論、既婚者である。まあ独身であってもということだろう。私が思うにケースバイケースだと。誘惑の付け文をこちらは面識もないのに行われたのなら黙殺もわかる。しかし私の場合2年間、問診を受け、魂を込めて何百通に及ぶ書簡を提出した事実がある。そんな不快な思いをさせた気もない。医者と患者の関係とはそんなにうすっぺらで、信頼という美德は地の利が無くなればシャボン玉のように即、壊れてしまうものなのだろうか。何故一言「私は幸福です。ごめんなさい。ありがとう」と返信できないのだろうか。人妻には通信の自由もないのか。姦淫の罪には決して値しない。もし先の女性と同様の了見ならば、それは違っている。いまの場合ちゃんとした説明責任があってしかるべきだ。私には自分に執着して、自分さえよければ良いというものを感じられる。もしも「私を治療するため書簡と恋心を利

用したのだ」としたら、なんと傲慢で侮辱したものいいか。私は入院中からこの身はどうなっても良いと思っていた。本当である。ただ忙しいだけか。善意に解釈すれば「こういう郵便物の送付だけで成り立つ関係を維持したい」。確かにそれでも私は嬉しいですけど。もしかしたら嘘をつきたくないのでは。「本当は幸福じゃない」私は黙殺では納得できない。苦しい物語にエンドマークを付けたいのだ。でないと新たな旅立ちが出来ません。私の勝手かもしれませんが、私は私なりのラブストーリーをとりあえずは美しく完結したいのです。待てといわれるなら死ぬまでパートナーは作りません。そうでないのならたった一言でいいのです。「ごめん」でも「バカ」でも。黙殺ほど卑怯で無責任なものはありません。心理学からいけばこのまま時間が経ち、私が鎮火し収まっていくのが一番良いという結論になるのでしょうか。しかし恋とは規範からはずれ破滅にまで向かって突き進む、そんなパワーがあります。私がストーカー殺人などしないと安閑としておられるかもしれませんが。まず、それは正解です。しかし世の中、ちゃんと異性に向き合わないで黙殺、逃避などするから重大事件に発展するのだと思います。まずは好意を持ってくれたことに人間として感謝すべきだ。そのことが伝わるだけで恋はむくわれ涙はかわくのです。美しい思い出にさせて下さい。お願いします。

拝啓 福寿草も花を開き、梅をめぐる季節ももうすぐです。始めまして、私、梶原義人という一介の名もない田舎者です。実は花などにはほとんど興味が無いのですが、ソロモンの栄華と比較される野の花の名前はなんだろうかと考えたりします。多分、たんぽぽかあざみではないかと推測はするのですが。始めに若松先生におかれましては、辛い状況におありになるのに、内村鑑三の「キリスト信徒のなぐさめ」が踏襲されたのだと、お話になられ「自分の妻はもっと生きて、いろいろなことを表現していたに違いない」。私は心に深く感じるどころがありました。「自分が何をなすかではなく、他者から何を受け継ごうか、と考えると豊かな先人からの遺物に気づく」「生きることは自分の願いを成就させることではなく、先人の生涯から受け継ぐものを見出すことにあるとも言える」。そして「人間の生涯は、自分がなにをしたかわからないまま過ぎて行くものだ。それでよいではないか、だからこそすばらしい」。しかし私には私の役割が理解できるのです。私は一冊の資料を同封いたしました。浅はかな、知識も知性も教養もない男が、愛と思い入れだけで製作したものです。決して美しい文でもなくレトリックにも長けてはいません。しかし信心では内村鑑三と同じです。簡潔に分かりやすくアンソロジーを仕上げるよう腐心しました。私はこの資料をもってどうこうしようという目的はなく、ただ私の通院している精神科の部長先生が若松先生によく似ておられ、お優しい雰囲気はテレビの

画面を通して伝わって参りました。そんな若松先生にお目を通して頂くだけで嬉しいのです。私は最近、大失恋をいたしました。愛するものを失う、これ程辛いことはありません。私も失望、絶望乗り越えてここまでやってきた次第です。内村鑑三の言う、教会も僧侶も介在しない〔無教会〕を私も支持いたします。ルターが言ったように聖書をとおして各位の良心にむけて直接、神は語りかけてくるからです。私は実感しております。若松先生におかれましてはお忙しいのは重々承知いたしております。是非、少しのお時間が許されるのなら一生懸命つくったものです。その意をお汲みくださり最後までご通読下されば身にあまる光栄にございます。

西郷隆盛について内村が語った。〔自分の思っていることを実現するのが革命ではない。無私になれる人物でなければ、虐げられていた人の声に応えることはできない。無私が革命の起点である〕。私は市井の庶民です。パリサイ派、サドカイ派に対したイエスは大工でした。既成の権威から外れ自由でないとキリストの愛は分からない。やはり神の愛は、沢山の無名のラザロに向けられており、彼らはパラダイスでアブラハムの横に座することになるのです。上杉鷹山が証明した徳による心と富の一致。ゴルバチョフがかつて言った、「世界で社会主義が唯一成功したのは日本だけである」。徳の心をなくした、現代日本に確実に忍び寄っている、至る所の格差社会の悲しい足音。神と富の問題は今も世界各地に火種、業火をも

って激しく存在しております。そんな中、無私無欲ながら志をたてたいと思っております。それは聖書が、親切なサマリア人と譬える、隣人を愛することにつきると思います。最後、日本に生まれてきたことに感謝をもちつつ、若松先生にはどうか寛容で暖かな心にて同封した冊子をご高覧下さいますことを願い、ここに筆を擱きたいと思っております。ご精読どうもありがとうございます。御座いました。

敬具

追伸

暖かくなってきましたが、季節柄、まだまだ寒いです。どうかお体お勞りくださりご自愛下さって、一切の障碍なくご活躍されることを、衷心よりお祈り申し上げます。

内村鑑三を、熟知された批評家の、若松英輔先生への書簡であります。

Dr Oへの鬱憤の書

まず神、聖霊を侮辱するような発言、物言いを慎んでいただきたい。

「頭の悪いものは体を動かさず、能力のないものは3倍働け」という失言、暴言を聞かされB型就労所を長期休暇することを決めた私に対し、なんの賛意もなかったことは極めて遺憾でありDr Oの真意も前言と同様なのかと不信の念を抱きました。問診での会話の筋、仕事、つまり労働を強制されているようで、自らの意志を無視された気がしました。なぜなら皆様のおかげによりデイケアに通所することになり、看護師さんと、これからの生活関連のリハビリを進めていこうと計画を立てる矢先に、仕事への復帰を要望され、私は生活基盤となっている障害年金とリンクしもちだされたことに対し、脅迫とも受けとり、私は不安かつ非常に不快な気分になったのです。

その裏側には私への敵意、そこから生まれる悪意があるともうけとられ、もしそうでないとしても、あまりにも不用意であり、精神科医として著しく適性を欠くものであると思います。村先生のカウンセリングの件においても科学的、かつ合理的事由にもとづき判断を下さねばならぬ案件であるのに、利用者の私にその目的を記せよと指示されました。私はアガ

り症からくる会話のしにくさの改善、いまひとつは私の表す文章からみられる心象風景によって現在、心の健康度を専門家のお立場から、おはかり願いたいという旨を提出しました。が、診察では、そのことには全くふれられず、このまま立ち消えになればいいというのがD r Oの心中にあるのではと推測され、なにか不純なものが感じられ、次第に強い不審の念を持つにいたりました。

私は幻聴、幻視、幻嗅、注察、させられ体験、痛みが体に入る。などの統合失調症の症状とともに、聖書との対話。神、イエスキリストとしての自覚があり、人間のつくった階級社会には取り込まれるわけにはいかないのです。もし選択肢がなくなるとするならば自死するほかは道がありません。そこまで切羽詰まった問題になるので、とにかくいまはそっとしてほしいのです。主体性を持たせて下さい。尚、この文はO先生の糾弾を目的としたものではなく、和解とご理解をお願いいたしたく記したものです。そのことだけはお伝えしておきたいと思います。また宜しくお願い申し上げます。

D r Oへの意見書

この文は敵対しているものを大目にみて宥和政策をとるというためのものでなく。本質的に融和を図りたくて記すものであります。ハッキリいうと先生とは波長があいませぬ。なにかギクシャクします。これは理知的、また継続的な筋のある診察をこちらは希

望しているのに極めて恣意的に対応されているようで違和感、不快感を、私は感じるからです。例えば看護師のFさんから受けているアサーティブトレーニングではいろいろなコミュニケーションに関してのことだけでなく、私が感じるスタッフの人物評価みたいなものまで聞いて下さり、そこからは私の、利用者というピアとしての面からと、またFさんのスタッフを束ねていかななくてはならない、お立場からの視点にいくらかの相違があることが鮮明になりました。真剣にお考えくださり、誠意をもってまたサービス面に生かしていきたいと約束される、そんな前向きな気持ちをみせて下さるFさんに、私は深い敬意を払うのです。つまり信頼関係が構築されたということです。先生は、Fさんとのトレーニングの中で「現実との違いがわかればいいねえ」と言われました。私の誇大妄想。私は確認のため「具体的にはどういうことですか」と、お聞きしたのです。返答はうやむやでした。「義人さん、トレーニングはどうですか」それでいいと思うのですけど。「楽しいです」と答え、また勉強になったことを話せたかもしれません。衝気を起こし手柄をあげようとあせっては、いい結果もでるはずはありません。愚痴をひきだし聞き役になるのはいいですが、我々、長年、症状につき合っている年配者はその体験、経験により自分の調子はある程度は解り、そして他人が自らに敬意を払っているかないかも肌で感じとるものなのです。村先生の件、「もう一ヵ月たちましたね。そろそろでは・・・」

どんな科学的、合理的事由があったのか説明もなく。Fさんは「村先生にかんしてはO先生の方から」という雲がかかった話、Fさんはカヤの外みたいでした。おふた方からのサービスの受給を並行したからといって功罪としては、重複もなく相乗効果の方が期待され、あきらかに功の方が大きいだろうと予想するのです。それにしても精神科のスタッフ間の連携はとれているのだろうか。専門家といっておまかせばかりもしておれないのかなあと思いました。主体性、自主性にもとづいて、村先生にはA4の紙面に文章を載せ、いろいろな角度から検証していただき、深層心理までもカウンセリングで解明していただければなあと思います。厳しい意見も楽しみです。いずれにせよ統合失調症には創作活動が良好だと、ある本でも読んだからです。とりあえずイマ感じる先生の、私をとおしての聖霊ガブリエルへの侮辱。脅迫ではなく不幸を招きますよ。ひとは思いやり、尊重しあわなければいけない。この基本を忘れてはいけません。最後、以心伝心では解らないといっておられたが、解体型、緊張型、妄想型、自分の言葉で表現できない事由を皆もっています。それを付度するのが精神科のお医者さんではないでしょうか。愛をないがしろにし、背をむけなないで下さい。お願いいたします。

拝啓 郁子様へ

寒くなってきましたね。いかがお過ごしですか。去年は御心のこもった暖かいお手紙を頂き本当にありがと

うございました。郁子様のお優しいお気持ちがスーと伝わり、私を弟のよう見守っていて下さっていたのだなあと、深く感激いたしました。この一年、私も常時、薬を服用しながら、とりあえずは順調に回復しております。でも病気が病気ですからその性質からお薬との兼ね合い、医師との相性が重要になります。私はまず一日、一日楽しく、表現がわるいか。言葉を変えて、充実して暮らすことを大切にしております。何年か先は覚束ない身の上ですが、明日の米があることに感謝しております。この先も未来は続きます。病と寿命は別ものです。さきほど充実と申し上げましたけれど、その中には悲しみも込められています。郁子様、どうかご自分を大切にされ、ご自愛ください。人生はいろいろあるから素晴らしい。郁子様も大舞台で主役をはる役者さんです。思い切って堂々とお声をあげて下さい。私も小さな自分に押しつぶされそうになったことが何度もありました。でも幻なのかもしれないがいつしか大きな自分を信じ、愛をもって行動するべきと自然に思いはじめました。心の狭いひとはなんでも非難します。ひとの評価を気にせず生きて行こうと思っております。郁子様、私のはなしばかりでごめんなさい。実は病院に勤めていたころを振り返り文章にしたためてみました。利用者より自ら英雄にあこがれていた処があったかと反省しましたが、理想を追いかけ苦痛を持ちながらも、本当に充実いたしておりました。私の世間知らずの無鉄砲な正義感も因縁のなかにあったのだと思いま

す。ひまつぶしに、ご覧いただけたら幸いです。まだまだ寒くなります。お体にお気をつけ下さり、心安らかに日々お過ごし下さることを願ってやみません。それでは郁子御ねえ様、これからもよろしくお願い申し上げます。郁子様が薬局で懸命に働いておられた御姿けっして忘れてはおりません。そして私はただ自分の道を口笛ふいて歩いて行こうといま思っております。ではご家族様のご多幸をお祈りいたし、本当に、いっこさん、元気でね……。では。

敬具

追伸

地代についての雑音は気にしていません。神の思し召しのままに

所感

その日、神はなんでもくださるだろう。この意味は。いつも感謝の人がひとつだけ望む。神がかなえられないわけがない。欲深なけちん坊なら、何をほしがるだろう。神を信じぬゆえに、つまりその愛のうすさに、逆にすべてを失い、泣くことになる。終わりの日、生きるものは極めて靈的である。結局、物欲、肉欲なきものたち。ほしいものは、美しく清らかな愛だけである。真実、神はそれを下さるのだ。世俗的に偉い地位を欲するわけではない。聖書に私に義があるとされているので口を開いてい

る。私はいわゆる世間でいう立派な人格者とは違うのだ。　愛は、ただ優しいとは違うかも知れない。　コリント人への第1の手紙「神の国とは言葉ではなく力である」心に愛と平和をもつか。ムチをもつのか。当然、怒りは敵ではあるが。そんなことより精神世界より強く御国は顕在化してくると言うことだ。　同性愛、神とその心を認め信じないところに情欲は生まれるのである。　トランスジェンダーの人たち、彼ら、彼女らの苦しみは深い。神は愛をもって解っておいでだろう。因縁であるが辛い。民主主義の下、人権と差別と真実の生き方がある。　エホバは神ということ。ヨシトは神、イエス、たくさんの聖霊たち、三位一体。　ヨシト、イエス、ペテロもとりあえずは人間である。色々な肩書き、レッテルをはずした後、真の人とは思いやり、愛に満ちた人である。　生存競争からくる罪悪感から抜け出すには、人の為尽くす。それしか道はない。　性格が悪くても心が美しいということもある。　実は私は職場で同僚と競う傾向があった。事務職の時代、負けられないと思い、ある先輩の女性と効率の良さ、実際の手早さ、確実性を争った。その理由はリストラの要件から逃れる為、新人の末席から這い上がりたかったのだ。それは怠惰な先輩の男2人に、対極として抵抗する意思表示でもあった。それは互いに非情になり同胞愛はなかった。私には上昇志向より、まずは解雇への恐怖があった。職場を清廉へ、の意識と、利用者の

為の自己犠牲。そこに矛盾するような生活者としての
の美しき清きパートナーの熱望。心が引き裂かれ、
病を得、結局、職場を去った。回復し、今度はプ
ラスチック関係の工場に勤めた。仕事を教えてくれ
るおばさんがいた。私は「競争だね」まだその言葉
の意味を正確に把握していなかった。おばさんは急
に対応が冷たくなった。序列重視からか。いや当時
の私の自己執着が見えたのだろう。またしても仲間
意識の希薄がある。私自身、愛の大義を模索中だっ
た。「リストラのときはその時」それでいい。いた
ずらに戦々恐々としても何のプラスもない。協調性
のない人間がまずきられる。恐怖に打ち勝ち、死
ぬときは死ぬそれでいい。そんな割り切り方が幸せ
を呼ぶ。いつも神を愛し隣人を愛することだ。時間
が大分かかった気もするが、生まれてからこの方気
付かねばならぬ運命であった。

素直とは、仲間を思い、どこに正義があるか判断
し、確かな決断を下す。それでいい。そして安楽を
求めるのは恥ではないが、狡い要領よしは必ず処断
される。我が道を行くことが大切である。 イエ
スの言葉を信じついていくものは、絶対にかわきも
せず飢えもしない。イエスの目的は神からあずかつ
た人々をひとりのこらず終わりの日によみがえらせ
ることにある。つまり愛がすべてである。 問題
意識があるから愚痴もでる。すべて裁くため。
母は悪魔かも、私の活動の邪魔をし、侮辱する。殺
したいときが幾度となく現れる。 自分本位、ず

る賢いもの。結局、良識が必須の仕事ではいきづまると思う。ありきたりだが人々への奉仕を考え、顧客の喜びをできれば忘れず、優先しなければならない。金は後からついてくる。私はこの世で一番幸せな男だと思っている。一方、私はこの世で一番不幸な男だとも思っている。私の危惧していたことが実際の事件となった。清原和博氏の覚醒剤事件です。彼は言いました。重圧感、5万の観衆の前で空振りしたあとの辛さ。責任へ押し寄せる、失望の波。彼はかつて対戦相手に「お寿司、奢るからシンカー投げないで」と頼んだ。と八百長みたいなことを公言していた。勝負となればサバイバル、何でもありだ。金がからんでいる。ジャイアント馬場が懐かしいなあ。プロレス八百長最高。ドラマがある。なぜ人は苦しみを選択する。何かを極め、できるなら神を超える為にと、鍛錬を継続する。逃れられない。人は人であることを忘れてはいけない。ただ愛の神を畏れよ。たとえ罵倒されても、自己の核にある仏性が冷静に受けることを自覚せよ。そして主体性は仏性と連動し生き続けなければいけない。人をすくうのが坊主。南無妙法蓮華経。万教同根、聖書にもとづく神に根はある。宗教協力など、それを主導した誰かの名誉欲、権勢欲から派生したものでしかない。員数と集金力の誇示である。この世は神の愛が漂っている。感知せよ。すべて神とサタンとの連携のような気もするが、複雑に見える善と悪、普通一般の人間関係

にも存在するもの。祈れ、さすれば愛の門は開かれん。 懈怠。心を善に向ける努力をしない状態。単なる労働に対する忌避ではなく、愛に背を向けることだ。 あなたが信じられぬならいい。俺は困らない。俺はひとりで幸福になる。俺は傷つかない。愛が強く深いからだ。あなたの為、神と隣人を愛するよう祈っています。 仏性は良心に近いが、オスカーワイルドは、良心は臆病を生み出すもとだともいっている。臆病は重圧感から神に委ねることを覚え、安心感を得ることができる。(南無) 私はみんなから障害年金というお布施をいただいている神ヨシトである。 永遠のいのちとは死後の幸福を想定している一面がある。仏教では輪廻、死後もくり返す苦しみ、修行者はそこからの解脱を望んでいる。大乘は現世での幸福を強く望むものであったはずだ。浄土教のような死後の幸福だけを望むことでは物足りない。願い、幸福はいつでも。そこにイエスの教え、永遠の命。日蓮の南無妙法蓮華経が生きてくる。つまりは皆の神の国の奥義、仏陀のさとり、即身成仏である。

念仏は厭世と諦めに生き、死後の幸福に賭けるものである。極めて不安定である。 いまは地獄だが死んだら極楽だというのは、念仏の気休めである、南無阿弥陀仏は、この娑婆(世)では役立たず何の功德もないと言う。虚偽である。現世で幸せを与えぬものが、なぜあの世での成仏を約束できるのか。現に当てにならないと親鸞は言っている。善、

また夢や目的を持たず過ごす。人生の答えは安樂行、つまり南無妙法蓮華經の唱題にしかない。それなきは罪である。生きても死んでも幸福である。永遠のいのちとはそういうものである。理屈を説いても理解せず、南無妙法蓮華經の功德を明かしても信ぜず。自由、愛、平和などの神の義を真剣に考えず、目先の悪徳にはしる、世間では愛への信仰心の薄い、金に汚い権謀術数に長けたリアリストが幅を利かす。そんな風景が広がっている。神に救われるのはただ無垢な幼子のように優しさ、純粹さ、素直さをもつものである。神をおおく愛せば大きな罪は許される。おおくとは真剣に無償の愛を想うことにある。エホバの証人。来る世では体制を維持するため、愛にて労働するという。ポエム産業のような偽善にならないように祈る。イエスの十字架の死により原罪は贖われ、律法よりも信仰が重んじられる。ここに旧約聖書は、意味を含みながらも必要性はなくなった。神から預かった命、返すときがあるかもしれない。ただひたすら信仰に生きるのみ。十字架の死、その後、預言者イエスの正当性を担保する言葉だけが有効とされた。それが新約聖書である。神との契約の真実。自由、愛、平和の実現を目指す。これが神の国の奥義である。人は生きて行く上で、貧困の中でも隔離されるよりは自由を選択するという。そんな人は神の国を信じ愛するだろう。しかし腕力をなくした老人は平和を愛す。欲望を遠望するからだ。私

は初夜に山代温泉にて宿った。妹は山田温泉だった
そう。もしかしたら父は家庭にSEXを持ち込ま
なかったのかもしれない。もちろん他に女などつく
らない。なにか微笑ましくないかい。これで母と私
の性についてのタブーはぶち壊された。良かったな
あ。 「義人さんあなたの知らない人のところへ
嫁いで行きます。ありがとう」これでいいのでは。
ホッと心が救われるのに。ホントか自分に嘘をつく
な。来ない返信、黙殺か沈黙か。優しい人だから、
そう思いたい自分が切ない。 真由子先生は結婚
した。私にとって浅ましい嫉妬心をもたらすはずで
あった。しかし私はなんなく、受け入れた。素晴ら
しい成長具合である。こんな境涯へ導いてくれた真
由子先生に大きく感謝する。私には強い気持ちがあ
った。「このままでは終わらぬ」と、真実の愛だろ
う。 釈尊は愛しい妻子をすてた。本当の悪人
である。自らがすくわれないと自覚したとき、サトリ
が開けた。つまり愛着の中、妻子と共に死ねな
かった。しかし仏陀となった釈尊は一匹の捨て猫のた
めに風の中、死すことができるようになったのであ
る。 他人の目を意識してはいけない。 難し
いことは難しさゆえ必要なことだけ話せ。 ちょ
こちょこの勝負に目くじらを立ててもしょうがな
い。 庭野鹿蔵は会員各家に庭野家御守護神様と
祈らせ、手前の家の先祖供養を暗黙に強要した。家
庭成仏が疑われると、自分達一族の栄華が根底から
覆されるからだ。狡い奴だ。 「千華物語」。偉

い人とは様々な悪徳から解放された人だが、尊い人とは神仏に頭上から、散華され、また足元から肩車され、認証された者である。それは実に素晴らしいことだ。人は心に信じて義とされ、口で告白して救われる。父の仇をうつ。それは出世、金儲けではない。愛を打ち立てること。心で生きること。イエスキリストの苦痛を心に受けることは、その後、信仰により大きな慰めを受けるということである。人は男も女も美しくありたい。美しくあっていい。恥ずべきことではない。私のシンクレチズム。思想、諸宗教の融合。混合主義。それはサムシンググレートである。神も人に支えられなければ生きていけない。イエスの死によって、罪は贖われ、人々の肉は死んだものとなった。死によって人は律法より離れる。つまり離婚して嫌な妻を追い出して、再び結婚しても姦淫にはならない。その逆もある。安息日のきまりなど、事細かな生活に関しての律法は悪か。偽善的な律法は否定されねば、イエスによって解放される原罪が見えない。モーゼの十戒の必要性も鮮明になる。生老病死の罰があるからこそ、苦に陥らない為の、人生の安全弁、神の戒があった。具体的には機会があれば義人にお尋ねください。栄枯論ずるにあらず、最近知ったいい言葉 神はイワンの馬鹿かもしれない。高額所得者、あいつらは、ただ欲の深さに苦しむだけという感覚しかない。神にとって、頭の良し悪しはどうでもいいこと。計算よ

り愛である。世は私を憎んでいる。この世の悪を明らかにするからである。大乘經典、法華經は真理である。偽經典もある。イエスも一旦、般涅槃（死）を体験した。私も死んだ後、復活（成仏）し昇天したい。イエスと同じく。「死後すぐわれたい。生前は無視、無関心、無感動。念仏の世界」。法華經、日蓮は布教を釈尊より引き継ぐ。人は積極的に利他に生きねばならない。そうでないと、真宗門徒のように、その冷たい人生の諦観により、ついには無間地獄へ落ちねばならぬからだ。聖句「義人でさえ救われなかったら罪人はどうすればいいのか」。絶対善（南無妙法蓮華經）、創造主（神）に委ねる。肉の欲（性欲）の克服、これは一番の問題だろう。アフリカの子供たちの悲惨さをみても解る。人の子（イエス）を迎えないものは、神の前にも迎えられない。神はすべてをご存じであり、愛の想いの権化、聖靈を侮辱するものは最も罪が重い。イエスは信じる者に報いる。神の愛（アガペー）である、だが十字架の自分に対しては、エゴを忌避し、民の贖いの為に死を受けた。疾病、疾患が科学によって治癒、寛解するようになった。ひとつの信仰の形態がわきにおかれる。「自分を振り返り人格を磨くこともなくなった」。だけど感謝を忘れないで下さい。快復したことに。それは何よりも神仏への因縁と、その御心にかなうものであったからです。信じて下さい。お願いいたします。初めて明かすが私が通った大学は愛知学院

といった。私が言いたいのはこの大学ほど私に相応しい学名はなかったということである。説明するのもなんだが愛を知り学ぶ最高の場所ということである。法学部は全国最低のランクであったが、それも私には良かったみたいだ。あまり勉強せずに、サボりながらでもなんとか卒業出来たからである。

神であり罪人でもある私は、独創的着想により愛の思想を大切にしたい。イエスの死より原罪が贖われたというが、殺し合いは消滅していない。人々はやはり罪人なのでは。悪魔の子たちが混乱させるサタンの体制である。イエスを信じる者は平和である。聖書のイエスは私であり、今度はどのようにして、どんな十字架につくのであろうか。そのとき神の国は完成し、またすべての罪も消えるのであろうか。いや今、イエスを党派の因縁からも離れ、正しく信じるなら、野蛮から離れ、幸せは逃げず、愛に包まれていることを実感できるだろう。そして私は最早、十字架にはつかない。 涅槃経。仏陀を般涅槃に向かわせたチュンダ。「彼は素晴らしい供養をした。その功德により、金が入り、見栄えがよくなり、権力を得るだろう」出家と在家の二重構造があるという、権力とは支配とは違い、つまり愛の持つ力ではないだろうか。 資本家も労働者もない。金持ちも貧乏人もない世界。果たして望んでいる人達はどれだけいるか。マウントし、また競争を煽り、煽られるのを好む、無節操な人もかなりいる。畜生の界、基本を忘れてはならない。しかし可愛い

のは事実である。母親より大事と思うときその危険性を思う。命としては平等が光る。確実に思う、自分がある。ソチの私を慕う鳴き声、無下にはできない。ソチは神の御使いである。真理にそむくようなら、たとえ父、母でもイエス、釈尊のように捨てねばならぬ。真理とはすなわち自由、平和、愛、そして神の義である。内村鑑三もパウロも同様、神の手足である。木を育てる、その力の根源は神である。勘違いしてはいけない、だから神である私が偉いということではなく末法、神はそういうものだという事である。イエス、神は愛である。だが一般に受け入れがたい思想でもある。積まれる富（傲慢が生まれ悪しきものに富は集まるから）と貪欲（権力の横暴など）の否定。イエス、その肉と血を食ませ、また泉のごとくあふれる霊力で人を救わねばならない。真実、中東のオアシスに譬えた、あふれ出る愛、無意味な偶像崇拜につなげては絶対にいけないからだ。無私とは己を計算に出来ないことより、素直に愛をもって生きること。敬天愛人である。遺産をもらうということは負債も背負うこと。財物と共に原罪を引き継いではいけない。イエスを信じること。つまり贖罪と愛を。天に求めるのではない。天は私に何をさせたいか。書かないことは罪である。もはや私は人としたら聖霊の宮である。ヨハネによる福音書ラスト、イエスは愛の現象。人々の心、姿に影響を及ぼし存在する。私は私の意志で愛の街道を行く。リュ

ータロー元気か。銘柄は忘れたけどいつも酒の5合パック買ってくれたね。ありがとう。友達と開いた運送業はうまくいっているかい。ガキの頃お前にももらったハイライト、誰だったか忘れたけど小学校のプールの便所で、3人でふかして楽しかったなあ。俺の親父は死んでしまっていてハイライトくすねてお前に返すことができなかったな。義理をかいちまったぜ。お前と同じ、でかい商用の自転車に乗っていた、転校生のタムラを覚えているか。「あいつ家、もやしたんだぜ」とお前少し怒っていたなあ。でも俺はいつも荷台に幼い妹を乗せていたタムラをいじめるといふか責める気にはなれなかった。お前はいつもの俺らしくないと思っていただろう。だけど俺は去って行く背中越しに確かに聞いたんだ。「あの人、いい人？」タムラは黙っていた。リュータロー元気でいてくれ。死んだりするなよ。みんな去っていくんだ。残っているのは怠惰な計算だかくケチなやつか、競争好きの権力を握りたいやつばかりだ。俺か、俺は大丈夫だ。神がいるからなあ……………。イエスの時代もかけおちはあったろう。もし離れ、各自、結婚したら姦通になるだろうか。私はこの世知辛い世の中に対し純真な愛を打ち立てたかった。清らかな愛があればきっと幸せになれると思うのである。金持ちが力でもってかっさらっていく。ただ全人的に相手を愛す。その時、真実の愛は勝つだろう。　　イエスは重い十字架を背負い引きずりながらゴルゴダの丘へ。釈尊は親、妻子をすて、のたれ

死に覚悟で城を出る。このふたつ、生老病死、原罪からの自由解放のため。人々に福音をもたらし成仏に導くことになる。人を正そうとすることが面倒臭い。裁かない。無私とは醜き我欲なきこと。人のあらを探るのが嫌、裁かないのは愛に背を向ける懈怠とは違うみたいだ。むしろ思いやりが見える。だが私はやはり裁かなければならない、神の名において。すべてに意味と時宜がある。そこで、愛と義に悩む私を傷つけぬため、天が請け負ってくれるのだ。まずは、神仏は美しくなくてはならない。なぜか。醜いと相手が引いてしまい、折角の教えも受け入れてもらえない。つまり利他の精神に基づき清潔で、小ぎれいなカッコウは必要である。すべて相手に心を開いてもらうためである。そこから空の教えが活きている。思いやりで女性を抱くこともあるか。EDの聖霊の宮には難しい。そしてその女性なりに生きていく。無理をしてまで、欲望への関与は必要ない。自然な感情で、愛する女性の手を握ればいい。真実の伴侶を見つける。一生は短いことはない。無欲を肯定的にうけとめる。離縁した。他と交わることは姦淫か。情欲を満たしたい。静かにイエスに祈ろう。本当の愛が見えてくる。生活に困窮する人も、神、イエスを信じさえすれば、つまり愛をもてば、周りが放っておかない。因縁から、自然に清らかに、聖霊により欲望に悩まされずに、賢き伴侶が現れる。再婚は罪ではない。ジュンコは或るキモイ男に身を預けたとき

聖女となった。たぶん神になるとき世界一の美女と世界一の醜女どちらも抱けなくてはいけないのだろう。私は聖霊の宮。EDによってその究極の選択より解放された。イエスはイニシアチブ（主導権）をとっていた。自由と平等のために。リーダーとインストラクター、権力は見分けがつかなく、統治はどこにある。神の愛による支配以外は悪行か。また世間には虎の威を借る狐たちが大勢いる。学歴社会の打破。神は霊的であるとき、人界では生きていけない。義人は服薬によって、寄りかかる悪の妄念より離れ、観念である神を受け入れることが出来るのだ。心からの苦しみ、切羽詰まった身の上。例えば母子だけで世間の荒波を越えようとする。安全祈願は叶えられ、御守護を受ける。それには南無妙法蓮華経の唱和が愛を奏でる。因縁、未熟さを超克しすべてに感謝できるようになる。膨らむ願望は貪欲につながる。清らかな心に神仏は働く。私は偽善者に適切に言っている。その民は口先では私を敬うが、その心は私から遠く離れている。人の戒めを掟として教え、無意味に、道徳的にエホバである私を拜んでいる。神の戒めをさしおいて人間の言い伝えに固執している。そんな人が大半である。欲望と布施は分離されている。製本は布施行。尾崎豊。ただ彼の曲を聴いたとき同じ気持ちになれるのはなぜなのだろう。純粋な若者への同情と言ってもいいのか。我欲に満ちた醜悪な大人たち、怠惰で物欲的であって

いいのか。社会、従属関係。契約に基づき、神を信じ奉仕の心で生きるとき、悩みを克服できるので。自己中心は束縛を意識し、仕事もルーチンとなり苦痛となる。競争、比較は醜く、他人の富、名誉への嫉妬は消し去って、自分自身の境遇に感謝するとき気運は代わり幸せが見えてくる。失望、絶望、孤立する障害者。独身者はイエス、日蓮の同胞である。もし結婚、就職へ進むとき、我々は、妬みを起こさず祝福すべきである。自己執着から離れるなら、人は神に受け入れられ、万人に愛されるものとなり、孤立、孤独とは完全に遮断されるのである。そして神の国、永遠の命が待っている。この体制、命をすてる覚悟を持つ。いのちが再び得られます。誰もが、いずれ死から解放される可能性がある。臆病から離れ、勇気を持て。義を求めよ。自由、平和、愛を真実とし、南無妙法蓮華經（絶対善）を求めるなら、神の国は腕を広げて迎えるだろう。イエスこと私は理想主義者であるか。愛と理想は一致するがよい。そして現実となる。原罪を贖って、神の子を集めるため十字架で死んだイエス。17歳で叔父殺す。父親殺す。親孝行という前に殺されずに生きていることを親は感謝しなければならない。人を愛せない。「その本心、自己への執着が強い。己に自信がなく振られることを恐れ、行動しない。臆病者、自衛本能だけである。それがすべて人生のマイナス要因に繋がる。自己から離れよ。利他の愛へと勇気を鼓舞せよ」。

この世では無職、それすなわち神、神はたんなる宗教家でも教祖でもないのだ。

ヨハネによる福音書。[聖なる父よ、わたしに賜った御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちがひとつであるように彼らもひとつになるためであります] これでわかるように父の本当の御名はイエスもしくはヨシトなのである。その意味するところは共に、[了解] ということである。エホバはヤハウエ、ゴッドと同じく神という名詞に過ぎない。(後に私はエホバとは愛の摂理(存在)の称号であるとした)。イエスは賜ったものすべてに感謝している。御名だけが特別ではない。神から授かった徳目。死の杯までも。彼を信じる人々には、神の恩寵が下る。それは、平等にありがたく、イエスの愛に基づき生きると信じられる。神は霊である。律法をもたない異邦人、キリストの義は律法をより厳しくしたものという。人々の律法を順守できない処に偽善者は君臨した。イエスはそれをあばき糾弾した。イエスは明らかにする。律法の偽善と残酷さ。結局、律法の順守よりも信仰が勝るのだ。つまり愛である。パウロは異邦人に説いて回った。実は愛による信仰はコンプライアンス(律法順守)よりハードルは厳しく高い。だが本当に温かい。人は弱い。そこから始まる。他への寛容なくして信仰は成り立たず、イエスはすべて存じている。信じなさい、彼を。それがすべてなのだ。罪は許されるのだ。神は俺みたいなものである。だ

って神だからである。俺が神でないと思いたい人には俺は神じゃないと答える。どうしたって神とは信じないからだ。神を祝福するとき人は幸福になっている。

欲ボケオヤジの借金苦より、子猫、小犬の命を救いたい、これがイエス。 私は試行錯誤、紆余曲折して金を得る。もう死なない。俺たち死なぬなら、死んだあいつらは復活するか。人は孤独ではない証明を神は果たす。 死は孤独の始まりと思う人は淋しい。死はむしろ霊の仲間入りを果たし、孤独から救われることを意味する。笑顔で復活の日を待て。神の愛を信じ永遠の命を得よ。 世話役になるときもある。一見、名誉欲が刺激されないと完遂しなく感じるが、やはり赴任の精神が必要となる。 神と民、イエスは仲介者として存在した。そして死に、原罪は贖われた。あとは各位、己の中の戒律と向き合うことだ。全てはキリストの愛にある。良心の自由を考察してみよう。聖霊が息づいている。 虚飾をすて、純真に好きなもの同士が一对になる。契りである。また当人らが決めた離婚は是だが、安易ではいけない。結婚は神の前で誓った、両性の合意のみが有効である。 「神の御名をあらわした」イエスの言葉は、エホバ、エホバと高らかに讃えるのを勧めたのではない。その意味は [神は愛としての存在] と明らかにしたということだ。 ヨハネによる福音書 [わたしをつかわされたかたはわたしと一緒におられる。わたしはいつも

神の御心にかなうことをしているから、わたしひとり置き去りになさることはない] 欲望とは [不足を満たそうとする心] 夢とは [いまは実現してないがめざす想い] イエスが「死んで三日目によみがえる」と、ペテロが制止しようとした。イエスは「さがれ、サタン」といわれた。ここである。イエスの死は、サタンの心待ちだが「三日で復活する」これは、まずい。サタンは心の中に入り込み、神仏の道を止めるもの、つまり私に反対する者たちである。 預言者ならさわった女がわかるはずだ、罪の女なのだから。イエスは預言者。「預言者の名において預言者を受け入れるもの、義人の名において義人を受け入れるもの、共に報いを受けるであろう」。聖句である。 神は御子イエスを愛していたのか。イエスは義つまり人の為に死ぬことが神の愛に報いることだと信じていた。民の贖罪の為、イエスが身代わりに死ぬ。神は死への杯をイエスに与え沈黙した。神は思った。「本当は裏切った人間などどうでもいいのだ。イエスお前の気持ちがよくわかる。だから私はお前と一緒に十字架についてやろう。おまえを愛するがゆえだ」ゲッセマネの園、血の汗。イエスの強い想い。死を依頼した神は再度、イエスの心持を確認した。「すまないイエス。欲にくらんで愛をないがしろにする、真理の見えない人々のために死んでくれ」。これが神の本心、杯だった。 だが十字架、あまりにも非道な群衆に対し、神は激しい怒りを持っただろう。イエス

は侮辱する民衆のお目こぼしを願った。「父よ、お許し下さい。彼らはなにをしているのか分からないのです」。 釈尊は愛着から脱出したかった。親からの愛情が重荷であった。自分は弱い、期待には応えられない。妻子への責任からくる重圧感。そして出家した。母の死によって生を受けた釈尊。忘れられないから、自分が許せないから、罪障消滅、南無妙法蓮華經。 聖句にある。「畑をすてるとは」。世の価値観を捨てる。来る世では永遠のいのちを得る。つまり雑事と生活に心煩わすより心を正し、思いやり、愛を優先すべし。 神もイエスも人々の大親友である。偉い偉くないという価値観からは離れるが、尊く、特別であるという域はずれない。彼の神聖は、義である。それは階級、権力とは違う、最高の愛であり、自然な勇気に満ちた尊厳である。

自分への固持、執着。傷つけられたという感情、どこまで許されるのであろう。仏教は自分への執着を否定する。客観を大事に、極端な侮辱、揶揄以外なら「あまりこだわらず。冷静に感情的にならず」と言うことだろう。人は何でも言うものだ。翻弄されるな。

コーポレートガバナンス（企業統治）に代表されるそれぞれの組織での立場と役目。仕方がない。それだけのことである。（利用されている）心情的にどこかで世間が納得できない人がいる。素直に礼節を持って先達に一言申し上げれば納得できるか。

(自分は自分、周りは周り) 私はいつも解決には神の靈感、聖書を用い伺う。神に委ね、絶対善、南無妙法蓮華經を唱題することが有効である。自分の本当の意志が湧いてくる。競争、権力より、助けかばい合う愛がある。そこに気付けば聖霊の宮はもうすぐだ。正義による自己コントロール。「人間関係に悩むことはもうない」と、過言ではない。 いじめ。サークル、学校、職場。病を引き起こし、自殺する前に退職、不登校、怨憎会苦から去るべきだ。優しい愛は傷つかない。明るく素直に温かく、怒り、恨みはいずれ消えればいい。まずは物理的に離れよ。それでいい。そしていつか「いや、助けて」とハッキリ言えることを信じよう。まずは祈ることだ。 神の子との結婚は神として許されない、と思ったが修道女、キリストの花嫁が存在するなら、結婚も認められると思い直し整合性をとった。そうなのだ。私は肉欲の為ではなく、精神的な永遠の契りを結びたいのだ。 責任と責任感の違いがある。重荷になってはいけない。いわれなき負荷は払いのけねばならない。目の前のことに精力を注ぎ、これぞ無二の責任感。責任は指示系統の人がいる。 憤る正義感と怒りによる邪心。似ている気もするが、私の真意は裁くことにある。確かなる善にて。

コリント人への第一の手紙 3 だから主がこられるまで何事についても先走りとして裁いてはいけない。主は暗い中にかくれていることをあらわにさ

れるだろう。その時には神からそれぞれ誉れを受けるであろう。神はこの世界を創った罪がある。だが神にさからってはいけない。「作られたものが、なぜ作ったかと」、そこに愛があるからだ。聖書の反応も変化する。周りの人々の意思を反映するからだ。神は繋がってくる想いを、豊かな愛に導くため手入れをする。聖書は絶対であるが、イエスはそのときに人格者に映らない。そこに彼は人々の複雑な心がわかる友人の証明がある。神、イエスは偉いのではなく尊い。エホバの証人はイエスを偉人とよぶ、この世の価値観にとらわれている。何故、科学との整合性に拘り、世間に迎合しようとするのだ。人間、義人（ヨシト）にすぐ戻ってしまう。神の御名はヨシトであり神はまた尊い。まだ時機が遠いか ソーナの弦の譬え。享樂、苦行、両極端は絶対によくない。釈尊ご在世、殆どの人が貧しいとき、少し禁欲的に生きることが安樂でちょうどいい按配だったのであろう。小乗の世界である。

私の場合、軽いソウで毎日、プラプラ、退屈もせず。だから平和な神の国の暮らしにも、永遠に飽きがこないのである。（常樂我淨）いつも楽しく美しい。天童よしみ（夜明け）。「出ていったあいつには一から十までだまされた。世話をして夢を見てひとりにさせられた。たかが別れじゃないの。泣いてることはない。ことはない。」♪かなり前に近所のスナックで、年上のパートのカウンターレディーに教わった曲である。なぜか共感していたが、現

在、この時点でその意味を知らされるとは思っても
みななかった。まるで失恋した私をうたっているかの
ようだ。この因縁はなんだろう。母がカセットテー
プを持っていた。聖書は時宜に合わせて力をく
れる。人として釈尊は偉いだろうか。すべてを
すて、仏陀となったとき、出家、その価値は光を放
ったのだろうか。仏陀万歳。よかったね、お釈迦様。
神は公平、平等をめざす。それはある意味、父子、
兄弟が殺し合うことであるかもしれない。「戦
争、人殺しの名誉」。「営利、金儲けの賛辞」。大義
からの栄誉である。神の栄光は、愛、自由、平和の
確立に、身を挺し貢献したものに与えられる。
聖書は母との喧騒を認めている。頑固で短気な母。
神の教えを啓蒙しなくては。助け船が入る。飼猫
のソチだ。私の言説をいい加減にする母の上腕に飛
び上がりかみつく。ソチは間違いなく神の御使いで
ある。誇りは行いからでなく、心からもたらさ
れる。堂々として生意気にみられるか、愛想よくし
て腰が低いとほめられるか、またシャンとしている
と思われるかもしれないし、卑屈だと思われるかも
しれない。人の見方はまちまちだ。心に自由、愛、
平和があればいい。徳は面に現出する。自己を
忘れるとは、欲望の縛りより身を解き放ち、自律
し、利他を念頭に、平和な心と態度を保ち、自然体
で生きることである。誤りではない。欲望の果
てに授かった命。育てるのは親の義務である。殺さ
れる子供たちにどんな罪がある。「親孝行などクソ

くられ」。そして親は慈しむのが無理なら子を人の手に預けよ。小乗仏教とよばれる南伝仏教。現在、活きている国のサンガにはスポンサーがあり、出家と在家の二重構造が見える。僧に供養することで在家は富、見栄え、権力、が手に入るといふ。原始涅槃經に記されてある。貧しさの中、欲望を持つことの虚しさを説いた、仏の教え。少し考察しよう。大乘が生まれ、禁欲と願望の矛盾を解決する。経済の発展を踏まえ、現世利益は感謝をもって是とされ、一仏乗、(すべての成仏)法華經から生み出た。日蓮大聖人の南無妙法蓮華經。人生の起承転結、幸せの為の、安樂行。人は平和、自由を享受する。常樂我淨、いつも愛に満ちて楽しく美しい。皆で一緒に成仏(絶対的安樂)をめざすことになる。くり返す、幸せの条件、すべてに感謝し、布施を忘れず、自己に執着せず、自律を大切にし、皆そろって即身成仏。これが久遠実成の本仏に人が許される真実の想い、夢と呼べるもの。やはり仏教は小乗、大乘問わず、自律、つまり自己コントロールが目的にある。そこは外れない。仏陀の教えはそこにある。モーゼの戒。「父母を敬え」、当時、親に縁切り、勘当されると、生きていけなかったのでは。新約聖書のイエスは弟子たちに対し、人々の後方からの支援を指示する。子育ては、親は天から子を預かり、育てさせて頂いていると思わなければ。虐待、殺された、子供たち。死の恐怖と絶望感、その寂しさを思うと胸が張りさけそうだ。

子殺し、虐待死、虐殺に関して、釈尊は静かに黙っているだろう。イエスは猛然と憤るだろう。日蓮は顔をゆがめてはらはら涙するだろう。私は裁く、悪魔の手に落ちたやつら、地獄に真っ逆さまに落とすのだ。それは当人たちも納得せねばならない。仏を信じれば自制できたはずだ。情緒不安定で済まされる問題ではない。親の責任は重い。内にある悪魔は聖霊により追い出さねばならない。尾崎豊からの解放とは。彼は自己中心的だろうか。「競争が嫌なら抜ければよかった」。心無い声がする。彼は殺伐とした世間を痛切に感じていた。コンテストは文字通り金の卵を見つける為。参加者は夢のつぶし合い。審査員、金儲けのネタ探し。権力による査定とは嫌なものだ。[千華物語]に書いた。「神の評価以外は一笑に付している」。「それはいつも愛だよ」。母が尾崎のDVDを聴いて、観て「そんなもん昔からある、三文演歌だ」と苛立って言い放った。冷戦状態になった。だが私にとって一つの起点となった。どこかその悲しい雰囲気を持っていた。疑似体験することですくわれた若者たちはたくさんいるだろう。学校、教員、体制、社会、仕事、世間、職場、観念、精神、悪魔、神。敵を作り続けた尾崎、気づくと同世代は皆パートナーを持ち、家族を養っていかなければ。もうつき合いきれない。計算高い奴も多かったろう。「20歳は大人だ、刑罰も厳しくなる。もう悪いことできないよね。」尾崎にとっては、中途半端な人間に対して、面当てに

覚醒剤にはしったのか。そして社会に出、挫折した私にとって本当の意味での自己の確立はあったのだろうか。大人になる、周りとの位置づけに関しても問題があったのは事実だ。そんな私に純粹で正直な衝動的な心象風景を見せつけてくれたのが尾崎だった。信じられない大人、不遇な少年、少女を具体的に理解できた。「俺は俺だ。俺なりに自由に生きる」。真実を求める若者たちに寄り添い代弁した尾崎のおかげである。生存競争のなか愛やまごころで生きるとき。金や名誉に拘らないなら、堕ちた先に安楽が待っていることも。全てはその人の持ち分である。何が良いか悪いかはわからない。死ぬ間際にいろいろあったが楽しい人生だったと思えたら本当に良いと思う。もしや一方、来る世、生老病死はなくなる。愛だけの世界。煩惱からの夢、願望は一蹴されることになる。競争は手段であり目的ではない。姿を消す。ある人が研究職から守衛にまわされた。落ち込み自殺も考えた。プライドが傷ついた。そして今度は社長付きの運転手となった。給料は変わらず楽な仕事である。周りの人間からのやっかみに悩むことになった。イソップ物語みたいだな。私はある結論に達した。女性、聖なる条件が揃い、許されるとき、一緒にお風呂に入ろう。私はED、性交渉には懸念がある。私はついに博愛の頂きに立ったのだ。性への意識は純然としてきた。美醜、貞操、気に留めず、寛容になったものだ。邪な肉欲があるから戒がある。自らの肉欲を克服すれ

ば、戒の必要性はない。自由になる。そして欲望のすべては聖霊の意思になる。セックスは妊娠、病氣、悪感情から解放される。後は彼女たちの労をねぎらい、背中を流すだけだ。でも・・・たった一人真由子さんを愛したい自分がある。食わせていけるのか、子供どうする。二義的な質問はバカバカしい。男と女が愛し合うのに振りかかる小難、しがらみ。派生してくるものは、すべて問答無用である。私は真っ直ぐ天の御心に従って、聖霊に導かれ、愛し合い、二人の生をまっとうする覚悟を持つ。そして永遠の命を得る。自然に聖霊へと任せる。己の為に生きよ。名誉欲、支配欲、金銭欲、所有欲、性欲と違う真実の良心の想いにより。私は観念の神に委ね、黙す。すべては天が私の意思に反応し、段階を踏まえ作用を生み、賞罰として自然に進展してきたからだ。統合失調症に「させられ体験」がある。幻覚は自分の意思からきているという。聖書と語り合う、観念の神は私である。つまりエホバは私である。捨て猫だったソチを拾った。私はリーダーシップをとれるものではない。一番後方にいてこぼれ落ちた人々をおすくいさせていただくのだ。それがイエスキリスト、愛の神エホバである。それがキリスト者にとって本当の主導と言えるのだ。尾崎は言う、仕組まれた自由に生きる。つまり因縁果報。ニーチェは叫ぶ、キリスト者の果ては虚無だ。弱者の恨み（ルサンチマン）ではない邪な強者に対するの反抗、正義はある。だがそれは

非服従、非暴力。イエスは贖罪のため十字架につく。愛の実現の為、人々の為に死んでくれた。彼の義とは、善悪の真実。道德の縛りからの解放。信仰により聖霊の宮となって完結する人たちの創出にある。善なる神イエス、愛の栄光、真の自由の獲得をあらわす。すべてはアガペー（慈愛、博愛）に生きることである。尾崎もまたラストアルバム10曲目「闇の告白」で原罪をクローズアップさせ、自らの死をほのめかした。そして悩む者はイエス、尾崎に感謝しなくてはいけない。サタンを恐れず。虚無に憑かれず。愛を信じる為に。神を殺せば、虚無などの言葉すら発せられない罰が頭上に。そしてまた愛（神）は決して死なない。来る世、真実の愛により人々は生老病死の苦悩を脱却し自由になる。祭り、不思議な力を願い、貧、病、争が解決に向かうという。迷信かな、神は犠牲と同じく特別喜んではいない。祭りは神事から外れた人間の余興の部分が多い。大乘経典は欲望、進歩など、仏の教えと矛盾しそうな事象を、聖者たちが仏陀の声を心に得ながら、一定の期間をもち、整合性をとり、空の教え、現世利益と発展し、形成されたものだ。経済の発展、物心ともに、暖かく、やはり民衆の心が救われねば、本物の教えとは支持されない。やみくもな欲望の満足に仏陀の教えはない。すべての想い、絶対的平和を目指す。末法には南無妙法蓮華経の唱題しかない。ヨシトは釈迦、涅槃の遺言である、法を依り所とし、自律を

大切にする。末法、そのことが難しい人が大勢。日蓮大聖人であるヨシトは、法華のうちわ太鼓を皆でたたき、草木国土悉皆成仏。仏法、南無妙法蓮華經の唱和を勧める。最早、ヨシトにとって題目だけが善なのである。即身成仏である。風俗にはしる若いシングルマザー。R会の教えで救えるか。雑談で法華經をこねくり回す暇はない。現実にはかなりコミュニテイの助けが必要だろう。私の題目が彼女らを救う。一昔前、御好み焼き屋で働いていた老女がいる。罵声が飛びかう。必死だったという。パワハラである。貧乏な家に育ち、夫も短気でよく怒鳴ったという。だからこそ仕事に耐えられたという。パワハラへの耐応性の問題は奥が深い。人間の尊厳につながってくる。ホームレス 世間から去る。これぞ出家。法華經見宝搭品第十一多宝如来と釈迦如来の並座。とすれば娑婆世界、仏は二人いても良い。日蓮は仏なのだ。だが彼らは末法に下種の仏は日蓮ひとりであると、翻意しない。法華經を無視することになる。法華經は釈迦如来を久遠の本仏とあらわす。そして一念三千、南無妙法蓮華經は当体、日蓮大聖人なのだ。二人の仏は並座する。なぜか、日蓮は神であり、仏であり、私である。そして大聖人の称号を得たのである。数値で見えない世界をはかるのは間違いである。「法華經方便品第二 仏は仏にしか解らない」日蓮大聖人と久遠実成の本仏は一体となったのだ。日蓮は仏である。人は仏でなくとも、行いと心が汚れに満

ちるとき、生きているなら、まずはそれでいい。そこから修行は始まる。ただ安楽行、南無妙法蓮華經の唱和。神仏の加護が生まれる。聖書とのダイアログ（対話）をこじつけと。その判別は、この私を觀よということだ。人が鍛えねばならぬ唯一のものは真心であり、それは愛を心に打ち立てることである。色々な人がいてもいいなら、我が母もきつといていいのだろう。ただ自分本位を矯正せねば樂園には入れない。私の心に沿い、母への教化の為、飛びつき、かみつくソチの心が痛い。法律上の結婚と、神の前の契約とは違う。辛さから辛さへの忍耐が生まれるのではなく、安楽より優しさが生まれる。そんな時代、人をつくっていかなくてはならない。母は鬼にも仏にもなる。鬼の母を殺し、仏の母を愛す、そうでなくてはならない。母を鬼にしてはならない。真の意味での謙遜、へりくだりが大切。欲望を叶えるために祈る、ではなく。平和を願い、幸福を派生させる事を祈るのである。それは真髓で、神（愛）の意に沿うならば叶えられるだろう。聖霊は風のようなもの、どこからか吹いてきて、どこかへ行く。そして今、私は聖霊に満たされている。（聖霊の宮）イエスの血、肉（十字架の贖い）。聖霊の水、霊（愛、教え）。それがペテロたちを勇者に変えた、自然に。釈迦は確かに偉いが、尊いのは仏陀の御教えである。つまり法にある。個人崇拜（意味のない偶像崇拜）を嫌ってあえて表記した。法華經の精神、釈尊

(仏陀)は久遠の法が示現した応身仏。大切にその慈悲を思い、現れたお姿を尊びたい。そしてサンガ、彼は高い位置に座を取る教祖にはならず、傍らのインストラクターに徹したという。日蓮大聖人の言う、主、師、親の恩とは、天の父のことが一番に大事ということである。つまり大聖人自らのことでは。イエスは死ぬことに価値があった。釈迦は生き方が大事。仏陀の骨を戴いた、ストーパ(塔)に集まった守り役たちは、次第に二重構造をつくった。出家と在家。在家の願望を認め、出家へのスポンサーとする。在家も出家に供養することで功德を積む。そして禁欲的な釈尊の教えとの矛盾点を平にし、整合性をとりながら新しいタイプの教えを生み出していった。釈尊の時代、貧しいからこそ禁欲が必要だったのである。一仏乗(すべてが救われる)、大乘經典、法華經である。悪感情に包まれた僧侶より、人生に問題意識をもつものが真の仏弟子と呼べる。そして末法、煩惱から抜けるには南無妙法蓮華經しかない。ヨハネ第一の手紙「彼が義人であると同様に義を行うものは義人である」。つまり現れた神は義人(ぎじん)であり、そして義を行う者は義人(ヨシト)である。普通、同一人物と考えるが既成の宗教団体は当然の如く、そうは認めない。そして神の心をもつものは義人(ぎじん)である。そして私もまたそのひとりなのである。結局、私が神ヨシトである。その前節、子たちよ、誰にも惑わされてはいけないと、記してある。

「あれは善き人だ。いや世を惑わしている」私は義人（ヨシト）。否定する人間もいるだろう。私を周りの人間がどう見ても、再臨した神イエス（エホバ）、なのかを裁けるのは本人、私、義人（ヨシト）以外は存在しないのである。神は神にしかわからない。イエスは言った。「もう、あなたがたは僕（しもべ）というものではなく友である」と。妬み、偏見に陥らず私を信ぜよ。そして求めよ、願い、狭き門をたたけ。心にイエスの義と愛があれば望みどおり。そして祈りを捧げよ。神イエスを信ずるものが、優しいパートナーを求めるとき、天は、さそり、へび、みたいな相手を与えるであろうか。そして世の女性は、未婚の方が生活、夫、子に拘わらず、主を愛し安楽に暮らせるみたいだ。淫猥な悪魔の声に耳を貸すな。聖書はこれまで私とのダイアログで含意、示唆を行ってきたが、ここに来て、自ら裁き歩いていけ。「あなたは正しい」と領解してくれた。私の水（愛）は永遠にわきあがる。私は神よりいただいた人たちを、終わりの日にすべてよみがえさせる。葡萄の木、つまりイエス、神（エホバ）に繋がっているものたちだ。私は神イエスの再臨である。（中東は水が貴重物）

あとがき

カウンセリングを受ける日の朝、妙な夢をみて目を覚ました。私が通っていた、大学の講堂が正面にある。そして私は必死に自分のクルマを捜しているが見つからない。ふと傍らに目をやると奇妙な珍獣がいる。よくみると頭の上部が陥没し脳みそのない犬がぬかるみにあえいでいる。そこで眼が開いた。その瞬間、私は悟った。真由子先生の迷惑になっている。それまでカウンセリングで、私の書簡に対する先生の対応の意味は。黙殺なのか沈黙なのか、もし沈黙ならばそこになんらかのメッセージがあるのでは。そんなことを話そうと考えていた。ぬかるみの犬は、私に対して当時の生活をよく振り返ってみろという示唆があった。出席日数不足で留年になった恥ずかしさ。哲学、再試に臨みしょうがないから平凡社の大百科事典のカントの欄を丸暗記して向かった。どうだと思った。（内容はよく理解できなかったが）そして発表。教授は怒っていた。「百科事典をそのまま写したものがある」私は3回生にあがれなかった。頭の陥没した犬。クルマに、アルバイトに浸り込み、毎夜のように酒におぼれ、勉強に見向きもしなかった。そんな男が一生懸命医者になることを夢見て、頑張ってこられた先生に対し、おこがましくも近寄ることさえ、許されざることだった。それでいいのだ。カウンセリングではその旨、話させてもらった。しかし思うに百科事典も始めからみそがついていた。セールスマン。「司法書

士の問題集を買って、項目ごとに事典で調べればだれでも試験に受かり合格する」。その口車に乗り母にまた散財をかけさせてしまった。当時、私は母が打ち出の小槌をもっていると思っていた。居酒屋の常連の鳶の富さんは種子島出身で「あんたのお袋さんのまねはとてもしない」と今から思えば、私の親不孝に呆れ返っていたのである。私は「大学を止め、司法書士の専門学校へ移りたい」とセールスマンの話を聞いた、入学、間もなく母にTELしていた。遠方にいる母にとって、はがゆかっただろうなあ。同郷の友人2人、ひとりとは私と同様に進級できないことがはっきりすると、東京の友人を頼ったあと、たくましく金の先物取引の営業マンとなって活躍した。もうひとは「お前も親友ならば一緒に留年しろ」という私の冗談を真に受け、親に告げ、彼の母親から苦言を呈された。一年早く帰省し、いまは市役所で高い位置についている。私は母に謝罪、感謝しなければいけない。だが恨んでいる。私に愛されることは教えてくれたが、ひとを本当に思いやり愛し、保護することを教えてはくれなかったからである。こんな馬鹿で不真面目な男でも進学できたのは、免許制度にあぐらをかいた、家業の酒店があったからこそである。「お客様みんなありがとう」読者の皆、今回もありがとう。そしてカントは親孝行を勧めるだろうなあ。つまり愛すること。当時それを書けば試験に落ちなかったかもしれないなあ。やっとなんも解ったみたいだ。

積み重ねた不幸の数を、なんと詫びよかお袋に。

「自由、愛、平和をいろんな職種、アルバイトから学べた」と、当時の自堕落な生活を弁解している俺。このままでは最低だ。還暦（令和3年6月）の俺には、8年前、生後4か月で捨てられていた、ソチへの愛情、保護、そこにしか救いはないかも。でも如何なる時も真由子さん、神の愛はあなたを包んでいます。私を信じていただきたい。いつもありがとう。「やっと愛というものが分かったような」。遅すぎるだろう。神は愛だぞ。誰かに叱られた。

義人

我は如何にして

神仏を信ずる者になりし乎

生きていたのしいと思うことのひとつ
それは人間が人間に逢って人間について
話をするときです。 みつを

正直、共感しました

義人 H28年6月

はじめに

〔義人所感集〕、神である自覚に基づいて説法をする。「母親に褒めてもらいたいから」と書いた。でも隠されてもいない、製本する真実は、真由子先生の愛を獲得したい、そのためだけなのかもしれない。聖書は彼の人へ郵送するな、と伝えてきた。これ以上の負荷は彼の人迷惑となり悪感情を起こさせると。私は心だけ伝わればと思ったが、そんな夢物語は胸にしまうときか。さようなら、さびしいけど。結婚というひとつの答えを出された先生。そして御懐妊されたという事実。そんな幸福な家庭に私が入り込む余地は毛頭ないだろう。

さあスッキリしたところで、少子化対策。まずは映画を観せることだ。ロマンチックな。たとえば外国映画、哀愁とか喝采とかローマの休日とか、セピア色の、すこし前のもの。心を震わす悲しくて、優しい、愛に想いを向ける、温かい映画がたくさんあるからだ。皆どこかボタンのかけ違いに陥っている。愛情、思いやり。そこからすべては始まるような気がする。心を深くする。結婚する人たちも増えるだろう。

民主主義。どんな暴論も一応は俎上にあげなければならない。神の教えは愛である。我欲のぶつけ合い、自由民主主義に公平、平等、平穩はあるだろうか。経済の拡大、貪欲の勧め。実は苦の根本原因、渴愛に呪われてはいないか。革新への競争を没立て続ける社会。

自律、まず欲望の追求から離脱する冷静沈着さが大

切。つまり煩惱から抜ける。サタンの体制に抗い、各自、達成する必要がある。絶対的平和の現出へ向けて。来る世、全知全能の神が愛をもって支配する楽園、王国の建設実現のために。

偶像崇拜。不平不満から懇願に至る。「エホバ、エホバ、」と叫ぶ、ではなく。

皆が愛し合い、尊重しあうことが王国の民の必須の条件となってくる。

それはアガペー（神の愛、隣人愛）である。

エホバの証人はエホバを連呼する、彼ら。戒はいたずらに神の名前を呼んではいけないことだと言う。だから破戒ではない。

私の知る文献にはモーゼの戒「みだりに呼んではいけない」とある。いたずらとは如何に。

愛である神に、目的もなく、あえて恨みもないのに、侮辱して馬鹿にする人はいないだろう。いたずらに呼ぶとすれば悪魔である。エホバの証人に罪はないか。

「オーマイゴッド」。ハリウッド映画でよく耳にするが、受難に対し発せられる言葉だ。「神への信頼を疑います」。神は、いたずらに名を呼ばれても怒りはしない。そんなに心は狭くはない。神である私はそうだから。（笑）これも様々な体験を経ての、忍辱行のおかげです。だが造られた民の立場で、愛である神の真実を気にも留めず、ただ名前を叫び、欲望を叶えて貰うためだけに祈る。これは偶像崇拜であり、許されない。「みだりに」と強い抑止の力がかかる。エホバの

証人はこれに抵触するのではないか。

今、エホバの証人の方々との聖書研究会が本当に楽しいと思える自分がある。大上段から宗教の話ができる唯一の機会だからだ。日曜日待っているよ。本当にいつも待ちどうしいなあ。エホバの証人よ。やはりみだりに神の名を呼ぶのは、大切なイエスの愛を忘れさることに繋がる。エホバである私はそれを危惧している。イエスの十字架の死に着目せよ。

[戒、定、慧]「戒律、精神統一、智慧」。三学の教えである。私のたどり着いたサトリとは聖霊の戒を保ち、ひとり静かに座し、愛するひとを純真にただ思い続けるプラプラと。それが真実ではないだろうか。

目次

はじめに

1 我は如何にして神仏を信ずる者になりし乎

2 母方

3 自慰

4 イエスと寅さん

5 悪魔の一味

6 吉田真由子先生へ

7 徒然に思うこと

8 {エホバの証人} の人への送信メール

あとがき

[我は如何にして神仏を信ずる者になりし乎]

寒かった、クーラーの効きすぎか。ベッドの脇の台の上に二本のタバコが置かれてあった。そんな歓迎の意味を理解出来ぬほど、私は世間知らずで病状も酷く混乱していた。

注射が効いてきたのだろう。意識がやっと自分を取り戻してくれた。

私はクーラーの寒さと、慣れないベッドが嫌で、昼の部屋にかえてくれと訴えた。

希望はかなえられ、脳出血から半身マヒになりうつ病を併発した男に誘われ、昼の部屋に居場所をうつした。

男はある人物に叱咤され、「毎日廊下を歩き持久力と体力を回復させるのに努力しているんだ」と汗ばんだ身体をタオルでふきながら笑顔を見せた。

一方、私は耐え難い苦痛にジッとしておれず、七転八倒の姿で煎餅布団の上、表情をゆがめていた。

それを眺めているひとりの男がいた。みるからにマトモには見えなかった。「頼む。殺してくれ」私は男に声を振り絞り発した。「殺してくれ」驚愕していた。看護人はそれから一週間、薬を与える以外は特段なものもしてくれなかった。

夜は、少し苦しみは収まった。

朦朧としたなか、選んだ主治医は薬を一週間後、変えてくれた。

しかし布団にくるまる様相からは離脱できなかった。

苦しみはしだいに緩和し平たくなっていった。
ある日、別室の男たちも交じり新聞紙の上にお菓子を積み、楽しそうに談笑する一行があった。
私は大きな声で「寝ている人もいるんだ。いい加減にしろ」とわめいた。
沈黙のあとひとりのこわもての男が「こういうことも大切なんだぞ」と溜め息を吐き出すように言った。
悲しそうな声色で。
場は解散となった。
振り返り、混乱から精神科閉鎖病棟で薬漬けにされるまでのいきさつは[白くて紅い日々]にて表したが、いかにして聖書に出逢ったかを語っていなかった。
私は思考伝播（相手に心の中が分かってしまう気になる症状）を引き起こしながら赤いプレリュードで友人たちの家を頼り、さまよっていた。
親が食堂を営んでいる高校時代の同級生がいた。お盆であった。彼は東京で金の先物取引の営業マンとして活躍していた。
本来ならそんな偶然がありえるわけもないような気もするが、私が彼の両親の食堂でビールを頼むと、彼がお盆で帰省し店にもうすぐ寄るという。
携帯電話などない時代である。
私は歪んだ周りの空間と人物たちに仏陀として説法の念波をおくりながら彼を待った。

彼が現れた。アルコールの入った私は彼のクルマで近所の彼の家へと向かった。

部屋へ入ると、彼は即ベッドの上、死んだように眠り始めた。不思議だった。

私は正面の、机の上に目をやっていた。二冊の書物が静かに並んでいた。ムーというSFの娯楽雑誌と小豆色の文庫本サイズの新約聖書だった。

ムーを広げると何度も聞かされたノストラダムスの大予言の文句が飛び込んできた。「アンゴルモアの大王か」少し気になった。

聖書をスーと開くと驚きだった。義を行うものは義人である。「俺のことがかいてある」素直に因縁を信じた。

この書は購入できないとある。私はズボンのポケット、有り金、全部をさらけだした。三千円ほどだろうか。百円玉が月明かりに光っていた。

私はその聖なるものをかき抱き、眠る彼に少し目をやると脱出するかのごとくに彼の家を後にした。

そして赤いクルマの待つ食堂前へと歩き出した。

また不思議が起こった。わずか二時間ほどで夜がしらじらとあけ始めたのだ。

なぜか核爆弾の発射を思った。それほど私の混乱は酷かった。太陽の雲間から覗く朝の光がそう錯覚させたのだ。

そうやって盗んできた聖書も25年間雑誌の山のなか、幸いにも捨てられず、見捨てられてはいたが存在してくれたのである。ありがとう聖書。

なぜか新約の文字が消えていた。

私は気づいた。なぜこわもての男が寂しく悲しい表

情をみせたのかと。

周りのみんなのことを考えていたつもりでいた私は、本当は自分のことしか考えていなかったのである。

公と己、厳格と寛容。大人とは仲間とは、神を愛するとは、隣人を愛するとは。

傷ついても追い求めていかなければと決意する。

少し時間はかかったが。

今、私は自分の運命は聖霊から知らされ、意志は神の靈感である聖書によって導かれた。私は己の使命を果たすべく、ここに生きている。と宣言するものなのである。

[母方]

無私がある。端的に言えば、これは与えられ、また紡ぎ出した想いを消し去るものではない。それは己の中にある妬み、恨み、ひがみ、などの悪感情。金銭欲、名誉欲、権勢欲、支配欲などの、醜い欲望からの美しき解放にある。雪の中一生懸命足をとられながらも、年を取ってから生まれた末娘にできた外孫の為、担いで持ってきた天神様。また鯉のぼりを欲しがる幼子をなだめるように贈られた金太郎の置物。母方の祖母である。(実は後年知るが、金太郎は母が用意したものだった。) 私は執着から離れるため、これらをすべてくだらない軟弱な、とるにたらないものとして扱ってきた。そこには母の見栄も隠れていたからである。しかし私の息災と母の立場を思って天神様

を手渡した祖母の心になんのかもりがあっただろうか。私は確実に誤っていた。玩具に慣れ親しむことで人間としての真面目さがくずれると危惧した父方の祖母はバスのおもちゃ、電車のおもちゃを縁の下へ放り込んだ。が、さすがに天神様は破れなかった。母方の祖母に酷いことを言ったことがある。ネフローゼで入院。見舞いに来た祖母に「汚い、ばあちゃん、帰れ」。なぜだろう。たしかに祖母はパーマもあてず髪もちゃんとしていなかった。三つのときのことだが、後悔する。そんな私の残酷さにも、祖母は「昭子（私の母）にバス代もらっとるからいかなきゃいけないんだ」。お金など渡されてはいなかった。再婚して私の伯父と母が生まれた。祖父は昭和16年に富山の焼け跡を見ずに他界する。無学な、戦時中、ただ子供たちを育てるのに一生懸命だった祖母。我が母と重なる。伯父は私と同じく11歳で父親を亡くした。伯父はお国の為15で予科練に志願する。帰ってからは、家族のため、からだをおしまず、より高い給金の職を求めたという。母と一緒に我儘なところもあったが、母は伯父の悪口を言われるのを極度に嫌う。焼け出されのなか、生きてきた固い絆があるのだろう。私が、なぜ、いままで母方のことを取り上げなかったかということ、NHKの朝ドラみたいに根本にある世の中の理不尽、問題意識などが、単に明るくきざまれてしまう、そんな気がふとしたからある。母の中に、定職に付けず女房を泣かす罪人、父と、強い伯父の対比がある。私は酔っぱらって病院に夜半おとずれ、そ

ばで寝かしてくれと頼んだ父が愛しい。他人はプライドの高い病弱で少しやくざな父を愚弄し嘲笑を浴びせかけ、鼻でフンと投げ捨てるだろう。だがイエスはそういう父、そして軍隊に失望した伯父を含めて生活のなか格闘し傷つき、涙した、たくさんの人達のために存在するのである。私は孤独ではない、人々の心の痛みを察する、思いやりに満ちた人はたくさんいるはず。イエスはすべて知っていると言いたいのである。

〔自慰〕

9ヵ月ぶりに自慰行為に及んだ。自然の成り行きだった。EDになり、このまま聖人として確立していくのではないかと思っていた。罪悪感が少しある。聖書が肉欲を戒めている。自慰に関しては、野蛮な妄想がつき、情欲へとつながり、エクスタシーの後、脱力した嫌悪感に落ち行くことがかなりある。(病気、妊娠、悪感情)の存在。私は肉欲を安易に片づけられない。同病の連中に、その性事情を尋ねてみた。障害か、症状か、薬の副作用か、EDも多い。「風俗にいくか。女の子を食事に誘ってそれから」働いて金に余裕のある一級建築士だ。大概のやつは、マスターベーションを「週にイッペンDVD観てやっとする」「月に1回」そんなところだ。「60超えるまで、一日二回は必ずやっと思った」という服薬量の少ない豪傑もいる。性的欲求は個人差がある。様々。かつては薬の副作用が主で

あったが、性交渉までもっていくのは機能、そして感情、経済的な問題があり、精神障害者にとっては希少な事例であった。

自慰行為。世間では馬鹿にして鼻で笑うひとも多かろう。寺山修司はその幸福論のなかで「誰かがちゃんとした自慰論を書くときが来ている」。それから30年以上たった。SNS、DVD、性描写の露出度は激しく、赤裸々になっていく。手っ取り早く、金もかからず、わずらわしい会話に始まる人間関係もない。手軽で合理的か。こりゃ少子化がすすむわけだ。病気、妊娠、悪感情からも解放される。まあいい。さあ、どうキリスト者に悪徳とされる、肉欲の問題をかたづけられるかだ。話はとぶが、出世して金が入る。そこからどんな喜びが生まれてくるだろうか。男女関係、着るもの、食べ物、住みか。そして名誉、権勢。

欲望はどの位置でも内容は変わらない。不純な富に恵まれるほどあさましくなるみたいだ。なぜ神でありイエスキリストである私が、今、自慰行為に及んだのだろう。

「情欲をもって異性をみるのは姦淫の罪である」イエスは言った。かつて手淫一回で姦淫の罪を犯したと自死した若者がいたそうだ。イエスは姦淫した女の命を助けたかった。だから「罪なきものから石を投げよ」とハードルを上げ偽善を戒められたのである。すべては自然の中にある。心に思うことはだれも縛れない。頭に浮かぶ性的モチーフへの責任は。「ない」それでいいのだろう。つまりひとというものは弱い

ものだ。〔7の10倍、罪を犯しても許せ〕聖書にある。そんなひとの弱さを憐れむため、私は自慰を行ったのであろう。なぜこんなある意味、羞恥心に響くことを書くのか、みんなに安直にマスをかくのではなく、やがて肉欲の虚しさを知って、そこから生まれる深い想いにて、愛する人を、真心をもって、慈しんであげてほしいと、私は心より祈っているからである。肉欲、人の欲（金銭欲、所有欲）からは神の国には入れない。悪しき欲望の滅却。まずは神に祈り、自然にまかす。すべては始まる。そして本人の意志ではどうにもならないことにぶつかる。その時、気づく。すべてを神に委ねたとき、つまり我執から離れたとき、おのずと幸福が訪れることを。その時、欲望の責任は神に移り、皆は罪より解放されるのだ。イエスにより贖罪され、肉欲は滅したことを実感するだろう。

〔イエスと寅さん〕

田舎の図書館の棚に一冊の本が置かれてあった。題名が先にあるタイトルである。

敬虔なクリスチャンなら眼をむいて怒るかもしれない。ヤクザなテキ屋の風来坊と世界史上一番、御優しいひとが一緒なわけがない。まあ聞いて下さい。「かじかんだ指を握りしめる、そのぬくもりのようなあたたかさを感じる」銀幕のなか女は言う。風のように生きる。その日暮らしのような生活。恋した女には命までかけようとする。私と同様、ワルガキ出身の純愛主義者である。イエスはペテロに「魚をとるより人を

とる仕事をしてみないか」と声をかけ、ペテロは網を捨て即、付いて行く。イエスには寅さんみたいな型にとらわれないユーモアを含め自由な心があったのだ。愛を信じて、自由に生きる、寅さんにとって愛に満ちたイエスは自分と同じ香りがするのである。寅さんはテキ屋という縁起を担ぐ、商売上の関連性もあるのか、産湯をつかった帝釈天を大切にしている。もしかして寅さんが、イエスがいた、宮にて露天で商売を、どうなる。イエスと喧嘩になっていたかもしれない。ふたり、神への敬意の表しかたが違うのか。いや神に対しての認識が少しだけ違うのだ。愛か富か、祈りか商売か。寅さんはイエスに理由をきいて、イエスが暴れる所業におよんだことをきっと納得しただろう。

「神（愛）を不浄な金で汚すな」。

それが寅さんの善いところであり、心あるものに愛されるゆえんであろう。イエスは本当に寅さんみたいな陽気で能天気で優しくて、怒るとちょっとだけ怖いそんな一面があったのかも。イエスは神への義理、そして人情を重んじるナイスガイだったのである。

寅さんなら解る。衣食住、欲望を満たせと神に迫るより、美しい清らかな想いが愛する人に届いてほしいと祈る方が大事だと。寅さんもイエスも神を純粹に愛しているのである。

彼らは捨て身だからこそ下流でうごめく人々の心が理解できたのだろう。私には解る。何にもとらわれない純愛とは相手のことを、ただ思いやる心、幸せにし

てあげたいと望む心。

では幸福とは。ほら寅さんが答えをだしているじゃないか。ただ二人でいて楽しい。

それがすべてじゃないかなあ。隣人を愛するという事はそういうことであろうネ。

そうだろう。

[悪魔の一味]

真由子先生から手紙の返事を貰えず、私は少々、不安定になっていた。からまり繋がるよう葡萄の木を捜していた。或る女性目当てにクリニックにTELをしていた。聖霊にこの身をクルクル回転させられてから3年近く、経っていた。吉本先生はクルクル回った当時「明日9時に来なさい」と。なにか重要な用事が入っているにもかかわらず私に対し便宜を図って下さった。けど自ら神を意識した私は自分の主体的行動を阻害するものだと思って「来るか、来ないかわからない」とふてくされた。彼女が「絶対、来てください」真剣な表情で強く言った。[この人は本当に俺のことを案じている]。敵か、味方かと混乱した私は、たとえ悪魔の一味でもこの人に賭けてみよう。この人はきっと俺が救世主だと思い、真実の愛をもって、このろくでもない世界から、永遠の自由と平和の実現とともに、自らを救い出してくれると信じているのに違いない。かつて[私にとって、契りを結ぶとしたらこの人以外にはいないのでは]と思った時期があった。吉本先生の傍ら、パソコンを打つ姿、その柔

らかな表情。真由子先生を知るまで、ほのかな恋心を抱いていた。壁を蹴った外来患者。「辛いのは患者さんの方だから」思いやり、そう信じた。でも残念だが、健常者の職業意識からだったか。いや誤った見解だ。差別なき彼女を信じたい。彼女の名札の姓が変わった。勝手だが離婚され自由になられたのかと思った。逆に結婚されたのかもしれない。そんなことを10分でも20分でもいいから感謝の気持ちでお話させてもらいたかった。そしてぜひ私の書いたものを読んでいただきたいと思った。世間体、階級意識。障害者への差別。そんなものを最近、精神科のプロから突きつけられた。聖書[その量る、量りでお前も量られる]。人間はレットル、肩書きを引きがした真の人。すなわちどれほど愛と思いやりで満ちているか、それだけが本当の価値判断を下すものになると思う。入院中、ある女の子がいた。二十歳になったと聞く。外見はかなり幼くみえる。知的にも問題があるように見え、性格異常だとみんな噂した。看護婦はみな、「まゆみちゃん」と呼びかけ、幼児に対するように扱った。そんな中、吉本先生は[さん]と敬称をつけることにこだわり、強調された。先生も若く正義感にあふれておられたのだろう。「もし彼女が自分の身の上を自覚していたなら」、その心情を思うとき、私は胸が張り裂けそうになる。そんな人権への意識の高い先生には解ってほしかった。共生。私は一介の素浪人として浮世を渡っていこうと決めた。吉本先生には女性へのお詫びと同時に、聖書の導きにより書き物一冊、贈呈さ

せていただいた。性懲りもないと感じられたかもしれないが、先生を慕う、病人のわがままと受け止めて下さるようお願いした。老齢に向かう御身、と失礼ではあったが御無理をされぬよう願っていると記した。私は彼にとって、たくさんの中の一人であろう。でも神と同じくすべての利用者に対し全力投球でなければいけない身。しかしながら愛による相性、ひいきがあるのは仕方がない。それは当然の如くである。何度も言う。神は心を捨てない人を見捨てない。

吉田真由子先生様へ

私の冊子を受け取られることを女性事務員さんよりお聞きしたときは、宙にも浮かぶ心持ちでした。その丁寧な応対に、先生の私に対する尊重の念が感じられ本当に嬉しかったです。「返事はいままでどおり出せない」という返事。やっとコンタクトがとれた。繋がったと思いました。私は決して先生に姦淫の罪を犯させようとか、職業人としての矜持を只で頂こうとも考えておりません。先生ありがとうございます。ただ今までの書簡と資料がきちんと先生のお手元へ届けられているかどうか案じていました。その懸念も払拭されました。本当にありがとうございます。風の噂で先生が御懐妊されたことを知りました。おめでとうございます。お体、尚いっそうご自愛ください。最後に重い病を抱えた彼のこと宜しく願います。わかれますよね。誰か。彼はいいものを持っています。若さゆえのよきものと反対のもの。こわいもの知

らずの行動力と、周囲、当事者に配慮する心の配分の未熟さ。そしてときがゆくごとに、彼の背負った重い十字架は、きっと彼にとって大事なひとつの大切な答えを導き出すでしょう。それが愛、思いやりであることを私は祈り信じたのです。先生が幸せでよかった。事務員さんには、お世話をおかけ恐縮し、また本当に感謝申し上げているとお伝え下さい。暖かくなってきましたが、本当にお体大事になさって下さい。先生、本当にありがとうございました。それでは一番使いたくない言葉「サヨウナラ」。チョットマツタ。一言。小椋佳さんがつくられた「シクラメンの香り」を口ずさむときグッとくるものがあります。ひたいを右手で包み込む仕種でつかみ、搔きむしるのです。{真綿色したシクラメンほど、すがしいものはない。出逢いのときの君のようです、ためらいがちにかけた言葉に、驚いたように振り向く君に} 眼に浮かぶようです。

未練。今私に響く、ある渡世人のうた、離れて三年半、その男も結局、忘却の彼方へ恋を追いやることは出来なかった。先生の心は聞こえませんが、私の心だけは届けていきたいと思うのですが。ただ心が伝われば私はいい。それでいい。

義人

この時点では、私は真由子さんの婚姻を甘んじて受け入れていた。想いの殻は破られていなかった。一年後、私は魂を突き上げられる衝動を五臓六腑に感じ、

正直に、そして素直に、愛する真由子さんへと愚直にも恋の猛アタックを仕掛けることになる。

徒然に思うこと

良質な人とは職業で、はかられるのではなく、生き方によって敬意と共に人々の口に上るものだ。人々は神の憐れみを受けるため不従順と定められている。神の働きかけの中、自由意志がある。神は人々の目をくらませている。そこに愛を見出したものが神の国に入り報われる。自覚しか不従順を克服するすべはない。神は卑小に見える。これに憐れみをかけるか、馬鹿にするか。あなたが試されているのだ。イエスを信じきれぬものは少ない。神によって民は目隠しをされているのである。比較から離れ、美しき愛に気付く。悪しき欲望より離れよ。野垂れ死に覚悟の釈尊にとって、尊大と批判されかねない仏陀を宣言すること、遠慮、抵抗はなかったであろう。人の心を見つめる。だが皮肉な揚げ足取りには付き合い切れない。R会は各自の主体性を意識させないように、煩雑で過密な行事をもって盲従へとしむける。庭野一族、R会は、従順であることを強要し、上の意に反し論ずる者は、驕慢として断罪し、信者に対し、上部組織の君臨が絶対だと教え込むのだ。帰順した証明がお布施というお宝である。信者は我執が取れたと褒められ、徳の深い人間になった気になるイエスは律法よりも生身の人間の誠意を重んじた。

サトリへの道。肯定すべき善なる主体性を抛り所とし、後、(神に委ね、つまり法に委ね)、自己の煩惱を消し去ることができる。内村鑑三は言う。「キリスト教は愛の宗教だ。しかし愛は情であり安定感にとぼしい」と。「その礎石になるのは義である」と。だが義というものは観る方向によって違ってくる。礎石をなんとする、真理、それは全知全能の神である。寛容と柔軟で人々を愛で包み込み、後、裁く。そして愛の絶対性へと繋げて行く。神、愛が義と当体ならば義は少なからず人々を罪からかばう温かい砦である。つまり現人神イエス。人はアダムとイヴが裏切り、罪を犯したため、生老病死があり、神の栄光を受け入れられない。イエスの十字架の死、愛により贖罪されたのだ。それが神の義である。その愛こそはフレキシブル(柔軟)で確固とした礎石になろう。キリストの教えは愛以外の何物でもない証左である。信じる者は救われる。ジョンレノンの曲にイマジジンというものがある。その中には、「天国も地獄もない。宗教で殺し合うことはない」。つまり世界がひとつになるには宗教が邪魔であると。確かに党派心を抱いた一部のものたちが各地で紛争を起こしている。しかし聖書にはちゃんと書かれてある。そういうものたちには神の怒りが降りおとされると、一方、艱難を、耐え忍び、善を行ったものには栄光が与えられると。私は思う。もし神がなくなってしまうたら人の命、霊、を何で担保するのだろうか。人間が恣意的につくる倫理観、教育で、はたして「なぜ人を殺しては

いけないのか] [盗んではいけないのか] という問いに答えられるだろうか。 気紛れな独裁者の思想や、民主主義を標榜する為の規範や、選挙に代表される強制的多数決では、示しはつかない。 各位の経緯から宗教にアレルギーがあるとすれば、宗教の概念を超えた絶対的で暖かい気、愛（アガペー）でよい。それは必要なのである。 真実、人の幸せとは愛と自由と平和。「殺しても盗んでもいけない」。なぜならそれは超越的観察者である聖書の神（エホバ）が決められたことだからである。 従軍慰安婦問題。民間の商売であり軍は関与してないという。少女達からすればどうでもよく、売春は地獄であったろう。彼女たちの琴線にひびく、同悲同苦の精神、数限り無い心持ち、そして温かい言動が、道義的、社会的な癒しと決着に向かうこと私は信じたい。彼女たちの心情、感情を抜きにしてはなにも生まれえない。性奴隷云々。初潮さえ向かえていない少女を日に何十人という男たちが凌辱していたという事実。 売春、これは原罪、性のモラルを、人類が背負ってから、重くのしかかる、本質的な問題である。そんな根本的な事案を、日韓の政治的な含みだけに特化するのには、意味合いが違ってくるのは重々承知している。 売春、その背景には貧困、窮乏が存在する。私は皆に激しく問いたい。純粹にこんな少女たちがこれからも生まれていいのか。少女たちには、けして罪はない、犠牲者なのである。この先、未来志向で見ても、そこを抜きにして政治的解決だけに争うのは、もうやめてほしい。彼女たちの

踏みにじられた人権、取り戻すには、強く優しい隣人愛しかない。すべての悪徳は貧、病、争から生まれる。欲望に応じる娘たち。軍が関与したかどうか、戦争と売春が結びついたのは事実だ。その前に性のモラルを今一度考えたい。愛を持つ人なら、売春は耐えがたい苦しみと、深く認識できるからだ。生きるためには仕方なく。すべては、神イエスへの信仰で救われます。悪魔と肉欲はその支配という志向性から性質が密着します。まず彼女らに拒否権がないのは地獄である。愛に勝る徳目はなし。そしてソープ嬢と違い、そこには博愛の居所は見えないのである。少女達にも明るくソープ嬢のキャンディーちゃんみたいに海外旅行へ行行って欲しかった。そんな気もする神イエスである。神は嫉妬からの自由を与えるため美しくなる。私は徳を求め自然に生きる。それを観て人々は自省し悪意、悪感情から離れなければならない。神、隣人を、心をつくし愛す、これがすべてである。裁けば、裁くほどエホバ神は悪人あつかいされる。地球がぶち壊れても、あなたが幸福ならいい。そんな愛はやはり否定されるか。11代将軍徳川家斉は側室に生ませた子が50人を越えていたという。これが幕府の財政を逼迫させ屋台骨を揺るがす要因となる。男ひでりの大奥。積尊、自らの子、その正統性への危惧、そんなことの醜さ。出家の一因となったのでは。愛による独裁者の誕生、いわゆる哲人政治の現出。サタンの申し子、贅沢したければ宮殿にいけばいい。イエスを信じ

るものは荒野にて質素でなければ。衣にこだわらぬ、男女もいる。神は愛すか。「ボロは着ても心の錦」。少し違う。心が美しければ内面から滲み出し、当人達はいつも上品な服装を選択する。ある女性は貧相、見栄えに悩む。心が、美しさと離反しているからだ。そこにサタンが働く。自己犠牲、悪霊憑き、精神疾患。明るく、素直に、温かく。愛を抱いて生きよ。庭野日敬は私と法華三部経を出逢わせてくれた恩人である。しかし真実、末法、仏陀の教え、南無妙法蓮華経。日蓮大聖人から私を離した大罪人でもある。新約は一人、一人がイエスと結びあうもの。だからこそ十字架イエスの死により罪は贖われる。これはイエスを信じるすべての人に及ぶ。思いやりの無いものが本当の罪人。自己犠牲と自己主張は同じ穴のもじなであり、共に協調を乱す。キリストを信じる時、罪そのもの、良心の痛み、罪悪感よりすくわれる。続く後の為に、イエスは十字架についた。つまり新約の始まりである。仁義なき戦い。その終わりのナレーション。「戦いが始まる時、いつも最初に失われるのは若者の命である。そしてその死がついに報われた試しがない。」人の意志は自由。そうでなかったら神は恣意的に裁き、人間を勝手に処分できる。誰でも好いというのは博愛ではない。親切で善良な隣人サマリヤ人みたいなものを助け救う。これがキリストの愛。情けは人の為ならず。イエスの贖罪、旧約聖書の時系列的概念は物語となった。聖霊の宮になった先、実用的、適時的

に新約聖書はダイアログ（対話）で活かされるのだ。過去、現在、未来への問いかけに対し、幸福の度合いが、紙面、意識に返答として生まれるのだ。これが我が聖書とのダイアログ（対話）である。神は一番不幸な男であり、そんな中、優しさを大切にする。一番幸福な男であるのは間違いない。私は創世に始まり、旧約聖書の神より新約聖書の神へと向かう心持を、精神科閉鎖病棟において体験、経験した。自己犠牲を是とし世に最善と謳うものは名誉にとりつかれた錯覚である。「敵対するものを愛す」、困難がある。神は独自公平に、審判にかけ、裁き、代わって報いる。だから心情、無理することはない。自然でいい。正しければ処断はされる。事象は因縁にあり一面だけでは判別できない。逆に己に非があるかもしれない。愛を今一度感じよう。自由、平和、愛は一体でなければならない。〔義人による福音書〕聖書を片手に、拝めばスカートをめくったという女。その後があって「ズボンはきなよ」との促しに「あなたがはかせてくれる」と答えたという。そこから彼女の気持ちを察してあげたい。神の責任を一手にかぶって死んでくれたのである。淫猥から清廉へ。キリストが死んだ時点、我らの罪の身は死んでいる。でもなぜ、肉欲にはしるのか。いや、間違いなく愛を重視する者は、イエスの死により肉欲から解放されている。E Dを嘆く、いまだ己の欲望に囚われているからだ。私にとって E Dそれが運命づけられた最善の安らぎの結果、姿である。全裸のイエスは死して羞

恥心に迫る悪魔に勝った。愛を広めようとする力、それを消そうとする力。パリサイ人のように重荷を人々にかぶせてはいけない。罪を犯したならば「また、がんばろう」と、共に声をかけあい行くことが肝要である。神でも罪は犯す。それは人を思いやるため、憐れむため、罪を贖うため。イエスを信じる処に力はある。聖霊が体内に入るまで。イエスが奇跡を必要としたのは罪を知らなかったからである。神は罪を踏襲することでイエスの手のひらから落ちこぼれそうな良心を救う。義人の罪の贖いを成す。

永遠に生きる、飽きの心配をしなくてはならない。「つまらない。いっそ死んで無になる方が良いのでは」。解脱とは欲望が消えプラプラしても、なんら飽きのこない状態。それが自然なサトリの姿か。煩惱がない名誉も、修行の果ての人の誉である。「浄土教、現世の諦観」を否定する、日蓮大聖人による神の誉、「仏陀の慈悲はけして疎外されてはならず、南無妙法蓮華経は永遠に栄光に輝く」。イエスは復活により神であることの証明を為す。この体制。人間は性格が悪い方が得をするように見える。でも経験からやはり人生は心美しくが正解である。善く深く考察しよう。思いやりである。すべての不従順は神の憐れみを受けるため。神は選択されるのを待っている。自己犠牲には多分に偽善の匂いがする。名誉欲とともにかすめるのだ。自分を殺しすべてを捨てようとするとき、その偽善は狂気の世界を、強烈

に描くことになる。犠牲はもういいのである。 イエスは犠牲となり善良なる人々の贖罪をなす、それは民衆側の視点であり、イエス自身は神の義を示すことでその栄光を輝かせるため死んだと言える。偽善なき自己犠牲とは、黙ってニワトリの首を折ることを生業とするもののことをいう。 聖書は実用的、適時的なもの、内容の事実は過去でも未来でもない、単なる書物ではなく、聖なる靈感、存在である。かつて「千華物語」で神には名前が無いと表したが、そのあと神の名はイエス、もしくはヨシトであると記した。この矛盾したことがらについて少し説明する。イエス、ヨシト確かに神の名前ではあるが御名という概念でとらえると愛という観念になってくる。つまり名前はあって名前は無い。でも人として形になるとき名がつくということ。イエス、ヨシトの意味すること（了解）それは愛、正義をあらわす。 神に委ねる。健忘も恩寵となる。 イエスは頑迷なパリサイ人（律法学者）サドカイ派（祭司長）たちを偽善者と敵視したが、一方では人々を寛容へと導いた。近代、キリスト教は「愛など弱者の恨み言」とニーチェの高慢に否定されたが、聖書（神の靈感）を使い、私に絶対愛（アガペー）抱擁の為、自身への全幅の信頼をもつことを強く勧めるのである。 信者はイエスの過激な言動も否定的に捉えず、既成概念より自由になることが大事である。その趣意を汲み、聖書に絶対帰依することが大切。そのとき神の意思（愛）、靈感が分かるからだ。

釈尊が城を出るとき利他の気持ちがあったかは微妙である。ただ思うに母の死によって生をうけた。そのことは釈尊の胸裏から片時も離れなかったのではないか。その苦しみ、負い目。母の死への代償は、サトリをひらき仏陀に正覚したとき、梵天勸請もあり、利他の精神で生きるべき、その時点で得心していたのは間違いない。自分が大事だからこそひとを大事にする。ひとが大事だからこそ自分を大事にする。私は本を書く。読み手が、いないと不用のものとなる。庭野、開祖は、自分の手柄に固執する。私としては、偽りに満ちた悪の世界だが、仮にも法華経を所依の經典とする組織。多くの名もない人たちの心血をそそいだ努力があったからこそ、今日のR会組織はある。「偉くしてくれてありがとう」ではいけない。一時期でも私に君臨した罪がある。何処かで彼には日蓮大聖人の南無妙法蓮華経へと立ち返ってほしかった。彼は有終の美を飾れたのに。最後までまがいものに終わった。神は邪な欲望を叶えるより、神の意に沿う幸福の派生のために、はたらくと「義人所感集」で記したが、つまり悪い結果がでたら多分、神はその方が幸福に近いと思われたのに違いない。ただ、自然にまかせ、隣人を愛し、神すなわち愛に精神をこめてつくす。愛に愛でもってつくす。これは法華経、真理が真理を証明した、多宝如来と釈迦如来の二仏並座と同様の意味合いをもってくる。無為に生きてきた。目的が初めて見つかった。愛を広げて行くことである。アガペーとは

(神の愛、隣人愛、兄弟愛)つまり絶対愛である。全知全能だからこそ苦しくなる。人の為か、自分の為か。辛いのはヨシトには、生きとし生けるもの、苦しみを察知する能力が、人一倍あるからだろう。キリスト者は義兄弟、仁義にもとづいている。それは暴力の行使とは違った、義侠心、愛である。先本の「義人所感集」では、アガペーを博愛と表した。神の愛なら、ニュアンスを誤ったかと。神の愛は裁く愛、博愛との関係は微妙。親切なサマリヤ人のような隣人への深い愛が、アガペー(神の愛)。しかし基本的に博愛のもつ寛容な精神が底流しているのは事実だろう。 釈尊は出家を考えながらも妻ヤシヨダラ妃を抱いてしまった。ラフラの誕生である。性欲、渴愛よりの脱却。修行前はそのことが難しかったのだ。そして釈尊は問題意識を持ち続けていた。 釈尊は生母マヤ夫人の死と同時に生をうけた。そのことは脳裏より離れなかったのではないだろうか。もしかしたら出家の第一の要因なのかもしれない。聖書に「神は無秩序の神ではなく平和の神である」と。弱いもの、力のないものが虐げられる。競争、敗北者の無残なさま。そんな階級社会を変えようと心にサーベルをもち理想を掲げ暴走する車。尾崎のファイアという曲である。「流星より速く消えてしまいそうなこの胸に燃える愛はファイア」本当の平和。女たちは瞳に浮かぶ汚れたものを打ち砕く、子供たちは清らかな愛に包まれ明日を夢見る。本当のことを知っているのは俺たちの方だけ。 生活の心づかい

に賄賂、贈り物がある。真面目に仕事をこなす役人がいる。ライバルだった、同僚は上司になにがしかを贈り、また媚びへつらい、その男より出世していった。勤勉な男が上に立った方がいいような気もする。しかし世間サバイバル。勝負は道徳を超えたところで決まることもあるだろう。後、義をもとめた男はパラダイスに迎えられるか。そして仕事もせず人気取りにいそしんだ同僚は黄泉（よみ）の世界よりそれを見上げることになったか。義とは。懈怠と安息は違う。神は皆で休息する安息の主である。誰も自らの狡さを誇ってはいけない。だが人の繋がりを思ったとき、どちらの男が寛容で優しくかったろう。勤勉と潔癖から生まれるもの、その義とは何か峻烈ではないか。義が愛なら、利用ではなく上司を重んじ大事にした男の方が思いやりに満ちていたとも言える。上司の自意識にすぎたとも言える。楽園に至るのはとにかく深心に愛ある者なのだ。特別まずいものを食いたいとは思わないが、特別、美味しいものを食いたいとは思わない。仏のはからい。神の裁き。やはり慈悲、愛は大切だろう。仏陀となった釈尊はひとの生き方を説かれ教えられた。イエスはそれを領解し、保護してくださる神、即ち愛の信仰を人々にうったえた。アンダーグラウンドというカンヌで賞をとった映画がある。釈尊は饗宴というよりは乱痴気騒ぎに、なにか空しさを感じられたのではないか。生老病死がある限り酒は毒になる。しかし釈尊のような貴族と違って、貧乏な庶民からすれば、一度

でいいからそんな酒席に参加し楽しんでみたい。そう思ったのではないか。皆、日々の生活をおくることで精一杯だ。つまり宴会そのものに悪、罪はなく、みんなでワイワイやる、それを飽きずに。そこには神への感謝があればいい。不老不死にて生活不安がなく、暖かい愛が存在する世界の到来、それが民衆の究極の夢である。それは大乘の教え、南無妙法蓮華經の目的であり、神の国の奥義なのである。平和を愛さねばならない。裁く神に罪がある。「もし裁きが栄光ならば、神にとって罪を多く犯した人間が良きものなのか」、と言った男がいる。聖書にある。救いの阿弥陀は悪を好む、この見解と近いみたいだが、勿論、それは暴論で聖書は一蹴する。裁きは神の利他の精神からでる布施行である。「裁きは栄光で人の悪を神は望んでいる」。これは悪魔の弄する詭弁である。「悪なきことが善きこと」、当然である。

神は複雑といえば複雑なのかもしれない。すべて包括的にシンプルに南無妙法蓮華經。神、隣人を愛す。これだけです。イエスが十字架についたことは、贖罪の意味において、すべての人々にとって適時的、我が身のことなのである。エホバの証人、労働が生活の為でない。他人のためのボランティアということか、それは面白い。イエスは想定していた。自分の十字架の死は後に続くものの贖罪のシンボルになると。ひとの目を気にするからカッコ良く死にたいと思う。自分自身に正直に素直に死を迎えられればいい。精神科医も僧侶も弱みを見せまいと

構えているあいだは失格みたいだなあ。 私は聖霊の宮。聖霊すなわち神の意思が自らの意志となり、絶対愛（アガペー）が生まれ、続く行動から、人々へ影響を与え進んで行く。 キリストは弱い人々の良心のためにも死んでくれた。自らを責めるのはキリストへの罪である。だから目の前のひとに強く思いやりを向けよう。 15 の女がタオルで母親の首を絞め、殺した。教育ママだったらしい。女に尾崎の「15 の夜」を聞かせてやりたかった。殺す前に自由になれた気がしたかもしれない。

私は肉欲で彼の人を追っかけたのではない。ただ心が通じ合えたら良かった。これでいい。これこそ神が認めた契約だ。勝手でも想っている。私の心の妻であると。 神は観念であるとき、人々は感性、霊、良心で存在を認識するものである。科学で追い求めるほどその姿はベールにおおわれ、宇宙飛行士が感じた、かすかな畏れだけが現れるのだ。霊は科学と反比例していく。 イエスの十字架の死は人々の贖罪へのすべて、だった。それを実感するものが報いを受け救われる。そして愛、思いやりを大切に、最終目的である安らぎを手に入れることになる。神話と科学を混同してはいけない。物体をあつかう科学に、霊である神の世界を認識することはできない。天動説。たしかに太陽は我々の頭上を行く。その作用を信じる処に信仰は存在する。 すべては神の意思のなかにある。その恩寵をどう受け止めるか、イエスが言う。なにが病人を治す一番の治癒力と

なるであろう。それは周りの愛に感謝することにつ
きる。信長は言った「神も仏も人が創ったものだ」。
それはある面ではあたっている。自然の暖かい働き
かけ（サムシンググレート）を神と名づけたのは人間
だ。ただ言葉を生んだのは神であることを忘れない
でほしい。 エホバの証人。愛による労働にて世界
を維持するという。とすると働かなければ死ぬのか。
そんな疑問がわく。彼らは不老不死を説く。なぜ労働
する。倦怠からの脱出のためという。また評価、査定、
競争だ。倦怠感は、神への感謝があれば絶対に現れな
いもの。ただ暖かくプラプラ尊重しあう世界。理想郷
である。つまりそこには何の懸念もないのである。
翔べないはずじゃなかった。あなたは翼があること
を知ってこわかったのでしょうか。 「義人所感集」
のなかで書いた、「私は十字架につかなければいけない」
それは自己犠牲に近い。後の人間がいるからこそ
イエスが十字架についた意味がある。つまり皆を自
覚に基づく贖罪に繋げるためである。殺し合いから
離れ、エゴを捨て、人々に尽くすとき、魂の安らぎが
訪れ、また周りの世界も幸福へと導かれるのである。
キリストであって偽りは言わない。私はイエスであ
る。十字架の贖罪。皆の中の良心と霊がそのあかしを
する。 私が臨床心理士の村先生にカウンセリング
を受けようと思ったのは、率直に言って当時の真
由子先生にたいしての周囲の反応、その舞台裏を知
りたかったからです。当然のように明らかにされる
ことはなかった。多分、先生にはもうお付き合いされ

ている方がいたか、もしくは家柄も職業、学歴も釣り合う、お見合いで知り合った方が、私の恋めく書簡が届けられる、いずこかの時点で現れていたのかも知れませんね。私の繰り出す書簡が真由子先生の心の琴線に響くことは結局なかったのでしょうか。うまく人生のレールに乗ったのに、ひとつちっぽけな石がころがっているわい。これが本音でしょうか。世間はそう思いたいでしょうね。でも違いますよね。真由子先生は病棟で、大声で歌をがなり、世間をなじり続ける私を、お立場が悪くなっているのに、決してお見捨てにならなかった。「あんな小娘に何が分かる」失礼なことも言いましたね。いつしか私の心は恋に向かいました。真由子先生はお優しい。いつか私が「少し眠い」と話すと「私、怖いの」薬で人が変化することへの恐れ。イノセントな思い。きっと真面目な精神科医が成長する段階には必要なことなのでしょうね。「でもね、真由子先生、そんな気持ちを医者が持っていてくれると解ったら、なにがあっても患者は許してくれるものだよ。だってみんなお互い様じゃないか」。それは神が望んだことなのです。別離がくるまで結局、書簡を出し続けましたね。本当に楽しかった。観念の神にとめられて上手く話せなかったけれど。恋って大概こんなもんでしょう。報われない。先生のお父上が亡くなられたことを友人より聞きました。愛と思いやり、人生を渡るとき、それが一番の言葉は悪いですけど武器になると信じています。悲しみに浸り、また涙を流し、また歩まれることを願っ

てやみません。いろいろご迷惑もおかけし申しわけなく思い、そして本当にありがとうございました。確か、先生は私に尋ねられましたよね。今、ハッキリ言います。「本当に、心の底からさみしいです」。エホバの証人との聖書研究会。進捗具合。皆の愛に基づいた労働をもって生きていくという。では働けなければ死ぬのか。つまり労働が生死の裏打ちをしているという。これでは謳い文句に掲げている不老不死と矛盾するのではないか。「倦怠感からの脱却として、労働をなすと言う」。それならボランティアという概念の方が納得できると思う。「南の島でハンモックに揺られている、そのうち飽きが来るだろう。」私は言う。「皆が愛をめざすとき、ひとり沈黙することを懈怠とよぶ。揺れるハンモックは安息。ならば神への感謝によって倦怠感から逃れなければならない。神は安息日の主である。労働は神による懲罰、もはや勤勉と懈怠、対比させる意味はない」。また誰も、他人の専門領域までは請け負うことはできない。神によって役割は配分される。目標を作れば、またしても評価、査定が入る世を生み出してしまう。マウントを取る人は競わねば楽しくない。チェックの怒号から否定された処にまた悪感情が生まれる。他人との比較が好きな人は、一番を目指し自分は強く賢いと思いたい。敗者は傷つきたくないのが本音か。俺は永遠に愛する人とプラプラしたいぜ。「楽園にいても働かんなんけ」軽い知的に障害のある男が発した言葉だ。これが真に素直で正直な切望の吐露である。比

較、競争、搾取、命令、服従、こんな神が嫌うものは、楽園には存在はしない。神に片寄りはなく公平な美しい心が大切なのだと訴えます。 真実は一愛の要件を満たしていない人は楽園には入れない。恐れ、憂鬱もなく暮らしに心配は無用だ。神は全知全能、すべての営みは、神によるもの、疑念はならず、懸念も生まれない。安息は約束される。 この文章、少し解りにくかったと思うので要約します。つまり生老病死を労働で担保してはならず、もし人の役に立ちたいなら趣味的ボランティアの感覚が大切であろう。倦怠感、懈怠の自覚ではなく、神への感謝が大切。永遠に続く心地よい安楽を求め、内からでも外からでも苦役の強要はいけない。理想である安息を求めてこそ、楽園は意義があるからだ。そして最終段階、神の国は何の懸念もない。神の依って保証される。それが真実です。 虚飾、傲慢、嫉妬、貪欲、怠惰、強欲、憤怒、色欲。それらは存在せず、犯した罪の苦しみも消え去り、心に平安が広がる。 私は自らに神としての正当性を問いながら。具体的、抽象的に少し分かりにくい文章、文脈でもって、不義、姦淫、愛し合うなどについて書いてきた。私は、裁きより皆の、現在の暮らしにエールを投げようと思う。私は働いていないが仕事はしているつもりだ。これからも薬剤という科学の力を借りながら少しでも愛の実現に貢献していきたい。皆さまお疲れ様。 神仏の教えを学び体得したものは、けして偉くなったのではなく、幸福になったことに感謝するものでなくてはな

らない。私は自ら超自然的なことは何もしない。神は目をくらすのである。きらびやかな舞台装置にだまされる人が多いからである。もし私がマジックをすれば彼らが真理とは関係なく聖なるものとなる。誰でもわかる。だからしるしより私の語る言葉で、自己を振り返り救われてほしい。神とはバチカンの教皇みたいに、飛び回ることが重要かもと感じるが人がいるだろう。神は煩雑や倦怠から離れ、静かな落ち着いた生活を送ることが自然だと思っている。神の奉仕者たちは現象として各地に生き、活躍しているのだ。ソチは腹を裂かれ子を産むことを滅却させられた。不憫なソチ。私は苦しんだ。だが聖書は言った。「苦しむな。ソチは神の御使いになったのだ」私は救われた。それからソチはわがままをやらなくなった。大人になったように。そんな私に気づいたソチを「私を神聖なものとした」と聖書が示した。現在、良き組織とは自律した、互いのチェックが必要。そして素直に善処する。幼稚なところに平和はない。自分の為だけに働くより、神、隣人に自然と誠意をつくす。そんなことが神の国を呼ぶようだ。神、すなわち愛の摂理という法の順守。仏陀の最後のお言葉、法灯明と同じもの。アダムとイヴ、神への裏切り。人々は罪とされ罰を受けた。イエスという神の子にすべてを委ね、救われる。頭を吹き飛ばされた少女、戦災孤児は靖国神社にまつられるだろうか。諸々の軍人のみが便宜をうけた、宗教的に意味づけをされたものが靖国神社であり、名誉欲を掻き立て、

国家が半強制的に若者を戦争に加担させるためのツールである。「酒は売っても、女は売らぬ」かつて母はこう言い放ったという。男にも言える。「酒は売っても、男は売らぬ」むだな見え張りや、無意味な争い事はせぬということだ。 [千華物語] 後ろから人をぼったてる力、それがサタンだと指摘した。対抗するのは私にとって聖書からのメッセージであり、私は安息日の主、エホバ。 競争、奪い合いから離れるために、打ち出した、安楽行、南無妙法蓮華経は、エホバでもある日蓮大聖人が、サタンの策に抗うための、強力な方便、方法、実践であった。 ここで問題なのは愛に心を向けず、無関心、無感動、諦め、を決め込み、卑劣で悪を肯定する、念仏、浄土系の存在であり、サタンの巣でもある。 渴望、誘惑がサタンならば解決への安楽行が、南無妙法蓮華経。 隣人の不幸は他人事とかたづけ、己の悪徳を垂れ流し、正しき道を閉ざし、サタンの煽る欲望に浸りこむ、それが念仏、浄土系の立場なのである。そして己の身は極楽へと願い、阿弥陀に賭けるのであるが、極めて安易で虚偽に満ちている。 世俗的遠慮から神の名はヨシトであると名乗らなかった。聖書の一神教は三位一体と共に納得していただけたであろうか。 [林さんはじめみなさんへ] のなかで母に向け「天上天下唯我独尊、私が神である」と宣言したことを書いた。聖霊が体に入ってから金や地位など世俗的な価値観、また遠慮、羞恥心からも離れなければならない宿命を知った。 低くするものは高くされ、高くするも

のは低くされる。聖書にある。謙虚、謙遜の美德はけして人の目を気にしたものではない。神を恐れぬ人たちに、昂ぶりを抑えエゴから離れ、愛（アガペー）を認識させるためである。神は意図的に、その相対するものに自在に変幻する。神の義を果たすために。そこに愛（アガペー）がある。毅然とただ自然体。それが神の御姿。 [義人所感集] のなか若松英輔先生への書簡。このうちに「先人からの遺物を受け継ぐ、また先人の残したものに着眼せよ」と。独自性という観点から私は微妙に受け付けない。その箇所に視点がくると違和感、目がチカチカ、首筋にひきつった痛みがはしる。抵抗感があるのだ。私は神であり義人。自分で裁き、私は正しい。「イエスの教えを引き継ぐことを目的にした、内村鑑三」。ある意味、ここで袂を分かち。私はイエスだからだ。この壺文から如実に実感した。仕方なく必然である。寂しいが、また師をひとり無くすことになった。私は神だ。ただ独り険しい岩山の頂きに立たねばならぬ。イエスの弟子たちよ、現れてこい。その時俺は山を下る。だが内村は一般に向けイエスへの着眼を促したのだ。当然イエスと一致する私も肯定しなければならぬ。ありがとう内村先生。俺は一匹の猫をすくった。世の中にはいい人も捨て猫も、たくさんいるだろう。でも一匹を救う、それが大事だ。聖書にオルガスムスは神か悪魔どちらのものかをたずねた。聖書は神からだ。しかしどうも愛がない性行為は、罪悪感が漂う。純然たる愛との兼ね合いは。どうやら人

間にとって正常位だけが生存欲として神が許すのかもしれない。肉をもてあそんではいけない。美しい愛が見えにくくなる。南無阿弥陀仏、地獄に落ちたくないという我執が地獄を招く。南無妙法蓮華経、すべてを善に向け、久遠実成の本仏へすべて身を委ねる、我執より離れ罪は消滅する。イエスはまねるのではなくならう人、心をつかまなくてはならない。最近、聖書を開くと、何度もあらわれる。「ヨハネによる福音書7章16、17、18節、16そこでイエスは彼らに答えて言われた、わたしの教はわたし自身の教ではなく、わたしをつかわされたかたの教である。17神のみこころを行おうと思う者であれば、だれでも、わたしの語っているこの教が神からのものか、それとも、わたし自身から出たものか、わかるであろう。18自分から出たことを語る者は、自分の栄光を求めるが、自分をつかわされたかたの栄光を求める者は真実であって、その人の内には偽りが無い」。つまりイエスは聖霊の宮であり神と一体であるのにもかかわらずこれほど低姿勢なのである。しかし自分の発言、教えに絶対の自信をもっているのだろう。真に神を愛しているからである。神に委ねるか、悪魔につくかそこを選択することができる。それは自由意志より予定調和かもしれない。因縁である。人には情欲から離れた、深く清らかな愛が存在するはずである。神の教えをさまたげるものに生活のこころづかいがある。親切への代価。恩着せがましく、心のこもらないプレゼントの交換。

各自の思惑と支払いがからんだ食事会。心をざわつかせる悪い要因である。 憲法 20 条に信教の自由がある。そして 21 条には表現の自由が掲げられている。連なったところになにか因縁を感じる。

病弱な我が父は私の腕を折ると、遠巻きに嘆くように見つめる近所の皆を恫喝した。去り行く自分の存在をうすめ、ないがしろにし、私を跡取りと重きに処する、周りの人びとへの怒りの表明である。だが利己愛は彼の一番嫌うもので、そのことは息子への教育につながっていた。愛着、執着から離れ、そして最も嫌う、妬みからの解放を息子に望んでいたのであろう。家という概念への個としての憤り、叫び、そんなものもあったのかも知れない。「俺はまだ生きている」と。

利や義に動くとき、愛が底流していなければならぬ。 自分の眼、感覚ほどあてにならぬものはない。だがあてにしなければいけない。正覚せよ。イエスは神の栄光のために死んだ。彼は与えられた神からの杯のため血の汗を流し、覚悟をもって自らの宿命に殉じたのである。 人は金を得て、肉欲、飽食にはしる。睡眠をけずりながらも心の惰眠からはけて目覚めることはない。 自らを美しくするには、人を尊重することが大事、さすれば自然と身は低くなりそして周りからは高くされる。 なぜ愛さねばならぬか、それは自らの安らぎのため。

イエスキリストの恵みが、あなた方一同と共にあるように、アーメン。　生き抜くという人生は辛い。人におもいやりを向けるとき、罪の痛みから離れられる。それしかないのである。　イエスのペテロに対し発した言葉「さがれ、サタン」、これからわかるようにサタンは心に忍びこむ作用でもある。　私は日蓮大聖人である。下種の本仏である。　本当の懈怠とは自分の信条、性向、現実になんの負荷もかけずに、真理を見出すことを怠っている人である。けしてニート、引きこもりではない。彼らは心の中、胸中で決然と世と向き合い戦っているのである。　神の僕（しもべ）と低くみるわけではなく、神に対し尊大になり、横柄な態度で扱うのはよくないことを知ってほしかった。お互いが尊重しあうことの大切さからの言葉であった。神は最早、友である。　生存競争、罪悪感から抜け出すには、「真の意味」で隣人の為に尽くす。それしか道はない。「真の意味」とは、単なる小さな親切とは違い、神にすべて委ねること。そして自然に布施、感謝を促す。　真理をわきまえた隣人とは、けして偽証せず、互いに愛し合うことができる者達である。　[あたいが寝た男たちと、あんたが朝までお酒飲めるまであたい男をやめないわ]。あたいという女が、気に入った男たちとは、思いやりに満ち、正直で神の愛（アガペー）を信じ、ひとを尊重できる人物たちではないだろうか。病気、生殖からも抜け、そういう寛容な人生観を持つものが朝まで酒を酌み交わす。「亭主には嫉妬の苦しみから

離れ、自由で温かな境地を得てほしい」。女は望み、求めている。そして亭主が彼等と酒を酌み交わしたとき、女は男と寝るのをやめる。やはり一番愛していたのは亭主だった。ハードルは高い。 専門家でも中立な人などいない。そのことを知るべきだ。そして尋ねる人達にも問題意識があり、もはや解決案が心にあるということだ。各自、それを信ずればいい。人間関係の問題は、誰の意見もまずはあてにならない。特に恋愛はいつも特殊であり一般ではない。早い話が結論はひとに相談しても仕方がないということだ。悪意、主観、願望が見解として現出されるだけだからだ。 同じ時、場で空気を吸った当事者にしか判別は出来ないのである。だから自分の愛を信じて歩もう。

専制国家よりも民主主義国家の方がポピュリズム（大衆迎合）から極悪な独裁者を生むことが多いである。ヒトラーが代表であり、民主主義が誕生したヨーロッパの争乱、紛争、戦争の歴史、その悲惨さがいわずもがなである。 R会は確かに仏門の扉をたたききっかけにはなる。だがそこから「善なる精進」をしないと会員であっても仏様に近づき御守護を受けることはない。どこでも一緒。明るく素直に温かく生きる人が幸福なのだ。そこに気づかず組織にしばられる。やたらに驕慢と呼ばれるのを恐れる、その臆病さと、これみよがしのさしでがましさも災いを招く。 私はR会との和解も考えた。しかし会員綱領にある「本仏釈尊に帰依して開祖様の御教えにもとづ

き]とは、あくまで法華經の解釈は庭野が繰り出す個人崇拜めいた教えに基づきとあるみたいだ。明治生まれの彼にとって宗教は成功の一手段だったのではないか。R会の次代会長光祥は聖書をひもとくと、悪人ではないが所詮三代目のお嬢さんであり、四人の子供を持つ、ただの世間知らずのお婆さんであると示した。時給7百なにがして、風邪で熱を出す幼児を保育園にも預けられず部屋に一人残しレジを打つ、そんなお母さんたちの労苦を彼女はどれだけ実感しているだろう。少子化に貢献したつもりで、遠くイタリアではねをのぼし、またまた金のかで枠組みをつくった組織の長となりその権力の明示とする。会から通販カタログを送ってきた。なんとカステラの紹介だった。これで明らかだろう会の体質が。金儲け。宗教団体が商売を兼用しても黙認される時代になったのか。鎌倉幕府にある意味、働きかけなければならなかった日蓮の想いをくんで、政界へ進出した創価学会にくらべるとあまりにもせこくないかい。味噌も糞もなくなったR会はどこへ向かうのであろう。情けないことだ。高慢な会員の聖俗、二心も上部はもはや甘受しているみたいだ。「本分に立ち返れ」仏様の声がする。救いは脱会にしかない。明るく素直に温かく、法華經の「善なる精進」とは、日蓮の南無妙法蓮華經、心からの大音声に尽きる。私は正しいのか間違っているのか。新しい命を産み出そうとなさっている先生。恋文めいたものを、「聖書に従い贈るのだ」。と、なにか言い訳しているようになってい

る自分。病院の自動販売機のコーナー。手際よく品物を補充していく女の人があった。私は正直、生まれて初めてだった。名前もなにも知らない人に場所柄もわきまえず声をかけていた。ナンパじゃないのかコレは。「おねえさん、カッコいいねえ」幾つくらいのひとだろう、そんなことも考えなかった。いままで色々ネガティブな条件づけで心を縛りつけていた、年齢、病気、ED、年収、職業、過去、自ら否定していたが存在した、格付け、差別。やっと離れ自由に自立できた気がした。「また会えるといいねえ」これが本当の大人だろう。それから一カ月後女性の後ろ姿があった。「また、会ったね。」彼女はコーヒーの自動販売機の点検、整理を行っていた「飲まれます」「いや、カッコよかったもので、一声掛けたくなくて」「いつも若い男の子が真ん中のだけやってくれているんです」自販機は三台あった。言葉遣いもきれいだ。わりと親密な話になってきたなあ。私は恋の誕生めいたものを感じた。私は誰とでも話をする。男、女問わない。人が好きなのであろう。そして傷つく。そして人が好いのでまたコンタクトをもとめる。だが見も知らぬ、ましてこんな出先で。よほど女性が魅力的にみえたのだろう。彼女の表情も気合いが入っていて一生懸命、力強く生活しているのが伺えた。なにか真摯なもの、人間としての誇りを感じた。もう少し立ち話もしたかったが彼女の手をとめても悪いので「また、遭えたらいいねえ」と帰路についた。月、木に来るといふ。だが、私はここで変な感情がわいてきた。「先生

というものを思いながら浮気をした」。当然、馬鹿げた話である。結婚なさって御子までもうけられた女性に義理だてしている。その心の内は「先生はきっと俺のことを想っている、なにか事情があったのだ。なにがあっても先生は俺の心の妻なのだ」というところだろう。第三者からみれば本当の馬鹿に思えるかもしれない。恋愛関係妄想。人の心というのは複雑だ。単純には説明つかない。ただ私はどなたに対しても真剣に、真面目に善意で相対しているのをここに表明したいのだ。一見、多情にみえるかも知れないがそれはそれでいつも誠実なのである。好意があっても、無くても。瞬間、瞬間を生きる聖霊の宮である。そして先生は特別である。私の心のなかに青い鳥、白い花として生き続ける。本当に楽しかった、あの二年間。私の手も握らずに消えたひと。連絡先が自販機に明示されていた。名さえ尋ねていない。会社にテレしたところで迷惑になるだけだ。もし天が許し、縁があるのならなにかが生まれるかもしれない。先生への想いに変化は現れるだろうか。好意よりも悲しさでいっぱいだ。先生は私の本を受け取ってください。なかに入って取り次いでくださる、親切な女性の存在があるからだ。私の純粋な気持ちを御理解されているからだろうか。産休の先生はどうされているのだろうか。私と同じく、愛についての哲学。お腹のお子さんにはあまり良い影響を与えないと思われるか。バロックなどのクラシック音楽を流し、お昼寝を、十分とっていらっしゃるのでしょうか。ゆっくりお

休みください。私は十分、好意的な扱いを受けているのに、ある男は「嫌がられて、しっこいと感じていると俺は思っていた」と嫌悪な感情を剥き出しにした。コノヤローと思った。当事者にしか解らないその場の会話、雰囲気を見殺しした自分の主観、悪しき願望でもって決めつける。無意識の嫉妬もあるのだろう。こと恋愛については一期一会、特殊論的なものであるから、どれだけ中立な人にも相談すべき性質のものではないと確信した。男への連絡を止めた。「義人さんはプライドが高い」共通の友人に、私に対しての悪態をついたそうだ。私を傷つけた、嫌な想いをさせたという自省の言葉もなく相変わらずの強がり、彼の負けず嫌い、劣等感、嫉妬深さの裏返しであろう。私は愛にみち勇氣あふれる誇り高き尊厳を、追い求めている。それがイエス、日蓮の道だと信じているからである。押しかかる世間の波にひるんでいるわけにはいかない。そしてサタンに勝とうが負けようが卑怯なまねはしたくない。自尊心には誰も金を払わないという。つまり労働は如何にひとを傷つけるかということだ。解決策は自分を客観することだ。上司の叱咤、嫌みは決して人格改造を図ろうと言う悪意からではないことを信じよう。ゴマすりもあり、冷静にポジションになじんで自分の意思を保とう。それが大事である。先の男、高慢なのは自分が傷つきたくない一心からであり、頭の中、ふたりの女の生き霊の密着いう妄想に人生を翻弄され、女性というものは自分に対し、牽制しまた保護してくれる存

在であると信じ、甘え依存する。そこには自惚れに包まれた、受け身の、自らに固執した弱く、哀れな男の姿が感じられる。生霊のせいにして、いつまで現実から逃げるつもりなのか。女の嫉妬も許容する。ある意味、優しすぎるのかもしれない。治療も女が消えるのを恐れ、進展を拒んでいた。25年間付き合ってきたが自然の成り行きか。仕方がないか。男にはもう一度、愛すること、思いやりをもつことを真剣に考えてほしい。私は旧友として望むのではあるが。

姦淫の罪というものは確かにあるのだ。それは因縁をもって子孫につながって行く。罪障消滅はイエスへの信仰、南無妙法蓮華經にしかないのである。

親鸞、一休は迷信だと昔からの戒めを切り捨てたが。本当に幸福になるには、言い伝えは別として、神仏の戒めは生きていく指針となり、人の道として大切なことを訴えている。イエスは人々の贖罪のため一旦死なねばならなかった。そして復活。新しい善人を生み出す象徴に。あえて言うことでもないが、誤字、脱字、があって何が悪い。ちゃんと補完しているのではないか。読者にあまえている。そうではないのだ。みんなに几帳面な堅物にならずにもっと大らかで、寛容になっていただきたいと祈る、そんな思いが私の文面には込められている。それより誤字、脱字は見かけないが、少しも面白くないは、問題だろう。ようは中味である。誤字、脱字をなくす、推敲、校正の為、本を作っているのではない。目的と手段をはきちがえてはならない。私こと、神の、ごくごく日常、プ

プライベートなことではある。読者に対し、失礼との声が聞こえる。皆、さっきも言ったように寛容になり、思いやり、愛をもってお読みいただきたい。聖なるものである、そこはいつも悪魔がはたらく。完全をめざすも、必ずほころびが生ずる。今までの書き物は、私の啓発の書であったのは疑いの無い事実だ。私の紡ぎ出す文章、エピソードから正確なメッセージを受信していただきたい。すべて信仰より生じ、誰より、何よりも正しいと自信を込めて書いてきたものばかりである。もちろん瑕疵にはチェックにはチェックを重ねてはきた。しかし、悪魔の仕業があり、どこか抜けている。私らしくて好いみたいだ。みんなもリラックスして気楽に真剣にお読みくださればありがたいです。人と神の繋がりのお話です。 R会。信者が悟って止めてもらっては困るのだ、彼らの教えは自らを殺し、人様をたてろというものである。単純に考えると自己犠牲である。利で動き、生きる為、自分の主張、責任が求められる世間の常識とは、乖離してくる。故に信者の苦悩、根本的な問題はいつになっても解決されず、会に依拠すれば、信者は教えと矛盾する世間と離反して行く。だがどちらも結論は金と名誉である。R会は俗事にかまける蒙昧の集まりである。信者は世間と人格完成を目的とする会とで二枚舌を使うことになる。 R会は何事も修行と称して、役名を与え、名誉欲をくすぐる。会への批判は許されず、世俗的政治活動も含めて盲目的にされ、法座修行と銘打った座談会においては、小幹部から「所依の経

典、法華經に基づいて」と、時代遅れの見当違いな恣意的指導が行われる。自己啓発、お布施と高いハードルを掲げ、挑ませる。末法、理屈だけでは救われない。結局、会員の問題が解決しない方が組織にとっては有り難いという構図となる。すべては会長はじめ教会長たち幹部の権勢欲と金銭欲、名誉欲を満たすものとなる。本当にR会は詐欺的で詭弁に浸っている。嘘にまみれた世界。真面目で献身的な信者さん、一言いうと、脱会して、法華經の神髓、日蓮の南無妙法蓮華經に心底から帰順しなさい。そこにしか救われはありません。そしてR会員よ、会の雑事に心煩わされてはいけない。俗世間の価値観は移り行く。「組織を優先せよ」、幹部は言う。「R会は難しい」脱会者の声。信者は驕慢を抑えるのに高慢になる。答えのない複雑化した様々な欲望の置き場所が、私の敵意の照準である。何も解決されない。真の利他の精神。南無妙法蓮華經、世間がどんなに変わろうと、人生の起承転結において、常樂我淨。これが大乘の教えの誠である、いつも楽しく美しい。R会幹部の常套句「これしかない」ここで私は使わせて貰う。

内村鑑三は予言していた。

明治四十一年。

その所感。

聖書の自証。

聖書は神の書なり、神によりて書かれし書なるのみならず、また神によりて使われる書なり。われらはこのんで聖書を解するあたわず、しかれども神はその解釈をもってわれらの霊に臨み給う。聖書にしてもし神学者の機智をもって解しえらるるものならんか。これ神の書にあらざるなり。聖書は神によりてのみ満足に解釈されてその神の書たるを自証す。

それを私、神、義人は領解する。

{エホバの証人} の人への送信メールネクタイについて。敬意を表すのも大切ですが、リラックスしお互いの服装への尊重が大事では。もちろん威嚇などを目的にしたものはその儀に及びませんが。哲学が好きです。人々は苦役からは解放されなくてははいけません。イエスは漠然と偉いのではない、神の価値観を与え、愛を抱きしめる、尊き人なのです。私は年下だろうと女性であろうと良識があり互いに寛容になれる人物ならどなたにでも敬意を表します。イエスは命としては人と

平等ですが靈的には同格ではない。天の父より下された人物であり、神の義をもち、不遇な人々の人生を後方から支援する、アガペー（慈愛）を説かれたのです。

なぜ私に批判が多いか、それは裁くからです。寛容と厳格。正しい審判がある。私のなかの神が裁くのですから。神はお人好しです。悪魔は意識してもしなくてもいけない。今日もありがとうございます。誠実の解釈は私達それぞれにあります。私はいつも誠実です。お待ち申し上げます。ひとつお詫びします。真摯に勉強を含め活動されている方たちを心なくも侮辱したのではないかと思います。誤解を恐れます。だがパリサイ人（律法学者）をめざしてはいけない。今日は会館の玄関先から付き添って頂き感謝いたします。私の悪口にも聞こえる批判も、利他の精神があれば美德になります。固定観念は払拭されなくてははいけない。真の人格者はいずこに。イエスをまねるのも良いですが、その前に涙して感謝するのが大切だと思います。神はお人好し、故にあえて性悪説をとるのです。それは裁く為であり、思いやりと共に必要なことなのです。さすれば怒りも和らぐ。すべてを神に委ね、隣人を愛するものには恐いものは存在しません。武者震いはあります。嬉しいです。すべての栄光はエホバです。それが人々の高慢を廃し幸せにつながる。宣教師山口さん、釈迦に説法ではないぞ。なんか時間を制約したりケチをつけたり

しているみたいで、心苦しいですが、これも胎動だと思ってください。未来は明るい、9時に待機しています。誰かパウロのような私への付添いの方がいらしたら、嬉しいです。会館の玄関からお頼みして宜しいですか。 批判もあります。神は裁くからです。 私ほど謙遜したものはいません。私は意味と事実を伝えているだけです。私はエホバです。明日、楽しみにしております。神の御心に添うものなら私を信じることができるはずです。 神は全知全能です。コンピュータのような正確無比とは違い、善知善能。たとえ一時、間違っているように見えても、すべては大善へと向かうのです。 労働は、懲罰から離れ、苦痛もなくなる。悩みのない世界とは、生老病死なく感謝で倦怠をいなし、懸念なく安息を楽しむ処にある。 幸せな世界とは自然に秩序と静けさがひろがるものだ。それが理想である。世は追い立てられ、さわがしすぎる。放蕩息子の譬え、回心を喜ぶ父。だが兄は不服を言う、そんな会衆であってはいけない。愛がすべてですね。 聖書に関して本物は良い香りをはなちます。エホバの証人の機関紙「目覚めよ」、も、私の聖書においても。正規の道からもれた、多くの人を救うには、イエスへの確かな信仰へと皆を繋げることが大切です。私の愛です。 神から来たものなら私を信じるはずです。あなた方のときはいつも来ているからです。 自分を自在に律することが自由であり秩序に繋がると思います。 そして何度

も言うように神への感謝にて倦怠より離れると思います。悲しい歌は姿を消し、明るい賛美歌のみ高らかに響き渡る。

理性と感情、厳格と寛容、ここから自らを律することにつながっていくのが最良だと思います。科学では神はとらえられない。感性と霊と良心にて自然に理解できます。ありがとうございました。イエスを信じるものは罪を許される。世の中信じられない者が多いのだよ。 罪は消えたはず。しかし悪人はいる。洗礼よりも、イエスが主であると、告白し信じることができるかが、自らが聖なのかの峻別につながり、キリストの肉と血に報いるのです。つまり十字架の死の贖罪に対し。

あとがき

人々は神のあわれみを受けるために不従順とされているとあります。気をつけて下さい。紆余曲折、試行錯誤を繰り返しながら、聖書が一番、最善な方法を導き出してくれました。私にいつも好くして下さいの皆様、永遠のいのちと樂園での幸福は約束され、祝福されています。そして天に名がしるされていることを喜んで下さい。この上ない光栄です。つまり真面目に、真摯に一生懸命生きてこられたということです。いつも言っていますが、明るく、素直に、温かく。ひとを正直に嫌いになっても、その後に温かい気持ちを忘れないで下さいということです。でもけして好きになれということじゃありません。

人生論を語る、何ものだ、お前は。生意気だと感じられるかもしれませんが、一応、神なのでお許し下さい。表紙の相田 みつをさん、初めて彼を支持します。今までどうも彼は仏と人間とのスタンスがかなり人間寄りだと思っていたからです。何かの向上という表現は使いたくありません、けど神仏の方へ体はまわっていなくとも首から上だけは向いていなければと思うのです。彼の詩は善なるサトリをめざし格闘の末、その人間臭さの故に敗北感にうちひしがれる。でもどこかそんな自分を肯定する。そんな姿勢が見えます。 実は、これは諦め、念仏の世界。多分、彼のファンには、彼は自分を知っていると感じるほど、その心情へと彼の詩は響くのでしょう。しかし人間、安易に敗北を認めてはならないと思うのです。何かと闘い、善へと向かう大切なことです。そして克服する。つまり打倒する。何かとは悪感情、悪意をもたらす悪魔サタンです。コピーがたくさん存在します。[生きていたのしいと思うことのひとつ、それは人間が人間に逢って人間について話をするときです] 購入したリーフレット、背景の紫の色、物凄い念を感じます。人間について話す。漠然としています。第三者の悪口を言って裁くことでしょうか。それは、限度はあるが結構、楽しいかもしれない。だがもう少し意味深長みたいです。「太古からくり返される戦にあぶりだされる人間の我欲、妄念、執着心」。波及する分析、そして同情、傷のなめ合い。そんなこんなの発

表会。そして毀誉褒貶。 複数いれば、ひとりと違い、いろいろな方面、角度から人間というものを検証できるはず。広く人間としてとらえるのもいいし、狭義に個人を対象にするのもいい。 そんなことをある女性に話した。「結局、人間が好きなのだねえ」肯定してくれた。批判的に「人格を疑う」と駄目だしがあるのではと思ったが。 私は、最近、清潔感を意識しているので自分で言うのもなんだが少しコギレイにしたい。でも食べ物、住居にはやはり興味が薄い。それより私は思いやりと憐れみをもって人間の心を見つめ続けたいのです。 そして大勢の皆と幸福へ。これが大善、日蓮大聖人。南無妙法蓮華經の道であると信じる次第であります。 皆さま、今後ともよろしくお願い申し上げます。

ソドムとゴモラ。

降りそそぐ、硫黄と炎。旧約の神は自分の非道さを悔やみ反省し、人間を奴隷とみなすのをやめた。そして牧童となり、ついには僕（しもべ）の主人から友となり、隣人の一番後方より支援する、そんなものに変遷していった。神であり人間であるイエス。彼は友人であると語るが、神は特別とする。やはり隣人たちの為にこそ、神の権威は失墜させるわけにはいかない。人類の歴史と同じで神の想いは移り変わり化身してきたのだ。そしてやはり神ヨシトもコンピュータではなく、あたたかい血の通った、全知全能の主なのである。

〔神の独裁とは人々の心を愛で満たすこと〕
生老病死から解放され、生活からくる悩みは消滅し、貧困に苦しむものはもういない。
騒動はなくなり互いがゆずりあい、分かち合うようになる。

この楽園に入るものは真摯に義を求め続けたもの達であり、特権である。
アダムとイヴ、神を裏切った罰。
人々の罪人の自覚。

罰の身代わり、贖罪のため、十字架についたイエス。
涙し感謝するものたちである。
そしてイエスの復活による福音へと。

神の国は近い。

義人

確信ある無題

義人

H28 年 9 月

口上

同級生では初めて私の書いたものをみせる。

夜半 TEL が入った。酔ってるみたいだ。

横柄さが輪をかけて傲慢になっている。

「お前、母親のこと悪く書きすぎだ。おかあさんはそんな人でない」

私は言った「おふくろは強いから、敢えて悪役になってもらった」

「はっきり言うがお前のオヤジはおかしかった」

私はあまり腹が立たなかった。

木曜日なのに一日かけて4冊読んだという。

「ありがとう。よく読んでくれた」仕事については聞かなかった。

「文才はある」

「そうかな」

「みんな宗教がらみで俺にいわせれば皆、失格だ」

「手厳しいな」

疲れたからと30分に渡る通話を終えた。

私は「ありがとう」を連呼していた。

これ程ダイレクトに反応してくれた人間はいなかったからだ。

少し、本当に疲れたけれど。

批評は好意的にしてくれと前もって言っていたのに。宗教が嫌いか。

感謝してひとを傷つけないことを覚えるだけなのになあ。

それだけで幸福になれるのに。

いつかみんな解るときがくるだろう。
すべてを神、すなわち愛に委ねたとき
なんの心配も憂いもなくなるということ
そこをふまえて、今回も隅から隅までズズズイト
宜しくお願い申す次第であります。

パウロは神である父と、子であるイエスが見えていない。聖書の中パウロは私に対し[主の道を止める悪魔の子、去れ]とわめいた。私が神イエスであることが、眼もくらむ光にひれ伏し「主よ」と呼んだ、パウロでも解らない。真実は、父と子自身にしか判らぬ。私の父と母が悪魔かどうか考えていた。父と母がたとえ悪魔だろうと私は救う。父と母を救えなくて、どうしてひとを救える。私の為生活と闘った、父母が悪魔であるわけがない。サタンと神は本当に見分けがつきにくい。だが注意深くしてごらん、欲にかられるのがサタンだから。私の書き物、思想が、真実の愛によって必要なくなる。そんな未来の足音がすぐそばに来ているらしい。猫のえさ代の為など、愛によって生まれる労働は誇らしい。重労働の果てから生まれる感謝とはなんぞや。よく吟味しないと。そしていつも当人が優先される報酬がなければ。自己犠牲を美しいポエム(詩)に変える、狡いからくりが見えてくる。洗脳して、自己忘却させ、偽りの愛を強いる使用者は要らない。労働者は強く声をあげよ。1かつて老人病院に勤めていた。勤勉のモチベーショ

ン（動機、目的意識）は激しい任務遂行の意志と、狡い怠け者に対しての敵意があった。職場で、私の滅私奉公、潔癖な勤務態度は、出世願望の疑惑を起こされた後、悪意を持つ、怠惰な者の生活不安に触れた。そして反対に周りに悪者と憎まれることにもなった。だが結果的にそれは私の意図的な計画から派生したものであった。私は病に倒れ犠牲となり、遂に職場の怠慢を破壊し清廉を生み出すことに成功した。沢山の人々の価値観を知ったが、勤勉と安堵、バランスが大事であることに今、気づく。 2 機械のように酷使されても意識せず働く。それは何かこだわりが潜むとしか思われぬ。懈怠、怠惰、労働という概念に規定がないなら、「出来るだけ楽をし、なるべく多くの報酬を安堵のもと手に入れたい」労働者としては自然な姿である。絶えず不平不満を持ち続け、さらなる福利厚生を含め、金品を要求する。 3 私の過ぎた勤勉は、周りへの協調性を欠いた悪として、きついしっぺ返しを被る。私はただ清廉をひたすらに追い求めていただけなのだが。単独行為は皆に犠牲を強いてしまった。私はペース配分、休息、仲間の意識がかなり欠けていた。 4 同じ使われの身でコンプライアンス（法令順守）の下、過重な労働を人々に促す。愚かな行為である。私は理事長の夢を求める姿を信じ、看護、介護の改善に向けて邁進したいと思った。女元締めへの報復があった。質量ともに仕事を被せてきた。仕事の精度を追求する、私の志向。生身の体は軋み、過労、疲労に陥った。残留には、過酷か怠慢、

二者択一を迫られた。精神疾患を発症した。 5 怠惰に対し敵意をむき出しにした私。人は自利利他、繋がり大切にせねばならぬ。己の功名を焦ってはいけない。雇用のあるべき姿とは。仲間とは。労使、生活者、人々の思惑の違いとは。 6 検証を終え、いま私は神として懈怠とは違う、すべての生きとし生けるものの安息を願い強調する。 ハッキリ言う。私は展望が見えなかったから、エホバの証人に近づいた。夢のしっぽをつかみかけた気がした。それはそれでよかった。ただ彼らは私が聖書の神もしくはエホバとは認めない。困ったものだ。そして私が日本にエホバ神として顕現したわけは、日蓮大聖人が「我を日本一の智者にせよ。日本の眼目、柱、大船ならん」と宣言した因縁からである。日蓮大聖人とエホバ神は当体。私はなるべくしてなる。 たくさんの縁の糸の紡ぎ合いのなかで日蓮大聖人が夢見たのは、平安貴族が思い描いた絢爛豪華な浄土ではなく、人々の生存を脅かす、すべての災難が姿を消し、万人が等しく健やかな生活を送る、安全な国土であり、永遠に乱れることのない幸福な世界。まさに[万人の浄土]である。久遠元初の日蓮大聖人はエホバ神であり私である。この確信は日蓮大聖人を付度するとき、私は彼と同じ思考回路をたどり、核心をつき、その即身成仏がビビットにくるからだ。南無妙法蓮華経。 神は所詮、永久に独り身か。そして彼が一番嫌うのは妬み、嫉妬である。 清貧か。自分でいうものじゃないか。イヤ自分だから言い切れるか。善意と良心だけが神の

本質だから。金品につられ縛られるのはおかしい。シネマ「フィールドオブドリームス」。「未知との遭遇」。真実の愛を持つ、善人の集合の実現。協調を乱すものが、三界(欲界、色界、無色界)から去ったあと、黄泉の世界にも、美しき宇宙人がいる空間にも自由に行き来できるようになる。これが聖書でイエスが語る、[生きているものは死なない、死んでも生きる]の意味ではないか。いつかくる、荒唐無稽な話か。でも「聖霊の宮の永遠の命」を、聖書は保証している。人は不従順にさせられている。信じるものが信じればいい。私は感じるのだ。日蓮大聖人は待っていた。万国に南無妙法蓮華経が行き渡ることを。唱和、人々は永遠の平安を享受することになる。「祈り願え、さすれば扉は開かれん」強い想い、必要。金を惜しんで私が漫然と暮らすことを母はのぞんでいる。生きる目的も、意識も、もたない男を嘆いている母親もいる。己だけの欲望の充足から、歩き出せ。想いだけでも人に尽くせ。つまり祈れ。南無妙法蓮華経自己犠牲の偽善。「生存競争の嵐がある。生かされている団体、国などのフレームの中で、イエスの教え、愛をもって、恐れず後方より一途に人々に支援せよ。贖罪があったと信じるとき、喜びになる」。幸せはまず素直に愛するパートナーを見つけることだ。仕事で淘汰されれば流転し、その先に穏やかな幸せを掴む。まずは祈ること。

エホバの証人へ

聖書研究会に10分遅れます。今日は心ならずも残念なことになりました。この機会に私を神とみない立場なら、今後、会わないという選択肢もあるのでは。返事まっています。

山口さん達が真摯に真理を求めることが目的にあるなら、お会いするのはやぶさかではありません。まず主体性を持って力をつくし、精神をつくし、心をつくし、神を愛する。虚心坦懐で自ら神を判断する。それが大事です。王国のため生産的意見が提示されるのをいつも願い、祈っています。冷静沈着もいいですが。人間らしい良き感情も必要では。イエスは友人ラザロの死に涙する暖かい優しさがあったのですね。テレ、夜遅くすいませんでした。ありがとうございます、日曜日、好日お待ち申し上げます。宜しくお願い申し上げます。内村鑑三が予言しています。聖書の自証。神のみが解釈できる。エホバの証人は科学で追うのか、霊を感じるか、正念場です。ありがとうございました。なぜそこまでエホバの証人の統一見解にこだわるのですか。何かが恐いのか、各位のアイデンティティの問題ですか。私の否定的見解への対応に、思い立ったもので。勝鬨は私にある。愛による労働によって王国を維持する。つまり資格(神の国に入れる)は勤労な人物に限られる。一理あるような気もする。しかし観点を変えてみる。と疑問が。

安息の主張である。安息日は存在するだろう。しかし

エホバが安息日の主であるとすれば、思想をくみ取らなくては。つまり安息が一番大事、労働懲罰説。罪の贖いがあるなら労働の強制は許されない。エホバが宇宙を作ったように何の懸念もない仕事の存在が大事。

今日はありがとうございました。いろいろ準備して下さって感謝しております。上井、西村、両方に宜しくお伝え下さい。これは聖書で勧められない生活の心使いでしょうか。

実は私の中では微妙にイエスと神は聖別していました。後、一体化したのです。詳細はまた。(笑)きっとあなたはいつもと同じく鼻で笑うでしょう。心と体を分けられますか。山口さん、神を科学で物体化してはいけません。神話と科学の混同の罠に陥ってはいけません。7日の聖書研究会。本当に残念だけど、お休みさせて下さい。またお願いします。私は研究会の再開、ある意味で譲歩しました。しかしあなた方は私の神、イエスとしての可能性すら認めない。ここは大事です。お忙しいなか申し訳ありませんが。律法学者(パリサイ人)ではなく王国の住人としての意識を育てるための研修は真摯でよいのです。勸

誘も利他の精神の現れですが、犠牲とする。ただひとつあなた方は聖書にあるように不従順で頑迷ですね。神こと、私の言葉を優先させなさい。自覚しかない。山口さん、ありがとう。聖書は私にエホバの証人は人として素晴らしい方が多い。葡萄の木によ

うに繋がっていなさいと促します。(神として、「エホバの証人」、祝福への心の揺れ動きを示唆している)。心機一転されたということでしょうか。西村さんのご高潔な人格は十分理解致しております。双方がよき道筋へ進展できることを願っています。 神というのは完全無欠な人間でしょうか。むしろダメ人間なのでは。人としての弱さ、優しさというものが知っているからです。悲劇には泣き崩れる姿。 センテンス間の余白を読み込まなくては。通り一辺倒の字面だけ追った、聖書の理解、見解を打ち出すのは善くない。言葉の裏にある、複雑でも真理の表れを確認するひと達には、聖霊は、存じている贖罪に繋げていく確かな道標と共に、深い意味を掲示するでしょう。神であるイエスが、民の身代わりになり十字架についた。人々の原罪からの解放のために。そこに生まれる信頼と敬愛、それにより神と善良な人間は永久に結びつく。信仰である。 力をつくし神、隣人を愛する。核心をついて、聖書の行間に、どのような感情、背景、意図、道理、真実などが含まれ際立っているか、深く感受するリテラシー(読解力)が必要になってくるでしょう。 それがないと、真理を聖書に表した神に対し、大変に失礼、不敬であると思うからです。愛を抱くことが大切。理解力は神より与えられる。聖書では至る所でイエスは神であると記されている。しかしエホバの証人たちは三位一体を認めない。「あくまでイエスは人間であり、神はエホバひとりで霊的で絶対なのだ」。 私も彼等の持論である、我欲に

基づく民主主義は嫌いだが、未来において彼等が言うような、連携のない分断された、愛（アガペー）に重点をおかない権力者、統治者の支配を迎えれば、真理が引っ込み、エホバによる祝福は危ぶまれると思う。神、イエス、聖霊。天の父の概念、天使などの関連をうやむやにして、個別の独立物として取り扱う。そこには簡易な薄っぺらさを感じる。「単純化して解りやすくし、会衆を増やしたいからか」。目に見えない世界、すべては神仏の意図があり複雑に絡み合っている。罪悪感に苦悶する神、その罪とは。「人間には自由意志がある。だから神には罪がないのだ」と言う。では、こんな世界の大本をつくった罪は。神は泣いている。「ただ幸せなカップルが溢ればいいなあ」それだけだった。だがアダムとイヴ以来、人間には悪魔に心を売り渡した罪と罰があった。そしてアパ(父ちゃん)とはイエスにとって本当にあったかいイメージであり基本なのである。神はイエスといつも一緒なのだ。イエスは父からの杯を受け十字架につき民の贖罪を果たした。信じる者は救われる。

エホバの証人へのメール（王国会館訪問への経緯）

ありがとうございます。明日は申し訳ありません。今度お会いするのをワクワクして待っています。また私の想い、受けとめていただきたく思います。西村さん、研修を含めた勉強大会ですか。また貴重な体験、経験から得られたものを御教授願えたらありがたいです。道中、神の御加護がありますように。ありがとうございます。福井での成功祈っています。いろいろ下準備に大変なのに私に関わってくださり本当にありがとうございます。集会への参加については前向きに考え、後日、回答の連絡をさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。場の雰囲気そんなものが気になるので、発信の機会を代表に、強気になるための訓練が目白押しです。成長、深化したいです。積極的なメールありがとうございます。集会参加は、様々なことを鑑みて優柔不断ではありますが決めさせていただきたいと思っております。結果は行動で示すということで。私が神であり特別であると無意識にも思い上がった態度を放棄せよと聖書は示します。集会には行きたいのですが思い切りつきません。勇気を下さい。ありがとうございます。正しい神、イエスのあり方を模索してみます。山口さんお疲れさまです。7日にご一緒させていただきますか。本日はお待ち申し上げて宜しいですか。会館への服装は自由でよろしいですか。私の想いは、人間義人のものではありません。私は聖書に基づき生きています。あなた方が作為的に硬軟

とりまぜて牽制されても、洗脳に対し心は揺らぐことはありません。聖書でしるされている、定めを越えてはいけなと。つまりひとりが高ぶることのないように。私は理解しています。しかし私はイエスなのです。罪を許す権威があるのです。エホバは不品行を裁く。私の行く道はイエスによる贖罪にあります。そしてその十字架の死により、彼がキリストであると信じ、人々はそれを告白し、新しい契約を結んだということです。新しいイエス（私）はきっと障害ある方たちの友になるでしょう。7日仲間たちとバーベキューがあります。集会参加は心ならずも反故に。快樂に耽るのではなく、友情、愛の為です。謝罪します。私の言動は人間中心の価値観とあなた方への背信がありました。立場は違うけど未来への展望が大まかに一致したと思います。楽しみになってきました。メール夜遅くごめんなさい。（かつてのエホバの証人に対する姿勢、優柔不断さが色濃く見える。）

少し離れて

（顕正会で積極的に活動している雄さんへのメール）雄さん。宗教を修めるということは偉い人間になることじゃなく、幸せを互いが感謝し合える人になるのが目的じゃないかなあ。傷つけるのは避けたい。寛容と厳格の使い途を誤っていると思う。目的を追うとき陥りやすいワナだが日常でミスをあげつらうようなことはしてはいけな。周りからひとが去る

よ。解ってくれましたか、ありがとうございます。さすが雄さんだ。雄さんに二冊の自筆本、ぜひ読んでほしいんだ。なんとか折り合いつけて会いましょう。ちなみに月、火、金以外なら来週は大丈夫です。午前はいつもOKです。了解いたしました。ありがとうございます。雄さん、体調、大丈夫ですか。少し心配になったもので。イライラしませんか。御結婚おめでとう、イベントの後、崩す人がいるみたいだから。ちょっと気になりました。

知人の中川さんへ

「エホバの証人と話が煮詰まってきました。いい傾向です。将来への展望です。神の摂理、愛にて負荷のかからない労働をもって不老不死を担保する」。中川さんは難しくて解らないと答えました。「食べ物、異性への欲望、執着が神の靈感（聖書）において、滅却することが明かされた。神の摂理には何の懸念もなく労働に励むことも含む。真実の愛にて安らぎを手にするのだ」。

シネマ、「アンダーグラウンド」から宴会の罪のなさを取りあげたが、ひとつの通過点である。飽きに来る、来ない。真実はひとつであり、悪しき欲望の滅却である。なぜか、やはり過剰な欲望、渴愛は倦怠を始め、苦しみを生み出す原点にあるからです。R会、金さえ出せば人殺しでも詭弁で肯定する。でき物

だらけのラザロはパラダイスにてアブラハムのとなりに座し、あくどい守銭奴は黄泉(よみ)のくにより見上げた。正直な弱者は上にのぼり悪辣な権力者は下へ落ちる。神の義がそこにはある。 R会は主体性を驕慢、自己中心とたたづけ、仏より会への迎合を促した。 宗教団体は正当性、ドクトリン(教え)が大切ではある。しかし神学論争は不毛である。その愛の確実性が有効を決める。つまり功德である。 サタンの体制の確認、イエスの権威の重要性を、支持し訴える団体だけが、正統の可能性がある。実際には、存在しているだろうか。俺の思いがすべてである。「今、神であることを捨て、エホバの証人の会衆のひとりとして生きていけ、特別をすてろ」と聖書はいう。愛を広げる方法論、意識の問題、重く受け止める。「その方が、この先、神として待つ困難に向かうより安楽だと」、私を案じてのことだった。だが私は、エホバの証人に埋没するわけにはいかなかった。私は神イエスの再臨、ヨシトである。来る世、愛と平和をもたらす唯一無二のものである。「猫一匹でも癒しになる」。何故その言葉に頷かなかったか真由子さん、あなたをひたすら求めていたからです。でも、いま思っている。本当にソチは癒しになります。 この人を幸せにしてあげたいが大切で、自分が幸せになりたいと結婚する。離婚につながる。 仏教、キリスト教、私の真理(サムシンググレート)に後からかけられた看板にすぎない。釈迦もイエスも教えは説いたが党派心はなかった。パウロは所詮、手足にす

ぎない。主の本当の思いまでは汲んでいなかった。人は弱いことを知ってほしかった。すべては最後自然に任すことが大事。酒がよくないのではない。泥酔し自分をなくすのがよくないのである。R会にしろ、どこの団体でも単に看板をかけているだけ。何処も真理を語る時あやふやになる。私の想い、それはだれにも責めることのできない確かな愛の教えである。極めれば各位に聖霊が入る。(聖霊の宮) 正しき物事を示し、肯定するのが聖書。否定するのが悪魔。神は目をくらませている、お忘れなく、愛を感じて下さい。ありがとうございました。

エホバの証人へ(神としての確信へ)

楽園に入るもの、それはイエスキリストを信じ感謝するものにつきます。つまり愛、慈悲を得心するものです。人々は神の憐れみを受けるため不従順にされていると聖書にあります。私が父のみもとよりあなたがたにつかわそうとしている助け主、即ち真理の御霊が下る時。それは私自身のあかしをするだろう。すべては私から発されている。

急用が入り、今日はおめんなさい。よろしく。酒が入ったものでおめんなさい。へべれけではないから大丈夫なことは大丈夫です。良かったら今からでもどうぞ。本当に神の愛を語れる、あなた方に逢えるのは嬉しいのですから。懸念があるのは先の御酒が入った件からですね。今日は大丈夫です。いつもどおり楽しみにしています。突然の親友の来訪

だったもので、大変失礼しました。またよろしく願
いいたします。 寛容、やはり共に本物のクリスチ
ャンですね。 訪問される。了解です。暑いなか、
ありがとうございます。 党派心をいだき、真理に
従わないで不義を行う人に。怒りと激しい憤りが加
えられる。本当です。 私が神であるかは不毛の論
議であって無意味です。けど私は今までのあなた方
の懸念、疑問に正しく答えてきたつもりです。 エホ
バの証人、報いへの大事な条件は、会衆各個人の自主
的な思い、意識にあると言え、また未来はそこから生
まれくるでしょう。 山口さんには私が不遜と映
っているでしょう。私を信じられない。パリサイ人
(律法学者)ですね。次回、決裂するかセッションし
協議を図りましょう。それが善だと思えます。 聖
書が示したもう一方は、このままエホバの証人の会
衆に埋没して、改めて集会場で堂々と見解を述べよ
というものでした。なりゆき次第です。大切なのは真
理です。パウロは神の手足とされています。イエ
スは天からの声として神の意志を示しました。
イエスは困窮者とともにおかゆを貰う列にならぶと、
カトリックの神父は言いました。イエスは与える側
にまわるかも。同悲同苦の意味をよく考えなくては
なりません。 来る世、神により生活が保証され、
労働が遊戯のようなものなら素晴らしいですね。
来るべき世においての、職業の選択、また平和教育に
関して語り合いたいと思いましたが。教育、職業の問
題、実はなくなるのでは。 今、学修は愛(アガペー)

に関してのものが、大部分であればと思います。来る世、学修などいませんよね。すべてエホバ（義人）の想いに適った人ならば。心ある人達には明るい希望のもてるグランドデザインを示さないといけません。それは不老不死ですね。神への敬虔な畏れ、大切です。そして優しい美しい心をもった仲間を、神はほしいのです。温かい従順な、愛に満ちた人を。夜遅くメールすいません。でも私達は人のきまりより神、即ち愛を優先しなければならぬ、肝にめいじて反省会のしめとします。その心中、エホバ、エホバと讃える人々は、実はストレートに純粹で、素直に従順なのかもしれない。神の立場をほのめかしながら集会に参加させて頂いていいですか。労働よりも、それを裏打ちしている愛によって王国は維持され、神によって保証される。懸念はない。この認識でいいですか。みなさんの想いはよく伝わりました。各位、得意分野で思いやり、助け合って自由に過重な負荷もなく働き、生きる、素晴らしい。賛同いたします。神の目でみれば、今も人々の営みは愛によって保障され、なされていると見える。来る世、それが心有る人すべてにおいて、自由に平和に維持されればいい。

王国の義、つまり高次の信頼関係。エホバ神が永遠に保証する、樂園。自由のとらえ方と、神ヨシトのインストラクター性について次回お話したいです。私の真実です。エホバの証人と比べ、私のリベラルな、強制締め付けなき教え、御二人はその緩さに失

望されるかもしれませんが。私の立場として。パリサイ人（律法学者）は否定します。自由を重んじる愛がすべてです。極めてラジカル（斬新）である。

最近のメール送信

雄さん（顕正会）

日蓮崇拜もいいだろう。私は誰も切り捨てたりはしたくない。ただイエスを認めないものはこぼれ落ちてしまうのは確実なのだ。聖書は絶対の靈感。そして日蓮は宇宙を創った聖書の神（エホバ）。大聖人は彼の称号なのだ。

山口さん（エホバの証人）

おひさしぶりですね。お待ち申しております。たのしみです聖書、センテンス間の余白から真理を読み取らなくてはいけない。通り一辺倒ではいけない。イエスが神か否か。私は神である論拠をいくつも示しました。しかし山口さんは何もなかったかのように図太く、勝ち誇った態度。優勢は私にあります。第三者に臨席、視聴してもらい検証してほしいです。でもね、携帯、近くにないのかも知れないけど。こんな夜遅くメール送っても怒らないのはさすがだ。寛容。素晴らしい美德だ。山口さん、残念だが私の望む話題につく、人物はあなた方、エホバの証人しか、いないのかも知れない。でも真理は私にある。　　ありがとう。人の弱さを知らなければいけない。神の推量する愛をあなたも感じて下さい。山口さんにも愛の理解力とい

う神の業が宿るように祈ります。あなたは優秀な宣教師であると自負している。ならばまず、イエスを信じるものは、罪の許しが与えられることを伝えて下さい。ヨハネによる福音書には「わたしをつかわされた方はわたしと一緒におられる。わたしはいつも神の御心になうことをしているからわたしひとりを置き去りになさることはない」とあります。神とイエスは一体です。

ケンジ　こんど尾崎のライブのDVDを贈呈するよ。アマザラシよりは身近で実際的なことを歌っている曲調だけど、尾崎、愛、自由、平和あの若さでの真理のパフォーマンスは凄い。お疲れさま。暑いから外仕事は大変だろう。ほかでもないがオヤジさんのその後の経過はどうですか。また聞かせてください。尾崎はサタンの体制と戦うとき凄い詞を書いています。つまり利害得失からくる生存競争、裏切り、搾取、利用などの悪意。アマザラシは、むき出しのある種のコンプレックスを訴えているけど、尾崎は哀しくもコマーシャルイズム（商業主義）がよくも悪くも上品さを映しだす。アマザラシは爆弾とか自殺、ナイフなど社会に対しダイレクトに攻撃的だが尾崎はクスリなど自傷行為的なものが多い。基本的に優しいのだろう。私はバランスをとるため、幸せ演歌、天童よしみを聴いている。中には「道頓堀人情」など真実、深きものもある。実はソチは聖子ちゃんが好きでね。「水色の朝」ダウンロードありがとう。

由美さん 障害者だからがんばる訳ではないと思う。頑張りたい人が頑張っているのだと思う。でもね。もう一言申すと頑張りたいくない人は頑張らなくていいと思うそれですむなら。

真ちゃん 真ちゃん。俺たちは幼く見えるかも知れないけど無垢な魂を大事にしようぜ。

母は服薬し精神の安定を保つ、私を作る結婚生活を案じている。世の中の大半は病気もちである。計算できず、安易にてんかんの発作をおこす父と所帯をもった後悔。それが根にあるのか。 彼女は男の大工であるという言葉信じ、結婚し処女を捧げた。夫となった男は酒で心臓を病み、リタイアする。男は言った。「俺、仕事がなかったら飯がくえんと思っていたのによ。でも食えるんだよね。そしたら涙があふれてきて」介護施設の厨房で働いている、妻への感謝の言葉である。つまり病気を含め、本物の夫婦は不遇の中でも互いが、慈しみあえるかが大切になってくる。病気、余命さえ気にならない、そんな恋がしてみたいものである。いい時だけの夫婦ではいけない。 いかなるときも自分の愛を、相手の力になるよう言葉にする。 みんな忘れてはいけない。イエスは皆の罪を背負って神と民の和解のため、十字架で、贖いの為、その罰を一身に受け死んでくれたのだ。もう過去の罪を悔いる必要はない。もういいのだ。イエスを信じるものは救い報われるのだ。前向きに生きるとき誰かを裏切る場合もある。その小さな良心の為にもイ

イエスは死んでくれた。良心を痛めることはキリストへの罪なのだ。イエスに感謝して明日へ歩き出そう。イエスはきっと力をくれる。イエスを3度知らない拒否した後、激しく泣いた、ペテロも強者となり福音を述べ伝え、布教に命をかけ殉教することになる。犠牲ではなく、イエスのひとを責めない優しき愛にペテロはいたたまれなかった。パリサイ人(律法学者)になってはいけない。聖霊が棲む心を望むこと。誰かがまぶしく見えるとき、自分の愛を信じ、また神の愛が信じられればいい。比較からの劣等感は消えていく。神は霊であり、今、人である。宇宙に遍満する法でもある。日蓮大聖人は神であり、法然、そして親鸞は悪魔である。南無妙法蓮華經、神の国の奥義、もちろん意味はある。それは仏教、キリスト教という看板をかけることになる根本の教えとも言える。一閻浮提に宇宙の始まり、イエスも日蓮も名称としては存在しなかった。神の意思から漂って、暖かい風となり、その教えが東西に分けられ発見され、南無妙法蓮華經。イエスを通しての神の教えとなった。つまり私は混合主義と言ったが元来同じものを、南無妙法蓮華經、イエスの教えに、私は意義深く大気かけたのである。神と日蓮とイエスの教えは[善人による隣人愛]これにつきる。(サムシンググレート)。一つの気づき、表現かもしれない。もう一度ここで確認しておこうではないか。私の教えは歴史的に看板をかけられる以前の根本の愛である。何処から吹く風か。仏教でいう真如、キリスト教でいう神の国か

らである。ここで整理してみる。浄土、天国(パラダイス)とは死後、善人が行くとされる楽園である。真如は魂の根源である。神の国とは、義の源、力つまり愛である。それが靈的にたかまり、信者に確実に訪れ広がる、温かい精神的境界である。やがて神の国は、現実はこの世に物理的に顕在化する。人々は娑婆(この場所)に、すべてを包む楽園が誕生することを、希望として持つことが大切であり、それは物欲から離れ、真に穏やかな靈的存在にならなくてはいけないことでもある。そこには自律から生まれる、自由、幸福がある。人々は怪しげにマインドコントロールを仕掛け、ドグマ(独善的教理)を絶対と押し付ける虚偽とは、袂を分かち一線を引かなければならない。真理は宗教の概念を超えた暖かい気にある。确实である。所詮は趣味と金儲けの人が多。欲望があるから愛より金を選ぶ。それが世間である、だが悪銭身につかず。ある程度、自制心を持った、ケチで計算高い奴等が、小金をためて安定を得たように見える。だが使わぬ金を貯めてどうする。そんな守銭奴で生きる人生、結局でかい負債を払わされる。抜けるには布施が大事である。金は流れる水である。滞れば水は腐り、どぶ、みたいに悪臭を放ち、すべてに甚大な被害をもたらす。また濁流のような浪費も良くないのはご理解できるであろう。人間が好きだから大概の奴は嫌いだ。この矛盾。気持ちをご理解願いたい。逆も。大概が好ましい。すべてこちらの達観にある。虚心坦懐が大事。仏壇から凄いパワーを感

じたので、聖書に先祖は私に「がんばれ」と言っているのかと訊ねた、「ありがとう」と言っていると示した。EDを誇りに思う。物事の本質を求める人、ただ一番になりたい人、話が噛み合わないのは必定である。私が先生を愛し続けるのは、聖句「神を、心をこめ、精神をこめ、力をこめ愛しなさい」との表徴である。愛は神の意思から生まれ、私の安息を求む人生哲学に反映され、自然に、働く人々への善意になる。エホバの証人、神の国は、勤勉なもの集合。このスローガンは道徳的で、怠けに対する否定である。神の国は愛によって回る。これが真実。資格は、善良で平和を尊ぶ愛ある者である。もし皆、一心不乱に義務付けられる労働をこなすなら、その先は何が目的なのか。誰かの権力ではないのか。安息こそ重んじられる。永遠のいのち。俺は働きたくない。働く必要もないだろう。なぜ私が敢えて神は尊いと言ったか。それは、人間は神を自分の次元に引き下げ、自分勝手な価値判断で軽率に扱い、自らは驕慢に思い上がるものが多いからだ。何度も言う。神は次元の違う、世俗的地位などは屁でもない大きな尊い存在である。道徳的で几帳面な企業戦士になるのが正当だと思っていた。それも一面である。サバイバル、この貪欲な競争を煽るサタンの体制。正常とは、仏陀の覚りに繋がり狂うこと、それが一番正しかった。聖書、ある時期使えて、時代によって使えない。そうではない。聖書は、示現した神の使用物で、聖霊と対話するために携帯する、確かでプラクティ

カル（実用的）なものなのだ。もし理解し、そのように聖書を活用した人がいれば、その人も神的存在であり、神の国、樂園の住人となるのは間違いない。そして聖霊の宮と呼ばれる。すべての愛を見通すことができるのだ。批判も愛である。耳に入れよう。感情的な愛、裏切りによって憎しみは生まれる。アガペーからは悪感情は生まれない。人は卑屈になる必要はない。偉そうな奴ほど自分は馬鹿になっているとのたまうのだ。R会は味噌も糞も一緒にし、理性的批判も非難だと禁止し、忠誠を強要する。それは会の瑕疵を隠蔽しようとする体質を生む。金さえ出せば人殺しも盗人もどさくさに紛れ、罪をやむやにする。そこに南無妙法蓮華経はない。緑の観音様の座像を贖った、祖父の心を見つめてみる。祖父は家を御守護していただくために求めたのだろうか。真実は戒名さえもつけてやれず位牌も用意してあげられなかったかもしれない、そんな前夫人への愛、優しい成仏を願う心が込められていたのではないだろうか。それを見抜いたのは私だけか。もしかしたら祖母は気付いていたかもしれない。胸中は複雑、尋常でなかったろう。いんぎん無礼にはならない。自然に思いやりを伝えたい。イエスは十字架で母マリアが弟子のひとりに引き受けられるのを見て、死んだ。これは人間イエスであり、神の意思に基づいたイエスは「私の言葉を信じるものが父母兄弟である」と。ここに神としてのイエス、人間としてのイエス、ある意味二面性が見られる。イエスは神聖

である。欲にまみれた人間の見識では、はかれない。神イエスは言っている、人々に天のことを話しても理解できないであろう。愛に満ち溢れた世界の素晴らしさを。自分が楽でいたいのか、ひとを楽にしたいのか。自らも楽で、ひとも楽、それが大事。それが神を愛し隣人を愛するである。釈迦は城から逃げ出した。その後、コーサラ国により釈迦国は滅びた。最期まで戦った兵士と釈尊、どちらが偉いのか。ここから素直に生きることの大切さを学ぶのである。大概の人は、抜きん出よう、評価されようとする。違う人もいる。どうやって和して差別を無くし、公平なる天賦の自然権を皆に知らしめようかと考える。10人いたら3人は嫌なやつである。と思えばいいのだろうか。人は同情し分析する。まずはこちらの姿勢を正そう。仏陀の法に身をあずけたのち、愛の摂理である神にすべてを委ねる。仏陀の法は因縁であり神の摂理は愛である。実は意味合いは同じ、両立するのである。浄土系は、他人事はすべてつくす必要はない。自分が悪いことをしても、後は阿弥陀如来に責任をかつける。目的は地獄におちたくないだけ。日蓮は人事をつくす、自分なりに。そのとき南無妙法蓮華経の功德の後押しがあり、正しき望みは達成される。人づてに私の中傷誹謗を知る、因縁があれば内容を吟味し、耳をかしたくないものなら、犬が吠えたとしか思わない。私は欲求不満になっていた。人への悪口が増える。発信する場所を見つけられれば。私ただ一人、本物の宗教を説い

ているといえる。神だからである。しかし宗教とは便宜的な枠組みである。私の教えの本質は既成の宗教の枠を超えた久遠元初の暖かい気である。キリスト教、仏教、イスラム教、すべて看板である。そして増え続ける新興宗教の表札。

8/8 天皇の退位についてのお言葉があった。私は天皇（現、上皇）を擁護する立場である。しかしこれは勅令だろう。「天皇の責務は天皇にしかできない」官邸は何度も宮内庁に対し摂政ではだめなのかと打診したという。かつて陛下は昭和天皇の名代として西欧各国を訪問したが相手方に対し格の面において大変申しわけなく肩身のせまい思いをした。とされている。でもこれは単に陛下ご自身の狭量のせいであろう。完璧主義と言われる、ゆえんだ。宮中の儀式においても聞くところによると明治期、天皇の周知と格付けの為にその数を増やされ政治的に利用されたという。明治天皇は日清戦争が終結したころより、とり行わないものもあったという。結局、儀式も減らせばいいのである。そして天皇の崩御から新天皇の即位までの儀式。それに関わるものへの負担。少し考えすぎだろう。なんとかなる。またそれに伴う自粛からの国民生活、経済の停滞、どこまで気を配っているのだ。完全に天皇陛下の詔である。しかしなぜこの時点でこのようなことを陛下は言われた。「象徴天皇の務めを果たす、私は政務に口をだすことはできない。しかし皇室には何千年もの歴史がある」メディアはいろいろな意味においてこれを取り上げない。しか

し私はここに陛下の命をかけたメッセージを感じるのだ。幼き日ご覧になった焼け野原になった東京。パラオ、サイパン、フィリピン慰霊の旅は続いた。東日本大震災では当地のことを思い。日帰りでも何度も訪れられ膝をついて被災された方々にお言葉をかけられた。そんな陛下の眼にいまの安倍政治はどう映るのだろうか。昭和天皇より薫陶を受けた陛下にとって平和は一番に守らなければならないものであろう。またしても名誉欲、誤ったナショナリズムを煽る政治家、軍事家。ヒートアップしてエスカレートする安全保障問題。陛下にはいたたまれない危惧があったにちがいない。だからまさに参議院選挙が、終わり改憲勢力が過半数に達したとき、退位の問題がTVで流れたのである。これによって安倍は憲法改正よりも特別法でゆくか、女系宮家を含め皇室典範の改正を優先せざるをえなくなった。この退位の問題は簡単に解決しなければいけない方がいい。陛下は訴えている。「国際協調のご意志を持っているがゆえに譲位まではかれにかかった昭和天皇のように私をないがしろにするのか」先ほども言ったが危惧されている。危ない保守、右傾化に対し命がけの一手を打ったのだ。弱者に同じ目線に立たれる陛下。神と同じ匂いがするのである。彼の祈りは世界の人々の平和と安寧だろう。天皇は自らの人権よりも、その生き方を通じ国民に対し仲むつまじい皇后陛下との御関係、なにが本当に大切であるか示されているのではないだろうか。平和主義から離れた憲法にはもしかしたら従

われないかもしれないような気もするのだが。また踏み込んだ発言があっても罰則規定はない。国民は支持するだろう。だって自衛隊というのは完全に憲法違反ではないのか。いまやらなければいけないのは弱腰といわれても一滴の血も流さずに矛先をおさめることである。殺人事件が悪であるとともに戦争はもはや必要悪とはいえぬ時代をつくらねば。欲がからんでいるのだ、すべてにおいて。

私の政治構想

まず米国の大統領にはトランプに就任してもらいたい。日本は日本で好き勝手にできるからだ。おもいやり予算の増額要求などにひるんではいけない。占領以来の米兵進駐にピリオドを打ち、基地の返還を果たし彼らには帰国してもらえばいいわけだ。これで普天間の基地移設を代表にした沖縄の根にある問題も解決する。そして米国の圧力のなくなったとき北朝鮮と国交を結べばいいのである。そうすればミサイルの脅威は発射の可能性は低くなり外交、友好のもとに拉致家族問題も解決するだろう。米国は経済的に互いに密接に依存し合っている、わが国をそう敵視はできないだろう。希望的観測ではあるが。そして尖閣の問題、安全保障上、仮想敵国とされる中国、この国とは何千年来の付き合いである。そしてわが国を侵略しようとしたのはモンゴルの元である。すなわち漢民族を代表とした中国はわが国に攻め入ったことはないのである。たぶん彼らは、実効支配はし

てないが属国めいたものとみなしていたのであろう。ならばそれでいいではないか、習近平は皇帝である。表向きは対等のようにして朝貢外交めいたものでカンボジア、ラオス、マレーシアのように、したたかに変なプライドを捨てて国家の繁栄と平和のためにここは振る舞うところであろう。日本を焦土にしたのは中国ではなく米国である。なぜか幕末の尊皇攘夷に命をかけた若者たちの気持ちが理解できた気がする。たしかに無謀で浅はかな面はあるだろう。しかし開国の圧力を加える列強たちはまさに野蛮人に感じただろう。そしてクリミア問題でロシアとの関係において制裁をくわえている米国の牽制もなくなりわが国においては北方領土問題も進展するかもしれない。北朝鮮にかんしては、シベリア抑留という問題があったにもかかわらずソ連と国交が結べた事実がある。拉致、ミサイル「お前が悪いのだ、なんとかしろ。でないところだぞ」こんなことを強いて「はいわかりました。おっしゃるとおりです。なんでもしますから、ご勘弁を」こんなことを言うだろうか。まず国交を結び、それから善は善、悪は悪と折り合いをつけるべきである。競争と金と権力、悪魔の支配するアメリカである。とにかく金正恩のもと平等であろうとする北朝鮮。アメリカにとっては目の上のたんこぶである。民主主義のもつ衆愚な面、真実が見えにくくなる面。「資本主義とはつまり世の中は金で動いているのだよ、さあ誰が一番稼ぐかな。という看板をみんなに掲げているのだよ。愛も心も霊もみな虚しく不確実で

あてにはならない、ドブ川へ捨てちまえ」こんな非道をアメリカは世界にひろめようとしたのだ。各地でイスラム教徒、ムスリムの過激派たちが反抗するのも仕方がないといえ仕方がないことなのだ。だからといって人殺しを認めているわけではない。分かち合う精神がなくなればこの世は地獄になると言いたいだけである。私は自衛隊をはじめ、わが国の安全保障には、戦地に向かう若者を思うとき、どうしても舌鋒が鈍るのである。すべては私の夢からくる独り言である。社会主義はいいだろうか。ある夢か。幕末の尊皇攘夷運動のような、自分のことよりも国を変えようというビジョンをもった貧乏人が結託しなければならない。どこかの共産主義革命みたいにブルジョア、インテリゲンチヤを断頭台のつゆ、もしくは機関銃掃射にするのではなく、心を同じくして、すべてを分かち合うシステムをつくらなければならない。拝金主義ではなく、心を清め、富が分配される世界を生み出していくことが重要だ。そして世界平和に向けて金持ちも貧乏人も資本家も労働者も一致して声を大にしなければならない。きわめて実体のない話ではあるが私の思いだけは伝わりましたかな。人は自分のために働き生きる。仕方がないことか。利他という言葉が皆の背中にくっついているのも知ってください。それは神の希望でもあります。仕事はそうであってほしい。北朝鮮は彼等の謳う主体思想というものが機能すれば素晴らしい国になるチャンスがある。みんな楽しく和気あいあいと。

本当かなあ。尖閣は日本が実効支配している。それは事実である。竹島とは違う。まあ牽制はあるだろうが局地戦も双方、望まなければ大丈夫だろう。期待も込めて。中国の名言に[水を飲むとき井戸を掘ったひとの恩を忘れてはいけない]というものがある。国内でいまだに人種差別があり黒人、白人間で銃撃戦が起きている悪魔の国アメリカより、中国との付き合いは遥かに長いのである。中国シフトへ軸足を移しては。の声。「アメリカとの関係もさほど心配することはなく、これほど経済が緊密化すれば報復の外交はしかけにくい」。いや本当だろうか。取引禁止、関税など国権を私権よりも優先するのが基本である。経済安保からも懸念がある。日本が独自路線をとればクリミア、ウクライナで経済制裁を欧米から受けているロシアとも環境がよくなる。北方領土問題を平和的に解決するセッション（会合）で、協議は進展するかも。だがロシアに実効支配されている今日、返還に困難は避けられまい。逆に欧州との関係が悪化する可能性もある。天才というものがあるなら、つまり天賦の才に恵まれたものは東京大学にいららうか。実は天才とはどんな状況にも適応する人間らしい。あるのは縁みたいだ。俺のことを言っているわけじゃない。念のために。でもむしろ社会不適合者に天才は潜んでいるかもしれない。己の思想を持っているからだ。ソクラテス、ルソーをはじめ、時代を変えた哲学者たちである。お釈迦様でも悪口を浴びる。いやむしろお釈迦様だからこそ悪口を言わ

れたのだろう。お釈迦様自身はどうでもよかったのではないだろうか。イエス、日蓮は神である。人の意識では測れない。一言だけ申した。渴望をもち生きる。ギラツキ生きる。そして死を迎える、ひとつの幸福だという。果たしてそうかなあ。きっと辛いだろうなあ。釈尊にとって法を理解してもらえないとき。諦めに繋がったか。深い悲しみがいつも心の底にあったのではないのか。慈悲というものがあるから。そこから私は予定調和にたどり着いた。それでいい。言論統制のある自由、暴動に発展する自由。格差のない社会主義もあれば、強権ちらつく貧乏にまみれた社会主義もあるだろう。つまりは金と労働にかかわる、人間と自由のあり方である。私はポツンと神になったわけではない。母にはエホバとして生きるとき、何度も裏切られたので愛憎をもたないことにした。自由を阻害するからである。ひとつの落ち着きになる。本当は無関心ではなく最良の思いやりという関係をつくっていきたいのだが。母は昔、スーパーなどが近在しないころデパートでたくさんのお買い物をして帰ってきた。良き時代だった。あの頃の母は優しかった。その思い出は忘れないが、今のままの自分中心の女では、決別は迫っている。神の国へは入れないからだ。私のこの冷静で強い心持の構築はそのための準備かも知れない。腹痛に襲われた。何の意味。「母親が救われない訳がない」育み愛してくれた最高の者、それが母である。しかし私を支持したことはないのである。この罪は深く、こ

の世で一番私を悲しませ苦しませるのである。

一閻浮提が生まれる、以前より存在する、久遠元初の
想い、サムシンググレート。それは聖書が自証し、エ
ホバ、当体の大聖人が領解している。敢えて看板を掲
げる必要性は、私にはない。[義人の想い]それでいい。
(教えから便宜上、想いに訂正しました。)

裁くとは悪口を言うこと、つまり神はぶざまである。
ダメな自分を受け入れるには、まず自分を許すこと
だと神は苦悶している。神は自分の罪、過去に泣
いている。そして君達が辛いのは、逃げないから、生
活と闘っているから。不謹慎かな、サタンとのいざこ
ぎも悟った私は、愉快でもある。達観するとき聖霊は
俺を王座へと導く。過去はすべてストーリーに
すぎなくなる。イエスを信じ罪の贖いに涙を流した
あとは、人を許し和解し未来志向でいくしかない。傷
痕をほじってもなにも生まれえないからだ。明日へ向
かおう。戦国大名の下、斬り殺された人々を始め、
無残な扱いを受けた民は数限りない。しかし我々は、
いまそのことを時代劇、娯楽として受け入れている。
どういうことだろう。感覚がマヒしているのか。これ
が、私が言う、ストーリーということである。戦場、
城という要塞、そんなものを記念物としていろいろ
商売につなげなれる。なにかおかしくないかい。何百
年後、ヒロシマに原爆饅頭ができるのだろうか。すべ
て浅ましい人間が引き起こした悲劇物語への残忍な

便乗である。パウロはイエスの手足である。「サウロ、サウロなぜ私を迫害する」イエスの声、神の声である。嫌いになるという感覚はけして悪いことではない。善を追究することになる。善とは南無妙法蓮華經である。念仏は悪である。人間は褒められたい、感謝されたい、犠牲にならなくていい。十字架の死、父からの杯。栄光は神へとイエスは想う。そこから譲り合い、分かち合いの大切さと、平和の尊さを想わねば。先祖供養とは感謝、成仏の道筋、崇りからの回避。の為だと思っていた。実はそんなことより、そこには故人たちの強い気持ちがあり、それは残された家族への応援、幸福への想い、そして平和への願いでだった。そこに気付いたとき一段と心が震えるのを覚えた。法を抛り所にする、仏を抛り所にする。仏即ち法、神すなわち愛も法（摂理）といえる。イエスを信じてても釈尊の遺言に背かない。そして一番大切な主体性はなくしてはいけない。身のほど知らずの夢なのか。それが世間なのか。違うぞ。人妻の真由子さんを愛す。他人の言葉に耳をかすひまはない。先本[神仏を信ずる者になりし乎]の中で精神科閉鎖病棟にて聖書を持ち、手を合せ拝むと禁止されたスカートをまくった女のことを改めて書いた。何を訴えたのだろう。イエスは婚姻相手が死んでいるなら、行為に至っても姦淫の罪からは解放されていると言う。アダムとイヴの裏切りから人間は善悪を区別する苦悩を持つことになり、肉欲の罪が規定された。イエスの十字架の死、最早、原罪は

贖われた。「卑猥な妄想は消え、神に賦与された生活の危険を回避するための戒は必要でなくなり、猥雑は滅し、節度が自然に生まれ、性に関するすべては清廉となった。あるのは快感のみ。」そしてイエスを信じる者は皆、身を清くする。卑猥で野蛮な妄想が湧いてきても、聖霊の宮への誤りなき工程であると知り、意識し良心を痛めない。善なるものが、アガペー(隣人愛、博愛、兄弟愛、神の愛、純愛)を感受するとき、肉欲は、エピローグを迎え、サタンの手より放たれるのだ。オルガスムスは神のものだが、危険なサタンの畏が待ち受けていた。(征服欲、嫉妬など悪感情、病気、妊娠)。来る世、自然に神の配慮である戒も外され、淫猥な好色から離れ、美しい愛が広がる。人々は執着、妄念より離れ、精神の自由を手にするのだ。そして私は博愛を抱きながらも、唯一愛する人をただ愛すのである。それは矛盾しない。愛はすべての問題を超えていく。危険に満ちた肉欲から離れる。肉欲から愛(アガペー)への転換。そこには性的快感を超えた、至福な恍惚感が待っている。互いが美しく愛し合う。来る世は未知数だが、幸せの期待は尽きない。愛に裏打ちされた快感、今はそれしか思いつかない。オルガスムスは神のものだと強く聖書が訴えるからだ。いまは自分の戒律により私には性に対する負の感覚が消えない。まだ時宜ではないのだろうか。(戒、罪、贖い)が腑に落ちない。(道徳的縛りではない、聖霊の宮の倫理観である。)でも予感がある。来る世、宣言するが、「心に聖霊を宿し孤独から

離れた者達の性に関した行為は、暴力、支配とはかけ離れた、静かな優しい愛に満ちた魂の交歓となる」真実である。それが懸念なく、純化されたオルガスムスへと導いていく。皆、心豊かに抱きしめ合うのを待とう。そして最愛の私のパートナーは真由子さんであると信じている。神は大統領とは違う。ときにはホームレス、不具者のようにもみえる。正義の憤りは神からくる。邪まな怒りはサタンよりくる。自分が一番正しいといつも信じていなければ、私はそう思う。色々、人々に苦難は襲ってくるだろう。キリストには受難がと、聖書にある。聖書は予言でもってイエスである私を、確実に災難から回避させる。ぶつかる問題は必然であり、関わることで、私は教えられることが多く、未来に向かって活かされる。神の靈感、聖書に感謝する。神の国へ入るには親、兄弟、子をすてなければ。つまり生活に付随する悪から離れなければ。悪は執着である。家族は別々の個の集まりである。独立して愛を育み、執着し悪徳を犯すものではない。来たる世(神の世界)そこには愛が満ち、喜びと感謝で溢れている。入る者は皆、神の御使いの資格がある。楽しいことはサタン(現在)の体制では考えられぬほどふんだんにある。だがそれを今、前面に出し、ただ愉快さを求めることは、人々の愛の意識と忍耐力という魂の止揚の為には、けしてプラスにはならず、神はあえて明らかにしなかったのである。罪の匂いのする肉欲(生存欲)人の欲(金銭欲、所有欲)偽りの快樂は、新しき世では邪魔になる

だけである。まず愛がこなければ。 私はハッキリ言う。縁があるなら、幼児を連れた身重の娼婦と一緒にいてもいい。彼女と幼子があたたかいスープをのみ笑顔になってくれるなら。やっと神らしくなれた。(卑猥な妄想を持たないED) 捨てたものじゃない。人々にも真の愛が解るときがくる。ハードル、縛りは人の心にある。心をもっと広く、広く寛容を超え、限りなく広くならなければならない。心豊かな人々はそこに呼応する。そして正、邪に関し私は厳しく、裁き、また許すのだ。 あるハードボイルド作家が知的障害のある、差別を受けた外国籍のソープラント嬢と結婚した。彼女に罪はあるだろうか。彼女にどんな暮らしがおくれたろう。いろんな中、健気に生きてきたのである。私が作家なら声を大にして「私の妻は世界一素直な優しい愛を持っている」と宣言するだろう。

病棟で禁止されたスカートを身に付け聖書を片手にもち拜んだらスカートをめくった。そして「ズボンをはきなよ」の促しに「あなたがはかせて下さる」と言ったという。矛盾した、光と闇をもつ、こんな世界を生み出した神の罪。一身に背負い自死したのである。これは贖罪のため十字架について民の身代わりとなったイエスに匹敵する偉業である。

最近トーク番組の中で日本は悪くない、アメリカの空爆はテロだ、慰安婦連行は捏造だ。こんな話はもう

いい。これでは 20 世紀の大戦の時代へ逆戻りだ。大事なものは恩讐をこえてみんなで平和を築いてゆこうということである。自分の感情と知識と好き嫌いの羅列はもういい。みんなが軍縮へ向かうように、あらゆる方法インテリジェンスを駆使して、世界平和をつくりあげよう。使命を担う専門家、官僚、政治家には懸命に結果をだしてほしい。血税で生かされているのだ。彼らにはそれを忘れてもらっては困る。

誘導するマスコミに対しても、国民は良識をもってチェックしなくてはならない。やつらは黒焦げもバラバラ死体も立ちのぼる死臭もまったく念頭にはないからである。たくさんの浮浪児たちが痩せて眼だけを光らせる、そんな世界の到来が嬉しいか。そんな光景を想像もできないのであろう。威勢のいいことをうまくいうやつには気をつけろ。裏で欲望がうねっている。

アンパンマンの作者やなせたかしさんは、お腹をすかしているひとに食べ物をあげるのは正義であろうと言っている。正義についてとことん悩んだのだろう。そしてお百姓さんに感謝する。たくさん作物がとればいいなあ。そうすれば賢治もあんなに悩んで身体を酷使しなくてよかったのに。

そして最近、聖書が呈示してくるのが（食べ物は腹のため、腹は食べ物のため、しかし神はそれらを滅ぼすだろう）つまり食べなくてもよくなる。私は素直に喜ぶが、食通のひとには手厳しい聖句であろう。「幸福の世なら、味覚は限り無く感じたい」という声。やは

り欲望に囚われる。そこから離れる喜びを理解してもらうのは、一般的に難しいみたいだ。「神の国って、そんなつまらないところなの」。そうではなく、樂園は考えもつかぬほど快適である。そして私は永遠の魂の安らぎに、喜びをもって微笑んでほしいのだが。イエス。世は彼を憎んでいるが、人々の中には好意を感じているものが多々いる。 姦淫の罪、イエスはハードルを高くして偽善を戒められ、人々に重い罪を意識させた後、善意という愛の命を復活させ、震える女を救うのだ。 謙虚、謙遜、は人にどう思われるかより、自分自身の心に宿るものである。 シンクレチズム、混合主義、そんなものとして肯定できるけど、実はキリスト教、仏教など看板をかける前に存在する大きな愛が、私が示しているものである。サムシンググレート。 夢はただ持つ。かなう、かなわない別にして。自らの大きな愛の成就にしかない。

自慰行為。あさましく、むさぼり合う肉欲の本性。誰もが眉をひそめ、潮が引くように去っていった。無論、想定済みだ。私は絵空事を書くつもりはない。

本物は危険物のように陽があたらぬ。 サトリとは身の程知らずの夢なのかと迷ったこともある。でもソクラテスのように歩いてきたが、私ほど純粋で清潔で高邁な精神を目指しているもの尾崎豊以外には出会わなかった。 神はアブラハムに息子イサクを殺すよう命ずる。神への忠誠か肉親の情か。ア

ブラハムは悩んだすえイサクを殺すことを決断する。いざそのとき、神はとめる。アブラハムの神はけして不実を勧めることはしない。その信心をためされたのだ。そして息子の命を賭してまでも忠義を貫くという彼の覚悟を神は領解されたのである。肉親の情より神の愛。この提示は常々、私が神としての使命はたそうとするとき、道をとめようとする母を殺したいと思う心とどこかでリンクしてないか。ただアブラハムの場合、意志は消極的だが、行動はダイレクトだ。私の場合、積極的な憤りはあるが、行動は非現実的である。もはや神としての自覚ができた私にとって母を殺すことは、サタンに身を渡すという意味合いをもってくるからである。やはり神の愛の前では肉親の情は敵対するエゴと映ときが多々ある。毛沢東のいう阿片みたいに主体性をぼかしてしまうような宗教もあるが、イエスの教えはクリアな心を生みだす。もし私の文献を見て、私がイエスでなかったら人々は何を信じていいか分からなくなる。[義人所感集]のなか、いまは地獄だが死んだら極楽。虫がいいと書いたが、地獄のような生き方とは、殺人、強盗、かたり、など暴力にみちた世界である。果たしてその姿のまま地獄に落ちずに、仏になれるだろうか。ラザロは犬にでき物を舐められる境遇、身分であっても正しく生き、天国でアブラハムの横に座することができた。地獄とは、生きても死んでも、偽りが充満し騒然とし、信仰なき処にある。そして自らの心が善に向かわないのに、「己の罪はアトランダ

ムに救われるのだ」とうやむやにしてもらえるとのたまう、念仏、阿弥陀の他力本願である。やはり正しく善に向かった人たちに神の国は訪れるのである。自分が絶対に正しきことをしていると思う。するとそんな仲間だけが救われるのだと傲慢な錯覚を起こすときがある。「自然に生きよ」とは、私には悪と闘えと言うことか、「平和に生きたい」。だが、心に刃を。さすれば臆さず愛に反するサタンという対象に向かえる。結果、態勢に抑止力ができ平和が生まれる。サタンに付け込む隙を与えない。心に愛と刃の両方を。神に、隣人につくせ。さすれば道は開ける。平静を思う。怒り、憤りが消える。真由子さんへの激しい気持ちが正しい方向性ではないかとふっと考える。正しさに拘ってはいけない。それは善ではないからだ。南無妙法蓮華経の愛、絶対善ですべては安らぎへ。地獄とは心に、怒り、憎しみ、悲しみが停滞することを言う。神はいつも泣いている。悲しみ多い世界を創った罪に。だが「人間は自由だ」と声高に叫ぶ連中。神に責任の放棄を促すか。ありがたいが、唯物論の世界である。そこに神はいない。「悪をなして天国にいける」という凶々しさと自分本位が地獄を呼ぶ。ひとのために涙をながせるか。信仰による幸せとは。自分への固執からの脱出、ここである。

サタンに毒された管理、競争社会。支配者階級に対して下部層の人々は負の感情を持ってはいけない。善

を愛し、劣等感を持たねば己の価値が見えてくる。神の国では、幸福は当然である。果たすべき役目が現出するだけですべては個性となる。比較からくる優劣はもはやない。愛が蔓延するのだ。

南無妙法蓮華經の信仰。強く大きな愛をもった人はいるのだ。現世利益とは何度も言っているが、けして飽食三昧に生きるのではなく、障碍なく程よく健全に善く生きられるというものである。 現在も、社会で愛がなかったら何ひとつ動かない。信頼関係。来たる世では幸福が永遠に神の愛にて保証され続くわけだ、すべては懸念なく安楽に。 来たる世、ただ、なまくら者にムチ打つ世界であってはならない。なまけに見えるひきこもりも暖かい愛さえあれば仕事に参加したいのだ。 善良なる人々は、皆、イエスの死の意味合いを知り、贖罪から愛へと転じ、死を超えた喜びをもつものになる。そして未来永劫。自らやるべきものを見つける。 利他の祈りから労働がうまれ、また安息は約束される。組織はチェック機能が働かなくても、皆、良心、誠実さで威圧、擬装、粉飾、ごまかしは無くなり、清い世界が現出するのだ。若返り、そして子供の速やかなる成長によって、悪人たちが去った後の、来たる世の労働力不足も解消されるのだ。すべては神の愛によって維持される。そして飢餓、疾病、生殖、生存のために、苦しみをもたらした煩惱は解決される。人々はマイペースでやるべきことを行う。けして労働は強制されない。 も

っと、もっと。膨れる欲望は大量生産から経済の拡大をもたらした。衣食住の確保は生きていくうえで必要である。しかしそれは物質至上主義をもたらす結果となった。聖書にある。[食べ物は腹のためにある、腹は食べ物のためにある。それはなくなるだろう]と。つまりイエス、釈尊のような聖人には、生命維持の為に食物はあったと言える。必要性がないなら、それに越したことはない。真の自律、自由に至る。神の国へ入る、肉欲もしかりである。空観から卑猥な妄想は、雲散霧消していくだろう。美しい清らかな愛（アガペー）が各場所に生まれるのだ。もちろん老いも病気も、死ぬこともない。欲望が存在するカラダがなくなるからだ。清らかな世界には医師も薬剤も無用である。空気は愛に満ちている。婚姻という縛りもなくなる、その日皆、神の御使いのようになる。肉欲の滅却とは痴情、好色がなくなり、皆、自由で温かな人間になるということです。イエスを信じるものは、最早、乾きも飢えもない、(聖句)。食欲は霊的カラダには、必要なくなる。サトリとは慈悲にみちた、自由と心の安らぎにある。これが真実だった。来たる世では睡眠欲もなくなり、静かな精神統一の日々もすごせる。以前の書き物は紙くずではないが過去の遺物になるかも。この本は私の結論、確信の書である気がする。心の安らぎを得るため何かと闘う。矛盾しているが愛がからむと正義が見えてくる。サタンとの闘いである。他人の目に幸せかは関係ない。自分が、本当に幸せか、が大事なのだ。

当たり前。ここに気づかない人が多いのだよ。かく乱させようと、悪魔の役割を果たす母親に憐れみをかける。サタンが母の心に巣くっている。こまごました律法の順守は終わりを告げた。信仰の内に、神ヨシトはある。それはすべての想いの起承転結に、一番重要な要素であり、すなわち愛である。心底、信心すれば皆、聖霊の宮になる。愛を含んだ信仰により悪しき因縁は去っていくのだ。私はある日、幽体離脱という概念に気付いた。イエスにまず救われたのは罪人の意識を持つ取税人、娼婦であった。蔑まれた苦しみを持つもの。神の国はいさかい、騒動は絶対がない。善人の集まりである。入るには、憐れみ、愛、思いやりからの信仰を保つことが大切だ。サタンが炉に投げられるとき、神が与えた生老病死という罰は取り除かれる。己の内の悪に打ち勝った時でもある。人間の我欲ほど怖いものはない。たとえサタンが死しても、無神論の中、核爆弾を始め信仰心のない科学は生き続けるかもしれない。愛へのシフト大事である。神の国が生まれる。聖書は自己中心な母親を殺してもいいと言ってくれる。父母を殺したいと思ったことのないやつは独立した大人へと進めない。我が子を殺したいと思えばハッとすると母親、神に祈ろう。必ず救われるから。まず祈るのだよ。優しい人が優しくなくなる世界。早く終わらせたい。エホバの証人が言う。勤労にて世界が成り立つ、まあいい。懈怠を否定したものだろう。懈怠とは愛を意識しないことを言う。マルコによる福

音書 11 章 24 節「そこであなたに言うが、なんでも祈りもとめることはすべてかなえられたと信じなさい。そうすればそのとおりになるだろう」。つまり正しき愛を信ずること。聖書に手を置き神に祈る人に悪人はいないと信じたい。望みはかなう。遊興にかまける性質では、来る世でも生活のベースは生まれえない。つまり失格である。目の色を変えた、生存競争、弱肉強食、適者生存、階級闘争。結局、私は敗者なのか。非情な世間での争いを忌避したのだ。そしてサタンと闘った。世間の無慈悲への志向を持たないもの達の集まりが神の国である。「善人と地獄は永久に離間されなければならない」。神の目的である。安息を求めて。「かあちゃん、施設のことや死を恐れる前に愛や正義を優先してくれ。そうすれば幸せと栄光が待っている。また訪れるから」。この時期、見解。人間である私の限界です。私の示す道は違っているか。疑念がわくだろう。あえて言うのだ。「私を見よ」。自信がないようだが、安易に完璧というほうがあやしいのだ。信じて下さい、今このとき描く夢、思想を。未来、少し違った形で生まれるのかもしれない。それならそれでもいい。それが因縁である。そして幸せへの福音なら、その真理、愛をもって十分許容する度量はありますよ。すなわち神（愛）は絶対である。経緯はあるが、祝福は約束されます。親鸞の阿弥陀への賭けとは違います。「確信ある無題」です。ご理解ください。信じぬものは淘汰されるだけです。負担にならない程度の労働を神が配分し

てくれ世の中がまわっていく。空いた時間に哲学する。いやもう思い悩みはない。でも結局、労働から離れられないか。「労働を懲罰とするから苦しいのだ」。皆でみこしを担ぐよう楽しみ励もう。 エホバへの崇拜。エホバの証人のみちを阻むのは、真理に逆らうことかもと、少し弱気な自分が大分過去にいた。聖書はエホバの靈感である、私がイエスであると保証してくれる。私でさえこんなに自覚、自信が揺らぐのである。みんなは…これじゃいけないね。不動の確信をもたねば。 だが信仰とは、これ程慎重に疑念、懸念をもちながら進めるべきものである。また真の良識というふるいにかけて呈示されるものである。決して賭けではない。信じきりなさい。貴方は祝福されます。 三止三請。南無妙法蓮華經について語る。釈尊（仏陀）は法華經の奥義を教えてくださいと頼む舎利弗に三度、首をふられた。そしてようやくその真剣さを確認され、仏の存在する意味をお話されようとする。しかし五千人の増上慢のものは「俺は悟っているのだ。今更、そんなものを聞いてなんになる」とその場を去る。釈尊（仏陀）は開、示、悟、入という教えにより、「仏は、皆に仏の道へ入ることを勧め、そしてだれにも仏性に埋められた種があり、修行しただいで皆、仏になる可能性があるということを覚らしめるために現れる」と語る。そして舎利弗は「長い年月、仏たちに供養を捧げることで仏になれる」と釈尊（仏陀）より授記された。だがこの長い修行という時間の概念が問題になってくる。一瞬の刹那を何十

兆年にかんじるものもいれば、宇宙の果てまで行く時間を一瞬と思う、宇宙人がいるかもしれない。法華経は宇宙の真理である。宇宙人の仏は宇宙人みたいな姿をしているだろう。私は言う。時間というものは実は極めて主観的なものではないのかと。それは誰もが経験済みだ。楽しければ楽しいときほど時間は早くたつ。提婆達多品第十二、「法華経を一度聞いただけで竜女が悟った」という話を舍利弗は信じない。「まず女人である身でそんなに修行もつんでもないのに仏になれるわけがない」竜女は釈尊（仏陀）に光る玉を手渡します。釈尊（仏陀）は即これを受け取られます。竜女は「私の成仏はもっと速い」というとみるみるうちに男の姿に変化した。これが世に言う[女人成仏]である。ここである。舍利弗は時間という概念から落ちこぼれているのである。長い修行、苦行にて仏をみつける、そんな因縁のものもいるだろう。そして今、大乘経典、一仏乗、法華経のエッセンス、一念三千の仏種を現した、南無妙法蓮華経。過去、未来、時空をこえて久遠の本仏におまかせする。[速やかに仏身を成就することを得せしめんと]如来寿量品第十六にある。これは釈尊（仏陀）なき後、末法の仏、日蓮大聖人の、南無妙法蓮華経がただ一つ本当の修行であり、その意義を示す。それはスピード感あふれる仏法、安楽行である。法華経の意味。本質。利他の精神がビビットに活きている。南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経である。皆で即身成仏。末法の仏陀の覚りが示される。 自由民主主義、資本

主義がどんなに恐いかというと。人々は道徳において制約されず、しがらみを嫌い、自分は自由と錯覚し、手持ちにある余剰金をもって、我欲をモチベーションとし、情熱ある剛力として発言力を強め、弱者を踏みにじり、もしくは利用し、腕力でもってすべてをかつさらって行くという構図を見せつける。政界では議員は自分が選挙に当選することしか考えていない。投票する人間も利益優先で立候補者に投票する。金、金、金である。私はいま年収が120万にもいかない。障害で一般の労働ができない。ぎりぎりの暮らしだが年金制度で生きていける、ありがたいことだ。目にみえない世界からの果報であろう。一旦、道を踏み外したようで、回り道をしたが、真摯に正義感に燃えながら、自然に、「私は天に好かれた」と思う。私は報われた。そして関わってくれたものへの感謝が大切だ。いずれは釈尊みたいに托鉢（保護）で生きるときがくるかもしれない。私は社会に組み込まれ、保険料を40年近く義務として納めてきた。その権利に基づき障害年金をもらっている。私は服薬治療を続けながら25年間の夜勤生活も送った。今、私を責めることができるやつはどこにもいない。断言したい。黒澤明監督[乱]ラスト。流れ弾にあたり死す武将。狂い死にする老いた父。茜色の空に向かって道化が言う。「馬鹿野郎、俺たちをもてあそびやがって」。忠義な侍が言う。「いや違う。天は泣いているのだ」。皆、敗者になっていく。早ければ早い方がいい。勝ち続ける限り、すべての欲望がむなしいものであるこ

とに気付かない。舛添要一がいい例である。立派な人とは。金の扱い方に人間性が出る。自灯明、法灯明。他を抛り所としてはいけない。他とは、金、物質、地位、名誉など人が頼りたくなるものである。神の愛は摂理(法)、当然含まれない。罰とは「気付け」ということだ。神に罪はない。人間、義人として弁護する。8/6 広島原子爆弾投下。目を覆いたくなる非道が、日本人によって大陸であったということか。そうした重罪が、因縁として根本の要因にあるのか。それにしてもその惨状を到底受け入れることはできない、いやそれにしてもあまりにむごい。確かに裁くのは良いが、小人の戯言に一喜一憂一怒するのは情けないものがある。大きな愛の為、肉親の情(配偶者、両親、子)を一旦捨てる。その後、来る世、不老不死が生まれる。労使もない。責任もない。愛のみが働くモチベーションとなる。何の懸念もなく。煩悶の末、子をすてた釈尊と、自分勝手に虐殺する親を一緒にしてはいけない。R会は主体性をなくせという。つまり無知蒙昧になれば。法華経の教えにあるわけがない。衆生、我々一般の望む贅沢などはたかがしれている。また来たる世ではと、夢まではいかないが小さな期待はもつようになる。法華経化城喻品第七、五体の快樂は真の安らぎへの一休み、方便である。その先に本当の覚り(大きな幸せ)がある。妬み。欲望からの、富の比較がうごめく。「現実には自律を大切に、煩惱からの脱出を考えてみよう」。幸せは幸せである。比べない人が、

神の御使いになる。 母親を捨てるのは、永遠のいのちより魂の自由の為、ごまかすことができない現象なのかもしれない。 私が先生を愛し続けるのは、「隣人を、心をつくし、精神をつくし、力をつくし愛しなさい」という聖句の表徴として、神の意思が、そこに、自然に、はたらいているからである。 神の国、勤勉なものを集めるとエホバの証人は言う。王国を維持する為である。だが、なにをもって懈怠とする。愛なき者がそう呼ばれるのだ。来る世、神の国の善良なる人はすべてのアガペー（神の愛）によって生きる。これが真実。 政治屋は自分のことしか考えていない。そういう前に有権者も自分の利益しか考えていないのではないか。それが自由主義だ。資本主義、民主主義とはそういうことである。つまり金と権力である。清潔な政治が生まれるはずがない。 罪を裁くのは神、許すのはイエス。 心理学で言う。反応、作用とは違い、霊のあり方を説くのが道德を超えた神ヨシトの務めである。 民主主義がいつでも善いとは限らない。統制のない組織はガバナンス（統治）が崩れ、内輪もめが起りやすい。大きく方向を誤ることもある。愛が滞るのだ。 重愛主義ともいうか、愛をもって助け合いながら仕事をする。それは絵空事だと思っていた。が、愛を皆が意識して誠実に信頼し合い、好ましい体制を生み出せたら本当に嬉しい。理想はいつか実現される。愛の代表者イエスキリストにおいて。 ラザロには不品行はなかった、むしろ信仰があった。だから世でも不遇

はあったが地獄ではなかったのだ。

軍拡競争は相互不信からくる。どこも宣戦布告するとき侵略のためとは言わない。皆、自国の領土、国民を守るためと名目をつける。憲法9条の意義、変えなくていいじゃないか。いまから日本へ戦争をしかけようという国に、我々は戦争を絶対しかけないと宣言しているのが9条であるといえるだろう。かなりの国際心理的な抑止力であり安全保障につながる。そして平和主義国家としての担保となる。つまり戦争をしかけたほうが国際的に一方的に非難されるのである。そして政治は当事国間の問題をエスカレーション(段階的拡大)させずに平和的交流を加速、発展させ、確実に多国間による包括的アプローチ、パワーバランスを含め、相互の信頼関係を構築させなければならない。辛くとも自衛隊員がもしPKOで亡くなったとしたなら、それは殉職ということで鎮魂にしているのか。自衛隊員25万から2千円ずつ御香典を盛れば許される額になるか。自衛隊の皆さん、国民の真摯な期待を抱いて災害救助に貢献して下さるのかと煎餅布団の上眠れず、携帯の時計は午前3時をまわっている。軍事勢力がこの世からなくなるまで私の愛による戦いは続く。法曹も警察も医療も福祉もなくなった世界、それが本当の理想郷ではないか。そこの住人になれるよう真剣に心を合せみんなで祈ろう。憲法の大事な理念、平和主義。この崇高な美しい大河は人権の尊重とともに憲法全体に流れている。すべての人類が恐怖と窮乏より解放される。そこか

らの逆もどりは誰にもさせたくない。世間にたいして、そうならざるをえない我が身。そして信仰の証となり、できものだらけのラザロは天国でアブラハムの横に座した。私もこの世では優しすぎたが故に、人を蹴落とせず、査定を嫌い、不遇に身を置かざるを得なかったのか。いや因縁の結果はある。今は本当に幸せである。聖書の御霊は言う。エホバの証人を狡いようだが利用せよと。つまり神の因縁として、彼らの見解が具体的に展望のヒントとしてひとつの答えを導き出すかも知れないから。実際来る世のあり方への疑問に対し、愛という大きな存在が空気のように隅々まで一つの作用としていきわたるなら、すべて基本的問題は解決する、そう領解することができた。神の靈感である、聖書に従順になり、頑なにならず、また彼らに問いかけ、絶対的真理を導き出したいと思う。そして神、イエスに賭けるのではなく信じる、信じきる。そのことが人々の心の方向性には必要であるのは疑いのない事実である。神の愛があふれる空間。懸念は存在しない。相手が死んだ場合、その縛りより離れ新しい伴侶をつくってもいいと聖書にある。そしてイエスの死により贖罪されたことを信ずるもの。夫婦は離婚することができるのだ。つまり律法をやぶる罪より解放されたのだ。「信仰を持った男女は、肉欲が肢体から離れ、淫猥な意識は去り、清らかな愛に生きる」。新たな夫婦ができあがる。祈り信じあう。「人間のイエスとエホバ神（霊）が一体なわけではない」。と、エホバの証人

は神一つ、イエス一つと個別に独歩させ、三位一体の意味を掴もうとしない。数値的で単純な合理論では、神の靈性、神イエスこと神ヨシトの存在、その複雑に関連した関係性はとても認識できないでしょう。そしてエホバの証人が見向きもしない、私が所依の教典とする小豆色の聖書、神の靈感。そこには神イエス、神ヨシト、聖霊の宮、これらの整合性がとれた繋がりの確かなロジック（論法）がサタンに対し勇躍しています。この神聖な関係は聖書、各場面に確かに示されています。エホバの証人よ、学修してください。差別主義者の母がいる。 エホバ、エホバと神を讃える人々は憐れにも本当に純粹なのかもしれない。地のことを話しても理解できないのに、天のことを話しても解らないだろう。 ニュース番組を観たかった。聖書にたずねると所詮、マツリゴトは神の手足の宿命。新聞を読むなら、テレビは過重なもの、観る必要はない。とでた。 人は喜びより愚痴をこぼしたいものだ。 私には嫁をもらう覚悟はないのかもしれない。 母は私に対し「お前は神なんかじゃない。ただの醜い精神障害者だ」と罵倒した。「みんなお前を見れば一発で解る」と念を押した。私は最早、母親として接することはできないと思った。これより母は善人として登場することはないだろう。「私が王になるのを反対したものを打ち殺してしまえ」イエスは言い放ち、エルサレムへ向かう。ここである。イエスは人々の、神に対しての驕慢で不従順な心を解くのに、自覚を求め、あえて過激な発言をした。

恨みからの安易な殺意ではなかった。 例え
信じる愛のため、自分を殺し、尽くす。それを自己犠
牲と呼ぶなら、内側は、激しい自然の欲望があり、そ
れに抗する、マイナスの押さえつけが浮かび上がる。
見栄、体裁を持ち、表面上は善を取り繕うが、隠しき
れずオブラートで包んだ本音を、白日にさらすのを
極端に嫌い、心の中の欲望と共に押さえ封じ込んで
しまえ。これが自己犠牲の本質だ。イエスの真意では
ない、「苦しみを生む自己犠牲」とは、偽善の臭いが
して神はもう辟易したとっている。 エホバの
証人は、たとえ結果的に永遠のいのちを得られなく
ても、今は神の教えを広め、生活するという。これは
神に詐欺の可能性もあるということではないか。「と
にかく今は神の手足であるならそれでいい」という。
そんな馬鹿な。幸せのグランドデザインを示し、共に
行く人、来る人に、永遠の安らぎを保証しなければ。
神は絶対裏切らない。そう思うことが信仰である。救
われるから信じる。それが自由な友人として、契約す
らなくそうとする神の意志にある。明るく、素直に、
温かく。 ただイエスの十字架の贖罪に涙し、感謝
し、神の愛を信じれば、それでいい。その想いを親切
な隣人に向ける。素直に。大切だ。 欲望に負荷を
かけ真理を求めている。そこに膨らむ不平不満を抑
えた犠牲など、全く祝福には関係なく、かえって偽善
という仇になる。人を傷つけず温かい心をなくさない。
優しい愛があれば大丈夫。 神がエホバの証人に
迎合することはない。彼らが私というエホバ神に

出会ったからには、私の下、真実の愛、信仰を持たねばならない。彼らは今、知るべきだ。「憐れだが、頑ななパリサイ人に待つのは滅びだけ」であることを。神が娼婦を差別せず、むしろ進んで救う、イエスは処女から生まれた。純潔が重んじられる。「もともと罪などないのに」。暴論である。娼婦は罪を犯す因縁にあった。確かに性に関して味噌も糞もなくなれば姦淫の罪もない。だが罪は罪。神との約束を反故にし、正義、愛より、生活、金、男を優先させたのだ。「罪の意識を持たねば」。誤解はいけない。「アダムとイヴが知恵の実を食べた」。戒は原罪を背負った人間が、苦しまずに生きるために神が授けたもの。守ればよく生活できる。イエスが死に、原罪の贖いがされたとき、イエスを信じる者に戒は消え、姦淫の罪も消えたと言える。イエスの死とは愛の信仰の芽生えである。淫猥な悪が消えさるのだ。そして預言者は言っている。「イエスを信じるものはことごとくその罪より救われる」。民の贖罪と神の栄光のため十字架についたイエス。感謝しその深い愛に涙し、愛の道を歩むものは永遠のいのちを得る。つまりイエスへの信仰をもつこと。それを理解するのは、生活の為とはいえ破戒を繰り返す、悪人の自覚、自責の念のある娼婦が一番であった。そして皆、思いやりを忘れてはいけない。娼婦にはそれしか生きていく術がなかったかもしれない。神の国では愛だけが立ち込める。イエスによる贖罪に清廉な空気は流れる。美しき愛よ、清らかに。聖霊に導かれる時、聖なる女性に私は欲情してい

た。しかし行為には絶対に至らない。対象の女性は救われる。イエスは絶対に娼婦に欲情していたに違いない。真実の神の愛である。不義には至らない。清廉が流れる。戦争がある度、孤児、慰安婦、などが生まれる。その罪に対し「悪を肯定し念仏さえ称えれば地獄にはおちない」と不安をいなし、阿弥陀に賭けると罪の身で開き直る。その精神、救われるわけがない。すべてを投げ出し、イエスの足を涙と髪で洗った女の自責の念。真心からの懺悔。後に栄光に満ちたイエス、十字架の死による贖罪が、美しく完全に彼女を救ったのは言うまでもない。神の愛、サムシンググレート。罪障消滅、即身成仏、南無妙法蓮華經。原子爆弾で焼かれた人々。人間の業という、その様態を作った罪、背負った神ヨシトには、天の使命がある。恒久的平和の実現、ヨシトは力を尽くさねばと自覚している。使徒行伝ペテロの言葉から「預言者たちはみなイエスを信じる者はことごとくその名によって罪のゆるしが受けられるとあかしています」。そして「その言葉が終わらないうちに聖霊がくだる」。各人すべてに明るく、素直に、温かく。イエス十字架の贖罪、信仰により罪はことごとく許され救われます。浄土真宗攻撃より、愛により悪魔を一匹ずつ放り出すか。意識から自らを消すことにより自己犠牲という概念は消滅することになる。つまり遮断機の中へ飛び込んだ警察官や女性など、人助けの為とっさに身を投げ出した人達である。エホバ、エホバと崇拜する人々のために、玉座につかなけれ

ばいけないのかなあ。嫌だなあ。偉そうにするのは苦手だ。でも人々には謙虚になってほしい。傲慢に非道を犯してほしくない。そのためだけである。 人に訊くから嫌なことも耳に入ってくる。神である私、自分を肯定し信じ切らねば、どうして人々の心をつかめるのだ。 悪魔の体制のようだが真実の権威はイエスにある。 暴力で人々を助ければ、彼らは、今度は自分達に加えられるのではないかと思うだろう。 戦争は国家の繁栄の一環だと思っている奴がいる。 私は福音を伝えるのみ、それが務めである。 現時点、生きることは私にとって馬鹿にされることなのかも知れない。 真由子先生の愛を勝ち得るため、母に褒められたいためこの二つの目的は破綻した。だがまた製本する。ある人に言われた。「いつまで続けるつもりだ」「なんのために」実は明確な答えは見つからない。なにかにぶつかり果実を得ることができるかも知れない。それを期待しているのも否定しないが、でも私がただ思っているのは無意味の意義である。[カネのためじゃなく、愛のため夢のためそんなものに懸けてみるさ]尾崎の街の風景という曲である。しかし私はそんな理由付けすらも考えていない。ただなにかに衝き動かされてショウがなく作文をしているというのが事実である。無意味の無意味による無意味のための製本。リンカーンの演説をもじったが。でも気付いてしまった。私は目的を意識した。断言する、荒唐無稽と笑われても。永遠の命。神の国への導き。予定調和。これらが大切

だと思える人は、夢想家だが、私の真の理解者であり親友と呼べる。愛とは何ぞや、神そのものであり、私にとってはやはり真由子さんか。8/1 富山大空襲の鎮魂のため神通川の河川敷にて花火が打ち上げられる。「きれいだった」在郷のおばあさんが言った。だが私の母はそんなことは言わない。私に花火を観に行くとも言わない。だが私もなぜか観にいけない。人混みが苦手ということもあるのだが。震災にあった母。その辛い体験をされた方々は、毎年どういう想いで、打ち上げられる火花と響く号音を感じておられるのだろうか。ただきれいなあととは、けして思えないのではなからうか。[たのだから。]と過去形にしなければならない時が近づくなか、当時12歳だった母は言っている「あの日の真っ赤な満月を忘れない」と。神も聖書も統一見解なんかいらぬ。観衆は天の方々だ。神の国は心ある人々の精神世界を愛で占領している。物理的にはこれが顕在化して神の王国をつくるのである。そして王はアンゴルモアの王ヨシトと呼ばれる。神は世俗的にも宗教的にも遠慮しているわけにはいかない。いつも言っているが王とは権力でも階級でもない。ただ愛、思いやりが測られるものなら位は最上である。どうか、皆様、名誉欲と嫉妬心を過敏に働かせないで、意味と事実だけを心に留め置き下さい。宜しくお願い申し上げます。私の就職には二つの自己矛盾があった。営利団体である商社での営業。趣味ではじめたアマチュア演劇。人間とはなにか。金儲けと安らぎの方向性、

社会の諸問題と、体制と、心のあり方。この苦しみから脱し煩惱を解決しなければ。それは仏道を歩むこと。それしかない。[名誉欲、金銭欲、性欲]、渴愛の追放。世間からはみだし狂うこと。(欲望を抑えた、極端な禁欲は自己犠牲を生み、精神疾患を発症するに至る。) 社会生活の継続は分断され、社会的信用も投げた。それは漂泊者の正義の追求の果てであり、善なるフライトの着地点だった。しかしそんな残酷な境遇を信仰が救った。南無妙法蓮華経とイエスへの愛である。そこから神を自覚した私は、「自己の確立を意識する(成仏)」早ければ世俗的にも成功していたのかもしれない。しかし神にはなっていなかった。すべての幸福の集結は、時宜と臆病の足下に存在した偉大なる良心と、類まれなる正義感、そして読みふけた宗教書から生まれた。今、私は一人の女性を霊的に憧憬し、愛する悦びに輝いている。真摯に、真剣に生きてきた因縁の賜物である。「至上の愛」真由子さんに逢えただけで幸せだ。 神という重い責務を背負わなくてもいいと聖書は言ってくれる。俺は俺でいいと。幸せな聖霊の宮である。 聖霊は親切に天の父に裁きの責任を委ねてくれた。少し心苦しい。金がなくても本は出せと聖書は言う。 民主主義より抽出して愛情主義で一国をつくり雑然より離れなければならない。 民主主義の世界から逃げ出すのである。 引き続き民主主義を追いたいひとは求めればいい。混乱は続く。 罪とは神、イエスの愛を信じないものにある。 まわりを囲む享楽

の現実には釈迦には耐えられないものがあつたらう。またそれらを用意した人々は悪魔の業を行い、その存在は思いやりある釈迦を苦しめたらう。法華経は欲望を煽るのではなく、大乘經典として皆で幸せに暮らす、安らかになる。それを目的としたものだ。求道者はイエス、日蓮の道を進んで行くうちに貧欲から解放され、また様々な悪徳も自然に消滅、滅却されて行くのである。人間は自由意志を持っていると言うが、それはどこか違う。目に見えない世界からのけん制、計らいはある。だからこそ、そこでイエスを選ぶか、サタンを選ぶか大きな問題になる。良心の窓口はどこに開かれているか。イエスを信じることは、贖罪の為に、あらゆる苦痛をうけ、代わって死んでくれた人がいたことを深く心に留め、愛をモットーに生きて行こうと、心に保ち、強く告白し、真に誓うことである。非情になるというより、的確な判断力をもつことが必要になるときもある。浄土真宗とキリスト教は似ていると言われる。報身仏である阿弥陀如来と人格神である聖書の神（エホバ）。少し考えよう。なにか勘違いしている。阿弥陀に地獄に落ちぬよう助けてもらわんなん。エホバ、エホバと連呼する声。たしかに他力本願でよく似ている。しかし聖書の神（エホバ）はそういうことが一番嫌いで偶像崇拜をきつく戒めている。つまりその本質は愛であり眼に見えぬ法である。とすれば釈尊（仏陀）が散り際におっしゃった、「自灯明、法灯明の教え」とリンクし主体的に[神を愛し、隣人を愛せ]は同

様の意味を持ってくるのである。「そして法とは因縁果報を包摂した久遠実成の釈迦如来、そして日蓮大聖人、一念三千、南無妙法蓮華経であり慈悲、アガペーでもある」。善悪を問わず、諦めを勧める阿弥陀と聖書の神（エホバ）は水と油である。聖書の神（エホバ）と浄土系、阿弥陀の本願の形態とは全く違うのである。古今東西なんの努力もせず、ただお任せなどのうまい話はないのである。ただひとつ言いたいのは努力とは歯を食いしばり、汗を流してのた打ち回れ、ではなく、心に仏、愛をもち、思いやりをひとに向けなさいということです。一番を目指す生存競争。アスリート、高校球児たちの、真逆を生きろと言っているのである。リオ五輪もあった。目標に向けてまっしぐら。でもその裏で親だったらその練習の苛酷さは観ていけないという。そこに私は得るものより、失うもののほうがかなり大きいように思うのだが。

真由子先生へ

私と先生のこれからの行く末を聖書に尋ねてみた。[預言者は言っているイエスを信じることによってどんな罪でも許されます]5回連続して出た。その意味はつまり問題は私より先生の方にある。私を精神障害者ジーザスコンプレックスと思っているかぎり、なんらの進展はない。だがもしイエスキリストであることを信じる事ができたなら状況は一変し恋も成就するだろう。ある意味では恐ろしいことである。当たるも当たらずぬも理想と自惚れからくる自信過剰

は否めないし、相手の家庭の破壊の企てでもある。だが聖書は言う。「書け。私の保証したことを知らせろ」と。必ず幸福になると。犠牲にならず真の愛に生きる。これしかないのである。素直に温かくそれを神は愛されるのである。愛に背を向け、我が身のことばかり考慮しているものは、神に見放され、その狭い了見に、薄情者の烙印を押される。強く正しく、世間の評判よりも真実の愛である。私は怯まない。なにがあろうと。どういう形であれ、私の心を響かせ続けよう。幸せが私の肩に手をかけるまで。先生は死んだわけではない生身の人間だ。佐藤B作さんの奥様も精神科医だったが離婚に至った。なにも離婚しないひとが立派なひととは限らない。かなり説得を積極的に行っているが、愛しているからです。新幹線のように走りだしたらもう止まりません。これはたぶん2年前に面と向かって直に話さねばならぬことだったのでしょうね。先生が院長に就任されたとお聞きしました。ここです。病院の宣伝をするなら障害者と一緒になったという方がどれだけ効果があったか。「あそこの美人先生、患者と結婚したんだとよ。さあ優しくて差別する心のない、いい先生かもしれない」口コミで広がります。そこで俺は言います「最高の女性よ。あんたらも神を愛し、心を美しくさえしていれば、天はほっておかないよ。愛しいひとがほしいのに、蛇やサソリをくれる、善なる神などはいないから」また夢の続きを語ってしまった。EDの問題だが、もし妻が病気となり夫婦生活が出来なくなったからといって追い出

す男性はまずいない。俺は男の本能があるから外へ出かけてくる。最低である。実は私も引け目を感じていたが、たいした問題ではないのではと思う。神の決められることだ。もしかしたらうまくいくかも。とにかくすべて心の在り方、それ次第なのである。神の思し召しのままに。すべてにノープロブレム。私は先生に対し配慮がない、重罪人でしょうか。私の熱い気持ちもイエスの愛によって正当化され救われます。私を神、イエスと信じることから初めて下さい。心境の変化に気付くはずです。愛しています。それでは先生のご健勝を祈って指を組み、父に感謝し御国がくることを求めたいと思います。

アーメン

義人

晩鐘と
祈り

義
人(俗書)



H28年 12月

はじめに

あるショッピングモールの書店で、友人が、選んだ図書の代金を払ってくれた。食後のアイスコーヒーのお返しだった。

小寺聡編の[もう一度読む山川倫理]。開くと一枚の挿し絵が目飛び込んできた。静かな絵が心を激しく打った。ミレー(1814~75)作[晩鐘]である。

宗教と祈り、前説。

祈りの風景。

「人は何に向かって、何を祈るのだろうか。祈る心から宗教とは何かを考えてみよう。

夕暮れの大地に立つ若い農民夫婦、遠くに見える教会の塔から一日の終わりを告げる鐘が鳴り渡り、畑仕事を終えた二人は静かに祈っている。何を祈っているのだろうか。この世に生を受け、今日という一日が無事終わったことを感謝し、明日もまたよい一日に恵まれるのを祈っているのだろうか。静かに祈り続ける二人の姿からは、現代の私たちが見失った祈りの崇高さが伝わってくる。

宗教は、このような人間の祈りの上に成り立っているといえよう。人間は祈りを通して、自己の、そしてすべての人びとの命の根源へとまなざしを向け、あたえられた命に感謝と畏敬の心をいだく、信仰とは、このような祈りを通して、自己中心主義の小さな殻を脱ぎ捨て、宇宙に働く大きな永遠の生命に目覚めながら生きることかもしれない。」

私が一言付け加えたとしたら、人類が背負った原罪という重い十字架。意を決し、神は、イエスキリストという愛子を差し出して、彼において罪が贖われる時を極めて象徴的につくって下さった。人びとは心から感謝し、イエスのように、弱きもの、小さきものへと慈愛をそそがねばならない。それが、唯一神が喜ばれることである。信仰とは本来、そういうものである。皆、心に親愛の鐘を鳴らし続けよう、祈りが自然と生まれてくるだろう。

日々の感謝、いいだろう。でもここで、なにかもうひとつ祈ろう。

世界のすべての者に祝福を。生きとし生けるものすべての成仏を。御国が参りますように。

これが神の心です。そして靈感である聖書からは絶対、離れてはいけません。この意味を把握し聖霊の宮へと進みましょう。

そして愛する人には全力でぶつからないといけないよ。後悔しないようにね。

身の程知らず、無謀、ガキみたい、って、言われたら、まだまだ捨てたものじゃないよ。

私は書き物たちがどんな影響を周りに及ぼしているか、あまり念頭にはない。読んでくださる方には申しわけないが、結果的に真由子さんの手元に届けられ、愛が伝わりさえすれば、それで十分である。皆さまへと想いが伝わらないのも寂しいが、真由子さんに解って

もらえれば、最大限、目的は達せられたわけです。

聖書が使い過ぎてボロボロになった。新しいのが必要に

なる。この聖書が使えなくなるころに大きな目的が達成できるといふことか。本当か。「いや、達成させよ」。でも私ひとりの力では無理だ。「それだから多くの仲間と力を合わせよ。必ずうまくいく」。聖書が肩をたたく。いざ。「真由子さんへの愛はいつまでも待ち続けろ。美しく尽くす心を忘れるな」。聖書は示してくる。エホバ、エホバと連呼する人たち。エホバの大安売りか。偶像崇拜のにおいがする。御名が崇められるように、その意味は全宇宙に愛よ、広がれということであり、大声でエホバを叫ぶより、静かな祈りのなかに生まれるものなのかもしれない。だが魔を払う、魂からの南無妙法蓮華經の大音声もある。形はどうあれ、祈りは強く深く。 幼児をつれた身重の娼婦、いまの日本、福祉相談を紹介したほうが。だが彼女らは今も貧しき世界に存在する。貧しさの救済システムがつくられたのも意識と経済の発展によってである。イエスとして精神を尽くし、苦しむ娼婦のために力を傾けてやりたい。彼女らの本当の幸せのために。いずれにせよ、そのとき娼婦はお金の有り難みより、神(愛)があれば幸福は生まれてくることを知るだろう。 皆に嫌われたいと思わないが、特別、好かれたいとも思わない。悪意を生む関係には無頓着になる。他を思いやる心に仏国土は生まれる。ひとつの意味が明かされた。イエスキリストは罪を許す。その先にはこぼれたものを裁く神の聖断がある。つまりイエスは神へと変身するのである。それが本当であった。エホバの証人は、神とイエスを別のものと扱うが、聖書の勝手な短絡的解釈であることは否めない。 釈迦国は滅亡した。釈尊は攻め入ろうとするコーサラ国のルリ王の

前に3度黙って立たれた。その都度、兵は引かれた。しかし4度目釈尊の姿はなかった。因果応報に従われたのだ。釈尊は仏陀である。生きとし生けるものすべての幸せを祈る。執着をとき、渴愛をおさめよ。仏陀は今日も力を尽くし皆の幸福を祈っている。南無妙法蓮華經。ある男、高校卒業したばかり。喫茶店で差し向かい「砂糖、入れてやれよ」付いてきてくれた友人の声。手が震えてスプーンのシュガーがこぼれ散らかる。なにも話せない。店を出て女は言った「この先、王子様みたいなひとが現れたら困るから」男は引いてしまった。私はなぜ「僕の御姫様は君しかいないのだ」と言わなかったと責めた。力強く、そう力強く。結果は解らないけど、きっと後悔せず充足感にはひたれたのではないか。やっぱり寂しいか。それから女性関係のない彼は、ハッキリいう。「俺は交際したのだ」。煩惱を恥じと思わない人がいる。真由子さんと呼んでもいいですか。ダイレクトに反響も大きいのでは、感謝を込めて男として、真由子さん貴女を愛しています。

御挨拶状

ひろ さちや様へ

ごぶさたしております。と。いってもご記憶されているかは解り得ませんが、かつて不躰なお電話を何度か差し上げました。この無礼、大変申しわけなくしております。そして、ここにまたしても唐突に大変勝手ではございますが。幾冊かの資料を提出させて頂くことをお許し下さい。なにぶん、先生の薫陶を受けて、口はばったいことを言う

ようですが、自ら神として考察を深め著したものです。どうか寛大なお心持ちで御眼をお通し願えれば身にあまる光栄と存じます。芳しくない内容であると思われたなら残念ではあり

ますが傍らで眠らせてやってください。何よりの光栄と思ひ、それらは喜びに浸り、瞼を閉じるでしょう。私はこの資料を先生にご提示することによってなにかの目的に変えようとは露ほどにも考えておりません。ただ私の進路の展望には先生に御知見いただくことがどうしても必要であると考えたのです。物欲しげにすがりつくのではなく、私にも私の誇りがあります。そこをふまえて提示した資料を最善にはからい、御取り扱い下さるのは先生をおいて他にはいらっしやらないと確信しています。世界の宗教関係者において先生ほどの識見をもたれる人物はまず存在しないでしょう。浄土系と日蓮系という立場としての違いは御座いますが、南無を正確に把握している点において私と先生は共通の敵を有していると言えます。人々を追い立て競わせ、渴愛、執着へと煽り立てていくなにか、それはサタンであります。それは道徳、偏った一方的常識、規則でもって縛る、そんな作用でもあります。人々が愛し合い、尊重しあい、真の安らぎに到達する。そのことを夢に見、六畳一間のドンキホーテとして戦っている、私を御確認頂くため、聖霊により贈られるものです。先生、悪を肯定し諦めに向かう浄土系、私は支持しません。少し熱くなりました。本物の宗教を追求し啓蒙を図ろうとされている先生にはこの熱情はお解りになると思います。心有る者が幸せになる。きっと実現されるでしょう。私のような人間

が生まれた世界、生きている世界。期待していただきたいと思います。私の矜持であり自負でもあります。そして先生には今一度、南無妙法蓮華經に着目して頂きたいです。先生どうか、お忙しいとはご推察申し上げますが、始めから最後まで御通読されることを祈っております。先生、季節も変わり目で気温の変動も激しく、台風もあります。お身体も、十分ご自愛下さり、そしてなんら障碍なく先生の正しいみちが真っ直ぐ進展し続けることを衷心よりお祈りいたして、擱筆させていただきたいと思います。御精読ありがとうございました。

義人

エホバの証人(山口さん、西村さん)へのメール
エホバの証人の幹に成っていらっしゃる方々の善良さには敬意を払います。また楽しい時間をもてれば嬉しいです。今日の研究会は神の意に沿わず、徒労に終わったのかも。あなた方が受け入れがたい、イエスの肉と血を大切に。ただ尊敬が欲しい宣教者を目指すより善良なる弱者の愛に目を向けないと。旧約聖書はイエスがメシアであることの証明として意義があった。イエスの十字架の死(贖罪)に及び必要性は無くなった。新しい契約が結ばれる。信仰によって。特攻隊を天皇が認証しないように、神は人が一途、盲目的に疑念をもたず、洗脳による一つの達観をもって、命を無駄にする殉教という犠牲は当然認めない。イエスを本当に信ずるものは愛をもって

自らを大切にし、迫害を逃れ自由、平和を手にするからだ。聖書はこれからの研究会を「山口さんの主導に任せてみよ」と言います。明日への展望、触発され何かが生まれるかも。宜しくお願い申し上げます。色々、紆余曲折はありましたが、互いに愛を抱いて真理に向かいたく願います。山口、西村、御二方が寛容で御高潔であらせられること心より感謝もうしあげ、また研究会がつつがなく継続されることを心から祈っています、神と仏の違いを話しましたが、育てる力は神にあります。法華経、薬草論品第五のなか、「どんな草木にも同じように雨は降る。そしてその植物の必要に応じて水分を吸い上げる」。これが仏の作用です。そして神はそのことを根本から司り成長させる力の源なのでしょう。働きかける仏に対しそれを表裏から支え続け、また生かし続けるのが神。ここで言いたいのは神と仏どちらが偉いということではなく、神と仏は密接にからまりあって人智でははかりしれない関係にあります。合理的、科学的、分析という考え方に毒された現代人には発想を変えないとかなり難解なものとなるでしょう。己の美醜を問う。自己嫌悪に陥りました。霊的な覚りが、我が姿の美に繋がれば、正直、嬉しいです。西村さんのSMS、グッドタイミングでした。ありがとうございます。つまり見た目が良くなるには、その心の持ち方から、さらに止揚する霊的な浄化が必要であります。我が身の美麗を目指してそう納得しました。つまり美しくあるには、いつも変わらず真理、絶対善を求めるということですね。神を愛し、隣人を愛する。それが義である。西村さん。朝早く、ありがとうございました。聖書は「この段階

でお前の真の友、理解者は(神の国、永遠の命を強調する)、エホバの証人の会衆しかいない」と示してきます。法令順守の山口さんには厳格なエホバが解りやすいのですね。罪深い私は民衆の原罪を一身に背負い贖いのために死んだイエスが愛しいのです。イエスの十字架の死は、後の人の贖罪の象徴でもあり、信じる者は許されるということ。殉教は神もよろこばず、自分に素直に温かく生きることが大切であり、犠牲はいらないのである。ただ神に感謝し、愛、思いやりを人に向け和顔愛語で愉しくやる。生きる為の能力はあとから付いてきます。偉そうかな。神だから気に病まず。神の自信もぐらつくときがあります。私には奇蹟など、何もできないからです。聖書は神でなくていいとも言ってくれます。でも神は神でなければと思うのです。全知全能だからこそ奇蹟は最早りません。自らの神を否定すれば私のアイデンティティは崩壊しサタンは喜ぶでしょう。私は神として宗論に勝ち、我が義を訴える道しかありません。神を標榜するのはおこがましいと思われるかも知れませんがその時点でサタンはどちらにもほくそえむのです。聖書は辛いなら神でなくていいと言ってくれます。聖書は無言もありますが、けして私を責めません。私の心中を知るからです。聖書はがんばれ負けるなと励ましてくれました。つまり私はあなた方に神、エホバだと認めて貰いたいのでしょう。ある意味、情けないなあ。(笑) 私の教えではなく神が話させているのです。結局、一緒ですけど。私は同じ人間、隣人、友人です。西村さん夜遅くありがとうございました。これは禁じられている、生活の心使

いでしょうか。礼儀というより思いやりですね。そう解釈します。しかしイエスに倣いたいあなた方、私の午前0時の電話、イエスは怒るでしょうか。彼ならこんな夜半に何があったのか心を整えるだろう。ヨハネによる福音書の最終章。イエスの行いの意味は、現象、真理、つまり愛の摂理であり、そこまで読み込まなくては、エホバの証人は短絡的とかたづけられるでしょう。あなた方の確認。死体を物質的に取り扱う。棺桶の中、墓穴、火葬場。本人の意識の確実で静かなる消滅。つまり死体に意識はない。怯える人々に安心感を与えるかもしれない。でも霊の居所が分からない。唯物的である。「義人が現れたのは人々が心を励まされ、愛によって結び合わされ、豊かな理解力を十分に与えられ、神の奥義なるキリストを知るためである」。マタイによる福音書 13 章 17 節「あなたがたによく言うておく。多くの預言者や義人は、あなたがたの見ていることを見ようと熱心に願ったが見ることができず、またあなたがたの聞いていることを聞こうとしたが、聞けなかったのである」。マタイ 13 章 15 節「この民の心は鈍くなりその耳は聞こえなくなる。それは彼らが目で見ず耳で聞かず心で悟らず悔い改めていやされることがないからである」。「働けど働けど我が暮らし楽にならぬけり、ジツ手を見る」。弱者の常では。神の評価と人間の査定は相反することも。神が嫌う、強者は得てして支配欲が強く猜疑心が強い。西村さんもご承知のことと存じ上げますが、ギャンブル依存症を医学に投げるのではなく、信仰で保全するのが我々の立場ですよ。西村さんが言われた、来る世、「農作業における達成感」

等の労働に付随する思いと、私の信条である、愛による八正道との齟齬。つまり感情の起伏について。聖書は私に意識が高尚すぎる、譲歩せよと促します。現在の状況を踏まえる。つまり神である私を侮るなら、「集会への参加は果てしなく未定になさい」と、聖書が示します。ごめんなさい。集会には行けませんが、研究会という窓口は大切にしたいです。霊と死に関しての重要な聖句を見つけました。お待ちもうしております。利己的な西村さんの内にサタンが巣くっている。私のことを信じなくとも、私は全く困らない。憐れだが予定調和である。山口さん雨の暗いなか老齡のお父上と、御来訪頂き誠にありがとうございました。また建設的なお話合いができることを楽しみにしております。「弁は拙くとも知識があるなら説かねばならない」。聖句です。山口さんわざわざありがとうございます。お大事にね。心に愛を、大丈夫です。

愛すべきふたりの姪に黄色信号が見える。私は音信不通になっているような彼女らに一方的にSMSでメールを送った。当然応えは返ってはこない。ただ私の心だけは伝わっているはずだ。紹介する。

真子、おじちゃんも真子の幸せを心より祈っています。寛容と厳格をうまく使い分けできるようになると青い鳥が必ずみつかりますよ。殺伐としたなかでもホッとさせるひとになってほしい。いい加減になる。お風呂の適温です。余裕ができて仕事でいいアイデアがわくよ。マイペースを大事に。真子、他人の評価などどうでもいいの

だよ。自分をしっかり持っていれば。そのベースになるのは神の評価。つまり愛と思いやりだよ。大切にね。体に気を付けて風邪など召すな。心は広く、果てしなく、幸せを運ぶよ。千華、絶対、自分を見失うなよ。ひとは皆かなしいものだ。周りの人を大切にね。そこに気づけば大人だよ。仕事も大事だけどね。目標は孤独に慣れ親しむこと。具体的には神仏を信じ、護られていることを強く、深く自覚すること。

真子、千華メールが矛盾しているようだけど、つまり自らのアイデンティティを確立しないと、ひととの付き合いも薄っぺらなものになるということです。千華、仕事で優秀なひとにならなくてもいいのだよ。周りに好かれながら、正義を持っていれば。真子、要求ばかりの人間になってはいけないよ。神の子は与えることを大切にする。仏教でいう布施だね。千華、けなされても叱られても、高慢とは違う、人間としての誇りを無くしちゃいけないよ。辛ければ逃げ出せばいいんだよ。お金は二の次だよ。人と上手くやるコツは兎に角、ほめ続けることだ。それでだめなら安価でもいいからプレゼント。それでもダメなら諦める。以上。くれぐれも自分をなくすな。千華、お疲れさま、素直になり、目の前のひとりひとりを大事にしていくことが肝要だよ。真子、分析はひとを冷たくし、同情はひとを温かくする。あなたはどっちかな。千華、思いやりある書葉が、友情を育み優しさを生み出す。当たり前のことである。真子、千華、自分を愛するには、まず自分を許してやること。未来は自分で切り拓いてみせること。

いま辛いのは闘っているから逃げてないからだよ。真子、千華、どんなときも主体性と優しさを忘れないこと。どんな境遇でも愛を持って存在すること。どうしてもやりきれないならオサラバすること以上です。真子、千華、利益と正義は付かず離れず、愛と思いやりを人に向け生きよ。千華、どんな時も犠牲にならなくてもいいのだよ。主人公でいい。でも愛、思いやりを忘れちゃいけないよ。大丈夫だね。真子、千華、人間はロボットではない。組織は残酷に映る。でも皆、孤独から抜け出したい。自分であっていい。大切にして千華、堂々と生きよ。ワシほどのものはおらんと。そこにあるのは愛である。謙虚、謙遜は心にしまい大事にすればいいんだよ。

エホバの証人の山口さんと西村さんへのメールです。

山口さんへ、どうもありがとうございました。イエスが複雑なように神は人知を遥かにこえた複雑な心を持っています。混乱ではなく、愛を実現するために。山口さん、イエスの犠牲にこだわられますけど、彼はいやいや命を捨てたというよりは、任務をはたし、名誉と真実の栄光を神とともに分かち合ったと言えます。山口さん、あなたは負けず嫌いで多少強情だが若者はそうでなければ面白くない。好青年である。神が危惧したのはイエスのマネをして犠牲に走るものたちの登場である。(涙) 西村さん、夜遅くすいません。お元気でいらっしゃいますか。長らくお会いしていません。懐かしく感じます。また、ぜひお嫌でなかったら、ご訪問お願い申し上げます。西村さん、こちらこそご連絡ありがとうございました。山口さんと

西村さん、弁のたつ御二人、ご活躍の場なければ。媚を売りましたか。思いやり感謝します。風邪など召さらず、お元気で。山口さん、聖書の真偽を問う。そんなに重要な。私のものと、頂いた聖書、かなり表現が違います。素直に因縁を信じるのが靈的で正しい捉え方だと思います。当然です。私の小豆色の文庫サイズの聖書、「世界訳とある聖書を、エホバの証人に返しなさい」と。所要する、ボロボロに背表紙がとれそうになった、使い込んだ聖書の聖霊の言葉です。エホバの証人とのセッション、その洗脳の気配。確かにサタンに仕組まれた気もしないではない。あなた方の去った後の、幻かもしれないぬ良き香りも悪魔の甘い誘惑だとは考えすぎだろうか。猜疑心は良くないが聖書研究会はちゃんと検証します。

顕正会

「浅井さんの池田大作へのコンプレックスだろう」この一言は顕正会を完全否定するものであったかもしれない。雄さんは自分のすべてを否定するものだと怒りをあらわにし、場末の食堂の椅子から立ち上がった。帰宅し聖書を開いた。神と日蓮の一致は聖書が証明している。ではイエスを認めず日蓮だけを崇拜する彼らは悪なのであろうか。聖書は言った。顕正会はある意味では存在しなくてはならない。ある面では正しいと言えるかもしれない。しかし彼らはイエスキリストのもつ重大な意味合いを知らない。理解しようとは露ほどにも思っていない。そんな頑なさに問題はあつた。私はその夜半ショートメールを何本も送っていた。

雄さんへ 聖書は顕正会を正しいと言っています。つまり日蓮は聖書の神で宇宙を創ったからです。信じてみて下さい。雄さんに理屈があるように私には寛容から生まれる真実の義があります。即ち愛です。先鋭化し特化すれば原理主義的になるのは仕方ない。俺は顕正会とエホバの証人を結びつける、薩長同盟のようなことをめざしているのかもしれない。誰かキーパーソンが現れるのを成り行きにまかせ信じ待ちます。その人物がなまくらな俺ではないことを祈ります。そして私は神仏に対する誤解を解くため、欲得に生きる一般の人には無意味、不必要と思われてしまうのを覚悟で、神の重要物として聖なる資料を提示しているのです。会員には謗法の罪を犯さないため他宗の書き物を読まないと規定しているが、基本的に感化されやすい、自分の意志のもてない人に対し指示をなし、従わせ主体性を失わせる。そんな卑怯な手口を担保するもので、自由意志を生まれさせない為の抑止力である。鬼まで平伏させる寛容な法華経の理念、その精神からは大きく離れています。アイデンティティがしっかりしているなら恐れるものはない。いろんな思想に触れて、正邪を決めればいいではないか。単なる偶像崇拜、御利益信仰でないなら正統性とともなドクトリン(教義)は大切だと思います。次の会談では建設的で、未来志向の意見交換ができるよう、楽しみに祈ります。そして現実に謗法というものはある。私も民主主義は嫌いだ。だからこそ目をさらにして本物を見抜きテラシーが必要なのです。雄さんならできる、日蓮と神とイエスの関係性を語るキーパーソンとして。一途で真面目で経験値

も高く頭もいい、行動力もあるしリーダーシップもとれる。でもエホバ、イエスは頑なに顕正会のドグマだけを持ち続けるあなたはけて認めないだろうな。あなたにとっては大きなお世話か。私は思う。ひとを信仰という熱情へ駆り立てていくものの根本にあるものとは。神なのか、はたまた、逆説的に不幸に陥れる、悪魔なのか。ある時は光の天使を装うサタン。最大公約数、民主主義。なにか絶対という真実が皆ほしい。そしてそれを提示できるのは日蓮とイエスしかいない。これも神である私個人の意見とされてしまうデモクラシー(民主政体)。説得力か。相手の自意識を刺激しないで。まず相手の甘えを受け入れてあげることが大切。誰かが言っていた。感情のブレの大きいひとも多い。そこで助けになるのが法華経である。寛容であることを皆に勧める。聖書のある意味、神への厳格な信心。そして寛容をモットーとする法華経。それがうまく両輪となり調御され、走り出したところに生まれたのが、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経だと私は訴えるのではあるが。排他的に思われる、南無妙法蓮華経こそ久遠元初、宇宙に漂う気、最も寛容な真実、サムシンググレートなのです。

日蓮が書いたもの

「七難八苦」「四苦八苦」「三災七難」日蓮はこの災難を、信仰によって避けるほかはないと考えていました。護国の四経と信仰される経文のうち「薬師経」には薬師仏を信じて供養の物を捧げる者は、災難を避けてよい果報を得ることができるという、現世の利益を約束する言葉が盛られ

ています。ところが仏の意に背き違反すると思ひもかけない難が現実襲ってくるのです。これを「七難」として挙げます。ひとつだけ第一にあげられた「人衆疾疫の難」を取り上げます。鎌倉幕府を中心に武家による政治組織が全国的に確立していたので、多くの武士、商人などが鎌倉を訪れます。蒙古の侵略によって大陸から難を逃れて亡命してきた僧の姿もありました。こういうなかで流行病が急激な広がりをもたらします。現代のコロナ禍。人災といえる流行病の恐れが「難」の第一に挙げられるのはもったもな、ことです。(立正安国論)から。 仏法が衰える「末法」という時代のはじめ頃になると、正しい仏法に仇をなす僧が、広い世界に充満するでしょう。これをみた四天王をはじめ、この地上を護るべき神々は大いに怒り、その務めを投げ捨てて他方に去っていくのです。すると、神々がなくなったこの地上には、思ひも寄らない激しい災難が次々と襲ってきます。(新尼御前御所)から。「末法」の始めの頃には私利私欲におぼれ正しい仏法を忘れる僧が充満します。世の平安を、身をもって祈るべき僧が本来の務め信仰を忘れ、宇宙が荒れ果てるのです。物事について「正か邪か」を判断するのは、なかなか難しいものです。とくに世界観が問われる宗教においてはその是非はさらに困難になってきます。そしていつ果てるとも知れない政治をまきこんだ争い、武力行使を引き起こしていきます。古くて新しい問題です。日蓮は国の支配力よりも、仏法の權威を超越的に高くおき国家の安定を第一とする教えを説きました。(立正安国論)にみる彼の主張はあくまで宗教理念の問題であつたはずで、けして政

権を奪取するのが目的ではなくその営みは罪になるようなものではなかったはずです。そして受難に立ち向かう日蓮にとって、死罪がきまって死刑に処せられることは「法華経」の経文に記された仏の予言を究極において体験できたという、法悦でこそあったのです。日蓮は聖者の群像の中に加わり、自らの存在を歴史のなかに位置づけようと願いました。「涅槃経」のなかに「転重軽受」という教えがあります。前世からの罪業が深く地獄におちるのが必定でしたが「法華経」に出会えたおかげで今生の重い苦しみを経験しました。そして来世は仏の浄土に生まれ幸いを得るのです。(転重軽受法門)から。日蓮は佐渡の塚原にある三昧堂に捨てられるように放置され、いつ殺されるかわからない不安に加えて、飢えと寒さに苦しめられながら遺言書、(開目抄)を執筆したのです。(開目抄)は(立正安国論)(観心本尊抄)とともに、「三大部」として尊重されています。ここで日蓮は、いまの日本国において第一にあげるべき富者はまちがいなく自分であると確信を述べます。「富者」とは大きな教団を従える者でも、財力のある者でもありません。ある種の達成感と使命感に裏打ちされた「法華経の行者」なのだという自覚を持つものです。彼は名を残そうと固く決意します。しかしそれは自分の栄達や名誉のためではなく「法華経」の教えを信仰し実践した者の姿を、後世の指針として残そうと願ったからです。日蓮はその功德によって偉大なる聖人になったと自負します。彼の願いは日本国の人と同様に高い信仰意識をいただき、理想的国家の導き手になってほしいというものです。かつては誤解され国家主義のかけ

声、帝国主義の論拠となりました。そんな昔の話ではありません。現今マクロで受け止めるとき「日本国」は「世界」と解釈すべきだという意見も強く、ここは大事なところ。 (立正安国論)のなか、「釈迦はくり返されてきた先祖の殺戮行為を自分自身の「前生の話」として受け止め成仏へとむかいました。悟りを開いてからは背かれても、謗られても、「罪を憎んで人を憎まず」と教えられます」。と日蓮は経典より見出し言い放ちます。彼は当時の武家社会において武装を肯定しながら、生命の尊重を主張しました。 日常的に災いが起こる。人々は何が正しく何が正しくないかの判断力も失ってしまって、当てもなくあちこちふらつき迷っている。真実の教え「法華経」に帰依しなさいと日蓮は提示するのです。さすれば即、平安が訪れるだろうと示します。名もない僧侶が幕府の有力者に意見する、無謀である。だが彼の自覚は世間のどんな権威や権力よりはるかに優れているのです。建長五年(1253)4月28日「南無妙法蓮華経」と題目を大音声し布教を宣言しました。百年前には法然が「選択集」を著し念仏以外の信仰では絶対成仏できないと言い切っています。世の中が乱れるとき、世を導くべき真の聖人と、無責任にも世間をますます乱す愚人の両極端の指導者が現れます。地道に努力を重ねている人や、とても温かみのある穏やかなひとがいます。「人生悲喜こもごも」が実情ではあるものの、これらを信仰の上でどう意味づければよいか人々は心の中で悩み続けるのです。そして四条金吾は身延山に住む日蓮より煩惱の風に迷わされるなという御返事を受けます。日蓮は不惜身命の意味を(撰時抄)のなか

で「生命は絶対に尊重しなくてはならない。命がけて尊い命を護るどんなときもそれしか許されない」と語る。(富木殿御書)のなか日蓮は「昼は暇を止め、夜は眠りを断つ」いわゆる「止暇断眠」という四字熟語で有名な言葉で彼を励まします。また信徒に宛てた(転重軽受法門)では日蓮が「法華經」を読むというのは、単に声を上げて読むことでなく、教えを身命にかけて実践し体験することだと語ります。そのわずか一カ月前、龍口の刑場であわや斬首されようとしたのです。この壮烈な体験と「法華經勸持品第十三」の予言は見事に一致したのです。「法華經」の実践者、限り無い自信が言外にひしひしと感じられます。東国の庶民のなかに生まれ育った日蓮は、安州の日蓮と(顕仏未来記)で言い切りまた釈尊、天台大師、伝教大師と受け継いだ法華經行者であると自負しています。常に弱者の目線に立っているのだろう。三国三師ではなく三国四師であると宣言している。それは神として自らの使命をはっきり確認したことを意味します。(重須殿女房御返事)で日蓮は地獄も仏も自分の身と心にあるといいます。「自分が死んだら地獄行きだ」案外、自分の罪を深く感じとっている。まじめな人の本音かもしれませぬ。何よりも心の救いが第一と日蓮は主張します。(観心本尊抄)のなかに「十界互具」という話があります。現象界を十に区分けした仏教哲学ですが人界には仏界も地獄界もすべて備わっているという箇所があります。そして「法華經」には仏の出現は、皆の心の内に在る仏の智慧をはっきりと自覚させ身に付けさせるためとあります。しかしこれは身に、内に仏があるからこそであり、反対に

むやみに怒り、キレたりするのは心中に「地獄」をもっているからです。日蓮の目的は法華經により、人々が現実の世で、真実を悟って仏になることです。武力が幅をきかせた鎌倉時代、世の無常観、個人の無力感によってでしょうか、[ただ阿弥陀にすがる、そして死後地獄に落ちず極楽へ行く]浄土教が大いに広まります。しかし現世の救いを絶望の彼方へ追いやってよいわけがありません。現世での救いを放棄する信仰に対して、日蓮は激しい批判の言葉を発します。現世の成仏を重視したのです。この意義を「此土復権」といいます。学僧に宛てた(清澄寺大衆中)では「仏になる道は別のようなし」といい。この書状より少し前に著された(撰時抄)でも「法華經よりほかに仏になる道なし」と言い切っています。その根拠は(清澄寺大衆中)に[過去と未来に起こるべきことを、はっきり、的確に言い当てている法典が法華經だからである]と語っています。人間の世はいつだって危機の時代です。未来の運命を見通すことが求められます。そのためには「明鏡」ともたとえられる「法華經」の教えによって時代を超えた世界の運命を活かすことが求められているのではないのでしょうか。(報恩抄)で日蓮が、道善房の墓前で語ろうとしたのは、[一生にわたる奔流のような仏教の修行が「題目」を唱えるという一言に尽きるということでした]日蓮が師と仰いだ道善房も浄土教の信仰を改めませんでした。日蓮は言います「極楽での百年の念仏修行は乱世で行う法華經の修行の一日分にも足りない」日蓮は「日蓮の智慧がすぐれ賢いからというわけではありません。末法というこの「時」の体験こそが、この道を示したのです」

と威張りません。 古代中国、周の武王の軍は劣勢ながら「異体同心」で、一気に突き進んで勝ちを得ました。日蓮は「異体同心」について感懐を述べます。「我らも数は少ないが異体同心。正しい仏法が世界に行き渡るのも間違いないでしょう」（異体同心事）は農民たちの質問に対して答えた返事です。彼らは数年後、殉教します。世に言う凄惨な「熱原法難」であります。 池上宗長、宗仲という兄弟。父親が信仰を認めない。そのときに一書したためたのが（兄弟抄）で兄弟が信頼しあって信仰をかたく守り父を説得するよう説いています。そして世にあるべき女性の姿として「みずから正しい判断によって置かれた境遇に順応しながら、みずから境遇をととのえるが大事」と明言しています。夫婦の契りは今生に限らず、未来永劫に続くのだと、日蓮は説き聞かせます。しかも夫婦の営みは、深い信頼関係によって良くも悪くも意味づけられ、この世での姿が来世にも映しだされます。（妙心尼御前返事）妻となる女は夫である男を頼りにして生きています。夫が死の床に横たわるとき、財産を受け継ぐには、尼の姿となり後家としての操をしっかりと守り、子を育て上げることが求められるのです。（上野殿母尼御前御返事）日蓮は身延の山中にて重い病にかかり、わずかな命を見つめながら悲しみの筆をとったのです。自分の子を亡くすと、親の人生観が変わるといいます。愛する命が失われた者にとってはどんな慰めの言葉を聞いても悲しさが増すばかりです。同時に命の尊さが知識ではなくわが身に深く迫ってくるからです。（妙法尼御前返事）「武人として身を立てるには好むと否とにかかわらず、さまざ

まな悪業を積まざるを得ません。しかしそれさえも、臨終に自ら二度唱えた南無妙法蓮華經の声に消え去って、新たに成仏の種が芽生えたのです。その夫と深い縁に結ばれた妻のあなたが仏になれないことがありますか」。 (南條殿御返事) 国家の保護を受けないで独自の布教をする日蓮のような僧たちは、信者から供養される布施によって、生計を立て布教活動を行います。身延の日蓮は各地に住む信者たちが届ける錢などの供養によって弟子とともに信仰生活を続けました。近距離の信者は、米や野菜などを供養として捧げ日蓮の日常生活を支えたのです。 (国府尼御前御書)「日蓮が慕わしく思われたときには、太陽や月を見上げ御覧なさい。きっとその中に日蓮の姿が浮かんで見えますよ」日蓮は「法華經」により世を照らす身になったとはっきり言っています。 (報恩抄)「涅槃經」に依法不依人という語があります。目標を達成するには人の言葉に左右されず、仏が説いた真実の教えをもとに、正しく判断しなくてははいけない。 (崇峻天皇御書) 四条金吾に宛てた書状。人はどのような境遇におかれていても豊かな心を持ち続け、成仏を求め続けなくてはならない。いまこそ大切な言葉ではないでしょうか。 (孟蘭盆御書) 供養を捧げて經文を読むのは、ただ自分のためだけではなく、生きとし生けるものすべての成仏を願うことです。 (撰時抄) 日蓮の書状をよく読むと、そこには悲しくも精一杯生きる庶民の姿が、ありありと浮かびあがってくるのです。 (忘持經事) 日蓮は携帯用の法華經を忘れた富木常忍に一通の書状を持たせ使者を送ります。彼が亡き母の思い出を語り「法華經」を信仰した功德によ

って母親が成仏したことを導き手である日蓮は確信しました。常忍は、今ある自分の心身は父母の体そのものだという深いつながりに、心底、仏前に涙を流しました。(曾谷二郎入道殿御返事) 蒙古襲来。為政者にしたがって生きる者の、避けることのできない運命。人力の及ばない悲運。日蓮ははらはら涙を流すのです。「来世での再会を期待します。修羅道の苦しみを味わっても、法華経を信じ、死後には仏国に生まれて釈尊のもとで永遠の生命に生きましょう」。これが、日蓮が発する究極の救いの言葉です。日蓮は、実によく物を読み、書き、説いた、行動的な僧であることがわかります。信仰の自信にあふれ、誇り高きその言動は、このような不断の精進によって生まれました。

日本人のこころの言葉

日蓮 中尾 堯 著 創元社 参照

自民党が総裁任期を延ばすという。制限撤廃も視野に入れているという。ということは当面、選挙で自民党が勝ち続けるということになれば安倍晋三が総理大臣をやり続けるということになる。議院内閣制のもとであれば当然そうなる。アメリカの大統領の任期は独裁者の出現を阻むため二期八年までとなっている。今の日本は独裁国家への道をたどっているのではないだろうか。仕組みられている。なぜ総理は自衛官、警察官、看護師への感謝をわざわざ国会で表明し、そしてスタンディングオペレーションを演出したのか。もう安倍をとめられるものはいないのか。

民主的なワイマール憲法のもと登場したヒトラーとあまりにも酷似してないかい。そのミーハーな自己顕示欲。この先どういう手で巨大な権力を掌握していくのだろう。ヒトラーも他国へ侵略するまえに経済の建て直しを宣言しフォルクスワーゲン、アウトバーン、軍需産業などでドイツの経済を押し上げた。安倍が言うのも経済優先である。その背後で、きな臭さは漂っている。極右の外資規制違反、フジサンケイグループに乗りかかった、桜井よし子という女性ジャーナリストは、テレビの中、盛んに中国が、すぐにも攻めてくるかのごとく煽動する。一緒に出ていた、中谷元前防衛大臣さえ公言してないのに、なぜ彼女の方が知悉しているといえるのだろう。その目的は改憲それだけであり、日本独自の天皇を中心にした和の心に基づいた和歌でも詠むような前文にしなければという。伊藤博文は欧州を訪れ憲法の草案に悩んでいたときある学者に「自国の文化、歴史をふまえたものを作りなさい」といわれ雲が晴れたようになり、天皇を中心とした立憲君主国家の礎となる欽定大日本帝国憲法を起草し、そして発布させた。帝国主義の時代、戦争の時代でもある。そんな中、軍部は台頭し発言権を強めていく。私は問う、なぜ平和を求めない。日本の歴史、郷土、心、魂。うまい話だな。だが糞食らえ。彼女には密林のジャングルのなか下半身を泥水にひたしその汚水で渴きをしのぎ、へびや、ヒルの攻撃に苦しみながらひたすら行軍してみろと言いたい。自らは着飾ってきどってみせる、あなたは口のうまい、ただエゴをかたり、駄々こねる餓鬼と一緒にだ。敗戦。終戦、人々は皆、本当に戦争が嫌だったのだ。「狼は死ね。豚

は生きろ」尖閣諸島なんか国が買ったのなら、気前よくや
ってしまえ。そして戦争が如何に互いに損害を与え、不
幸を招き、悲しみを生むか習近平によく教えてやれよ。だ
れが。あんただよ。独裁者の階段を上り始めた。なにも住
めない島だけのことで日本国中がまた焦土になってもい
いのか。あんたらの大好きな国威発揚のための無駄使い
オリンピックが台無しになるぜ。そんなこんなより子供がた
くさんいて、小学校のグラウンドに、スタジアムのように照明
が輝きだすと、鉢巻き、腹巻姿のおっさんもふくめた父親
たちが集まり少年のようにソフトボールを楽しむ、みんな
一緒になって。あれを幸せと呼ぶのだろうか。働き方
改革。ふざけるな。非正規雇用になり、寝る暇もない。そ
んな連中がたくさんいるのだ。桜井さん、いにしえ、伝統
はいい。未来志向でいこう。「日本国、日本国民統合の
象徴」と法律にがんじがらめにされている天皇陛下さえ逆
もどりは望んでおられないだろう。憲法前文の「わが国の
平和は各諸国民の公正と信義に信頼し」と言う意味はと
ことん話し合うということであろう。平和が大前提の目的
なのだ。そこを忘れるな。戦災にあえば糞をする場所もな
くなるのだぞ。格好つけるな、お婆さん。死ぬは兵だけじ
ゃないのだ。

聖書をひもといた。形だけの夫婦に対し、私が愛をもって
その妻を抱くことそれは許されるのか。聖書が示した、
「利他の精神。人に尽くす。その女性の生き様に対し神
が共感するなら許されるだろう」。律法よりひとの愛が大
事みたいだ。そこには聖女としての意味合いがあり、そこ

に呼応し私は欲情したみたいだ。だがやはり不義には至らない。信仰がある。そこには神の清らかな因縁がある。私はED。フリーセックスはたのしいだろうか。なにかが引っかかる、嫉妬心は無いが、愛という言葉が胸に響く限り、神としては醜悪につながる。言葉は大事である。仏教で嫌う、分別であるが、世間では慎み深い健全でバランスのとれた生き方であると認める者も多い。高校野球は勝つためにやっている。愉しむためではない。

サタケッチという男。昼夜逆転している。彼にははっきりしたポリシーがある。神通川河川敷花火のあと、ゴミひろいをひとりで黙々とする。戦没者への鎮魂。「勝手にやっている」彼はボランティアという概念さえも嫌い、主体性を重視し売名を拒む。またあるときは猫の死骸を抱き就労施設に現れる。「ゴミは片付けなければ」本心は「クルマに一度ひかれたあと、もう一度ひかれるのは不憫だ」。私は彼に伝えたい想いがある。理解してくれるだろうと思った。横柄に「俺から学べ」。彼はぶっきらぼうに言った「参考にさせてもらう」こいつは凄いと思った。バーベキュー。彼は富山の街中から遅れて自転車で猿倉に現れた。立って歩きながら食べ始めた。上半身は裸である。行儀悪い。彼にはその言葉は説得力がない。そしてまたそこに彼の行動原理があった。自分に与えられた食べ物はどんなにせかさされても残さなかった。かつてコンビニを営み多量の廃棄物をだした私は当時本当に心苦しかった。自由を追い続けるサタケッチ。私が世間にヒョッテいると思っているのではないか。ただひとはひとりでは生きられ

ないということか。サタケッチそういうことだ、許してくれ。というのも変か。

真実の栄光とは、愛によって、伝えられ、そしてすべてに向かって広がって行くものである。人間の幸福とは主観的なものだが、生老病死の中でどれだけ心に余裕をもち人々に愛を振り向けられるかである。動物も罪を犯した人間に付随して原罪を受け死ぬことになった。結婚に焦がれ花嫁道具を揃え、その日を待ち望みながら死を迎えた精神障害のある女性がいた。さぞ無念だったろう。つまりエホバとは神をヘブル語であらわしたただけのものである。名前とは違う。とすればエホバ、エホバと呼んでも良いのである。名前とするから破戒の疑いが出てくるのである。イエスを信じるものは裁きにあわない。裁きにあわないということは良心の呵責も鎮まされるということだ。

ヨハネ3章16節、神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった。それは御子(みこ)を信じるものがひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。裁判官のような公正、中立であったとしたら、本当に殺したいという気持ち、殺人者の気持ちを理解できるだろうか。神は殺意を理解するのは確かであるが、野蛮な心は旧約聖書のストーリーに封印した。堂々としろ、お前はもはや人間イエスではなく神だと聖書はいう。サタンはいわゆる、いい人の中にもある。傷つきやすく私を同情的にみってくれる人の中に。そういう人は自分に固執する。脱皮するとき何よりも強くなる。完璧主義、復讐心、恨み節、少しの瑕疵も許せない。そこにもサタンはいる。何度も

言う。私のことを理解し、そっと支えてくれる、賢くて思慮深いパートナーを得ること、絶対、最高の幸せであると思っている。私、唯一の夢である。精神科外来病棟。私は涙が流れてならなかった。私の中、神と義人が聖別し、神は命をかけた義人を褒めた。「精一杯やった」と。そして神と義人は一緒になった。25年後、三度目の混乱。イエスは義人の後頭部に居場所をつくり、神、義人を正義のもと、閉鎖病棟ベッドの上「懈怠はいけない」と布教を促した。数か月後、あまりにうるさいイエスを神の権威のもと義人は観念的に抹殺した。そして一体となった。この一連により子殺しの罪は浄化され、義人は神、イエスによって救われた。欲望の滅却とは他人の厚意に感謝させていただくために目指すものなのかもしれない。渴愛の克服は自分を安楽、自由にする為のものであり、苦しみ痛めつける為のものではない。エホバの証人の集会へ参加せよと聖書は促す。神である私がと、少しムツときた。この感情はまちがっている。神も会衆も平等であり、来たる王国に向けての学修は大事だ。そして訪問してくれる彼らに感謝し主導、誘導をまかせてみようかと思う。付和雷同しているな。「自分の思っことは話さなくてもいいや」これは誤っている。周りに思いが伝わらないからだ。勝手に萎縮し、心ならずも周りに迷惑をかけることになる。ただその人、内容、聴衆の理解力も大事だが。一見、漠然と友のために死ぬことが愛のような気がするが、価する友に対しての死が犠牲とは違う。大きな愛(アガペー)であろう。落後者、不適合者、不穩分子。純粹でいることの代償は居場所がない。潔白でいることの

代償はだれかを傷つけることだ。(アマザラシ) 上から目線に気づかない奴が多すぎる。俺の教えは、ただ善良で本当に愛し合う男女が永遠に一緒に楽しくいる為のもの。それにはイエスを信じるそれだけである。イエスキリストを意識する。つまり十字架の死を認識しないと原罪の解放が見えない。それを確認する。それが信仰である。自分の子供の為に死ぬのも愛であるが、不特定の神の子の為に死ぬのはアガペー(深い愛)である。隣人とは誰でもいい、というわけではないみたいだ。愛をなにより大切にすると人達だ。困難に手を貸すサマリア人のように。晩餐にあずかったのは足なえたちだった。右の頬をうつものには左も出せ、これは怒りをもつよりもその方が楽であるといいたいのである。心に怒りをもち続けることほど辛いことはない。まずもってすべて隣人にせよとは聖書は言っていない。ただ気に留めるな。神は身近にいる人ほどきびしく関与する。それはなぜか。身近な人には幸福になってほしいと思う気持ちが強くなるからである。これが神のひいきである。人間関係なんて割り切れなくていい。シンプルを複雑にすると不従順、分裂がおこる。深いものをシンプルにするこれが大事である。南無妙法蓮華経。なんの因縁か最近ひとを許せるようになってきた。大概のひとは好ましく思うようになった。自己嫌悪はみんなにある。脱却するには、何か打ち込むものを見つける。自分を褒める。達観し考えない。「またいいことがある」と思う。答えはこんな感じだった。人々の自己嫌悪を理解するため神自身、醜くなる。自己嫌悪から進歩、愛が生まれるならいいだろう。心と体、やは

り操は汚してはならない。なぜなら人を心で想っているなら、その命、魂の部分を代弁する象徴が操だからである。神と日蓮を結びつけることがすべからく大事になる。サトリというものについて。維摩は文殊菩薩との問答で、文殊が「サトリとは言葉にできない」と言ったことに対しサトリを沈黙で表した。これは従来「維摩の沈黙、雷の如し」と絶賛されているが、果たしてそうであろうか。ここには維摩の完全なる名誉欲が垣間見られ、言葉に出してなんとか表現しようとする文殊の姿勢の方が、利他に生きる釈尊(仏陀)の思いをくむ、美しいサトリの姿(慈悲)があるのではないだろうか。聖書コリント人への手紙の中、「弁舌はつたないけれど知識はそうでない」。この聖句は「理解するなら、どんなに話がヘタでも心をつくし、精神をつくし、力をつくし神仏の愛、慈悲を語らなければならない」と我々に直言しているのではないだろうか。私はそう思う。人が友のため命をすてる。より、大きな愛はない。つまりイエスの十字架の死。犠牲ではなく主体性に基づく真の愛、大きな思いやりである。自分は絶対に間違っていないと言い放つところに問題がある。そして真実、正しいのは全知全能の聖書の神だけである。私の言葉が解るものは傲慢ではなく素直な人だ。傲慢な人間には私は上から目線に思えるだろう。他人の幸福を本当に祝福し、一緒に喜ぶために、自らの顕示欲は少なくさせつづける。それは天への喜びであり、決して犠牲ではない。R会法座修行、あれこれ法華經に基づいてと銘打って、談じていたが、やはり法力、日蓮大聖人に意味付けられた、南無妙法蓮華經の唱題、末法の成仏にはそれしか

ないのである。エホバの証人もあれこれいわず、キリストが死ぬ前に教えられた、「父の御名が崇められますように御国が参りますように」と指を組み祈るだけが核心である。介護人、良いことをしているという。善人であるという。自意識のぶつかり合いが人間関係を悪化させる。それが善き人達の、早くの離職につながっているのではないか。イチロー、確かに目立ち、金は入る。だがそれだけだ。ヘルパーさん達と価値観が違うか。だが世は査定の報酬に金があるのは否めない。とにかくヘルパーさんは大事で必要だ。私は解った。グズグズ考えていい。二人、三人のことを想ってもいい。無理に心を整理しようと思うから辛いのだ。でも真由子さんごめんなさい。私は先本「確信ある無題」において神は人を救うと記したが聖書の神の概念には救うというものがないことに気づいた。つまり裁く、正しきものがおのずと永遠のいのちを得る。正しいとは神を愛すること。つまり神を愛するものが自ら救われる。それが即ち、善きものであり正義はそこにしかない。気付くとイエスは叫ぶ。これを信じる者に報いはある。信仰である。「神とは俺である」。自分は正しい。だが相手はそうとらない。そういうこともあるものだと、思うことが大切なときもある。諦めではなくリベンジに向けて。魚心あれば水心あり、良い時宜が来る。それが神の愛、寛容というものである。顕正会は正統性があるという。学、つまりドクトリン(教え)は絶対に正しく、他との比較は必要でない、現証を見てくれと言う。私は全般に南無妙法蓮華経(絶対善)の意味合いを明らかにしてほしい、そして納得したい。(私はこの段階で顕正会の文献と

も縁がなく仏法の意義を把握していなかった)。だがそのことは、入信した一般会員では関心がない人が主だ。結果、功德がすべてだ。ブラックボックスでは心あるものに不十分と思われても仕方がないのだが。ある女性にふられたとしよう。でも一匹の猫を救う。愛されるより愛することが大事だ。偶像崇拜、拝む対象がないと困る。むしろ拝む対象があるものでは困るのだ。自己犠牲は自分だけでなく他人に対しても促すことが多分にあり、傷つけるもので破滅をもたらす。彼は罪人のひとりに数えられた。義人は罪人である。だが彼の話すことには正義があり最後の審判では勝利をおさめる。愛があるから。パウロは主をさしおいて離婚を禁止したのか。てきとうな不心得者がいるからである。私は思うのだが、暴力、不倫、借金などの悪質な場合は例外とするべきだ。離婚OK。パウロはプリンシプル(原則)を述べているのである。R会の信者は、上部から驕慢と見られたくないため、手を合わせるが、同じ会員に対しては、いつも傲慢の醜い嵐が心の中、吹いている。それを防ぐにはお宝が必要みたいだ。私が全知全能、オールマイティーという意味は、心を善に向けてさえいけば、自然と、意に反するような風景でも、結果的に善き方に愛が培われ、また関わる人々には幸せが生まれてくるからである。とにかくイエスを信じるものがすくわれる。聖書には私に罪がないとある。彼は罪をとりのぞくために現れたと。そうだ、私はあらゆる罪を踏襲した。私は律法、契約では悪徳とされることを、自然に敢えて犯していたのだろう。なぜなら罪を犯したことのない人間などいないからだ。神が言いたかったの

は、罪を犯す、犯さないより、人間の心、清い美しい心、そしてその弱さ、もろさ、強さ、それが神には解るといふことだ。人々にも許す、寛容なる愛が何より大事だと神は訴える。神は罪を浄化したのである。私が神であったらどうする。私は神であつてよい、よいのだ。そして福音は私にある。とりあえず聖書の在り方の意味は、私を特別、個人的に支える為だけに、実用的にあつたのです。と、強く断言しなければならぬ現代が辛い。私と同じく聖書と対話できる、聖霊の宮に達した人に、私は逢いたい。聖書は私が神でなくても、よいとも言ってくれます。所詮、頑迷な人々は信じない。信じる者は何があつても信ずる。ヨシトの神であること、その祝福を受けるかは聖書を拝する人々の自己判断に任せよと。人生に負荷がかかる。自然に神、善である南無妙法蓮華經を選択したものが神の国へ入る。イエスは、原則、男は女の頭と訴えられた。ユダヤ、ギリシャの教会者に妻がいてはならなかつた。彼らは人々の愛(アガペー)の保ちをもとめず、自らの執着と欲望を求めていた。人々の幸福を願うのがすべてである。神であることへの人の判断はどうでもよい。眞実、大事なものは神の愛である。兄弟の愛をもって慈しみながら敬意を払い、それが王国を維持する。神であることを、神である自分自身が信じなければ、どんな愛の保証も無意味である。だから敢えて聖書は俺のすべてを一度、否定した。「これを認めれば、すべて今までのことは無にきす、お前はそれでいいのか」。私は自らの神を信じる。悪魔とは良心の呵責なく悪事をおこすものたちである。悪を意識した時点で神の子(南無妙法蓮華經

を唱題する者を含む)は何もできなくなる。そしてイエスを信じる時、神の子はもはや原罪から解放されている。悔悟からくる辛い良心の痛みは最早ない。それが救いである。布施しあっている自然界、例えば悲しむ鳥はいるのか。生存競争、適者生存。非情の独壇場だ。こんな世界は続いていいのかい。 本当の悪人はひとに思いやり、愛を向けない人である。 聖母マリアは悪魔である。イエスの道を止めることばかり考えている。12 歳、エルサレムの宮で大人顔負けの問答を交わしていたイエスに「なにしとる、心配しとったぞ」と夫ヨセフと一緒に処女懐胎したことも忘れて叱りつけた。イエスは「私の父の家にいたのです」と答えます。 人は一生懸命やればやるほど、失敗を指摘されたとき、怒りが湧き、反動することがある。周りの人は去り、人格は否定され、失望に悩む。感情のブレは少なくしよう。 有名になった時点で人が来る。あさましい奴等だ。そして過去を懺悔するとき、人間、気をつけよう。つけ入るやつがいるからだ。誰かの責任転嫁が醜く行われる。 価値観とはその人の好き嫌いにあるような気もする。ピカソと東大を出た官僚。どちらが偉いのか。せんべいを割ってどちらが旨いか。父と母どちらが好きか。イチローと介護士さんどちらが世間に必要か。比べるのは変か。 浴槽に首をのぼし、頭を突き出しシャワーでシャンプーした。小さな虫が浴槽のなか、傍らで動いている。湯がかかれば危ない。「金子 みすづ」を思い出した。[大漁で騒ぐなか、海の下ではいわしの葬儀がしめやかに行われているだろう。]人間は動植物を俯瞰しその命に対し勝手をする。許されるのであろうか。

では神にとっての人間とは取るに足らない虫けらのようなものなのか。それは断じて違っている。神は人格神。慈しみ、つまり愛を働かせるものである。人々の悲しみに共感しうるのである。エホバの証人をはじめ多くのキリスト教徒は人間以外の被造物を主従関係よりもっとひどい犠牲、奉仕するものだと位置づけ、その命を顧みようとはしない。仏教では衆生、生きとし生きるものにはすべて尊い命が平等に存在するとしている。輪廻思想。生まれ変わりがベースにあるのだろう。私が思うにキリスト教だろうと仏教だろうと残虐な殺傷は認めていない。生き物の命を奪う、重いことである。いずれにしろ、淡白になるか感謝するか、そこには辛い心持ちがあるのは否めないと思う。原罪である。エホバの証人の見解は人々の不安を除くためではなく、エホバ神の罪を否定するためにあると聖書は示した。子供を侮辱するから親は尊敬されない。そして侮辱する親にかぎって尊敬されたいと思っている。神はいつも人々を侮辱しない。我が家の宗派は法華宗である。射水の本光寺の門徒である。「日隆上人という、日蓮大聖人が打ち立てた、真実、釈尊(仏陀)の意を汲みリスペクト(最も敬意を払った)、南無妙法蓮華経を、顕教という(密教ではない)立場で、法華経八品から顕現させた、本門流中興の祖がいる」。京都から射水へ伴った侍が、私の先祖である。それは護衛役なのか、スポンサーだったか。不明であるがかなり親密な関係にあったと言い伝えがある。現在、住職の御立場にある御上人は体に震えがくる脳の病に罹患されている。言葉を出すのも辛そうだ。だが法華経を誠心誠意、精神を尽くし読誦さ

れているのがよくわかる。私はその御姿に愛しさと共に尊
さと真に大切なものを感じさせられる。私も病状か障害
か、服薬のせいが見方によっては、哀れな醜い精神障害
者かもしれない。我々のような疾患から姿形が不均衡に
なったもの、いや、これは早死にしなければ、すべての人
に襲いかかる普遍的問題である。御上人はそれを、身を
もって受入れ、生きていく悟りの姿を見せて下さっている
のだ。周知のもと間接、象徴的に教えを説く御上人に深い
親近感と敬意、感謝の念を抱き、「本当にありがとうございます。
綿々とつながってきた強い因縁を感じます」。私は南無妙法蓮華経を唱和いたします。私の旧友に
幼年時に積んであった線路の枕木が崩れ、頭を打ち意識
不明の重体になり、成人に達し、「芸能人から送金される」と変な誇大妄想に取りつかれ精神分裂病と病名をつ
けられた後、心筋梗塞となり手術、そして脱肛を併発。
駅の待合室はじめ、各場所で糞まみれになった男がいる。
彼はすべてを笑いとばす。タフな奴だ。私は線が細くなっ
たものだ、羞恥心の塊である。開放的な彼にはすべてに
おいてかなわない。見かけは悪い。たが無邪気に純粹で
正直で思いやりがあって助平で滑稽で面白い。そして人
の心がよく判る。彼がうまい具合に女の人とつき合えれば、
私は非常に嬉しいのだが。そしてひとつ注文があるのは
素っ裸で自動販売機を利用するのは止めよう。コーラが
いくら好きでも。マザーテレサが異例の短期間で聖人と
認められた。なんだろう。なぜこんなことが必要なのだ
ろう。完全にバチカンの権威と格式をあげるためのもの
である。つまり生者の名誉欲を掻き立てるためのもので

ある。死んだものは何を感じる。魂の充足などあるのだろうか。そんな欲から離れたものが聖人だろう。完全にバチカンの宣伝のためである。自己憐憫。自分をかawaii そうだと思ふのは、まず己に同情する自分しかいない。だからこそ他人のために流す涙は美しいのであろう。ある人からきたメールの躍動感と詩的雰囲気になぜか性的に魅了されてしまい少し下ネタのメールを返してしまった。なぜなのか。相手は既婚者である。自信喪失気味な主婦を鼓舞するために私はメールを打たざるを得なかったのであろう。神の善とは道徳ではない。彼女が元気になったとき、私の欲情はさめていた。ローマ人への手紙、第8章「1そういうわけで今やキリストイエスにある者は罪にさだめることがない。2なぜならキリストイエスにあるいのちの御霊(みたま)の法則は罪と死との法則からあなたを解放したからである。3律法が肉により無力になっているためになし得なかった事を、神はなし遂げて下さった。すなわち御子(みこ)を罪の肉の様で罪のためにつかわし、肉において罪と罰せられたのである。」つまり十字架の死の意味合いであるが、飛躍すると、この結果、逆説的に神は罰したのち肉欲を許容されたニュアンスもある。イエスの気持ちを察し神を重んじるとき、そこには原罪が贖われ、永遠のいのちが待っている。つまり戒は煩瑣な律法を生み出す副反応を起こしたが、原罪に対しての神の恩寵であった。そして戒は必要ではなくなる。信仰が生まれるのだ。変わった人でないかぎり優しくされた方が嬉しいはず。ある人から正論を吐くならば、当然、自分が正しいと信じきらなければと言われた。祖

父が脳溢血で倒れ座敷で安静にしていた。母と彼の姪が声をかけるとうっすら眼を開けた。意識があったのか。だが祖母が声をかけても臉をあげることはなかった。なぜか。この世は心に少しの悪魔がいなければ生きて行けない世界。利他は押付けであってはならない。なにも幸福になるだけが人生じゃない。と思ったが幸福は義務である。見ている傍が辛いからである。神ゆえに死ぬことができないのだろう。みんなを一度、宗教者にさせ、それから生活(労働、生殖)へ向かわせる。それが本当の信仰であり目的なのでは。自分で何でもしようとする、それは簡単そうだが実は困難である。周りに助けてもらう、もちはもち屋、この方がいい。乱暴者、高慢なるものは周りに悪影響、刺激を与えみんなの感情がぶれることになる。所詮、小人の言うことは風の音と同じ。空しく、聞き流せばよい。欲望を掻き立てるもの、クライシスを煽る者、そんな邪心をもった人間達はやがて悲しき結末をむかえるだろう。先生、情けなくも、僕はさみしいです。かわられた病院。あまりの名札の小ささ、そして結婚されたことを知りました。僕はふられたと思っていたのでそんなにショックはなかったです。でももしかしたらスーカーがいて、それを避けるために姓を変えて結婚したように見せかけているのだ、こんな非現実的なことも脳裏に浮かびました。でもそれははかない期待でしかありません。ただその名札の貧弱さは先生の御立場の不安定さを如実に示唆していました。私は傾いた心を正し、先生の幸せだけを祈ることを決意しました。お子さんがおできになり産休のあと実家の御病院に院長として就任さ

れると情報が入ってきました。そして御父上がご他界されたことも。先生もしも、もしもですよ、私と愛のために生きることを決断されたなら、私はどんな形であっても嬉しいです。別居OK、恋の奴隷です。一年に一遍逢う。それでもいい。財産の継承を懸念されているなら籍を一緒にしなくてもいい。ただ私が望むのは誰にも干渉、牽制されない美しい純愛形態です。私は物理的なことより心の一致を大切にします。私の願いはかなうでしょう。愛から外れる、くだらない問題は問答無用です。私の姿は独りで生きるようでそうでない。ベストカップルです。さみしくなったらいつでもTEL、メール下さい。でも手ぐらいは握りたいなあ。いや抱きしめたい。それは愛の発展からであろう。私達は自由で平和な愛をもつということが、世間に対し、こんな困難な関係性の中においても成しえることをモデルとして示そうではありませんか。試金石か。大いなる結果になると思います。真由子さん愛しています。知恵をしぼり二人が互いに自分らしく暮らせる道を模索し、見つけましょう。人間は悪事を犯さねば生きていけぬと諦めるこれが浄土真宗。念仏はこの世ではなんの役にも立たないものだという。どうせ地獄にしか行けない身なら詐欺にあっても、もともと。南無阿弥陀仏に賭けるしかない。親鸞はいう。聖書は心を伺い、無言のときもあるが、けて貴めません。今、聖書は「心穏やかにしましうね。それが幸せを運ぶ」。敢えてモラルを問わないのは愛を掲げているから。母は商売が殺し合いであることを百も承知だったのであろう。父は辛かった。私はどっちだ鬼と仏、立ち止まり狂うしかなかった。浄土真宗では人生の諦

観を勧める。信徒の徳川家康はあえて重荷を背負う。聖書はいう、ひとりであればいい。束縛されないから。結婚すれば互いに自由はなくなるか。母は自分の母親つまり私の祖母の教えに基づいて生きている。それがすべてである。癒しというのはエスカレートしていくそうだ。「神は癒しではなく安らぎを与えるのだ」。という宗教学者がいる。が、だが猫一匹いるだけで全然違う。もつともつと、これがいけないのである。好きで趣味をやるならいいが動機が不純な場合もある。勝ちたい、抜き出したい。光りたい。女の大厄、産という。つまり子供を生むことは死と隣り合わせでもあるのだ。だが快樂がある。子孫を残す任務もある。家の存続についても。こういう役割、難儀からして、肉欲そのものが滅却されたい。みんな勘違い。私が世の中から欲望の対象になる、旨いもの、見かけのいい男女をなくせと述べていると。そうではなくそのもと、我欲を無くせといっている。欲をまた欲する、つまり渴愛を滅却せぬことには本当の意味での安楽はありえない。食欲、肉欲は生存において必要。しかし不老不死になれば生命維持のための食事、種保存のための肉欲は来る世、自然と消えていくのだ。イエスは十字架につき最後、母マリアに「彼が汝の息子である」と叫んだ。マリアはイエスの愛弟子の元へいくことになる。つまり肉にこだわらず、心がつながることが大事だと。聖母マリア信仰の始まりだ。きっとマリアも気が強く強情で、ひとくせある。正義感の強い、また貞潔な女であったのだろう。死に向かうイエスを心底、心配していた。しかしイエスには神から与えられた杯があった。彼を単なる思想家にす

るのもいいだろう。じつはその方がイエスの凄さを見事に提示されたような気がする。十字架は愛という思想の象徴となる。科学の実証、エホバの証人はそこに重きを置く。私は言う。例えばあなたがたは地球以外の天体に行ったのか、また病原菌をみたのか。自分が実際に体験する、それを実証的という。むやみに信じるならそれは妄信である。私は霊を感じる。いつどこでも、だから信じる。これが事実ということだ。科学が物体として解明しようとするほど霊的世界は遠のく、神はそれより愛に気付くと人々に目隠しをされ、心を隠されているからである。愛は事実であり真実である。科学で追えば追うほど、神、霊は遠ざかって行く。次元、性質の違うものである。私の人生すべて正解だったと思う。人生すべて表裏、明暗はある。そして結果オーライ。エホバの証人は人の霊は無いという。しかし霊は実在する。創世紀。神は塵に息を吹き込み、人をつくった。エホバの証人がいように塵という表現は肉体がいかに弱いかということであろう。そして息を吹き込むというのは生命という霊を吹き込むことではないだろうか。天の審判、1914年よりサタンは天より追い出された。第一次世界大戦のときという。体制の悪あがき、確かにその後の戦争はすべて双方に壊滅的被害を及ぼした。娼婦、不義を行った女は罪としなければ。そしてイエスの愛を信じ感じることで贖罪となる。つまり報われるのだ。操は命ほど大切に、操は命ほど重い。だが愛はすべてを超える。今まで金銭、物理的に行動に制約があったが、聖書から教えを説く許可がでた。私自身の運命が自然に神へと促された。つまり神である

私は自分の言葉で物事を、語ればいいのである。楽しみである。皆に聞いてみたい、何がいったい幸福だろう。皆、母親が死んだら淋しくなるという。私はなんとも思わないと答える。なぜか、私は母の死を何度も想定、想像したからだ。そして乗り越えた。これで幸福だろう。そして自由を阻害する者が死んだことなど知るか、俺をこんな男にしやがって、でもありがとう。きっと飼い猫のソチの死の方が悲しいだろう。喪失感、保護する立場にあるから。本当に。しかし母親の死か。実際はどうなのだろうか。きっと辛いに違いないだろう。老いた姿が痛々しいから。この世に生きている限り。日蓮大聖人の言うようにこの世を良くする努力をしなければ。またあの世がないという論理を持ち出すのもおかしい、エホバの証人はこの世が本当に好きみたいだ。やはり人は死ぬ。死んでも生きる。生きていて死なない。聖書、霊の存在の証明であろう。人の霊を否定し永遠の命を説くエホバの証人。申しわけないが、今の段階では人は死ぬ。それでいい。なぜか、人は皆、霊的にならなくては。彼らは、人間は塵のようにもろいという。永続的、永遠に体を保つには何か変容がなければと苦慮する。また生きていることは果たして幸福なことなのだろうか。死に際し、(右往左往する欲望、様々な周りからの干渉、悪の精神の占領、恐怖の捕縛)。そんな締付けから自由になるには、仏法、南無妙法蓮華経しかない。涅槃の境地を迎えねば真の幸福はない。それは無か。永遠の静寂に向けて私は進んでいきたい。そしてなぜ生老病死があるのだろうか。どこかの時点で静止してもおかしくはない。エホバの証人の説がある。生き

ている限り、死は謎で恐れるものである。春夏秋冬を常夏の島へ。それが永遠のいのちかもしれない。皆、信仰は死を乗り越えるためにある。信じよ。まず愛により一閻浮提(大きな気の空間)は成り立つことを伝える。若く死んだやつら、いい奴が多い。しかし逆に悪い奴も多い。天の褒美と懲罰があるみたいだ。私に関わる因縁において顕著である。皆、どちらに転ぶかな、みなさん次第だ。楽園へ行くか、黄泉(よみ)の世界へ行くか。私は誰も地獄には落ちてもらいたくない。だから神を信じて。エホバの証人はこの世で生きることが幸福と思うから、愛による労働が必要であると信じる。需要という人の要求、不幸への、供給の必要性があるからこそ仕事生まれる。デスクワークしている会衆のひとは労働し、いい汗かいて神に感謝する[ミレーの晩鐘]のような生活を望んでいる。達成感。しかし裏側には失望感、倦怠感、喪失感がうごめく。そして飽きの登場がある。種をまき収穫に感謝していく。その途中か、果てに必ずあらわれるに違いないと彼はいう。私は人間の感情は愛、思いやりの他はきれいさっぱり美しい小川にオサラバして流してしまえと言いたい。やはりプラプラ何も考えず漂うように暮らすのが一番。それが許されない世界なら、涅槃の境地(永遠の無)を選択する。なぜ皆、無を望まない。夢も見ず快眠した爽やかさを皆、体験しているであろう。死が怖いか、確かにそこへ至るみち、恐れる人も多いただろう。だが、皆、通る門、それだけである。(生活の糧と感情の起伏)、エホバの証人の限界でもある。たが愛する人と、神の国。永遠のいのちを享受する。捨てがたい魅力が聖書から伝わっ

てくる。「人が生きる。その意味とは。聖霊の宮となる
とき、悪しき欲望からその自らの戒律により守護される。
幸せは約束される。もはや虚無には襲われず、尽くす喜
びを自覚することができる。共に歩む人(友)が、悪しき
快樂追求のため、正規の道から逸脱するとき、神の義を
説き、大きな愛の街道へと導こう。できるだけでいいか
ら」。先本[確信ある無題]で神の愛への疑念は私にも
あったと著した。人は、主体性を持ち、神、久遠の法す
なわち愛の摂理(アガペー)以外は依拠してはいけない。
神である私は今言い切る。また死ねば聖霊に委ねる。
楽園が待っている。真由子さんを愛する姿勢は最早、人
間義人のものではなく、「神はただ愛すべきものをひたす
ら愛す」という、善を示しているのである。「南無妙法蓮
華經を行ずる善人には愛しきパートナーは必ず現れる。
私も生きている間は神としての自分の思想に一生懸命、
忠実でありたい」「誰も歩かない道を選んだ俺だから、
ひとの言うことに耳をかす暇はない」「イエスは誰の手
も借りずに自ら復活した。神であることの証明である」。霊
は在る。アブラハムの横に坐する、ラザロ。黄泉のくにの
存在。イエスの十字架の横に、刑に処せられた罪人パ
ラパがいた。彼は言った。「俺たちと違って、このひとには
なんの罪もないのだ」「汝は今日、私と一緒にパラダイス
にいるだろう」明るく、素直に、温かく。受刑人さえ愛は忘
れないのである。他人の自分に対する、ひいき、欲目に
本当に感謝しなければいけない。場合によっては反対に
可愛さ余って憎さ百倍ということもあるからだ。法身、
報身、応身、仏の三身。義人は神すなわち愛が人間の

姿に示現した応身である。憎んでも、恨んでもいつかは温かく。「右の頬を打たれたら左もだせ」。自ら安楽へ。寛容をかぎりなく。平和への鉄則だ、非服従、非暴力。報復は神に任せて。悪はおのずと滅びる。「義人を信じれば、永遠に生きられると思ったのに」今、われらは永遠のいのちを得るために、愛に生き、安楽に死を迎えるでしょう。天国は必ず約束されています。この裏切りは真実か。断じて、義人(イエス)を信じるものは死なない。神ヨシトを愛せよ。隣人を愛せよ。そのとき命の泉(オアシス)は湧き出すのだ。「著わしたかったのは周りのこと、結局、空っぽの自分のことか。褒めてくれる人はいない。風景は変わる。真由子さんからもメールは届かない」。「信じていたこと正しかった」とよこしてほしい。間違いなく私の愛(アガペー)は存在するからだ。境遇は自分がつくる。ある男は唄っている。「悪人でも天国へいける。だって神様も悪人そんなことがキでも知っているぜ」。神は泣いている。自分の罪を痛いほど感じて。自省し自責の念をもち苦悩する、こんな善良な方を私は知らない。「神と同次元の人間だと錯覚し、なんの呵責もなく自分だけの救いのために悪を肯定する。そして天国へも入れるという図々しさ」。それが事実で、人生において自分で墓穴を掘らされるということだろう。何者かの独裁が生まれたとき統一見解ができる。偏った法律。誰にも間違いが明らかである。そのことを口に出せない世界。これは恐怖であるのは確かだ。「神の愛は恣意的で整合性がない、つまり非合理的なものである」の声。何度もいう。聖書は神にしか読み説くことはできない。なぜか、すべてにおい

て神と聖書はイコールだからである。つまり聖書は神が書いたもの、神の意思でいっばいだ。真実の愛を神は発揮している。だが僧侶、宣教師、機智者が介在して本当の意味をねじ曲げてきたのである。それを信じる人々がつくった体制形態とは。未来、果たして真理に司られる神の国はあるだろうか。断じて否である。「大富豪の妻ほどの淫売はいない」わずかな金で日々をしのいでいる、女性が言う。女を売るということは、その金額が上がれば上がるほど醜い。無償で体を提供するか、もしくは操を守って死ぬか。この極端を神は愛するのかもしれない。だがイエスは強制しない。愛を金で換算することは醜いことである。お金の使い方とその人間の本质が分かる。お金は流れる水と同じである。溜まるだけではドブとなる。最早、どこかの誰かがのたまわった、宗教協力などは、能天気、死に際極まった老人の世迷いごと、金にまかせたお遊びであることは明白である。すべての会派は正当性と教えの高尚さを訴え、他はすべて間違っているという、本音がある。そしてそこから忌避され、もれたセクトには、商売もある。軍事組織もある。宗教枠を括るとき、追従するものが認可されるのだ。これが聖書にいう党派心に走る悪辣な連中である。神の怒りが降り落とされる。どうしたらいい。私はすべての宗教会派がまず看板をはずせばいいと思う。その中で、真に人々が愛、自由、平和、を重んじ、そして安らぎを最終の目的としているか。それが大事なコンセプトである。真理のコンセンサス(合意)がなければならぬ。結局、神ヨシトの解する聖書の教えと、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経のみが、本当の進むべき道を

見出すのだ。そして私自らが教えを説く時宜がきたのである。 [ローマ人への手紙]被造物自身にも滅びのなわから解放されて神の子たちの栄光の自由に入る望みが残されているのである。 神は道德とは関係なく好色なときもある。だがそれはすべて相手に応じて示現されるもので結果的には戒は守られ、相手はすくわれる。元気を与える為であったのだ。 尾崎豊は言及していた、社会の責任。不遇な目にあっている少年、少女。そして尊厳を踏みにじられ理不尽の中、働くおとなたち。 イエスを信じるとき素直に悪人を嫌いになり、人を傷つけるのに臆病となりその果ては博愛(アガペー)を抱く。不思議に親切な隣人を愛せるものだ。 霊的なものなら顔が見えなくてもいいだろう。名もなく、貧しく、美しく。これが幸福への近道。 金儲けに走れば走るほど自己に執着し浅ましくなり、純粋な利他の愛は成就しないことが多い。先生は始め「なぜそんなに母親のことを悪くいうの」と訊かれましたね。私は「母は統合失調症になったことを全面否定してくるからです。これは私の人生、歴史、すべてを否定するものです。そしてそれは統合失調症患者への侮蔑、差別です」先生は「うん。現在の否定。確かによくありません」と頷いて下さいました。それから中立的立場で差別主義者、偏見論者の母に対し私と同じ目線で見下さるようになりました。 私の繰り出す恋の書簡に「迷惑ではないか」と何度も誘導と強要を仕向ける母、かぶりを振り不快な表情をされたと聞きました。母は誤解している。自らの行為の卑劣さ。先生が気ムラであるということよりも、母は自分の了見の狭さ、私への思いやりのな

さを自己分析しなければいけなかったのである。尾崎の訴えていたものは社会の破壊ではなく責任である。彼が反抗していたのは愛をないがしろにし、一方的に規則でしぼる体制であって、15の夜、卒業、ダンスホール、十七歳の地図、街の風景、アイラブユー、少し羅列してみたが、その歌詞の意味は、彼らのような少年達を生み出さないでくれ、そして社会として政治的責任を含めた道義的責任の存在。ちゃんとセーフティーネットを張ってくれ、誰が仕組んだのか競争社会、大人たちも傷ついている。行き場のない少年、少女はどうしたらいい、貧、病、争。悲しみはそこに愛がないことから始まる、オーソドックス（正統派）、金儲けを説く貧欲な社会に向け、ひとつのイデー（理念）を反論（アンチテーゼ）としてぶつけたのである。そしてそこからは社会全体の責任が止揚（アウフヘーベン）してくるのだ。この弁証法はなんとしても活かされなくてはならない。貧困、暴力、虐待、強要、隠れているように確実に社会の核心を蝕んでいるのである。本物の教えは肉欲を独身者に禁じている。もし既婚者に向ければ子供が生まれず人類が破滅してもいいのかと詰め寄る人もいる。私は言う。抑止をかけねばならぬほど人の肉欲がもたらす悲劇の方が大きいのが事実なのである。神として祝福をなくし福音が滞ってはいけない。展望が見えてきた。金銭の欲望から関係者は一旦、離れて私の教えを広報すること。つまり書き物を頒布すること。甘いなあ。どこの出版社がやってくれる。馬鹿者。ある意味、内政干渉から兵を派遣する戦争は自分勝手な善意から起こるのかもしれない。そんな砂漠状態に一滴の雨しづく

をとりあえずはもたらす自分でありたい。そしてオアシスをもたらすのが神である。やっどこぎつけた。イエスを信じないひと。神をけなす言葉をはいても許される。しかし聖霊を汚す言葉は控えた方が善い。人の子としてのイエスに逆らうことは許されても聖霊をそしめるものは幸福にはなれないからだ。聖霊は命であり力である。そして神に奉仕する愛である。そして聖霊をたたえる者はいつでもどこでも大きな加護を得るだろう。地動説をとるエホバの証人。だが進化論は否定する。科学を重視するという。そこからなにが生まれるのか。創造主のすごさは理解するエホバの証人。私は思う。「太陽の恵み。生物の営み。そこに感謝するのが信仰の普遍性である」。エホバの証人は科学の気にいったところだけを聖書の証明と取り込む。よくわからない。何が言いたいのか。神話は神話でいいのではないか。ご都合主義ではひとを説得はできないよ。自分が体感したものを信じればいい。事実と真実は違って当たり前、そこには愛がある。一閻浮提とは空間を言う。物質的宇宙とは違う。そして創造主は愛である。実践的成人とは。それは自己の想いの実現に忠実であり、それが善であると信じている人、正しいものがあるならそれを黙して追い求めている人。ただ言えることは、自らの人格を認識し確実なアイデンティティを打ち立てた人物は、その幸福をただかみしめ、分かち合いたいと思っているものだ。私は宴会が好きである。自己コントロールされた感情がイッキに解放、発散されるからである。祭りみたいな犠牲的、受け身の負い目はどこにもない。祭りには収穫の保障と感謝の祈り、防災、安全の願いがある。そこに

はどこか、もしかしたら祀り上げたものに裏切られるのではという心持ちがあるのだ。気紛れな対象物である。神イエスを、愛をもって信じ抜くことが大事だ。大安心につながる。また祭りの群衆の心理からくる熱狂には他己を排除する暴力が潜んでいる気がする。神イエスは素直に人に思いやりをかけ、素直に返しを受ける。それが大切と訴える。正当な言い分か、我が儘なのかその区別が大事。私は思いやりのコミットメント(公約)をする。それが来る世の労働である。自由が少し失われても。なぜ私が嫉妬、妬みを極端に嫌うのか。それはイエスが十字架につけられた一番の要因だからである。姦淫とは既婚か独身かを問う前に、愛に忠実に生きようとしないう、葛藤もないひとつの愚行をいう。来る世、食がなくなるということは、聖霊の宮である体は愛で維持され、肥満、瘦身をもたらす過食、拒食も姿を消すということだ。摂食障害に陥らないストレスのない世界である。アンゴルモアの大王とは僕(しもべ)のように人に尽くす王である。皆待ちかねていたのかも。希望の鐘を鳴らす主を。彼らは神を戴きたいのかも。私にはわがままな邪心はもはやない。病気が治る。延命につながる。それもサタンの仕業か、決断を強いられる家族。金が有る、無いが命を分ける。すべて因縁である。もう一度言う。聖書、百科事典を覚えても仕方がない。大切なのは思考回路を発展させること。そのエピソードからイエスの愛を知ること。プラトニックラブを考える。私は手にしたい、最後は結婚というぐいりも必要。真光の天津祈言(あまつりごと)は凄い。爽やかな風が胸に広がる。きっと私(創造

主)を戴いているのだろう。真光の神は俺なのだ。私は自分が体験、体感、実感したものしか信じない。もちろん教義も。納得いかない教えが多すぎる。ここである。彼らが目に見えないというなら解る。見えると言い切るところに問題があるのだ。策士とは自分のたてた策をしゃべりたくなる。そこが問題だ。親を捨て、子を捨てたところに成仏はある。それが自立して親をすくい、子は自らを救うことになる。人間は自由か。神か、悪魔か選択の自由はあるかもしれない。そして結果的に好き勝手をできないなら、人間は自由でないのかもしれない。だからこそ自律が必要になる。渴愛は地獄を招く。性善説に立つから頭にくる。性悪説に立てば許せる。まず自らが善人となることが肝要。他人はどうでもよい。それは悪を許すことであり、悪を肯定することとは違う。釈迦はサトリをひらいて、つまり仏陀になってからも悩んだか。迷いとは違って、智慧、慈悲がある。人の弱さを知りつくす、彼が心の救済から離れた存在なら尊ばれなかった。尊敬が仏陀の目的ではない。彼はすべからく言動は完全だったろう。懈怠は皆が愛に向け、思いやりを傾けるとき、悪、つまり分裂を凶ろうとするものをいう。衛星放送。桜井よし子氏(ジャーナリスト)は天皇の歴史観を含む、わが国固有の憲法を早急につくらねばいけないと。一方、同席していた中谷元前防衛大臣は安全保障の現実をはるかに詳しいはずなのに、反論もせず落ち着いた黙ってそれを聞いている。聖書は言う。「桜井氏の言うことは解る。民主主義は国民ひとりひとりの識見にかかっている現状がある。国民投票などでは衆愚な面もあらわれる。

だからこそ論議をつくさなければならない」と。しかしどうだろう。かつて天皇を元首と戴いた立憲君主制と軍部のありようが太平洋戦争へと向かっていったのだ。グリップ（把握）する統括、総理大臣の資質、能力も問われる。私が桜井氏に危惧をいただくのは戦争回避という概念が全くないからだ。日本の歴史と伝統と文化のためなら国の存亡をかける戦いに向かってもいい。待ってくれ。なぜ、ここで戦いを回避する方法を考えようとししないのだ。アメリカ、ベッタリの政治家ばかりの中で中国に足をのぼした鳩山由紀夫は名宰相だったのかもしれない。トランプが権力を握るのが良いと思う国民がたくさんいる、内向きになる米国。そして貿易で友好を結んできた中国、過去には不幸な時代があったかもしれないが、なぜ出来ない中国との仲良し。民主主義か共産主義か神権体制か。国民が飢えず、平和に暮らしているならそれでいいじゃないか。そんなことより国土が焦土にされることの方が問題だろう。桜井氏は危機を煽りその隙に改憲してしまおうという手みたいだ。強権的で詭弁をあやつる狡猾な女性という印象が私にはどうしても抜けないのだ。アジテーション（煽動）には国民よ、気をつけろ。自民党は自衛隊明記したい。しかしとってつけたように感じる。9条との整合性は。「君は心の妻だから」でいいではないか。彼女は言う。「国民投票、民主主義では結果がでたらイギリスEU離脱と同じ、それを肯定する。仕方がないことだ。日本は法治国家である」そして私は、それは運命だろうと思う。改憲にも中谷前防衛相はいろいろなパターンがあると言っている。よく議論して納得のいく結論が出せれば。環境権、

同性婚、プライバシー権などから手をつけるのがいいという。なにか姑息な感じもするが。桜井氏は「とにかく時間がない。憲法前文と9条をかえなければ」中谷氏にくらべ桜井氏はヒートアップ。なにかしらおかしいなシチュエーションと映ったのは私だけだろうか。中国の憲法も素晴らしい理念が記章されているという。彼女が言ったのである。そして疑問符を投げかけた。つまり憲法がどんなに立派でも、ということみたいだ。そうすると彼女が言う、日本は和の精神によって成り立つと明記する憲法はどうだろう。憲法自体に意味がないように聞こえる。日本は法治国家だから間違いなく反映するか。だがどうして彼女はこうも好戦的なのだろうか。人権の問題を考えてみよう。彼女は和の精神というものでほんわりと包み込み、憲法の屋台骨をなし崩しにしようと企んでいるように見える。なぜそうクライシスを煽る。私には解らない。日本人のアイデンティティが、なにかつかみどころのない文様で右向きにされるといふことか。日本人は日本人のDNAによって、たぶん生きている。それが良いか、悪いか決めるのは国民である。彼女に押しつけられたくはない。どこの国でも人権は尊重するという。つまり権力者の逆鱗に触れるから蹂躪されるのだ。日本も職場など各場所で同様のことが存在する。そして始めに戦争ありきというのはおかしい。人々の生活を忘れるな。本末転倒せずにちゃんと考えなければいけない。暴力による負の連鎖、それを引き起こしては絶対にいけないのだ。人々の貧、病、争が永久に解決されたい。その道は、「慈悲をもち自由な心によって安らぎをつかむ。つまりサトリ」、そこにくる。そしてそ

れが無二の幸福なのだよ。政治も大事だが人の心の平和が一番である。それは宗教の役割であろうか。自衛隊が日の目を見ない。何度も言う。「君は心の妻だから」隊員の人への感謝は忘れない。そして独裁者とみなされる習近平は愛なのか。唯物論、神の居所は。幸運を不平等に分配する資本主義。不幸を公平に分配する社会主義。何が正しいか。民主主義、権威主義。暴動のない、統制もない日本が一番か。非戦にはいずこの国ともパイプ作りは必要である。 27年前、精神科に入院していた。そこに由香ちゃんという女性がいた。最近、TELしてみた。かつて私は恋愛感情も肉体関係もないが友達から発展し、慣例にしたがって結婚することも視野にいれていた。彼女も考えていたようだ。結果は、彼女はひとり娘で家族を支えなければいけない事情があった。私が大人になり本当に愛したと呼べるのは真由子さんだけである。由香ちゃんは真面目でカタイ、私には女性という意識が全くなかった。彼女は気楽に話せ、それなりの距離をとってくれた。由香ちゃんは「生ぬるい生活は嫌で達成感、充実感がないと。ただ、漠然とした幸福感なんて嫌だ。」「でもね、達成感を求めるということは、その裏に失望、倦怠、挫折、屈辱という悪感情も意識するということなのだよ。懈怠は人々が愛、思いやりを何かに向けるとき一人だけズルをし、信仰心を欠き、我欲だけで動く者のことを、言う。人は慈悲、愛に基づいて安らぎを手にしないといけない。達成感、充実感、というものは苦、不幸の克服という欲望に存在するのである。そうではなく「芥川龍之介の蜘蛛の糸に出てくるお釈迦様のように極楽の蓮池の淵

をプラプラ歩く。苦にもしないで」。苦痛、地獄を呼ぶ煩惱は、渴愛、執着より生まれる。それが今、好まれざる状態の原因となっている。これは各自のすべての因縁によって証明できる。そして明るく、素直に、温かく生きる人に不幸はみえなくなるのは事実なのだよ。神仏に感謝し、何度も言うが素直に流れに任せよう。展望が開け、暖かい優しさに出会える、そんな自分になれると思いますよ。安樂行、南無妙法蓮華經。愛の力によって、心を見せない孤独からも解放されると思います。神仏は貴女をみている、幸福になってね。由香ちゃん。」　サタンと闘うとは人と争わないこと。母はそれを教えてはくれなかった。私を侮辱し続ける母。ただ私の必要のためだけに存在する母。私が困らないようなら、母は罪のため罰を受けるだろう。母に対し不寛容になるのは真実と思いやりを悟り、幸福になってほしいから。それだけである。生活のため格闘した母、賞賛、感謝もするが本当に大切なのは存在した周りの愛である。それを忘れてほしくないのだ。自分で天下を取った気になってはいけない。　軍人の独裁ではなく天皇の親政でもない。愛にみちた公正なる観察者、つまり神なる絶対者の意向がそそがれ、活かされ、反映される、そんな政治形態の方が民主主義より完全に清廉で優れているのでは。日蓮はそのことを言ったのだ。あえて民衆の心の平和と共に、現世での仏国土を拓くため、日蓮大聖人は政治に語りかけたのである。（立正安国論）　日蓮は辛かった。とにかく民衆の苦しむ姿を見ることが。日蓮は民衆の現世での安穩を心から願っていた。悪を犯しても死後、浄土に逃げ込むことを勧める念

仏。日蓮は批判、非難の集中放火をあびせかけた。日蓮は生きるものの姿勢を訴えている。浄土系の無関心、無視、諦め、悪の肯定がいいわけではないからだ。日本が戦後、発展したのは確かに科学のおかげなのかもしれない。だがそこには日本人の宗教観、心を尽くす、精神を尽くす、そんな思いが流れていたのではないだろうか。南無妙法蓮華経。これが、この真心が宗教的高揚性となり平和、繁栄をもたらしたのである。善人が神の国を追うとき精神世界を含め、現実に楽園を現出させることがイエスの復活から示唆されているのではないだろうか。

キリストの教えは政治的にも、つまり現世に対しても日蓮大聖人と同じく関与していくことになるのでは。だが私は祈るだけでありたいと思う。私はイデー(理念)しか説けない。統治者として規範に縛られた道化、さらしものは御免である。特に目立ちたいという意向もない。ただ宗教と政治、両軸がうまく回転すればいい。それがこれからの尾崎のいう社会の責任である。尾崎は[15の夜]、[卒業]を通して不遇な立場にある少年、少女たちをシンボライズさせ、またアンチテーゼ(反論)を世間にぶつけた。ここから生まれるアウフヘーベン(止揚)が社会の責任である。尾崎の生きていた時代よりも貧困、競争社会は進み、今、本当に悲惨な状態になっている。何かが、皆をそそのかし狡いやつらを生み出し、すべてを奪いとってしまうのだ。つまり愛そのものまで。何かとは悪魔サタンである。共産主義の失敗。金持ちを殺しても労働者の暮らしはよくなる。金の卵を産む鶏を殺し、不幸が公平に分配

されるだけだからである。働かない彼等。労働者が豊かになり安楽になる、イノベーション(技術革新)それが大切だ。革新。仕事が難しくなり、また長時間労働を強要される。苦しくなる。その悪循環がよくない。いつまで続く。技術者、研究者、荷は重い。自殺者も多いと聞く。競争の果てである。技術革新は切りがなく繰り広げられる。プライド、報酬金を取り巻いている。優しき人よ、鬱になる前に責任感から逃げ出せ。中国、社会主義の下、経済が発展したならば日本に続く凱歌を奏するものである。金が回り豊かになる実情がある。共産主義という亡霊は、もはや存在しないのかもしれない。父母をののしる罪をおかしたくない。そのために父母を捨てる覚悟がいる。私は受胎した直後から生命をおびやかされる危機に瀕していた。魔の手がのびていたのだ。祖母の内に入ったサタンは初夜に授けられた私は婚前にできた不義の子であると罵った。母はある親類の情けある女性の力に支えられ立ち直る。父は言った「俺の子だ。まちがいない」祖母は黙った。そして私は誕生した。私は人生の駆け出しから義というものにとりつかれていた。義士祭に生まれた。義を重んじる祖父、人を愛する父により義人と名づけられたのである。天が子を預かせて下さったと親は思わなければならない。神の国は世界を転覆させ政権を奪取することを目的としたものでない。世の悪が去り、永遠に続く平安の国土を拓くためのものである。政治は愛という理念の下、実務能力にたけたものが行えば良い。神の象徴は自由、平和、愛である。

コリント人への第一の手紙「わたしが福音を宣べ

伝えてもそれは誇りにはならない。なぜならわたしはそうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えないならわたしはわざわいである。進んでそれをすれば報酬を受けるであろう。しかし進んでしないとしてもそれは、わたしにゆだねられた務なのである。それではその報酬はなんであろうか。福音を宣(の)べ伝えるのに、それを無代価で提供し、わたしが宣教者として持つ権利を利用しないことである」。つまり宣教はなんらかの欲望からおこなわれるのではないということ。自然に無意味のようでも行うこと。恋、後、人間性か。「そうだ」聖書の声である。また人として忍耐力をつけ、「待ち続けよ」聖書は肩をたたく。彼の人人間性が悪いはずはない。何があっても愛し通すということ。神は愛の法の下、活きている。人である私。恣意的なエゴは起こせない。そしていつも他を愛さなくてはならない。それが神の姿、憐れみを生む。人である神ヨシトは完全無欠である。その使命を果たすとき、天が裁きで応えてくれる。私への罪は天が罰を与えようということである。私の友人が通う、就労所の施設長にひさしぶりTELしてみた。不二家の看板娘ペコちゃんに、似ている。仕事に忙殺されているという。自分の不徳の致すところと、誰も責めない。心がけがいいのかも。だが問題解決には遠回りだ。自由民主主義に論点移った。彼女はこういう話も好きである。「人々には煩惱がある。そのなかからいろいろな意見が出てくる。それが良い」。私は応える、「どんな暴論も一度は俎上にのぼらねばならず、結局、金と力をもったものが数でもって小さな声を押しつぶす。そしてその決定されたものが、さらい

いことのように大衆は思いこまされてゆく。金のばらまきがある。そこから落ちこぼれる貧しきもの弱きものはパイのひとかけらが与えられるだけで満足しろ、ありがたき幸せと思えと言い含められる。(給付金等)。そして大きな声の不足、不満がせめぎ合い、玉虫色の衆愚迎合政治が生まれる。そこで剛力により選挙制度がかえられたなら独裁者の登壇を迎えることになる。民主主義が良いという。色々な意見がでるのもいいだろう。だがほぼそこにあるのは我欲である。優先順位の奪い合いである。そんなことより、まずひとつの絶対的真理を見出した方がいいに違いない。愛である。無頼な権力者はいらぬ。どこが一番弱いところなのか、そこに重点的に温かさを吹き込む、そんな政治を実現させたい。現実には、党利党略のための議論、(改憲論議など)政局。いい加減にしろ。「仕事ができる、そこに価値標準を置く彼女は健気に職務をこなしている。だが知らぬ間に利用者に対し強権的になっているみたいだ。私は(自分は愛を求める、理想主義者だから)と締めくくった。彼女は、「自由民主主義は色々な意見、考えがあつて紆余曲折して結論をだす」と。最終的に真理に到達するなら善い。でもそこにあるのは何度も言うがパイの分捕り合いである。私はなぜか「尊皇攘夷が開国に転回するまでには多くの犠牲があつた、が結論に達したのである」。ありゃなんか話が変になってきたぞ。施設長は来客があるとTELを切った。「要は我欲の集合では真理は生まれてこないということである」。明治維新、天皇が愛であつたからこそ若者は命をかけたのである。私はそれを賛美はしない。だが絶対の愛が超法規的に

バックボーンとなるなら、理想的な互いを思いやる公平な素晴らしい世が生まれる。それが神の義。「神の国」の誕生である。ある女子高生、「どうして大人たちはお金のことばかり言うの」。豊かさは大切。そこには本当に神仏への感謝がなければならぬ。また分かち合い、譲り合い、助け合い、思いやる。そんな美徳が失われた世界に幸福などあるわけではない。陰に隠れているように見える、貧困、暴力の存在。乳幼児、老人虐待、DV、誰を責め、誰が責められる。人々は不安の中、サタンの体制で傷ついている。大企業の国際競争力を高めるため法人税率を下げる。国外に逃げていた奴こそ非愛国者だ。強い姿を求めるのが善で、杯からオーバーフローしたものが社会的弱者に施される。ほんとかよ、現実には、中間搾取と弱いものいじめばかりじゃないか談合、偽装、粉飾、優先的地位の濫用。まあいい強者の皆さん、本当に戦争だけは回避してくれ。他国の文化を尊敬、尊重せずに自国の素晴らしさばかり吹聴するものたちよ。厚顔無恥な君たちに真の友人はいるのかな。疑問符を打たずにはおれないのだが。私はひたすら心ある人達のために愛による世界征服をもとめ続ける。以前、「自衛隊を臨戦態勢までもっていけ」という言葉をうかがった。桜井よし子氏に問う。強腰はどう効果的なのか。太平洋戦争、開始時と同じことになるのではないだろうか。フィリピンまで海洋進出した米国は資源を押さえ、日本にも目を付けていると軍部は過剰な危機感を煽り、先制攻撃を真珠湾にしかけた。戦って本当に自衛隊は結成 100 年を迎える中国軍に勝つ自信はあるのか。強気に出れば引く、そんな計算が外交

を有利に進め、すんなりことを運ばせるだろうか。まずは首脳どうしが膝をつきあわせ、互いの文化、歴史に対し尊重し敬意をあらう。そこから信頼関係は生まれるだろう。そのことがないのは最高責任者の怠慢である。第一次世界大戦、イギリスの有名大学に通う学生たちはラグビーの試合に出場する、そんなゲーム感覚で西部戦線へおもむいたという。そしてドイツ軍による機関銃掃射。マシンガンの前、はらわた、脳みそ、血漿が飛び散り、血の匂いが一面に広がったという。桜井氏の手前味噌の憲法前文はわかった。だが和とは結局はどんな理念なのだろう。助け合い、結果的に良好な関係を創出することでは。聖徳太子、十七条の憲法。[和をもって貴しとする]。私が思うに、確かな人権が各国に確立され、人類全体が恐怖、窮乏から解放される、その実現には真の誠実さがなければいけない。これこそは十七条の憲法、大和のこころである。創価学会を母体とする公明党。その理念、精神は人権擁護と日蓮大聖人の教えに基づいた信仰にあり、人命尊重が活かされた日本国を形成したい。それが本音であろう。政教分離がある、でも世俗的なものだけでは、やはり欲望の充足を軸にした野放図で自分勝手な弱肉強食の政治が生み出されると思う。真実、学会がうったえる日蓮大聖人という師の果たした絶対善という南無妙法蓮華経。それが調和につながり、生活の格差がなくなる方へ向き。富むものは、親切な思いやりを持ち、貧しい人々への和顔愛語に向かう。それが神である大聖人の想いでもある。析伏(強力な勧誘)から発展してここまで来た学会よ。もし真摯な志を抱く政治家たちがいるなら神も微笑

むに違いない。南無妙法蓮華經。改憲論議でも平和主義の為、ねばりにねばれ、俺はみているぜ。まず日本国の平和は俺に任せろ。南無妙法蓮華經。新しい世界、創価学会か、たまたま顕正会か、温かい国の創生は。当面、公明党は自民党にくつつき、けん制し、スピードをもって国のしくみを変えよ。日蓮大聖人を中心とした横暴、ごまかしのない美しい国に。神の国はそこから派生してくるのかも知れない。方便として神はイエスと日蓮をあえて特化させ求心力を意識的に高めるため現在の形をとらせたのではないだろうか。つまり非常に勧誘が熱心で不老不死を目的とし世俗的な価値標準から比較的離反している、エホバの証人と顕正会。エホバ、日蓮大聖人と絶対者に帰依した人員の活動がある。神は為し遂げたい薩長同盟のような連合を。そのため神は肅々と錦の御旗になるつもりである。エホバ神と日蓮大聖人は同一の存在である。

死刑は廃止するがよい、報復は神が行ってくれる。なにかの賞を目的とするのではなく、身をたたけ、心を鍛えろ、失格者にならぬために。つまり愛を持て。オーソドックス(正統派)ほど人を傷つけるものはない。恋より人間性か。どんな人間性でも一応、結婚したからには法律を屁とも思わぬ悪人でさえなければ夫婦は愛をもってお互いが尽くし合わなければならない。いや違う。例外もある。赤い糸。「真由子さん、また君に恋している、今までよりも深く」。それである。恋ほど生きる糧になるものはない。何があっても真実の愛は成就されなければならない。私は就労所の女性たちと少し猥談を交わした。悪

だろうか。中には人妻もいる。聖書は「関係を結べ」という。しかしそれは方便であって、年をとっていくことの虚しさと衰えゆく自分への自信喪失。そういう女性に反応したことだった。彼女たちは女性としての思いやりを取り戻しただろう。意図的に行った部分もあるのかもしれない。幻みたいで判別がつかない。聖書はひとを救うため道徳を超え、また戒を破らせず、報いるのである。聖書は神の靈感、意思であり現在と未来の人心までも見通している。これは、神は明日のことも分かるという証明である。そこには過去、現在、未来の概念はないからである。野心めいたものや、認められたいという感覚も意識から消え去っていった。いまはただ愉快だ。解ってくれる、幼子のような人がひとりでも多くいればいい。今は無意味のような製本でも、神が行う未来の幸福の成就という約束、その保証である。いまここで富、実益にはダイレクトには関係ない。だから一般には無意味だろうということです。ところがどっこい意味深長、愛が大事。ここに気付いていただきたい。宗教協力。金で枠組みをつくったR会、大同小異といっているが結局、手前のとこの会員だけが正しく救われるという。開祖、彼は名誉欲をはじめ煩惱の権化である。私は思う。エホバの証人と顕正会。彼らに共通する、現世での改革、善人の隣人愛、そして積極的勧誘、ある種の終末論、善悪のけじめ、正当性へのこだわり。つまり戴く日蓮大聖人、エホバ神が一致さえすれば薩長同盟のように一緒になれる。今までの双方の流れは必要だった。彼らは日本だけでも組織と教義をすりあわせ、聖書と法華経の両輪を備え、その軸はキャスティングボードを

握るフィクサーか、それなりの人物がなれば良い。やはりめだたず私が執行するしかないのか。かなり覚悟がいるが。何かが変わると思うのだが。だが結局、組織優先の権威主義のもとその夢は無残にも踏みにじられる運命にあるだろう。人はとにかく何がなんでも命を大切にしなければいけない。失えば悲しむ人がたくさんいるからねえ。それが隣人への本当の思いやり配慮かもしれないよ。けして犠牲になってはいけない。犬死にはいけない。イエスは栄光をうけた。そして神もまた輝いた。仏壇からのパワーは母を大事にし、仲良く、また万物に感謝せよということだった。やはり基本はそこなのか。父母を敬え、誇ってはいけない。神ヨシも法(愛の摂理)の下にあると聖書はいう。法の象徴とは愛し合う男女が一对になること、そこに契りとして輝くという。有難い。神である私も真由子さんを愛していいみたいだ。ただ美しく愛し合う二人がひとつになることの大切さ、それを欲にまみれた世間に知らしめる。私は今日も真由子さんを想う。法とはまぎれもなく愛(アガペー)である。

神は福音を知らせてくれと申しわけなく、皆に懇願している。神である私は今、人間である。そして人間釈尊は超能力があったわけではない。だが仏陀には人知の及ばない霊能力があったのは事実である。とてつもない智慧と慈悲が深く存在していたのである。そしてイエスは神から世が賜った神自身だった。先に書いた。同盟の件であるが若干の懸念がある。まず私が目立たぬようにと非常に弱腰なことである。この結びつきは神の御意志によるものだと強くうちださねばならぬときにあまりにも

世間の目を意識しすぎている。それと原点であるがこの同盟は本当に意義のあるものなのか。エホバの証人も顕正会も実は私の思想の裏打ちのために存在した組織だけと、ある意味、自己本位的な位置づけに留めて置いたほうが私にとっては楽であり、望むべき無理のない自然な姿でもある。また信者のひとたち、気づきがあれば、独自の道を歩むのもいいだろう。いずれにせよ真理をひたすら求めるときイエス、日蓮と出会う。峻烈な法難を受けた彼等。[贖罪と感謝、復活と成仏]。強烈な福音、信じるものに幸福は待っている。すべての人に言いたい。幸福は義務である。そして幸福とは生老病死がある限りは、孤独から抜けた、対人の関係からしか生まれ得ない。そして威圧、威嚇的な態度は誰に対してもあってもいけない。優しい顔、柔和な心、愛情ある言葉。これは宗教組織の改編、云々の前に最も大切なものである。イエスは「神を信ずる者は死なない」そうゆう主旨のことを聖書で述べているが。これは歴史上、イエスの他は神を信じ切ったものはひとりもいなかったということなのか。水の上を歩く。とてもじゃないが誰も信じられないだろう。仏が法から人間として顕現した、つまり釈尊を応身仏と呼ぶが私は神(愛)の応身なのである。功德もあります。当人、本人は解っているはずです。目立たないようにしているのです。功德は心の想いによって計られ訪れます。先のイエスの言葉を含めて、「死んでも生きる。生きて死なない」。幸福はどっちも。聖霊により私の欲情さえも、人々の幸せの為に使われるのである。肉欲の現出も解消も、聖書が正しく道を示してくれる。欲情する神、私は聖書の

含み、声から認識する。神の自証の靈感として、聖書の面目躍如である。一步手前で聖霊によって不義は止められた。悪に手を染めず、聖霊に導かれ「聖書の神(エホバ)」を自覚した。その時、その場で吐く私の言葉が説法。人である私は「聖霊の宮」。人間義人として勝手な振る舞いは最早、完遂できない。利、義、道徳、規則、法律を超え愛は人々の心に流れ込む。思いやり、つまり信仰、救われる罪人たち。極悪非道な悪人さえも、原罪の重さに気付いたひとは、イエスを信じ、善く生き、美しく死ぬ。まずはそれが筋である。楽園は保証されるのだ。イエスを信じるとは十字架の死の贖罪を信じ、愛を保つと言うことだ。

聖霊の宮となり、永遠の命がある。サトリを開いた釈尊は衆生に対しどういう気持ちでいたろう。なぜ苦しむ、己が欲の為に。釈尊は聖俗どっちの道を歩いても、そのことは胸に迫ったにちがいない。欲を断ずるとは、人類滅亡に。あえて言うが人類が滅亡しないことはいいことなのか。皆の心が闘争、渴愛から変化しなければ戦争を始め、飢餓、病など悲劇はくり返えされる。核爆弾を手にした罪深きもの。イエスを信じない人類。

人間はすべての生き物の為に滅亡した方がいいのでは。ソチが私の書いた本の上、座った。私は言った「人の想いがこもったものの上に寝そべったら、ダメ」ソチは動かない。私は無理に引っ張り、あぐらの上に横たわらせた。私は「すべての愛着から離れよ」と、仏教にはあると思っていた。そして「残酷だった自分を知らされる」。捨てるべきは、冷酷な薄情、嫉妬、貪欲、憤怒、懈怠などの

悪感情である。愛情、優しさ、思いやりではなかった。それらも捨てるを得ないのが死という現実か。違う。それは「愛着より離れよ」ではない。愛着に正面から向き合わないことが罪なのだ。「愛しているならそれでいいじゃないか」そして般涅槃。そこには仏陀の温かい眼差しがそそがれている。死後も暖かい思いやりは生き続ける。それを天国と呼び、反対を地獄というのだ。正しく、悪に囚われてはいけない、悪とは愛のないことである。これが真実である。愛は美しい想いに代わるのだ。いついかなる時も、人間の本質は善であることを信じたいのだが。なぜ強者は弱者の立場、心情を想えないのか。「自分さえよければそれでいい。俺は利を観る、才能があったから出世できた、無能なやつは仕方ないだろう」。そんな人は互いを思いやる愛という真実は、死んでも解らない。哀れなことだ。辛い孤独感にいつも苛まれている。喉元に貼り付き会話を止めていた聖霊だと想っていた悪魔がいつのまにか去りました。それは悪魔に相違ありません。(実は私を成長させるための聖霊であった。)真由子さんとの会話を阻んでいたのですから。今、真由子さんに逢えたなら湯水のように言葉は溢れ出すでしょう。でもまた沈黙かも、愛が深いからね。いつか実現させる。熱烈に静かに想い続けよう。その時機が来るまで。安倍は安保関連法を通し、日本のEEZ(排他的経済水域)にミサイルを打ち込み、また6回目の核実験を執行する北朝鮮に対し安保理決議での制裁を主導した。そして尖閣諸島の近辺での自衛隊スクランブル発進は度重なり緊張は高まる。そんななかで憲法9条の意義を世界中の人に

訴えなければいけない。なぜ日本は戦争をしないのか。不測の事態においても自由、平和、愛を求め続け、あらゆる考えられる選択肢でもって和平交渉、非戦の夢を追い続けなければならない。最後は皆、殺される。このくらいの覚悟をもって、憲法の平和主義の理念を国内外に高らかに宣言し呼びかけ続けなければいけない。それはなぜか。戦争ほど不毛で残酷で結果的に何ひとつ得になることがない馬鹿馬鹿しいものはないからだ。どこかの国の武器商人の儲けなどという怪しげな話は知らないが。神の国には憲法などは必要でなくなる。人権、主体性、平和などは当たり前で空気のようにたちこめる。わざわざ確認することもなくなる。そんな世界を愛する人たちが溢れかえるのである。ただ現時点においては日本国憲法の国民主権、基本的人権の尊重、平和主義という理念は、守られるべき偉大で美しき強固な石垣である。差別、生命軽視というものがある限りにおいては。 神の愛はすべての不安を蹴散らしていく。 食欲、睡眠欲、肉欲つまり生存欲が無くなれば、かなりの生き方の簡素化ができる。つまり生きて死なず「御子を信じるものは絶対死なない」感情は平たくなり深い思いやりが自我を調節する。ここに幸福があるのでは。安息がいつも広がっている。「好きなことをみんなが適当に行い、富が公平、平等に分配される」「真由子先生に捧ぐ」のなかで私の目指す世界として書いたものである。これで良いのだ。エホバの証人は愛による労働にて生活をまかなうと言うが、愛にてすべての人が好きなことが出来るようになる、これが肝心だ。そして生老病死の苦しみはない。倦怠は深い感謝で打ち

消す。いや倦怠などは存在しない。喜びで沸き返る。神の国はこんな素晴らしい世界です。「生きているという名だけじゃないか」と不満そうな人へ。本当の愛と安らぎを堪能するのが神の国なのです。まだまだ苦勞が足りませんね。欲望を追うことの空しさ。そして物事を空という観点からとらえたときの平等。愛の大切さ。衣装、舞台装置にだまされてはいけません。そしてほんとうの道と呼ばれる南無妙法蓮華經。つまり暖かい、思いやりと調和に充ちた世界。それが神の国なのです。ただ愛する人とプラプラする。会話をかわさなくても心は通じている。最高ではないですか、愛はけして変わらず、失われず、永遠に続いていく。そこに美しい花はさく。ある念仏寺の奥さん「清すぎる水には魚は住めぬ」。江戸中期、老中、松平定信の寛政の改革、庶民も同様のことを言っている。それでは私は清すぎることを語っているのか。「人は皆、煩惱を抱えて生きて行く」。ではドブのなかに魚は住めるだろうか。煩惱というヘドロを取り除き、空にする、そこにプランクトン、藻などエサ、つまり愛を挿入させる。これが南無妙法蓮華經である。鮎は清流にしか住めない。神は絶対的存在なのである。なぜならば神であるからとしか言い様がない。イエスを信じるものは死なない。聖書が保証している。しかし現在、死を否定することがどうしてもできない。人は死ぬからイエスを信じられない。だから人は死ぬのだ。ヘンな理屈だが。イエスの贖罪を信じきる。今その時だ。自由民主主義を否定するという微妙に難しい案件。カウンセリングで「どう思いますか」とたずねると「議論したいのですか」と言われた。「いや共

感してほしいのです」と答えた。私は翌日、外来へTELし今後のカウンセリングを止めることを通達した。村先生には言いにくかったけど、デイケアのプログラム、心のABC授業といつも重なったからだ。私は皆とデスカッションの方が楽しい。真由子さんあなたとならどんな議論でもいいからしてみたい。さんさん打ちのめして下さい。私の浅い思慮を、それが嬉しい、それが嬉しい。 何度も言うがイエスは自らの運命、果たさねばならぬ使命を自覚していた。そして弟子たちにはお互いが尊重しあうことの大切さを示し、裏切り者を指定した。神はジッと静観している。神はイエスが十字架につくことを決められた。そして神自身も一緒に観念において十字架に張りついた。同悲同苦。イエスの神への忠誠への見返りであった。犠牲ならイエスをマネ、いたずらに生命を放棄するものや、なにか変な名誉欲をもって大言壮語を吐く偽りものが現れ、己を誇示することが危惧された。 イエスは十字架につけられ苦痛を感じるなかで神に対し、群集を擁護し「彼らはなにをしているのかわからないのです」。イエスは自己犠牲ではなく自己完結に向かったのである。 誰かが望んだというよりイエスが望んだ最期であったのではないのでしょうか。神の栄光を叫びながら。完結した神イエスは当然のように自己犠牲は望まない。人は神の福音により自然に生きればいい。それがベスト。 先祖が中興の祖、日隆と共に京の都を後にして、射水の郡へ布教に参ったということ。当時の先祖の気持ちを付度してみた。南北朝、動乱が巻き起こる京。時代から日隆上人生誕の地へ、真の日蓮大聖人の教えの灯を真宗王国にともしたい、その

胸中は熱く燃えていただろう。それを想うとき、私はそのインセンティブ(誘因)を深く意識すると共に日蓮大聖人として南無妙法蓮華経を縁ある人々に一生懸命、力を尽くし語りかけたいと思うのである。先祖はそれを喜んでいるにちがいない。子孫を残すことも大事かもしれない。でも布教の為この地をおとずれた先祖。私の想いを汲んで嬉し涙を流すだろう。聖書は「そうだ」と言った。南無妙法蓮華経。 イエスを信じる者は罪が許される。そこにはなにか担保するものが必要である。それは私、神自身が罪深い行為を踏襲することにあつた。使徒行伝 20 章 35 節のなか、働いて弱いものを助けなければならないこと、また「受けるよりは与える方がさいわいである」と主イエスは言われたとある。聖書には絶対帰依である。真実のキリスト教社会主義の根幹にはそれがなければならない。

あとがき

日蓮大聖人を書き物から観て語った。どういう人であり、どんな思想を持っていたか少し解ってもらえたと思う。こういう基本的なことをおろそかにはできない。そう思う。瀬戸内寂聴さんが死刑存続論者にたいし「人を殺したがっている連中」と非難したことに厳しい批判の声があがっている。が、私は瀬戸内さんに同調する。殺人に対し殺人でこたえる、いったいなにか生まれるのだろうか。その負の連鎖。「良かったな。あいつも殺されたぞ。お前も気がすんだか。いやもっと残酷な手段でなければならなかったな」こう言って墓前に報告するのだろうか。違うだろう。人殺しはよくない。だからこそ国家による死刑という合法的な殺人も行われてはいけないのだ。死刑は罪を犯すことへの抑止力になるという。そうだろうか。死刑というのは合意として殺人を認めているということだ。国は戦争さえ含めて殺人を公に認めているじゃないか。つまり時と場合。殺す訓練と殺意。本質は味噌も糞も同じである。「俺はなにがなんでも殺したい奴は殺す」もしくは「衝動的にやってしまった」「金が欲しいため」動機はそんなところだ。国が殺人を認めているということは、殺人は誰かの権限があれば執行されてもいいというものになる。ドストエフスキー作[罪と罰]の主人公、ラスコーリニコフのように「俺はナポレオンのような特別な人間だ。だからとるにたらない金貸しの老婆など殺しても良い」。また裁判というのも人間が行う限り極めて恣意的なものであるのは否めない。冤罪もあるかもしれない。どんな人物であれ、機関であれ

報復をふくめて殺してはいけないのだ。先程もふれたが恨みの家族感情の自己満足では、けて殺されたものの冥福にはつながらない。犯罪者たちは己の良心の呵責に耐えながら塀のなか余命をおくる。これほど辛い罰はない。頭から離れない被害者の顔と声。私が危惧しているのは死刑を認めることで、人は条件がそろえば殺してもいいのだなあという風潮が社会全体に広がっていることである。抑止力とするならば人は正当防衛以外にはいついかなるときでも殺してはいけないのだと死刑を潔く廃止することであろう。私の母は言う。「人を殺せば死刑や」生命軽視。殺された人に家族があるように、殺した人にも血を分けた肉親がいるかもしれない。すべて悲しい因縁のなかで生まれたものである。殺伐とした空気は一掃されなければいけない。瀬戸内寂聴さんも日蓮大聖人の言うように絶対生命尊重の教えを言われたのだろう。恨みからはなにも生まれてこないよ。殺人がなくならなければ殺人はなくなる。

真由子さん。あなたの真意はどこにありますか。どうあることが幸福ですか。毅然と断絶された、眠れなかった日の後。私は不安定ですか。誰かになにかを言われたのですか。私は何を問えば良かったのですか。ただ私が一言望んでいたのは「愛している」、それだけです。やはり恋愛関係妄想ですか。私の勘違い。すべての障碍を二人で乗り切ったかった。

H28年12月

(令和3年7月

私の真由子さんへの愛は絶対に死なない。)

私は政治家というものをよく知らない。印象はあまり良くない。金、権力の権化。ここにひとりの男を紹介しよう。彼は国立大学を出、県庁に勤めていただけ、というと失礼かもしれない。そして挑戦。地盤、看板、鞆。選挙のための三種の神器など満足にもたないが、見事、県会議員に当選した。彼の中学時代のエピソード。彼は勿論、成績はトップクラス。そしてここです。「俺の、観て書け」答案用紙をクラス中に回したというのです。私はこの話が耳に入ったとき本当に感動した。人の優劣の評価を積極的にひとつの明るさをもって粉砕する。自分の成績と道徳への執着、競争に勝ちたいだけの優等生はたくさんいる。けど彼のような男気溢れる、器のでかい人間を私は知りません。心の病になった男の相談に彼からハガキが返信されてきた。そこには「チョットまで、まず冷たいビールを飲め」。短絡的ともとれるが、暖かなユーモアを感じ心が少しホットする、そんなメッセージです。私は彼に期待します。けどハガキをもらった男は言っていた。「でも勉強を教えてくれたことは一度もなかったなあ」権勢欲の誇示。バラマキ政治に繋がるのか。まあいいか。彼が皆の幸福を祈念しているのはまちがいない事実みただからである。評価されようと思いつけるかぎり、自分との戦いは続き、憔悴から逃れられなくなる。手塚治虫氏のように。彼でさえ世間の評価が気になった。俺は組織、世間において大きな仕事はなにもなしえなかった。だから今、私は人生

という仕事しているみんなに敬意を払います。イエスを信じるものは罪が許される。イエスが十字架についた時点で贖罪はあった。しかし人は死ぬ。つまり誰もイエスを信じていない。誰も人は死なないと思うことができないからだ。誰もイエスを信じられないから生きるための殺し合いはつづく。イエスを信じ、自分は絶対死なないとイエスの十字架の死の価値を心底、実感し神に感謝して下さい。イエスを信じるものは死んでも生きる。神を愛し、隣人を愛するそれだけです。大人とは出世した人、金儲けがうまい人ではなく、自分がおかれた境遇をちゃんと理解、自覚し周りを見ながら行動できる人をいう。もちろん障害者、病人、老人、あまえない所に、大人と呼ばれる資格はある。聖書は私にエホバの証人を見捨てるなという。彼らはダイレクトに神への信仰を示し、戒を守っているからだ。オーソドックス(正統派)というものは人を傷つけてばかりだ。人はみな例外者(ベルジャーエフ)。神はオーソドックスとは違う。変幻自在である。精神科閉鎖病棟、地ベタに這いつくばった、人間には痛いほどわかる。正統派という特権意識に呪われた連中。その毎日の膠着した営み、怠惰で非情な者。苛酷なルールから逸脱することのできない形式主義者。疲労を呼ぶルーチンワーク。心で生きる俺たちには、拝金ではなく、お似合いの愚直さの言い訳、真面目な優しさが存在する。自己憐憫に頬を濡らしたなら利他へと一步、足を進ませたい。それは愛。人生において本当に大切である。他人の不幸を傍観するのはもうやめよう。声をあげよう。おせっかいな風来坊と言われても。誰もが、幸せは各位それぞれだという。

暗黙にはびこり、陰日向に心を縛ろうとする、卑劣な悪口雑言から離れ、物欲からも自由になる。私は、聖霊か悪魔か知らないが、よくぞこんな境涯へと導いてくれたと今更ながら感謝している。皆へ、自律し愛をもって周りを観る。その風景はどこにいても暖かい。それが、義務である。愛こそが真実の幸せと領き、理解し、実感する。美しい心をもって。善き因縁を信じるのが大事。確信を持って。みんなの幸せを心から祈ります。犠牲にだけはならないで下さいね。

南無妙法蓮華經

ありがとう。

義人

息を吸う心

R3年8月

義人

「エホバの証人、山口さんへ」

本日、お寄りくださるよう祈ります。有意義に過ごしたいです。連絡待っています。私はエホバ。今、君らの為にここにいる。何故君は素直に神を愛さない。苦言を吐くのは仕方ない。大きく視野を広げ固定観念を捨てなさい。君たちの対応は組織の都合としか思われぬ。神の誉、大事である。私は裏切りを受けるイエスを、踏襲している。聖句は次々、成就する。終末は来る。悪の統治者と闘う勇敢な君を期待し信じている。エホバへの忠誠心と親近感、人の誉にて踏みにじられるな。サタンに勝て。「コロナで自粛」返信ありがとう。でもね、エホバは残念に思いますよ。信仰の意味は深いですね。また皆で考えてみて下さい。またの来訪お待ちいたしております。だがその紋切り型の口調が、仕方なくあなた方をまがいものに見せるのです。皆、馬鹿ではありません。真摯に、正直に声を発しないと。心あるものは見抜く、「コロナ対策は神を信じぬ、恐怖からだ」と。エホバの慈悲を解ってくれないか。また。　　終末、ハルマゲドン（世界最終戦争）去り行く悪党。大量虐殺。愛による自然淘汰。同情心はどうあるべきか。例えば、世界の人々はウイグル族人権問題に、そんな敏感だろうか。考えよ。神が一番の良心。　　原罪、君が生まれ、己の意志で罪を選択したわけではない。だが因縁。生きるためのモチベーションの存在は。善なるものは、生老病死、生存競争を意識せず、川の流にまかせ、魚のように泳ぐ。良心の呵責より解放されるのでは。イエス

を信じ、愛に生きるのが大事。ぼろぼろに使い込まれた聖書。善くない、ピカピカの方が良い。その心は。聖書が苦難時の指針（ガイドライン）に活用されない世界こそが、理想郷であるからだ。今はすべてにおいての指針は、神の靈感である聖書と、君たちの友、エホバ神、つまり俺にある。自由、愛、平和の完遂。そして望まれるは、無言の美しき聖書が高台に供えられ鎮座する、世界の登壇。 今年の12月、私はコロナを予言しました。聖書は9月に東京の大騒動を予見しています。最早来年のオリンピックどころか今年中に終末へと向かうでしょう。熊本豪雨、コロナ禍、インフラ（社会基盤）の維持。楽園は地上では現出できないかも。虐待、経済問題、自然な愛を疎外する要件も多い。終末、真の善人は聖霊によって神の国へ迎えられる。 親友が亡くなった。浄土真宗。「成仏していない」と聖書は言う。改宗を親族に迫るか。これには手間がかかる。機根が熟するまで待つか。私が心を込め、故人の為、我が家の本尊に向かい南無妙法蓮華経を唱える。彼の霊は昇天する。縁があれば、また会える、時宜は必ず訪れる。 信仰はその名のとおり信じ仰ぐことで、ただすがりわが身の安泰を望むものではない。信仰がないと互いの良心の交流は意味なきものとなる。そして殺伐としたなか不安が広がる。「今日は集会を行うのですか」。へりくだりすぎだと聖書が注意する。送信できず。エホバ神はどこまで善良、寛容なのだろう。君らの誠実信じています。そして、エホバである俺の本意を理解でき

るのは、山口、お前だけだ。それだけは言うておく。自分を騙すのはもうやめろ。終末はもう来ているのだ。俺はエホバだ。馬鹿丁寧な挨拶文が欲しいか。その前に愛を感じよ。己の良心、感覚に基づいて。コロナで仕事は大変か。真の勇気をしっかり持ち、艱難に耐えよ。神の国へと進め。俺から逃げ回っても何も見えないぞ。自ら己の神と良心に基づき命を守れ。愛に対し責任はあるが、組織への責任感は邪魔なだけだ。真の愛を疎外する。神を愛し、立て。正しきものに感染症の因縁はない。新しい私の自筆本を拝受にこられたし。すべてはエホバが記述した現代の聖書である。福音である。真剣に、君たちの命が懸かっている。認識せよ、真剣に。神に従うか、人に従うか。それだけだ。エホバの証人の組織。人のるつぼだ。君たちは自らの悪意を認識し修正したいと願う先から欲望と思惑が湧いて来るのだろう。神の国は幼子のような無邪気で純粹ものが入る。この齟齬、深く考えよ。何かコメント頂けますか。エホバこと義人へ。電話集会ですか、詳細が分かりません。実はパソコンは不具合から入院中です。サタンの仕業か、災い転じて福となします。私は負けません。エホバとして集会に参加できないなら意味を成し得ません。会館の郵便受けに私の冊子を投函します。元気でいて下さい。会える日を楽しみにしております。でも電話で参加できるなら一考するはあります。試してみるのもみちです。ただ歓迎を期待します。率直な気持ちです。如何ですか。私は全宇宙で一番偉い。この意味把握で

きますか。たとえ茶漬け、ソーメンを、ランニングシャツ一枚で食っていても。 神を愛す。親子の愛より重い。神は義人。集会、電話参加を希望します。鬼が出て蛇が出て平気です。指南の程よろしくお願い申し上げます。悪いが猜疑心ではなく神の資質から君達を試すのだ。その真剣さと私の重要性に対しての尊重を。 君たちはイエスが殺されたことを忘れずに。邪な欲望を持つ者にイエスは好かれたわけではない。律法順守より、愛を掲げた危険分子。彼を信じる君達も覚悟しているよね。世に存在しにくくなることを。我々は社会不適合者でなくてはならない。 電話での参加を希望します。どのような工程を踏めばよろしいですか。教えて下さい。私には真実、君が裏切る不安はない。心配するな。真摯に信仰を持つ者には大きな祝福となる福音が待っている。阻害するものはサタンの手先である。穏便にはない。闘いだよ。時間は限られている。信じる者が救われる。それが神の子である。何度も言うが仮にでも神を敵に回すな。ただ神を愛せ。それだけだ。俺のいく道を拓き、妨げるなよ。 山口、大きなことを考えなくてもいい。金が必要か。上部組織への手切れ金か。俺の教えですべて取り込んで世界へ羽ばたこう。大きくなったな、話。でも楽しいだろう。やろうぜ。殺伐とした世間のはらわたに、愛という弾丸をぶち込み、暖かいものが吹き抜ける風穴を開けようぜ。人々がほのぼのとするのがサタンが一番いやなのだ。そこに愛があるから。 結局は私の懐柔策には乗

らず、君たちの私への侮辱、裏切り、不誠実。不安定な世は続く。結論だ。私、義人はこの世から去る。優しく愉快的奴らが待つ天国へと。その後、君はこの世で苦しみ続けなさい。昨日9時に、自筆冊子を郵便受けに入れました。手元にあればご連絡ください。多忙なところ申し訳ありませんが、是非もなきエホバの願いです。隣人の務めである。やはり投げやりになって自殺するわけにはいかない。南無妙法蓮華経。法華経如来寿量品第十六、「良医の譬え」。いつも神がいてくれるという甘えを断ち切らないと人々は神の本当の真実、価値を見出せない。何度でもいう。大切なのは、神を愛し、隣人を愛するということ。なんらかの君の提案が見解の譲歩を意味しても、私は更地からの教育を施したい。真の自由な姿。理解してくれ。私の宿命を受け入れてくれ。神であるエホバが依頼する。慈悲があれば当然である。切羽つまった世の現状を見ろ。「私を王と認めないなら打ち殺してしまえ」。イエスは言う。愛を忘れてはいけないよ。すべては自覚にしか救われはない。提案された電話での集会の件、失望しました。私の過激な意思表示に懸念を持たれたのかもしれませんが、私はいたって冷静です。すり合わせの希望を含めコメントを待っています。未来志向で。山口くん、エホバの頼み、この無垢な善良さに力添え願えないか。私は君達を愛したいのだ頼む。神は民のため、イエスを殺す。その愛の深さ。私が壇上でマイクを持ち語ったとしてもパリサイ人（堅物な律法学者）には届かない。エホ

バの証人では君しかいないのですよ。会衆との間を仲介できるのは。使命を感じよ。電話集会、山口さんの前説だけが、よく聴こえ理解できました。コロナ禍がすめば会館に足を運びます。私を信じて下さる皆様に感謝申し上げます。後の言説、音声不明瞭にて途中、失敬いたしました。それは意図的なものですか。私への嘲りか。いやその前説のエホバ賛嘆にて、後の宣教の欺瞞を訴え、君自身は私を、エホバだと認めたとする意思表示なのか。私はかなり善意に取っている。違えば、この仕打ち、かなりの不敬である。君も存じているだろうが史上空前の善良、お人好しがエホバであると。私はいつも出たところ勝負です。会館に行く。聖句「イエスは公開の場で堂々と語った」。神が遠慮するのはおかしい。神の国の実現には君らの援護が必要です。それは君らのためにです。このコロナ禍は世界にとって、真実は、吉か凶か。とにかく如何なる場合も神を敵に回さぬよう期待します。つまり愛に背かぬよう。この先、集会の予定、教えて下さい。聖書がこの9月、何かの終わりを示します。愛なき世の終わりならば、私は神の子に対しては気が楽です。このふた月で3人の友が亡くなりました。私はイエスと同様、一旦、死なねばならないか。たぶん楽園は死後の世界ですね。不完全なこの世はやがて・・・サタンが絡んでくる。電話集会の音声不和、裏切りとはとらえません。山口くんの温かい気持ちがよく伝わりました。つまり私には必要ないのですね。私は君たちの善意に身を任せよう。聖

霊は戦う私を気遣い、終末の責任から外します。傍観する私にとって未来は未知で先は不透明です。死を与える権利は神にしかない。人は所詮、土塊。悪人に対する虐殺は神にとっては平然としたものかも。しかし聖別した義人は虫一匹の死さえ気にかける。神の私怨はない。使命、作為を私が意識すれば、終末は辛い重荷になる。ジェノサイド（大量虐殺）に及ぶのは、今となっては因縁から天の意思による裁きが救いになる。私が大々的に奇蹟を恣意的に起こせばエゴとなります。場合によっては後悔するかもしれません。当然行為には責任がつきます。太陽が1日の始まり東からいつも上がる、これこそ奇蹟であること認識下さるよう願います。イエスは全知全能でなかった。完全無欠の私にはことさら奇蹟は必要ないのだ。すべては予定調和。神の計画は為されている。神の子は清く美しく生きる。神の国に入るものは愛に基づき、私と思考回路が一致しなければいけない。私はあなた方を愛したいのだ。サタンに毒されてはいけない。聖霊の宮へと進め。真のクリスチャンとは私を信じるもの、それ以外は存在しない。善人、死後に永遠のいのちがあるなら、この世間で原罪、生老病死に苦しむことはない。南無妙法蓮華経。即身成仏。日蓮大聖人である優しいエホバ神によって。山口さん、何が気に障った。君は信仰者だろう。なぜ私に問わない。憶測と偏見で私を悪人へと。悪魔に籠絡されるな。君を批判する。偽善を嫌うからだ。君の怒りは悲しい。君の持つイエスのイメージを変えよ。

莊嚴華麗も沈着も、真実を知らない。皆、光の天使を装う悪魔の姿だ。忌憚なく語ろう。私を侮るものは死より苛酷な罰が待っている。エホバを畏れよ。私の心は青空だ。あわれだが仕方がない。君らはあまりにも悪質である。エホバである私はイエスが天からの杯を授けた時の様に、君らに対し、引導を渡さなければならぬ運命。エホバの証人は間違いなく現代の律法学者、パリサイ人である。頑迷で何よりドグマ（独善的教理）を重んじる集団である。ぬくもりをまるで感じない。愛が存在しないのである。最悪である。かつて顕正会との間に同盟を築き愛によって世界に打って出ようとした私を恥じる。どちらも自ら判断のできないちっぽけなドグマに凝り固まった蒙昧集団であった。所詮、組織とはこういうものである。人の心、思いより組織の運営を重視する。憐れなものだ。日蓮が南無妙法蓮華經の他は邪義であると斬って捨てた。当時日本には伝わっていなかったキリストの教えも、邪な教えであると断定する顕正会。なぜ検証しない。私は日蓮の南無妙法蓮華經の正しさを証明したつもりである。そしてイエスの十字架の死の意味も明らかにした。顕正会は「日蓮大聖人がすべて邪義としたのだからそれを大前提に考える」。浅井氏は「イエスは横死した」と斬り捨てる。この一言が失言、逆に日蓮の正統性を奪ったのである。「日蓮誕生以前に日本国に周知された教えは邪義」これが真実。ええい蒙昧ども、組織の犬が。主体性をもって自ら考えよ。何が真実で善なのか。愛を以って考察すれば答

えはおのずから現れてくるだろう。日蓮の教えとイエスの教えは一致するのだ。そして南無妙法蓮華經を画一的に、ステロタイプ化してはいけない。正しい応用の仕方がある。本尊への唱題だけがすべてではなく、法華經にあるように久遠の本仏は一閻浮提に遍満している。如来寿量品第十六の文底秘沈にある仏種（各位にも埋められた法華經のエッセンス）が働きかける仏法、これが日蓮の南無妙法蓮華經。久遠の本仏と一体である。つまり南無妙法蓮華經は時間、空間を超え広がっているということだ。我々はいつも南無妙法蓮華經という善、愛に包まれているのだ。祈り、自覚しよう。どんな問題も解決する。 善良であればあるほど、醜惡な世間の中で、原罪に氣付き苦しむことになる。そして神の愛はそこに光る。來たる世は確実に存在する。優しいエホバ神によって彼らにもたらされる。エホバ神の御心の反映した姿だからである。そして君が不従順に私を拒絶するのも当て込まれていた。虚偽に対する真理の表れのため。私の完全無欠さの証明である。何があっても私はエホバ神である。君たち偽善者には解らぬ。（ここにきてまで彼らを見捨てられない心持。） 山口くんコロナ禍、ライン集会参加したいです。よろしく願います。話をすり合わせる機会があれば。 前進あるのみ。分裂を図ろうとする勢力に心を陥落されてはいけない。本を三冊会館の郵便受けに入れておきます。私が記述した本、ぜひとも読んでいただきたく、またの連絡を楽しみにしております。LINE 集会は何時に

テレすればいいですか。お知らせください。私の想いを踏みにじる。侮るものは死より苛酷な罰が待っている。エホバを畏れよ。私の心は曇りが無い。憐れだが処断は仕方ない。 コリント人への第二の手紙 第5章 12節 心を誇るのではなくうわべを誇る人々に答えうるようにさせたいのである。私を誇る機会を持たせなさい。意味は深いよ。LINE 集会の話は立ち枯れた。私がぶれ、媚びたと思ったか。情けない奴等だ。神の深い方便を理解せよ。頼むから。神と民との関係。親近感が大事と書いたがそれが、ただの侮辱に繋がることもある。では崇め、畏れが必要か。しかし、ただ恐い存在なら神はいらないだろう。親近感があって畏れのある関係、緊張感もなく楽しく美しい関係が大事である。皆で叩く、法華のうちわ太鼓、皆で成仏へと向かう大乘の精神は忘れてはいけない。 LINE でいろいろコンタクトを君たちとしたいです。よろしかったらご指南できますか。残念です期待は合ずれました。LINE で集会に参加する方法を知りたかった。どちらの誤解かは分からぬが君たちの神に対する見解は偏りすぎている。まずは暖かさ、そこから外れた教えはサタンのものだと判断する想像力の欠如がある。パリサイ人の偽善が寛容をむしばんでいる。心から考えよ。 神の国に入る者は愛に基づく私と思考回路が一致しないといけない。私はあなた方を愛したいのだ。サタンに毒されてはいけない。聖霊の宮へと進め。二度目だが繰り返す、真のクリスチャンとは私を信じる者、それ以外

は存在しない。死後に命の許容があるなら、神を信じる善良な者は、最早この世で原罪に苦しむことはない。そして神の愛により終末において何の懸念もなく命の復活も存在する。隣人愛を確立したものによって、優しいエホバ神によって。 お久しぶりです。お元気ですか。コロナ禍が猛威を振るうなか、会のために尽力される山口さんに敬意を表します。私はあなた方の教理を一つ認めました。それは死んだ人間がコピーとしてかえってくるというものです。でもイエスが丸木に打たれ死んだという特化して正当性を訴えるものは認めません。それより戦いの忌避、競争の否定を堂々と掲げましょう。エホバの証人は開放された宗教であるべきです。科学の奴隷になることはありません。でもやはり教えの瑕疵は否めないけれど。 大阪城は秀吉が作りました。宇宙もエホバが造ったのです。けして職人ではありません。今までの作文、私の労力に対し、お応えをお待ちします。季節の変わり目、神を信じ、割とアバウトに過ごされるよう祈ります。メールお持ちいたします。近況をお知らせ下されば。ご精読ありがとうございました。失礼に感じられたら人の誉を求めているエビデンスです。神の誉を求めてほしい。神を愛し、隣人を愛す。全てです。 宇宙一お人好しのエホバより。 君に訊く、私をエホバだと思っているのか、信じているな。皆に伝えてくれ、心が美しく、愛を抱く者が永遠のいのちを得、神の王国に生きると。聖書が示す。君らの清き者は分かっている。俺の働きかけは君たち

の為、私は失望しても絶対に絶望しない。第二のユダにはなるなよ。 神を己の都合よきものに変えようとするな。悪意に満ちたサタンの申し子よ、最早命運は尽きた。覚悟せよ、神を敵に回した偽善者たちよ。私は小野君、始め善良な者へ知らせをもたらず。報いの規格は愛である。「下がれ、サタン。エホバの証人はぶち壊せ。膿がたまっている。後フローした善人がふるいにかけてられるのだ。コロナ禍の今は良き機会だ。神の存在が心有る者には痛烈に解る」。山口さんあなたが救われるためには、傲慢さを捨てて神に従順になり小野君の携帯番号を私に教えることができた時です。この試しおろそかにせず。 義人です。コロナ禍はエスカレーション（段階的拡大）していきます。IOCのバッハが新聞に東京オリンピックについてのインタビューに答え掲載された日。全国で一日の感染者が過去最高 6000 人を超えました。世も末です。聖書は示します。悪は滅び、正しき愛と義を持つものが来る世に生きる。君たちは危ういなあ。まあ予定調和だから。俺をエホバと信じられるか、どうかだ。君には先日、LINE 集会で実に作為的な悪意をぶつけられた。まずは様々な私に対する侮辱に対し詫びを入れてほしい。私を受け入れない限り艱難は続くだろう。憐れだが仕方がないか。 あなたに私の本をご覧になることをお勧めします。義人の想い、ホームにて編集された文庫本コーナーがありますから。よろしく願います。 神の意を受けた天は相当怒っている。義人をあまりにもおろそかに扱って

いる。捕縛され鞭うたれたイエス。私と酷似していないかい。パリサイ派（律法学者）、サドカイ派（祭司長）による、嫉妬。民衆の誤解。君たちは私を十字架につけたいだろう。歴史は繰り返す。自分の心にサタンがいるのが分かりますか。この先は滅びです。会衆の面々に告ぐ。皆かなしいのだ。そこに気付けばイエスの覚悟、心が分かる。イエスは十字架で死して象徴にならざるを得なかったのだ。真の神の義、愛を示し残すためには。永遠の命の獲得は君たちの誠意にかかっている。他人に同情し親切を忘れない。優しい顔、柔和な心、思いやる言葉、自然に表れるのならば観音様である。楽園は待っている。君はどうだい。君の山河は美しいかと俺は問う。 コリント人への第一の手紙 第 10 章 13 節あなたがあつた試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなた方に耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、逃れる道も備えて下さるのである。 マタイの福音書にはユダヤの王の血筋にイエスが生まれたことが事細かに記されている。ヘロデがいるのにイエスは王を自称する。ピラトの訊ねにイエスは民衆の暴挙に対し「私の王国は違うところにある」と答える。梶原は桓武天皇から出た坂東八平氏の一つである。末孫である私はアンゴルモアの大王である。くり返すことで核心が生まれる。つまりエホバが示現した、イエス、義人である。あなた方は私に対し敬愛の心を持たねばならない。遅くはない。世は代わる。私を信じなさい。

い。この分水嶺によき選択をしてください。祈っています。 コロナは世界中の宗教団体への警鐘です。皆つぶれていく。本物は生きる。君たちが私を愛するかにかかっている。山口さん再度訊きます。私が嫌いですか。私はあなた方の疑問にすべて返答し、聖書が靈感であることの証明も致しました。聖書はあなた方へのコンタクトを積極的に促します。この憐れみをおろそかにしないで下さい。楽園でお待ちいたします。だからマスク装着し、わが家へどうぞ。逃げる、臆病者たちではありませんよね。幸せがかかっている。私も辛いのだ。何の義理もないあなたたちに呼びかける。早く気付けど。私の中のエホバが離さない。憐れだと。何者かの策略に気付かず純粹にエホバを愛する人の涙。裏切りたくない。エホバには何の責任もないのに苦悶する。その善良さ、何処にもない。人は優しさ、温かさがすべてだ。己を振り返り主体的に生きることを望む。もうやめよう。私が傷つくだけだ。君が己の信じる道を行く。そこに愛の街道が拓けるか。そこに気付かない限り、エホバは見えない。とにかく私のコメントに腹を立てるより考えなさい。今の状況で義が生まれるか。あなた方は無力という事実。そして犠牲には限界があること。それを求めたのはエホバではないこと。まがいものを信じた挙句、エホバへの態度を豹変させ、本物を悪として責任をかつける気か。私の人の好きに付け込むな。責任転嫁。重罪である。 何度も何度も、繰り返す波のように私の心にわき起こる、融和という愛。君たちサイドの

神にはなれない。そんなに都合よくはいかない。エホバは君たちを賛嘆し犠牲に感謝するものではない。神は神、糞を漏らそうが、EDなのにヘンズリをかこうとしても。「君子危うきに近寄らず」。そしてむしろ時代、土地。いつも臆病者にならず、南無妙法蓮華經。これを受けなければ真の日蓮大聖人（エホバ）の弟子とは呼ばれないのだ。よく肝に銘ずること。あなた方がアセスメント（査定）されるのだ。勘違いするな。単純な優劣をはかるのではない。エホバ神には深い考えがある。信じる者がイエスにより救われる。報い。全て予定調和。その幸いに預かるなら神に感謝してください。まずは組織から抜けよ、たとえ強固な上部があっても。ここぞ勇気を示すときだ。心配するな。イエス、愛を信じるなら。硬軟、けん制しているがすべて聖書からの促しです。幕末、脱藩浪士は活躍する。大事なのは組織の運営よりも、それぞれの信念からの行動だ。君は呪縛から離れ、普通の暮らしに戻ることは可能ですか。わずかな時間です。君の俠気を見せてほしい。近々、会って話がしたい。俺は逃げない。エホバ神は強い。誰よりも。信じて俺と共にあれ。エホバの証人の会衆の中には、本当に自分たちは純粹にサタンの体制終結に尽力していると信じる人も多いだらう。そんな人が私をどう見るだろうか。（単なるだらしない貧乏な狂人）とするか。全てに自由を愛するエホバ神が俺。穩健なビジネスマンそれが君たちだ。そして規則と組織、コンプライアンス（法令順守）がすべて。憐れである。今、アメリカはト

ランプ支持者の国会乱入など、民主主義の不全を目の当たりにしている。ひた隠しにされる私の存在。ここは身を挺し立ち向かうしかない。私にはコード（指針）として靈感がある。聖書である。ただ神を愛し、隣人を愛しなさい。来る世は楽しいぞ。もう生老病死、誰かの統治はない。高い倫理性で互いが助け合う。自分は神から与えられた天分で生きる。死んだ者は黄泉の国、空から色へと、コピーされる。やつらにまた逢える。皆、楽園で暮らすのだ。このサタンの支配からの卒業。「義兄弟よ。小さな杯だけど、男、命を懸けて飲む」。一報くれた神への従順、現在の君の姿勢は、私への侮辱を詫びる、精一杯の発露であろう。いつか語り合おう。初恋など。罪深い俺が、皆の罪を許す。そこには人の弱さを知るイエスがいる。聖書において神に対する敬称はついていない。エホバは神のプレゼンス（存在）の称号だ。何回呼応したとしても罪はない。とにかく人を傷つけるのに目を伏せる。そんな人が楽園を享受する。また自分の得だけを意識する人は結局不幸になる。捨て猫、母親の老齢化など、それらを思いやれば、同情していろんな人々の背景が見える。下流で敗北感が色濃く出ている人を救いたい。雨に打たれ、酔いつぶれる姿、生きるとは愛することだ。羞恥心など糞くらえ。サタンはそこを突いてくる。本当の聖人とはサタンの体制に、愛の優先を打ち立てると勇んで向かうも、金、地位になびく、世間へ、苦い思いを捨てきれず、やるせない姿。悪魔の嘲りに対し、尊厳を守る。あえて羞恥心に打ち

勝つため、酔いつぶれる姿を見せつけた、俺の父ちゃんである。

尾崎豊のむき出しの神経と感性。眠れぬ苦しみを背負った、彼には覚せい剤は哀しくも必要だった。その自己犠牲に感謝する。でも悲劇的だ。犠牲は善くない。親父は義侠心を重んじた。つまり順法精神がないとは言わぬが、とらわれずあえて義を優先した。真実の愛、正義である。父は信仰までたどり着いたのか。当然である。父は神仏を重んじ、尾崎と同じく南無妙法蓮華經にたどり着いた。私も。である。

ひなびた場所の小さなスナック。ママには他人の心を見透かす変わった障害のある娘がいて、いつも店の隅でなじみの客だけのときは横になっていた。私は50を超えていた。ある男が「あんたが懐かしいという人がいるんだ」と笑顔を向けた。傍らを見ると70くらいの女性が、クラス会の流れで来たと言う。私は少し前に小林旭の「北へ」を唄っていた。「覚えていないと思うけど、あなたのお父さんと私の兄が親友で、私は一番末の妹なの」「ああどうも」「いい唄ありがとう」。お袋から聞いていた親父の親友で体全体に龍の刺青を入れた人がいたことを。親父も早くに死んだが、その人はもっと早くその年の初雪が降った朝に亡くなり、親父はかなり消沈していた。奥さんは二人の子供を連れて家をたたんだ。その後水商売へと。化学工場を地道に勤め上げた人、親父の葬儀には来なかった。自宅、娘の前で号泣していたそうだ。親父が死んだあと抜け殻のようになり孤独死した安

さん、若いころ4人で東京に家出したという。もしかしたら女性は肩身の狭い思いをしているのではないか、私は何も言えなかった。「北へ」は男たちの挽歌ともいえた夜であった。合掌

親父の思い出にストレートに応えたかった。義と友情、今、ないがしろにされる価値観に精一杯の真心で向き合った父たち。私は涙を禁じ得ない。父亡き後、重い酒の箱を軽四のワゴンで運ぶ母。泣きながらとった自動車運転免許。きちがい水とはよく言ったものだ。母は免許制度にあぐらをかき、酒乱や、依存症の人など、気にも留めず酒を拡販した。幸福になれるわけではない。とてつもなく悪いことと表現したのは、恨んでいた人間もたくさんいたからだ。父はそれが辛かったのである。自ら依存症の道を歩む。父が母に手を上げた。「当たり前顔をしている」。母には意味が分からない。優しい父の苦しみ。天国から私を見ていて下さい。あなたと同じ義侠の道を歩んだみたいです。我が儘な母に手を焼いています。でもあなたは母に感謝していますよね。母は強かった。親父みたいな人間がいたことを知ってもらいたかった。それだけです。

父の左上腕に3センチほどのミミズのような刺青があった。脳動脈瘤になった父は親不孝をした罰だと線香の火を近づける。彼は親友と二人、彫師のもとに訪れたという。父はその道に入るか悩んでいた。どうもしっくりこない。任侠とは暴力を背景とした金がらみの世界。男を売る。か、早くに兄をなくした父に

は義兄弟というものへの憧れがあった。父は手刀が入ったところで「痛い。俺には無理だ。やめとくよ」「勇、情けないぞ、ここまで来て」「そうだな。でも俺みたいな軟弱者に渡世は無理だ。」「俺は極道になるしかない」父は本当に痛みに耐えられなかったのか。後に命を懸けて頭部手術をする父がいる。私は思う。刃が彼の肌を削るとき、なんだかんだと言っても自分には慈しみ、育み、愛してくれる父、母がいる。頭をかすめたのだらう。そして親友には最早その存在はなかった。父の全身に両親の想いが広がった。親にもらった肌を刺青で汚してはいけない。彼は踏みとどまった。優しき義侠の男として生きていこう。彼は静かに意識した。

きちがい水を売って生きている。酒乱、依存。父の苦しみは女子供が嘆く男たちの醜態より、その背景にある世間、人間の業についてであった。若き祖父は単身富山から大阪へと向かった。釜ヶ崎、土方の立ちんぼう。著名な社会主義者との出会い。大逆事件を18で経験し、革命よりも現実的な組合運動に力を向けるため紡績工場の職工となる。(チャーチルは言った。20歳のときリベラルでなければ、あなたは心がない。40歳のとき保守でなければあなたは頭が悪い)出世を果たし職長になり家一軒をあたえられ、大正にテニスを楽しむまでに至る。病気を機に帰省し農協の購買部で経理を担当することに。小学4年しか出ていない彼はどんなにか努力をしたであろう。長男が戦時中19で病死。年の離れた次男の父は仲の悪

い父母のもと溺愛されて育つ。酒税法、免許制度。祖父は酒一合飲むと湯呑をうつむける強い自制心があった。農協閉時の後の為、人品、資金共に認められた祖父に酒小売の免許が下りる。農家の若い嫁たちに小遣い金を稼がせるため、仕事を用意した優しい祖父。酒の弊害は理解していたと思う。彼は長男と同じく病弱な次男の為、安定し無理のない仕事を残してやりたかったのだ。二つの村さえ押さえれば、食べていける。競争は少ない。苦労人の祖父であった。だが父は何かやるせない。店の銭函から金を握りしめると街道に飛び出しバス停に向かった。「勇さん、マタカさんが来た。」父は街で皆に酒をふるまった。祖父の徳分を食いつぶすように見えるが、父は自らの良心を神仏にさらけ出していた。何度も言うが、寂しかったのである、世間が。父は愛を求めた。皆、金へ向けて猛ダッシュだ。父が金の苦労を知らなかつただけか。なぜ祖父は教えなかつたのか。きっと祖父も目先の金より愛の方が大事、必ず食べていけることを信じていたのである。女工だった初婚の妻、若くして亡くなり島根のお身内に遺骨、位牌を渡したとき、緑の観音様の座像を贖った祖父。そして母が嫁いできた。私が誕生することになる。父の義侠心、母の生活力。噛みしめて、明日も戦うために私は北へ流れる。

「エホバの証人、山口さんへ」

呼び出し音で意思表示を示す、君の寡黙を愛す。
君はまだ愛の本質を分かっていない。人々の生活が

愛と相反するときがある。美しき義理と人情を重んじるとき、イエスと同じ漂泊者となる。いつの世も世間は、縛り、規約を押し付ける。それは金と権力に裏打ちされている。仁義、つまり愛、心で生きる。これが神と共にあるということです。暴力は付属物です。ないにこしたことはない。ペテロは剣を所持していました。強い連帯感、使徒はイエスのことを（弱きを、助け、強きをくじく）侠客、親分と慕っていた。たとえば悪いと思うかな。拒否せず、納得したら、また呼び出し音だけでも聞かせて下さい。私には誠に的確であり、これ以上の説明はできません。心で考察してください。エホバはその愛をもって完全無欠と認識し信じること。従順に。着信拒否は、君の裏切りかと。俺の勘違いならいいが。先の寡黙の意思表示で、やはりイエスを誤解されたかと。また「北へ」のコメントの中、神への不審が湧いたかと。エホバは私のようなもの、そうしか申し上げられない。まあ、そういうこっちゃ。ナザレ、富山、共に方言満載だ。「イエスはおらのようなもんやちゃ、またよろしく頼みますちゃ」。ふざけていると思ったか。またしてもその想像力と理解力のなさに裏切られた気がする。この降雪は、君への天からの罰である。憐れだが。今の君たちは悪である。エホバを連呼して慕った君たち。ストレートな気持ちはわかるが、おねだりするようで偶像崇拜は否めない。善は頑なな君たちにはない。生活と格闘し、己の罪を自覚し、その悲しみに途方に暮れイエスにすがらざるを得な

かったものにある。それは末法の仏陀の覚り、南無妙法蓮華經である。イエスは病人を治すために来た。今、本当の重病人は君たちだ。自覚しなさい。君が私をエホバだと信じるなら。私は何度も救いの手を差し伸べたい。君のお姉さんの涙に報いる為。 イエスは義侠心から離れない。義兄弟。「親の血を引く兄弟よりも固い契の義兄弟」。暴力は出来るなら避けたい。だが偽善者の横暴に対し心に刃を持たねばならない。そんな現実があるのかも。だが絶対に使えない最終兵力である。神の暴力とはそんなものである。イエスの「私を王と認めないものを打ち殺せ」。私怨ではもちろんなく、エルサレムに乗り込む、強い覚悟を感じる。これを領解するのがイエスの十字架、贖罪と共にある、強い信仰、血を飲み、肉を食うということです。漂泊者にある愛それが自由なアガペーです。神の義は、肉親の情を超えて咲く大輪の花である。 山口さん、引いたか、呼び出し音がならない、少し敬遠気味だね。心配ない、俺ほど善良な人間は他にはいない。威嚇、威圧、大嫌い。暴力には本当に縁のないエホバ神だ。 よく考えよ。エホバ神は人間に罰をあたえた。死である。これをどうとる。エホバサイドの君たちは非情とはとるまい。死が与えられた、アダムとイヴ。裏切りはこれほどに重い罪なのだ。そして君の裏切り。エホバ神は悲嘆している。こんな関係をいつまで続けたい。君の良心に期待する。現在の心持を伝えよ。エホバ神の願いである。君を霊の死から救いたいのだ。君たちに対し私自身、つまりエホバ神の愛が救わ

れるためでもある。今日は通話ありがとうございます。嬉しかったです。本当に。コロナに、大雪に、鳥インフルエンザ。大変な時期です。信仰を大切に。何よりもイエスに倣い自由に愛を描いてくださいね。ではおやすみなさい。 高い倫理性とは利他の精神を言う。営利を離れ、ボランティア感覚で人に尽くす。人を思いやる心。「君たちへの訪問の催促」、私は一度だけでも従順を、態度で示して欲しかった。誠意が欲しかったのである。一度だけ。 神の晚餐に集まったのは生活、規則に従う健常者ではなく、足なえ等の道端に転がるしかない障害者であった。娼婦、取税人みたいに差別され、さげすまれた人もいる。彼等こそが神の愛の深さを具現したイエスの本意を、涙して理解できたのだ。君らの狭量は罪である。私は当たり前障りなく君たちと接するわけにはいかない。私はエホバ神として計らず、偽善者に相對しているみたいだ。私はエホバ神であり、その具現として示現した神イエスである。私は完全無欠であり、世界一、寛容と厳格を踏まえたものである。わが心、理解できないものはクリスチャンではない。聖書の都合の良い部分だけを切り取った曲解はやめよ。神は見ている。そしてサタンの手先にはなるな。頑なな心、ほぐされよ。何度も言う。私がエホバ神、イエスである。 実は監視の中、辛い思いを君にかけていたのだね。独立に向けてエホバ神を信じよ。目に見えない世界を。しばし待つがよい。もうすぐだ。解放された世界。心配するな。もう来る世の足音は聞こえている。神の支配、

復活の力強い響きが。私は最後の自分の務めを果たそうとしている。広報、掲示、訓戒、と警告である。それを布教に、するのは君たちだ。分からなければ訊ねよ。もう時はない。私は責任に苦しみはしない。何度も言う。すべては予定調和だからだ。君がエホバの証人で浮く。生活の監視があるのだろう。しかし危機に際し神を信じ、誠実に生きるとき怖いものはないはず。周りに私の正当を知らせ乗り越えよ。それしか君の救われる道はない。ここが本物のクリスチャンたるかの試金石である。恐れているは何も見えないぞ。エホバ神を畏れよ。イエスの血と肉を食め、俺は君のご機嫌取りではない。何が絶対なのかそこに気付きなさい。貴方はパウロのように、私がエホバ神、イエスキリストであることを周りに説かねばならない。世が来ないのは、まだせねばならぬことがあるからだ。一つ一つ丁寧に片づけねばならない。君は孤立から抜けるために積極的に私の正当と福音を広めなければならない。殉教しろとは言っていない。今の時期、宣教、布教とはそういうことだ。ガンバレ「巨人の星」を思い出せ。パーフェクトゲームを目指し、愛を投げかけよ。それでこそ本物のクリスチャン、エホバの証人である。頼むぞ、この負託に応えよ。私は悪意を持たない。また助けが必要ならいつでも。返ってきたか、久々のメール。わかってくれてありがとう。山口さん、教えは広がっているかい。すべてを公にするのだ。私の存在を。あえて傲慢にふるまう。悪風に負けぬため。実際はもう決着はついている。

掌からこぼれ落ちる者も決まっている。私は力を尽くして完結に向かう。君のこれからの姿勢も大事だ。堂々と私の存在を知らしめよ。それが唯一エホバの証人の行く道だよ。今こそ命を懸けるときだ。私はいつ、どこでも真理が語れるなら参上する。俺は神イエス、エホバである。楽しい世のため働き続ける。君の良心を信じる。

「日蓮正宗、貫井君へ」

貫井君、元気ですか。雄さんと電話で話した。相変わらずで立て板に水で自説を言う。現証しか信じないと息巻く。そして俺は君から金銭欲、所有欲から離れるという功德を承けた。もう一つは感受性が強く自分への侮辱に対し怒りをもって反応していた俺を君は痛烈に非難し自意識の殻をぶち破ってくれた。ありがとう。いま、俺はけなされても馬鹿にされてもいっこうに腹が立たない。平気である。君に敬意を率直に払う。だが「南無妙法蓮華経の本尊には何処も悪鬼は棲めない」。これを信じてほしい。それだけです。

君はお母さんの7回忌で富士大石寺へ行ってきたのか。確かに空気は好いな。また飲もう。その時文庫本3冊渡す。和顔愛語で頼むぞ。仏教徒の基本だからな。お彼岸は先祖が働く、墓に花を手向ける。功德はある。君の読経が聴きたい。さしで飲みたい。互いの本質を照らし会わすために。南無妙法蓮華経。体調はどうだい。お金はどうだい。心配するな、何とかなる。もっと心を許せよ、本音でないと人の心は打たぬぞ、そんなものだ。南無妙法蓮華経。 顕正会の

幹部が「日蓮大聖人は人々の恋慕渴仰が集まる」と。「神を愛せ」。すべての一番に来る。俺は日蓮大聖人である。これで経緯がすっきりした。貫井君冷静に考えて下さい。エホバと同じく大聖人はプレゼンス（存在）への尊称です。久しぶりだ、元気かい。君のおかげで幸せにやっている。君こそが親友だろう。色々な気付きをもらった。まあそうゆうことだ。また連絡を待っています。

貫井君、お休みのところすまぬ。再会を楽しみにしている。また俺の不具合なところを指摘してほしい。不思議なことにお金に対する執着が取れ、水が流れる如くだ。そしてかなり年下の若者にタメ口で遊ばれてもいっこうに腹が立たん。最近人間関係で悩んだことがない。君のおかげだ。本当に。正義感からくる憤りも憐れみに代わり、俺の怒りはいずこかへ消えた。またの指摘、教えを受けたいが母親の施設入居の問題、逆に、俺が家を捨てなければならぬかもしれない。これで釈尊と同位に立てるわけだ。半年でいずれか決着はつくだろう。楽しくなりそうだ。労働は俺には似合わない。やっと自由にこぎつけるのか。滅茶苦茶、期待が広がる。貫井君また会おう。相変わらずの奇人かい。まあいいか。だがな、聖書は言う。「君は友達ではない」と。ただ単に俺を傷つける意図があったただと。それでもいい。これを因縁と呼ばずになんとする。君のむらっけにも翻弄されかけたが、虚勢からだと知った時、君の善良さが顔を出した。

日蓮大聖人は傲慢を演じた。人一倍寛容で優しい人であった。仏様である。君も野蛮は捨て、もっとしっかりした義侠心を持ってよ。神イエス、日蓮大聖人の気持ちが生ビットに判るぜ。君はいずれにせよ大恩人である。貫井君、聖書は言う。今の私の境涯は富士大石寺の本尊のおかげであると。そして身延以外、日蓮大聖人の教えから出た本尊なら、何処も功德はがあると。どうやら私は一度の拝観で悟ったみたいだ。ありがとう。君に本当に感謝する。今年の日蓮大聖人生誕八百年の節目になる。記念の年だ。彼の存在した意味を噛みしめる。俺は俺の道を行く。ありがとう。おやすみ。貫井君、真実かどうか、懸念があるみたいだが、紆余曲折して愛に導かれ、真理に到達する。神とはそういうもの。体を大事にせよな。不毛な議論はしない。日蓮正宗も富士大石寺の大本尊も俺の為にあった。そして今、俺が日蓮大聖人なら過去の正統性はどうでもよくなった。南無妙法蓮華経一筋あるのみ。わたしはソクラテスのように宗門を訪ねてまわった。が、私ほど高邁で心美しきものと出会わなかった。私は確信した。自らを灯明とし、法を灯明にすると。そして人生の目的は善知識を得ること。それしかない。私は幸せだ。何があろうと。邪魔するものはサタンの手先。容赦しない。たとえ母親であろうと。それが神の愛を打ち立てるということだ。因縁があれば君も救われる。「和をもって貴しとす」。耳を傾けてほしい。確かに日蓮正宗に正統性はあった。だが私が日蓮大聖人だと自覚したからには、私がこれ

から行く道に正統性があるということさ。私を信じ孤立したエホバの証人の山口くんに私の正当性を周知させよと助言、要望した。聖書が語るには世の代わりを黙って待つのではなく、積極的に真理を周知させ、人々に働きかけるのが重要みたいだ。わしも自分に叱咤した。来る世、すべては清く美しい、楽しい楽園だ。永遠に壊れることのない、善なる人々の集う浄土である。君もこだわりを捨て幸せに、南無妙法蓮華経で生きてほしい。日蓮大聖人の言う善神以外、神はいないと君は言う。神とは単なる言葉のあやだ。前にも語ったが、つまりエホバでよい。エホバはプレゼンス（存在）の称号である。そして日蓮の称号、大聖人。エホバと大聖人は当体。人として示現し神イエス、日蓮大聖人、義人になった。貫井君、感謝しているよ。すべての経緯は君のおかげだ。だから俺を信じてくれ。君は新世界で幸せになる資格は十分ある、こんな表現は君が一番嫌がりそうだが。素直に、車座でほろ酔い気分。自分だけを見つめてくれる女性が傍らで笑っている。当然、仲間は分かりあえたやつばかりだ。南無妙法蓮華経、エホバを愛し、隣人を愛す。侮辱、揶揄するものはどこにもいない。万人が目指した寂光土である。真実の喜びとは目の前の人の笑顔に貢献できたとき感ずるものだ。「どうして生きているの、やがてわかるから」松山千春が歌う。君は県境を超え、日蓮正宗のパンフレットを配った。なかなか出来ない大変な菩薩行を為してきた。俺の笑顔、わかるかい。ありがとう。だから厳しい修行は

もういいから。俺の思想を信じ、近くの地蔵尊に花を手向けて下さい。必ず素敵女性が見れ、優しさに包まれるから。なんといっても仏心は、ダイレクトに。それは優しさが初めに来るのだよ。南無妙法蓮華經に包まれよ。君の目指す不動の境地。結果的に遠慮を含め、薄情者の開き直りならこれほど寂しいことはない。明るく素直に温かく、皆で仏になるのが大乘の教え。欲望が煩惱に。死後。罰の恐怖からの、気休めである念仏。根こそぎただ南無妙法蓮華經には、善き人たちの美しい想いがある。人々が平和を謳歌して、笑い声が響き渡る。南無妙法蓮華經の大音声と共に。貫井君、山の頂は殺風景だぞ。待つのは死だけだ。下るほどに高山植物を見る。そのくらいが丁度いい。人間は関係性の中にしか喜びを見出せない。自覚しない限り、過剰に愛を求め、裏切りを意識し、付き合いに冷たさを感じ、一人で生きていけない悲しみに涙する。南無妙法蓮華經。大事なのはこちらが隣人を愛することさ。それに尽きる。そして、君よ、また会おう。自然体で。もう対決色は終わりだ。善意の塊として俺を見よ。君の好意を期待します。まあ変わらぬわがままな君を、私には受け止める度量は十分にあるけどね。(笑)

尾崎豊 へのコメント

尾崎は深く考えている。周囲に対して、いったい誰が利害から離れた義の善人なのか。皆目見当つかない。尾崎の死後、生きている人間たちは、自らを有利な構図に演出し、少しでも実利を得ようとする。かつて狡

猾な大人たちに翻弄されたくなく手を焼かせ、自傷行為に走った、尾崎。苦惱計り知れない。彼の楽曲はまさに魂の叫びであり真実の愛を追い求める修行者の姿である。尾崎は深く考える人。ただの狂人ではない。だから彼らは、離別した尾崎のラストアルバム「放熱への証」を聴けないのでしょうか。シンプルな成熟、深い想い。秀作です。自由、愛、平和を追い続けた尾崎の本意がそこにはある。搾取、利用、支配、この世の悪をあからさまにした尾崎。死という杯を受ける命運に。イエスと同じ栄光に向けて。父として生きながらえ息子に何を伝えられる。金儲け、処世術。当然、尾崎は望まぬ。酒に酔いしれ、薬におぼれた愚か者、それが彼の正体か。羞恥心に嘲りを加える悪魔サタン。尾崎はそれに愛と勇気で打ち勝ちたかった。見せしめのような死に向かう尾崎。最後「勝てるかな」尾崎は、胃液を嘔吐し、つぶやく。その戦っていた闇の正体、サタン。奴のコピーが尾崎の周りを取り巻いていた。強い気概を持ちながらも、弱者に注がれる優しい視線。そのひずみに煽られるコモーションイズム（商業主義）。魂と神経の軋みは限界へと向かっていったのであろう。己の栄達の為に彼を利用する目的だけの周囲。才能を原資としてしか扱わない芸能の世界。純粹で正直な尾崎、軋轢は避けて通れない。そして生存競争は何の痛みもなく繰り広げられる。夢のつぶし合いである。彼は不遇な人々達をモチーフに、それを歌い、金を手にする。そのことは対象への背信にも思えて強い罪悪感が湧いていたの

では。創作者、表現者としての彼の苦しみを全く理解せず、欲得と懈怠に向かうやつら。愛を求める彼は怒り狂う。彼は「愛の消えた街」利害から離れたホームレスに再び心を寄せる。最も弱き保護の薄い存在。イエスと同じ目線。イエスは死に、民の贖罪を果たした。だが現実に尾崎を襲う苦悩。彼にはもう一度贖罪の意味を持つ死が必要となった。イエスを意識した尾崎。確かに神の国、永遠のいのちを思えばこの世の生存競争など無意味になる。尾崎よ、原罪からの解放を感じることができたか。誰よりも純粹で無邪気だった君よ。愛は自由を縛るものではなく、如何なる時も自由を求めることができる。そこにある。アルコール依存症の画家モーリスユトリロ、道端に寝ころぶ彼に嘲りと侮蔑をぶつける人たち。しかし優しさと悲しみを、愛をもって表す人たちもいた。「この世には2種類の間がある。」彼は語っている。尾崎も同様に嘲りと蔑みの中死んでいく。だがその真実の想いは聴衆の中に復活を繰り返す。「息子はそこを理解し力強く生きてくれるだろう」。天国で迷路から抜けた尾崎は、母親への愛を抱きしめると共に「太陽の破片」、たくさんの思いやりと憐れみが希望のうちに生まれることを信じているに違いない。その生き様を忘れたくはない。護国寺での葬儀、日蓮正宗にて執り行われた。南無妙法蓮華經。その排他性。尾崎は絶対善を求めていた。正しいものはなんなのか。尾崎の求めた愛は醜悪さへの寛容ではなく、高く掲げられた独善的でも完全な真実揺らぎなきものにあっ

た。つまり念仏ではなく題目である。非業の最後にみえるが、邪悪なサタンに勝利したのは南無妙法蓮華經の功德である。イエスと同様、彼は選ばれ、使命を帯びた聖人であった。聴衆の中への、復活の前には死は必要だった。神、罪を意識し幾つもの作品を残した彼。改宗した功德、イエスと、日蓮の共通性を自覚しただろう。彼の「君たちの夢がかなうよう祈っています」。夢とは。なりたい職業に就く。お金持ちになる。やはり欲望からは幸福になる道は見えないのでは。夢とは愛の実現、成就。そこにしかない。

謙虚、謙遜は、「実は私は賢い」の裏返し。まずは自己憐憫があるからこそ他人の苦しみに涙できる。同悲同苦が大事。小さな虫も追えば逃げる。「人間に生まれてよかった」。それは信仰によって恐怖に打ち勝ち、死までも克服することができるからだ。そこに神イエスの隣人である意識が人間の尊厳とともに生まれるのではないのでしょうか。神の名は愛です。人間に具現するときイエス、ヨシトとなる。その意味は（了解）。神の名が崇められるとは宇宙空間（物理的宇宙もだが一閻浮提と呼ぶ、気の空間の譬えがピッタリくる）に愛よ、広がれということです。強盗に襲われ、介抱してくれたサマリア人のような親切な人を隣人と呼び愛す。仏陀も善知識、すなわち仲間を得ることが仏道のすべてだとおっしゃっています。「神と隣人を愛する」。これが義務でもある真実の幸福なのです。私は神イエス。一番謙遜、謙虚が分からぬ、正直者で

す。以後よろしくお願い申し上げます。イエスは病人を治す為に来た。娼婦、徴税人、卑しい生業。彼らは自らが本当に罪人だと懺悔する。イエスは彼らに愛を向ける。最早、人々を奴隷にする、旧約の荒々しい神はいない。良心を痛め、卑下する者は救われた。祝福され、愛による霊の向上があれば。でも完璧主義は良くない。寛容をなくし皆、苦しむ。全知全能とは、ひたすら正確さを追い求める電波時計のようなものではなく、「5分程遅れている」確認する。これでいい。謙虚、謙遜は神の前では処世術でしかなくなつた。本音を語れ。そこに愛があればいい。神学論争は不毛だ。党派心を持つものは艱難が訪れ神の怒りを受け。神イエスはどこのセクトでもなかった。パリサイ派(律法学者)の様ですました顔で墓の上を歩いてはならない。内村鑑三も言う。聖書は靈感であり、神の自らの証だけが正統。後は私のホームページをご覧ください。キリストの教えは勉強するのではなく神の愛を聖霊と共に体感するのだ。見栄、体裁の強い者の謙虚、謙遜が高慢に変わらぬことを祈る。旧約があるのになぜ新約が必要だったか。イエスの十字架の死。原罪の贖いにより旧約は過去のストーリーに追いやられた。いま、新約さえも破棄する。神イエスと人間が友情で通い合う。温かい愛です。これをアガペーの極致と呼ぶ。

アシハラへ

障害のせい、年齢が年齢だからか、記憶が悪く、神としての役目、立場を忘れることが多々ある。健忘に付随して幻のような寛容が現れる。チェックする鬼に対しても仕事をこなせる要因になる。俺には見える、他人の善意、悪意が。母は清廉潔白をモットーとしている。が、おだてられると得意になり猿のように木に登り調子に乗る。こちらが考慮すると自分の気分だけみたいだ。人が好いのだろう。きっと存在する。義に飢え、愛に満ちた人たち。明日は一麦教会へ乗り込む。代表の牧師さんにアポを取った。因縁から繋がった。何か知らないが感じる。今後、悪いことばかりは続かないだろう。聖書は「話を聞かせていただく」という低姿勢で臨めと言う。あちらの度量の問題だな。楽しみだ。まあなるようになる。一麦教会の牧師さんに自筆本を二冊渡した。病院勤務時代、俺は愚かだったかもしれぬ。機械のように働いた。出世目的にしか思われなかった。倦怠、怠惰。労働に規定がないなら、勤め人としては出来るだけ楽をして、より多くの報酬を安定のもとに手にしたいと思うのが自然でなかろうか。常に不平不満を口に。要求する。結局、私は悪人とされ罰を受けることに。職場の清廉をひたすら求めていただけなのに。今年役所を去る奴。立場は理解している。だがな、24時間忙しいわけではない。優先順位を外れても意識は持っている。奴のことだ。俺は奴に20年ぶりに逢ったとき「お前とは以前みたい、やり取りはするつもり

はない」と言い放たれた。そのスタンスは今も変わっていない。君の介在で何とか関係は保っているが実際はそんなところだ。恨みも何もない。奴には俺が必要ではない。俺にも言えるな。やつにしたら、いちいちけなす俺は鬱陶しいだけだろう。忙しい中申し訳ない。奴が俺と話す必要性はないのだ。そこには以前から気付いていた。今となっては棲む世界が違ふのだ。「仲間は大切だからこそ、奴には厳格に対していた」。君はよく成功した。俺には真似できない。競争の激しい都会にいてはホームレスにもなれなかったろう。田舎にいてよかった。でも東京にいて噺家になったなら、かなりいける人物になっていたのではとも思う。俺には君のような堅気の社長になる志向は全くなかった。まあその煩雑さからも、君への羨望は俺にはない。俺は奴に逢いたくない。奴は正直に言葉も吐けない憐れな境遇だ。嫁さんが暗いのはまじい。鬱の夫婦か。くわばら、くわばら。言い過ぎたか。「君はファンキーモンキーベイビー」明るく、素直に温かく。真由子さんは最高だぜ。正義は死なず。友情を忘れる男に明日はない。正義は必ず勝つ。つまり勝った方が正義になるからだ。 奴へのやっかみではない。ただ昔みたいには戻れないなら寂しく、そんな奴に腹立たしさを覚える。俺に対して恨みがあるのか。多分そうだろうな。

人の心、さびた鎖が解けるまでどれだけ待てばいいのだろう。奴は執念深いのか。友の大切さを知った俺には、君らが幸福の源泉である。奴にもわかってほ

しい。金、地位、名誉はあの世まで持っていけない。むしろ邪魔になる。奴の生き方だから安易には査定したくはないが、寂しいぜ。 厚労省の官僚が銀座で夜中まで飲んでた。ワクチンについてと、各店の様子見だったのかもしれない。奴のこれまでの俺たちへの対応は、是だとは思いますが姑息な自己保身しか感じないのも事実だ。田舎の要領のいい小役人だ。城山三郎だったか「官僚たちの夏」という小説があった。「日本を動かしているのは俺たちだ」。過労死推定ラインを超えてもコロナ対策に全力を尽くす。気概と自負がある。さすが東大法学部出身だ。 奴にテレ、メールしたが反応はまるでない。退職金目当てのたかりだと邪推したか。とりあえずどこから見ても評判のいいリスクが少なくメリットの高い人間と付き合うみたいだ。死ぬまで下僕のマントを羽織っていく。それは温かいか熱いかはわからない、窮屈なのは確かだ。奴はマントに泥水が跳ねても気にするだろう。小心、臆病なやつにはもってこいの生業だった。ほんとうに電話で労をねぎらってやりたかっただけなのに。 君は凄いと思う。「リーダーは意欲のない連中の尻をたたき雇用を維持し、個人消費につなげ、少子化対策も推進する。新しいニーズから需要をかぎ取り供給に結び付ける。その人心掌握は作為、意図的なものかは周囲には判別しない。その奥底は世の為、人の為かもしれない」。単なる金儲けとは違うかも。 最近、「生存競争は意識せず」でいいと思ってきた。墮ちたところに幸せが待っていることも。

愛と友情に満ちた世界だ。 只酒が飲めるからではない。俺は君と飲むときが一番楽しく、嬉しい。コロナなど全く怖くない。信仰がある。奴はこれからも発言に冷や冷やして生きていくのだな。 出世し。草葉の陰でご両親は喜ばれたらろう。俺も俺なりに親孝行はしていくつもりだ。やつの処世は政治ばかりで男気に賭けるのは事実だ。役人に誠は無いのか。俺と君は結局フーテンの寅とタコ社長だな。君が選んだ道、一喜一憂しているとは言わない。俺は能力の問題もかすめるが、因縁として経営者にはなりたくない。使われの身でも今、生活は成り立っている。君の煩雑な辛さはよく判った。頑張ってください。俺は今日も工作の仕事だ。楽だ。因縁だな。皆いつになったら楽になる。死ぬまでだめか。何か辛いな。 「聖書に導かれて南無妙法蓮華経」、東西の宗教思想を融合させ、サムシンググレートの復活、愛による、世界征服を目指す。神である私をまず愛し、親切な隣人を愛す。なぜなら神は愛そのものだからである。私のわがまま、傲慢ではない。信じる者は予定調和である。私は義人、顕現したイエスであり日蓮大聖人である。そして聖書のエホバである。友情が一番大切である。素直に信じれば、眠っていた霊が復活し成仏へと向かうでしょう。神の国、永遠の命の到来です。すべては欲望を含め因縁だな。おかげで四時間の労働した後、執筆活動もできる。障害年金のおかげだ。君みたいな良心的経営者ばかりではない。従業員を食べ物にするやつもいるのだ。ブラックだ。因縁だな。何度

も言う。正義は必ず勝つ。なぜなら勝った方が神に愛された正義だからだ。神は愛を保ち、心を捨てない人をひいきする。 奴にワントンス、メールする隙もないとはどうしても思えない。飲食店コロナ対策に 80 人で一万軒回ると新聞にあった。定年の奴には関係ないだろう。まあ忙しいとしておくか、しばらくは逢いたくない。異動で忙しいのは理解している。 5 巻目の文庫本の準備中だ。推敲に手間取っている。YouTube の発信か。やり方が分からない。神イエスにどれだけの人が視聴を傾げるか。今、広報、掲示の意味を考えている。イエスの後、神の御国は来なかった。終末は近いと言ったのに。俺の為だけに聖書はあったのかも。信じている。だがこの先は不明瞭だ。自然に任すしかない。良心に基づいて。信じる者は神の子である。 アシハラよ、奴と電話で話した。LINE が奴とできるよう操作してほしい。よろしく頼みます。元気でやっているかい。忙しかったら後回しでいいから。奴の調整能力、協調性、仕事の堅実さが、評価された。奴の視力という負の要因が、類まれなる人格者を生み出した。奴はずる賢くはないみたいだ。安心する。ただ薄情と言える、過ぎた遠慮。結果的に見えるのは保身だけである。勇気を発揮する気概があればなあ。自分で言うのもなんだが、俺と同じ大人しい節度を守る紳士なのだろう。LINE の件重ねて頼みます。

俺は最近、考え方を改めた。目的に向けて組織立つなら、社長には社長の役目があり、掃除の人には掃除

の人の役目が有る。それぞれだ。社長は雇用を守り、社員はある程度、忠誠を誓う。自利、利他にどんな枠組みが最も効果的か、そのための各自の持ち分なのだ、役職は。誰も増上慢になったり卑下したりしてはいけない。たまたまだ。出世から外れても自分は自分。劣化しない。貶めることもない。そして労働者は契約に基づき関与を認める。皆で持ち分を果たし幸せになればいいのだ。　だがそれより世は終わりへと向かっている。この時機、オリンピックを開催すると言う、非道を改めない。善神は去り悪鬼が跋扈する。結果的に新しい世が来るのもいい。だが愚かしい、中止できない理由、真偽は分からぬが、我欲が根にあるのは世の悪の常だ。結局は手前らの金と名誉だ。「君は、コロナはワクチンに関しての利権が原因だと言う。しかし経済をつぶしてまでの利権とは。信じられないが、戦争は実際におこるものなあ」。そんな競争を煽る、野蛮な思想の権化がオリンピックだ。そんな性根に俺は一喝する。理念の問題だ。損得ずくめか。天の愛に背けば罰は当たる。神の意思を皆軽く扱い、無視する。目に見えない世界が9割、それを信じられない。コロナ禍はその一端。日蓮は立正安国論で疫病を国の災難の第一にあげている。一挙には伝わらない教え。悪魔が邪魔し、聖霊がコーディネート(調整)する。サタンがいろんなものの心にスーと入る。観客のいない競技場に向けられる松明。もはや悪ふざけだ。選手はじめ関係者はどの国からどのようにしてくるのだろう。オリンピックに感動する馬鹿は絶対

に神の国には入れない。正直に金と名誉と言えばいい。矢沢永吉さんを見ればハングリー精神は十分に学べるから。　奴は自己保身をいつまで続ける。それも生き方かもしれない。計算した薄情さか。俺はそんな役人の姿を羨ましいとは思わない。2千万の退職金があっても。孤高のホームレス、金で頬をたたく行政、役人。泣きの涙で侮辱が繰り返された知的障害者。着いた先がホームレスだ。俺は投資ファンド、M & A より気になる。彼らとともにイエスキリストはあるからだ。　まさに役人の世界は伏魔殿だ、余計なことはせず目立たねばいいか。法律の保護を受けるか。イヤな渡世だなあ。何はともあれ、すべてに誰かが得をし、誰かが損をする。それが世間だな。俺や尾崎豊は、そんな世間に神経がきしんだ。ぶつかり合うエゴイズム。私は金を貯めることや、名誉を得ることに興味をなくした。求める者を嫌う部分もある。この世の価値観を捨てねばならぬ。私は世間からはみ出した。欲望から派生する悪意は忌避する。　別に生活に不足はない。銃弾が飛び交う戦場にいるわけでもないから。そう思えば多少の理不尽にも耐えられる。交通事故で障害があり、癌を発症した妹さんは可哀そうだが、君という金持ちの兄がいる。すべて御縁だ。紀伊国屋書店の「二巻目も置いてやる」を思い出し、責任者に確認した。一卷目の売れ行きから、ダメ出しを食らった。厚意は熱いうちに素直に受けておくものだ。失敗した。でも結果は同じと聖書は慰めてくれる。お互い生活に不足がないなら御の字だ。それ

でいい。君の息災を祈っている。もう少し恋に生きるけどなあ。フェイスブック、反応がいい感じになってきた。すべてに因縁だな。時宜が来れば世は代わる。奴の善良さが、奴を維持した。君は野心家だから組織で生きるには窮屈な部分があるだろう。奴は保証された安全地帯にいたと言える。奴にとって役人は苦痛ではないのだ。むしろ楽しいと言っていた。公僕の面目躍如だ。俺は理不尽と闘った。世間の価値観を捨て、ただ自由で平和で愛に満ちた暮らしを送りたかった。坊主は、手前の飯の種は明かさない。俺は宗教を超えた気を感じ、聖霊の宮となった。難解と言われたら仕方がない。まあ今日、本三冊送る。見てくれ。ひとつ言うが俺は奴を否定してはいない。ただ、役人の体質、宿命を批判するのが君を錯覚させるのだろう。昔へと感慨に浸るのは好いが、俺はいつも前向きの旅人だ。真実の安息を求め何かと戦っている。君もその敵に気付けばいいが、目の前の現実に気を取られている。コロナで世界は壊滅しない。欲望にまみれた暴力が吹き荒れるときすべては破滅へと向かう。人は神に勝てぬことを恐れねばならぬ。オリンピックは餓鬼、地獄、修羅の表徴である。拘るとき不幸は続くだろう。利権云々より、その悪意の膨張の現実に世界の命運がかかっている。君も渴愛は攻略しなければ。俺は君の欲を笑い飛ばさねばならぬ立場みたいだ。北野武はやっと、自分の無意味さに気付いたみたいだ。「人は生きて死ぬだけ」という。糟糠の妻と別れ、愚かしさを選択する。いずれにせよそれだ

けの男。50の童貞の純情男には逆立ちしてもかなわない。そんなたくさん存在する神の子の為に俺は生きる。本は明日2時以降に着く。読んでみてくれ。よろしく。全く的外れだぞ。俺を人でなしのように言うのはよせ。奴が父親の葬儀で力になってくれた、ひいきして感謝があるのも判る。奴はいつも善良面を下げる、人生を否定するつもりもない。誤解するな。俺は今、奴の境遇に同情しているのだ。君の思い入れから俺を悪人にするのはよせ。俺は十分に奴をねぎらい、侮辱せぬことを通話で誓った。かつての俺に恨みもないと言った。新世界に向けて。むしろ、奴は価値観の違う君のことを気にしている。俺と奴はある意味、無欲で一致している。安息を求めている。奴は早くから冷静な大人だった。奴は嘘みたいに好いやつだと信じたい。だから普通に笑い、泣く、話す、そうやってほしいのだ。俺の希望ではなく、奴も自覚しているはずだ。ゼンイチ、万歳。

一度何かを背負ったら重荷になることがよくある。幸せと思ひ込みたいわけでもないだろう。弁解などせず、理解も求めず自分の道を歩いていくだけだ。天の意志に適えば永遠の命が待っている。楽しみだ。大乘、特に法華経は皆で在家も僧侶もなく幸せになる一仏乗を大事にしている。南無妙法蓮華経、起承転結の安楽を目指す。波乱万丈とは違う。

あとがき

生き方というか自分に拘り過ぎる者がいる。名誉、評判を気にするところに存在する。俺は皆の優しさを信じている。どんな人生も思いやりなく批判してはいけない。人に勝たないことが、本当に克とすることを知ってほしい。それは自分から離れることだと愛を持つ人は気付いているだろう。

まいこ、まいこ、まいこ、君の心はどこに。

探すが見つからない。

なにが、愛にきまっている。

馬鹿だな。ジーンズのポケットに入っているよ。

嘘だろ神様。

俺ならパソコンの前においておくはずだ。

で、それは愛なの、ちゃんとホイルをはがして見せておくれよ。

いやわかっている。わかっている気になった。

確実に俺への愛はある。

まいこ、まいこ、まいこ。

そしてただ俺がまいこを死ぬほど愛していることだけは、わかっている。

今日も元気で。

皆さま、ご精読ありがとう。ご自愛ください。

小澤慎一氏、今回もありがとう。また製本スタッフの方本当にありがとう。

またの機会に向けて、さようなら

義人

容姿の衰えを知り
記憶力の衰退と健忘に出会い
懈怠の自分を知る。

愛がはるか先にかすかに見える。
その時、息を吸う心を知った。
ハートで勝負だろう。
男なら。